

九州縦貫自動車道関係
埋蔵文化財調査報告

— XIX —

福岡県八女市室岡所在遺跡群の調査

1 9 7 7

福岡県教育委員会

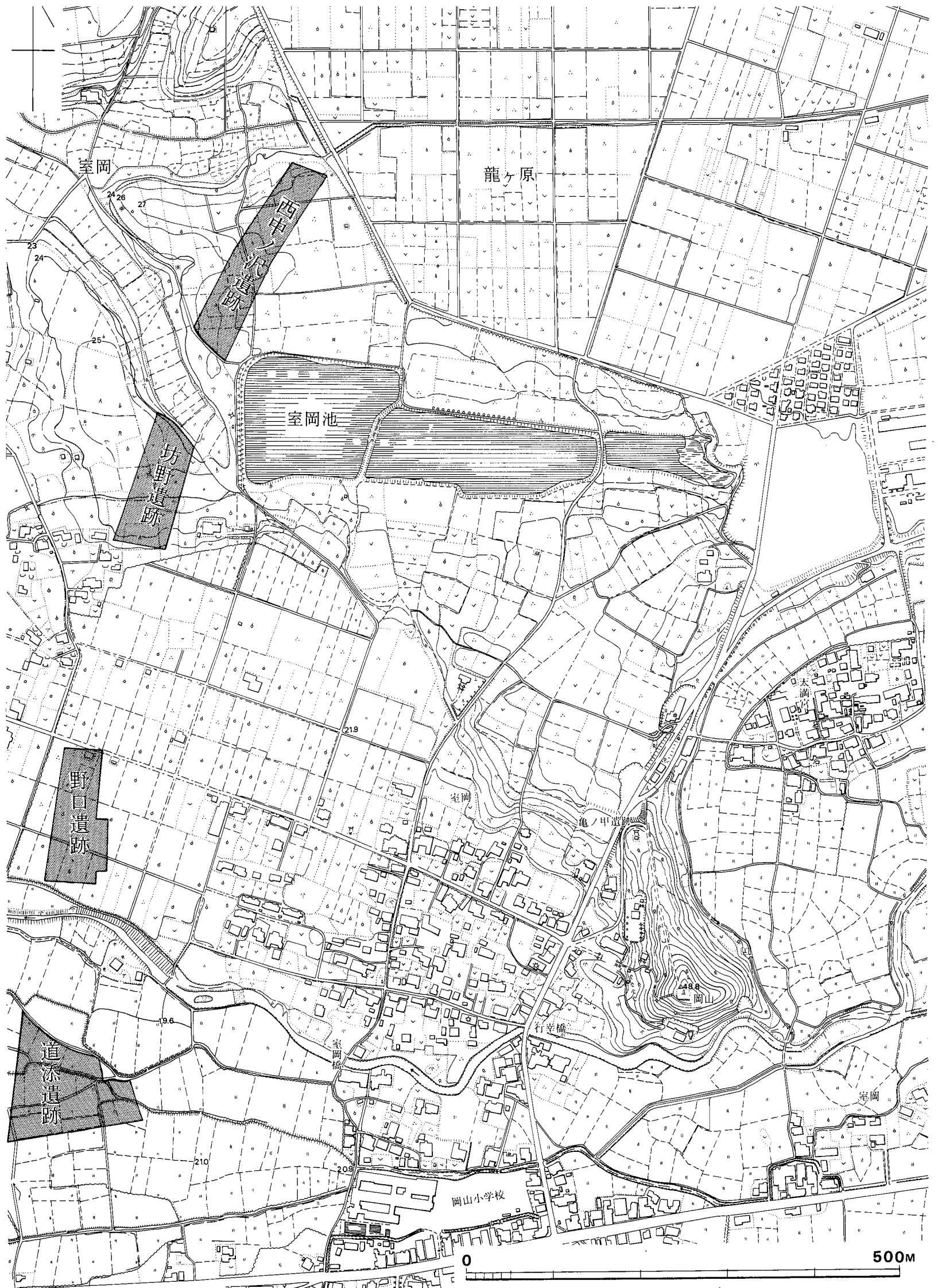


Fig. ① 室岡周辺地形図 (縮尺1/5000)

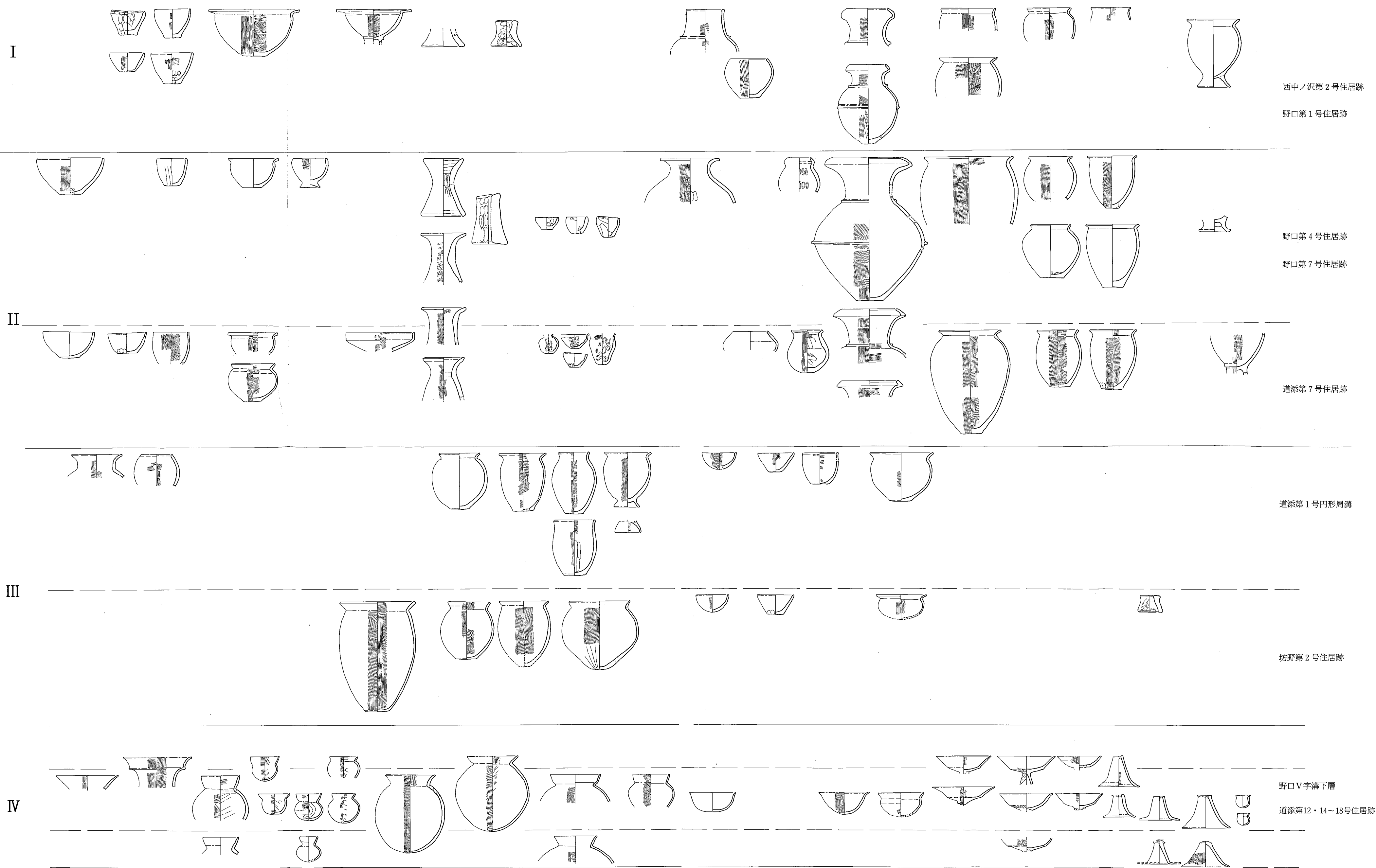


Fig. 2 室岡遺跡群出土土器編年表 (縮尺1/8)

(1977. 武末純一作成)

九州縦貫自動車道関係 埋蔵文化財調査報告

— XIX —

福岡県八女市室岡所在遺跡群の調査

序

九州縦貫自動車道建設に伴う埋蔵文化財の発掘調査は昨年度をもって終了し、本年度はこれまで未発表であった遺跡の報告書刊行を漸次実施する予定であります。

この報告書は八女市岡山地区におきまして、昭和46年から47年にかけて実施しました集落遺跡の発掘記録であります。筑後地域におきましてはこれまで集落遺跡の調査例が少なく、貴重な内容を含んでいると思われれます。

発刊にあたり、報告をお寄せ下さいました筑後市郷土史会の岩崎光先生、九州大学農学部教授松本勗先生、同工学部助教授土田充義先生及び北九州歴史博物館員武末純一氏に対しまして厚く御礼申し上げます。また調査に当り、御協力を惜しまれなかった八女市教育委員会及び地元の方々に対し、深い感謝の意を表します。

昭和52年11月1日

福岡県教育委員会

教育長 浦山太郎

例 言

1. この報告書は、九州縦貫自動車道建設によって破壊される予定の遺跡について行なった事前調査のうち、昭和46年度に発掘した八女市室岡所在遺跡群の調査報告である。
2. 発掘調査は、日本道路公団の受託事業であり、福岡県教育委員会が主催した。
3. 発掘調査に当っては、八女市教育委員会及び市内在住の方々の多大な協力を受けた。
4. 本文中、位置と環境については岩崎光先生、木材鑑定については松本昴先生、建築物については土田充義先生の報告を掲載した。また、土器について武末純一氏の論考を考察編に加えることができた。
5. 掲載した遺構写真は酒井が、遺物写真は石丸洋の指導の下に林志郎氏の撮影による。また挿図は関晴彦と宮原真裕美が整図した。
なお、Fig. 1 は久留米市文化課松村一良氏の撮影による。
6. 本書の編集は酒井仁夫と関晴彦が担当した。

目 次

I	位置と環境	岩崎 光	1
	1. 位置と名称		3
	2. 八女丘陵, 台地, 低地の地形地質区分		5
	3. 気象及び水系の推移		9
	4. 八女西部の主要遺跡		10
	5. 遺跡の破壊と現在		11
	6. 亀ノ甲遺跡に関する資料紹介		12
	A 亀ノ甲遺跡第97号石棺		12
	B 「亀ノ甲遺跡」報告の補遺		13
	C 岡山小学校蔵土器	酒井 仁夫	13
II	調査の経過	酒井 仁夫	17
	1. 調査の進捗過程		19
	2. 各遺跡の調査過程		20
	3. 調査の体制		21
III	西中ノ沢遺跡の調査		23
	1. はじめに	酒井 仁夫	25
	2. 住居跡	関 晴彦	27
	3. 出土遺物	酒井 仁夫	37
	4. おわりに		42
	(1) 遺構	関 晴彦	42
	(2) 遺物	酒井 仁夫	44
	(3) 小結	酒井 仁夫	44
IV	坊野遺跡の調査		45
	1. はじめに	酒井 仁夫	47
	2. 住居跡	関 晴彦	47
	3. 出土遺物	酒井 仁夫	50
	4. おわりに	酒井 仁夫	53
V	野口遺跡の調査		55
	1. はじめに	酒井 仁夫	57

2.	弥生時代の遺構と遺物	58
(1)	住居跡	関 晴彦 58
(2)	出土遺物	酒井 仁夫 65
(3)	小結	酒井 仁夫 79
3.	古墳時代の遺構と遺物	79
(1)	住居跡	関 晴彦 79
(2)	掘立柱遺構	関 晴彦 84
(3)	溝状遺構	関 晴彦 87
(4)	出土遺物	酒井 仁夫 91
(5)	小結	酒井 仁夫 94
4.	おわりに	関 晴彦 95
VI	道添遺跡の調査	99
1.	はじめに	酒井 仁夫 101
2.	弥生時代の遺構と遺物	102
(1)	住居跡	関 晴彦 102
(2)	円形周溝	関 晴彦 111
(3)	土壙	酒井 仁夫 112
(4)	掘立柱遺構	関 晴彦 113
(5)	出土遺物	酒井 仁夫 114
3.	古墳時代の遺構と遺物	127
(1)	住居跡	関 晴彦 127
(2)	溝状遺構	関 晴彦 148
(3)	出土遺物	酒井 仁夫 148
(4)	第15号住居跡出土木材の樹種鑑定	松本 昶 159
4.	おわりに	関 晴彦 162
VII	考察	165
1.	住居跡の構造	関 晴彦 167
(1)	はじめに	167
(2)	平面プラン	167
(3)	床面積	168
(4)	出入口	168
(5)	ベッド状遺構	169

(6) おわりに	183	
2. 道添遺跡における住居跡の周溝について	土田 充義 宮原 種生	190
3. 遺物の検討	武末 純一	194
(1) 弥生土器		194
(2) 土師器		215
4. 結語	酒井 仁夫	228

挿 図 目 次

Fig. 1	八女市岡山	I 章扉
Fig. 2	室岡遺跡群周辺遺跡分布図 (縮尺1/25,000)	2
Fig. 3	亀ノ甲遺跡周辺土層	4
Fig. 4	八女洪積台地の地形区分 (縮尺約1/83,000)	4
Fig. 5	八女地区地層柱状断面図	6
Fig. 6	亀ノ甲第97号石棺陰刻 (縮尺1/8)	13
Fig. 7	亀ノ甲遺跡出土土器 (縮尺1/3)	14
Fig. 8	野口遺跡の実測作業	II 章扉
Fig. 9	坊野遺跡付近の試掘	19
Fig. 10	野口遺跡付近の試掘	19
Fig. 11	調査前の道添遺跡	20
Fig. 12	道添遺跡の試掘状況	20
Fig. 13	秋の西中ノ沢遺跡	20
Fig. 14	3時の休養	20
Fig. 15	西中ノ沢遺跡調査状況	21
Fig. 16	秋深き道添遺跡	21
Fig. 17	遺跡西方より南方に入る谷部	III 章扉
Fig. 18	西中ノ沢・坊野両遺跡周辺地形図 (縮尺1/3000)	24
Fig. 19	西中ノ沢遺跡全景	25
Fig. 20	西中ノ沢遺跡遺構配置図 (縮尺1/400)	26
Fig. 21	西中ノ沢第1号住居跡実測図 (縮尺1/80)	27
Fig. 22	西中ノ沢第1号住居跡	27
Fig. 23	床面上土器及び礫散布状況	27
Fig. 24	西中ノ沢第2号住居跡実測図 (縮尺1/80)	28
Fig. 25	西中ノ沢第2号住居跡	28
Fig. 26	西中ノ沢第3号住居跡実測図 (縮尺1/80)	29
Fig. 27	西中ノ沢第3号住居跡	30
Fig. 28	西中ノ沢第4号住居跡	30
Fig. 29	西中ノ沢第4号住居跡実測図 (縮尺1/80)	31
Fig. 30	西中ノ沢第5号住居跡実測図 (縮尺1/80)	32
Fig. 31	西中ノ沢第5号住居跡	32
Fig. 32	西中ノ沢第6号住居跡実測図 (縮尺1/80)	33
Fig. 33	西中ノ沢第6・7号住居跡	33

Fig. 34	西中ノ沢第6号住居跡	34
Fig. 35	西中ノ沢第7号住居跡	34
Fig. 36	西中ノ沢第7号住居跡実測図(縮尺1/80)	35
Fig. 37	西中ノ沢第1号住居跡土器出土状況	37
Fig. 38	西中ノ沢第2号住居跡土器出土状況	37
Fig. 39	西中ノ沢第1・2・5・6号住居跡出土土器実測図(縮尺1/4)	38
Fig. 40	西中ノ沢第1・2・5・6号住居跡出土土器	39
Fig. 41	西中ノ沢第7号住居跡出土土器実測図(縮尺1/4)	39
Fig. 42	西中ノ沢第7号住居跡出土土器	40
Fig. 43	西中ノ沢遺跡出土土器・土製品実測図(縮尺1/2)	41
Fig. 44	坊野遺跡の試掘調査	IV章の扉
Fig. 45	坊野遺跡遺構配置図(縮尺1/400)	46
Fig. 46	坊野遺跡全景	47
Fig. 47	坊野第1号住居跡	47
Fig. 48	坊野第1号住居跡実測図(縮尺1/80)	48
Fig. 49	坊野第2号住居跡	48
Fig. 50	坊野第2号住居跡実測図(縮尺1/80)	49
Fig. 51	坊野第2号住居跡土器出土状況	50
Fig. 52	坊野遺跡出土土器実測図(縮尺1/4)	51
Fig. 53	坊野遺跡出土土器	52
Fig. 54	坊野遺跡出土鉄器・石器実測図(縮尺1/2)	53
Fig. 55	野口遺跡より亀ノ甲遺跡を臨む	V章の扉
Fig. 56	野口遺跡周辺地形図(縮尺1/3000)	56
Fig. 57	野口遺跡遺構配置図(縮尺1/400)	56—57
Fig. 58	野口遺跡北半遺構全景	57
Fig. 59	野口遺跡南半遺構全景	57
Fig. 60	野口第1号住居跡実測図(縮尺1/80)	58
Fig. 61	野口第1号住居跡	59
Fig. 62	野口第2・3・4・5号住居跡	59
Fig. 63	野口第2・3号住居跡実測図(縮尺1/80)	60
Fig. 64	野口第4号住居跡	61
Fig. 65	野口第4号住居跡実測図(縮尺1/80)	61
Fig. 66	野口第5号住居跡実測図(縮尺1/80)	62
Fig. 67	野口第6・7号住居跡	62
Fig. 68	野口第7号住居跡実測図(縮尺1/80)	63

Fig. 69	野口第9号住居跡	63
Fig. 70	野口第9号住居跡実測図 (縮尺1/80)	64
Fig. 71	野口第10号住居跡	65
Fig. 72	野口第10号住居跡実測図 (縮尺1/80)	65
Fig. 73	野口第1号住居跡出土土器実測図 (縮尺1/4)	66
Fig. 74	野口第1号住居跡出土土器	67
Fig. 75	野口第4号住居跡土器出土状況①	68
Fig. 76	野口第4号住居跡出土土器実測図① (縮尺1/4)	69
Fig. 77	野口第4号住居跡出土土器実測図② (縮尺1/4)	70
Fig. 78	野口第4号住居跡出土土器	71
Fig. 79	野口第4号住居跡出土土器実測図③ (縮尺1/4)	72
Fig. 80	野口第4号住居跡土器出土状況②	73
Fig. 81	野口第7号住居跡出土土器実測図 (縮尺1/4)	74
Fig. 82	野口第7号住居跡出土土器	75
Fig. 83	野口第7・9・10号住居跡及び円形溝中出土土器	76
Fig. 84	野口第7・9・10号住居跡及び円形溝中出土土器実測図 (縮尺1/4)	77
Fig. 85A	野口遺跡出土土器・土製品実測図 (縮尺1/2)	78
Fig. 85B	野口遺跡出土土器・土製品 (縮尺1/2)	78
Fig. 86	野口第6号住居跡実測図 (縮尺1/80)	80
Fig. 87	野口第8号住居跡実測図 (縮尺1/80)	81
Fig. 88	野口第8号住居跡	81
Fig. 89	野口第11号住居跡実測図 (縮尺1/80)	82
Fig. 90	野口第11・12号住居跡	82
Fig. 91	野口第12号住居跡実測図 (縮尺1/80)	83
Fig. 92	野口第13号住居跡	84
Fig. 93	野口第13号住居跡実測図 (縮尺1/80)	84
Fig. 94	野口遺跡掘立柱遺構とピット群 (縮尺1/200)	84
Fig. 95	野口第1号掘立柱遺構実測図 (縮尺1/80)	85
Fig. 96	野口第2号掘立柱遺構実測図 (縮尺1/80)	85
Fig. 97	野口第3号掘立柱遺構実測図 (縮尺1/80)	86
Fig. 98	野口第4号掘立柱遺構実測図 (縮尺1/80)	86
Fig. 99	野口第2号溝 (V字溝) 実測図 (縮尺1/200)	87
Fig. 100	野口第2号溝	88
Fig. 101	野口第4・5号溝	88
Fig. 102	野口第6・7号溝実測図 (縮尺1/80)	89

Fig. 103 野口第6～8号溝	90
Fig. 104 野口第8-b号溝	90
Fig. 105 野口第8・12号住居跡・掘立柱遺構周辺出土土師器・須恵器実測図(縮尺1/4)	91
Fig. 106 野口各溝出土土師器・須恵器実測図(縮尺1/4)	92
Fig. 107 野口各溝出土土師器・須恵器	93
Fig. 108 V字溝上層土器出土状況	94
Fig. 109 道添遺跡航空写真	VI章扉
Fig. 110 道添遺跡周辺地形図(縮尺1/3000)	100
Fig. 111 道添遺跡遺構配置図(縮尺1/400)	100—101
Fig. 112 道添北半遺構群	101
Fig. 113 道添南半遺構群	101
Fig. 114 道添第2号住居跡実測図(縮尺1/80)	102
Fig. 115 道添第3号住居跡実測図(縮尺1/80)	103
Fig. 116 道添第4号住居跡	104
Fig. 117 道添第4号住居跡実測図(縮尺1/80)	104
Fig. 118 道添第5号住居跡	105
Fig. 119 道添第5号住居跡実測図(縮尺1/80)	105
Fig. 120 道添第6号住居跡	106
Fig. 121 道添第6号住居跡実測図(縮尺1/80)	106
Fig. 122 道添第7号住居跡	107
Fig. 123 道添第7号住居跡実測図(縮尺1/80)	107
Fig. 124 道添第8号住居跡実測図(縮尺1/80)	108
Fig. 125 道添第9号住居跡床面土器及び炭化材出土状況	108
Fig. 126 道添第9号住居跡	109
Fig. 127 道添第9号住居跡実測図(縮尺1/80)	109
Fig. 128 道添第10・11号住居跡実測図(縮尺1/80)	110
Fig. 129 道添第10・11号住居跡	111
Fig. 130 道添第1号円形周溝	111
Fig. 131 道添第1号円形周溝実測図(縮尺1/80)	112
Fig. 132 道添第2号円形周溝実測図(縮尺1/80)	112
Fig. 133 道添第1・2号土壇と第1号掘立柱遺構	113
Fig. 134 道添第2号土壇	113
Fig. 135 道添第1・2号土壇及び第1号掘立柱遺構実測図(縮尺1/80)	113
Fig. 136 道添第2号掘立柱遺構実測図(縮尺1/80)	114
Fig. 137 道添第7号住居跡土器出土状況	114

Fig. 138	道添第7号住居跡出土土器実測図① (縮尺1/4)	115
Fig. 139	道添第7号住居跡出土土器①	116
Fig. 140	道添第7号住居跡出土土器②	117
Fig. 141	道添第7号住居跡出土土器実測図② (縮尺1/4)	118
Fig. 142	道添第7号住居跡出土土器実測図③ (縮尺1/4)	119
Fig. 143	道添第1号円形周溝土器出土状況	119
Fig. 144	道添第1号円形周溝出土土器実測図 (縮尺1/4)	120
Fig. 145	道添第1号円形周溝出土土器	121
Fig. 146	道添第5号住居跡貯蔵穴内土器出土状況	122
Fig. 147	道添第3～5・9・11号住居跡出土土器実測図	123
Fig. 148	道添第3～5・9・11号住居跡出土土器	124
Fig. 149	道添第2号土壇内出土支脚 (縮尺1/4)	125
Fig. 150	道添遺跡出土鉄器・石器実測図 (縮尺1/2)	125
Fig. 151	道添遺跡出土鉄器・石器・ガラス玉	125
Fig. 152	道添遺跡出土砥石	126
Fig. 153	道添遺跡出土砥石実測図 (縮尺1/3)	126
Fig. 154	道添第12号住居跡実測図 (縮尺1/80)	127
Fig. 155	道添第12号住居跡と円形周溝	128
Fig. 156	道添第12号住居跡	128
Fig. 157	道添第13号住居跡	129
Fig. 158	道添第13号住居跡実測図 (縮尺1/80)	129
Fig. 159	道添第14号住居跡	130
Fig. 160	道添第14号住居跡実測図 (縮尺1/80)	130
Fig. 161	道添第15号住居跡	131
Fig. 162	道添第15号住居跡実測図 (縮尺1/80)	132
Fig. 163	道添第15号住居跡炭化物出土状況実測図 (縮尺1/30)	132
Fig. 164	道添第15号住居跡炭化物出土状況①	133
Fig. 165	道添第15号住居跡炭化物出土状況②	133
Fig. 166	道添第16号住居跡実測図 (縮尺1/80)	134
Fig. 167	道添第16号住居跡	134
Fig. 168	道添第17号住居跡実測図 (縮尺1/80)	135
Fig. 169	道添第17号住居跡	136
Fig. 170	道添第17号住居跡貯蔵穴様土壇内土器出土状況 (縮尺1/30)	137
Fig. 171	道添第17号住居跡貯蔵穴様土壇	137
Fig. 172	道添第18号住居跡実測図 (縮尺1/80)	138

Fig. 173 道添第20号住居跡	138
Fig. 174 道添第20号住居跡実測図 (縮尺1/80)	139
Fig. 175 道添第21号住居跡	139
Fig. 176 道添第21号住居跡実測図 (縮尺1/80)	140
Fig. 177 道添第22号住居跡実測図 (縮尺1/80)	141
Fig. 178 道添第13・15・20～28号住居跡	141
Fig. 179 道添第23号住居跡実測図 (縮尺1/80)	142
Fig. 180 道添第13・14・22～28号住居跡	142
Fig. 181 道添第24号住居跡実測図 (縮尺1/80)	143
Fig. 182 道添第25号住居跡実測図 (縮尺1/80)	144
Fig. 183 道添第26号住居跡実測図 (縮尺1/80)	145
Fig. 184 道添第27号住居跡実測図 (縮尺1/80)	146
Fig. 185 道添第28号住居跡	146
Fig. 186 道添第28号住居跡実測図 (縮尺1/80)	147
Fig. 187 道添第29号住居跡実測図 (縮尺1/80)	147
Fig. 188 道添第12・13号住居跡出土土師器実測図 (縮尺1/4)	149
Fig. 189 道添第12・13号住居跡出土土師器	150
Fig. 190 道添第12号住居跡土器出土状況	151
Fig. 191 道添第12号住居跡柱穴内土器出土状況	151
Fig. 192 道添第12号住居跡貯蔵穴様土壇内土器出土状況	151
Fig. 193 道添第14～17号住居跡出土土師器実測図 (縮尺1/4)	152
Fig. 194 道添第14～17号住居跡出土土師器	153
Fig. 195 道添第17号住居跡貯蔵穴様土壇内土器出土状況	155
Fig. 196 道添第16・17号住居跡出土土師器実測図 (縮尺1/4)	156
Fig. 197 道添第16・17号住居跡出土土師器	157
Fig. 198 道添第18号住居跡出土土師器実測図 (縮尺1/4)	158
Fig. 199 道添第18号住居跡出土土師器	158
Fig. 200 道添各住居跡出土土師器・須恵器実測図 (縮尺1/4)	159
Fig. 201 道添各住居跡出土土師器・須恵器	159
Fig. 202 道添第15号住居跡出土炭化材顕微鏡写真	161
Fig. 203 坊野第2号住居跡張り出し部	168
Fig. 204 梯子の位置想定図	169
Fig. 205 西中ノ沢遺跡のベッド状遺構設置情況	170
Fig. 206 坊野遺跡のベッド状遺構設置情況	170
Fig. 207 野口遺跡のベッド状遺構設置情況	171

Fig. 208 道添遺跡のベッド状遺構設置情況	172
Fig. 209 裏山遺跡竪穴Ⅰおよび竪穴Ⅱのベッド状遺構	174
Fig. 210 狐塚遺跡第11号竪穴	175
Fig. 211 狐塚遺跡第2号竪穴	175
Fig. 212 宝台遺跡B地区第1号住居跡	176
Fig. 213 五十川高木遺跡A地点第2号住居跡	177
Fig. 214 ベッド状遺構各種①	177
Fig. 215 千塔山遺跡におけるベッド状遺構の設置情況	178
Fig. 216 ベッド状遺構各種②	179
Fig. 217 ベッド状遺構各種③	180
Fig. 218 弥永原遺跡B地区における設置情況	180
Fig. 219 有田遺跡における設置情況	181
Fig. 220 ベッド状遺構各種④	182
Fig. 221 横隈山遺跡第2地点における設置情況	182
Fig. 222 ベッド状遺構各種⑤	183
Fig. 223 門田遺跡における設置情況	183
Fig. 224 ベッド状遺構各種⑥	184
Fig. 225 断面図	191
Fig. 226 断面図部分 囲を示す	192
Fig. 227 鹿部東町遺跡土器溜出土土器実測図① (縮尺1/4)	201
Fig. 228 鹿部東町遺跡土器溜出土土器実測図② (縮尺1/4)	202
Fig. 229 久保長崎遺跡出土土器実測図① 第5号住居跡	203
Fig. 230 久保長崎遺跡出土土器実測図② 第7号住居跡	204
Fig. 231 久保長崎遺跡出土土器実測図③ 第1・2号住居跡	205
Fig. 232 小笹遺跡祭祀遺構出土土器実測図 (縮尺1/4)	206
Fig. 233 小笹遺跡A溝出土土器実測図 (縮尺1/4)	207
Fig. 234 原ノ辻9'試掘壕溝上層出土土器実測図① (縮尺1/4)	208
Fig. 235 原ノ辻9'試掘壕溝上層出土土器実測図② (縮尺1/4)	209
Fig. 236 原ノ辻上層式土器実測図 (縮尺2/15)	210
Fig. 237 有田遺跡25街区住居跡出土土器実測図 (縮尺1/4)	218
Fig. 238 竹ヶ本遺跡第11号住居跡出土土器実測図 (縮尺1/4)	219
Fig. 239 原2号墳出土土器実測図 (縮尺1/4)	220
Fig. 240 立花貝塚上層出土土器実測図 (縮尺1/4)	221
Fig. 241 大曲り遺跡第3号住居跡出土土器実測図 (縮尺1/4)	222
Fig. 242 伊勢山遺跡3区第1号住居跡出土土器実測図 (縮尺1/4)	223
Fig. 243 黄金山古墳出土土器実測図 (縮尺1/4)	224

表 目 次

Tab. 1	西中ノ沢遺跡住居跡一覧表	42
Tab. 2	坊野遺跡住居跡一覧表	50
Tab. 3	野口遺跡弥生時代住居跡一覧表	95
Tab. 4	野口遺跡古墳時代住居跡一覧表	97
Tab. 5	道添遺跡弥生時代住居跡一覧表	162
Tab. 6	道添遺跡古墳時代住居跡一覧表	164
Tab. 7	竪穴住居内諸施設の面積構制一覧表	173
Tab. 8	弥生土器分類表	194
Tab. 9	各遺構別出土土器分類表	197
Tab. 10	筑前・筑後の弥生後期各遺跡時期関係一覧表	212
Tab. 11	土師器分類表	215
Tab. 12	各遺構別出土土師器分類表	217

付 図 目 次

- Fig. ① 室岡周辺地形図（縮尺1/5000）（宮原真裕美製図）
 Fig. ② 室岡遺跡群出土土器編年表（縮尺1/8）（武末純一作成・宮原製図）

I 位置と環境



Fig. 1 八女市岡山

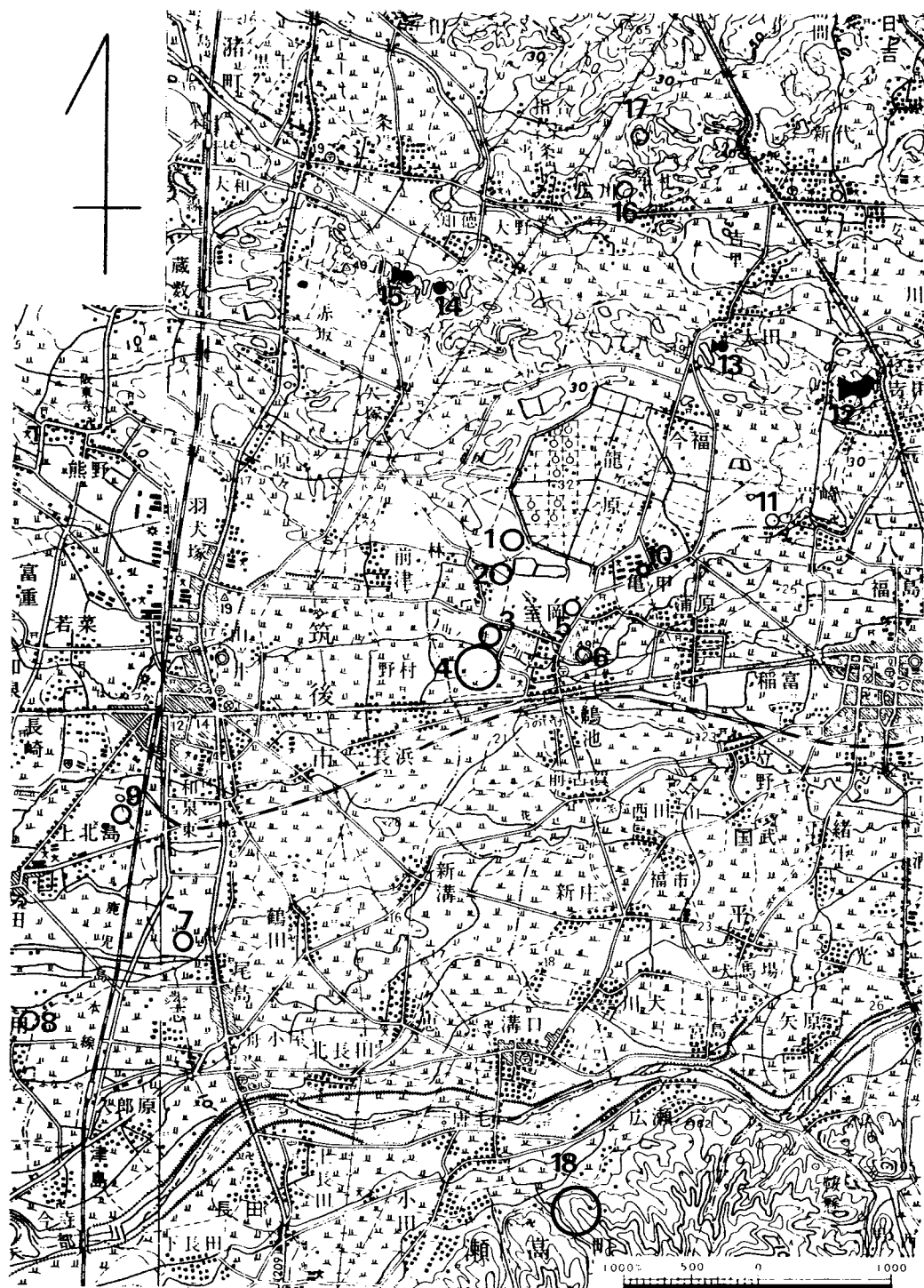


Fig. 2 室岡遺跡群周辺遺跡分布図 (縮尺 1/25,000)

1. 西中ノ沢遺跡 2. 坊野遺跡 3. 野口遺跡 4. 道添遺跡 5. 亀ノ甲遺跡 6. 岡山 7. 裏山遺跡
8. 常用遺跡 9. 狐塚遺跡 10. 石棺 11. 押形文土器 12. 岩戸山古墳 13. 神奈無田古墳
14. 弘化谷古墳 15. 石人山古墳 16. 平原古墳群 17. 山ノ前古墳群 18. 名木野古墳群

はじめに

1972年（昭和47年）八女市室岡西部，現在九州縦貫自動車道及び八女インターチェンジの敷地になっている4地点において発掘調査が行なわれ、『福岡県八女市室岡所在遺跡群調査概報』が福岡県教育委員会により発刊され，着目すべき成果をあげた。この調査に最も関連深いものが，この遺跡群の東に続く八女台地にある1964年（昭和39年）世に紹介された「亀ノ甲遺跡」である。八女市教育委員会から『亀ノ甲遺跡 福岡県八女市室岡の弥生遺跡調査概報』が発刊されている。これら両遺跡の周辺をみることにより，前記調査の意義を深めるため，1.位置と名称 2.八女台地，低地の地形，地質と弥生期の生活環境 3.主なる遺跡分布 4.遺跡の破壊と現状の各項にわけて述べることにしよう。

1. 位置と名称

現在，九州縦貫自動車道の久留米インターチェンジ南にある八女インターチェンジ直下と，北接地点でおよその位置がつかめる。八女市室岡所在遺跡群中，最南部最大の道添遺跡の中心部は，筑後・八女両市役所を結んだ線上にあり，筑後より1.9km，八女より3.2kmに当る。

筑後市役所（筑後市山ノ井）

北緯N33°12′

東径E30°29′

高度14.63m

八女市福島小学校（市役所東）

北緯N33°12′30″

東径E130°33′15″

高度30.0m

上記経緯度から道添遺跡の中心部は，ほぼ，

北緯N33°12′20″

東径E130°30′30″

に当るであろう。

八女市室岡は八女市北西に位し，その西は筑後市前津に台地，低地を帯状に隣接している。昭和29年4月，八女・筑後両市に岡山村が分割併合された際，室岡以東が八女市，前津と南西の長浜とが筑後市に編入された。

道添遺跡の中心から西2.2kmを国鉄鹿兒島本線が南北走し，山ノ井川南側低湿地に羽犬塚駅は設置されて居る。ここが八女地方，西の玄関口に当る。逆に，この遺跡の中心から東3.5kmを，国道3号線は北の久留米市より来り，八女市中心街福島を経て，熊本県山鹿市へ通ずる。国鉄鹿兒島本線と国道3号線の間は，東西に走る八女～大川線（東は大分県鯛生，西は大川市榎津）で結ばれている。

岡山村時代は同村の中心が室岡，鵜ノ池であった。その東または北は，八女台地であり，その南へ突出した半島状の南突端に高さ44.8mの残丘たる岡山（通称岡山さん，または竜頭山ともいう）がある。1911年（明治44年）筑後平野で，陸軍大演習が展開された際，明治天皇の行

幸があって、御野立所となった。その頂上部は平坦で $60m^2$ ほどあり、足下に八女低地、北肩後に八女台地、それから北東にかけて、耳納山塊の南前山赤藪山塊即ち八女郡広川町東部筑後変成岩帯に続いて岩戸山古墳をのせる八女丘陵、そして八女台地を見わたす。東は八女低地をへだてて、遙か日向神、矢部の東部火山群、南方には、これまた八女低地の向う筑肥山塊が、北・西に断層崖を明確に示している。ここでは北縁近く山門郡瀬高町名木野古墳群、同町小田の旧石器包含地帯、西縁近く女山神籠石、長谷横穴群、旧矢部川分流沿岸大道端遺跡などが知られている。

現在、矢部川の本流は筑肥山塊の北縁を西流し有明海に注ぐ。長さ $133km$ 、矢部北東の最高

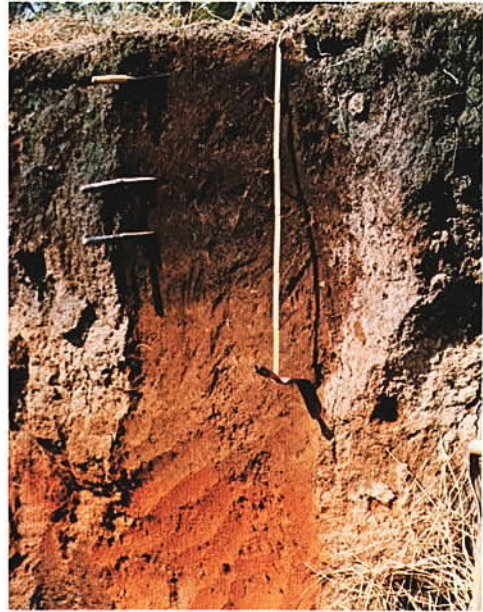


Fig. 3 亀ノ甲遺跡周辺土層

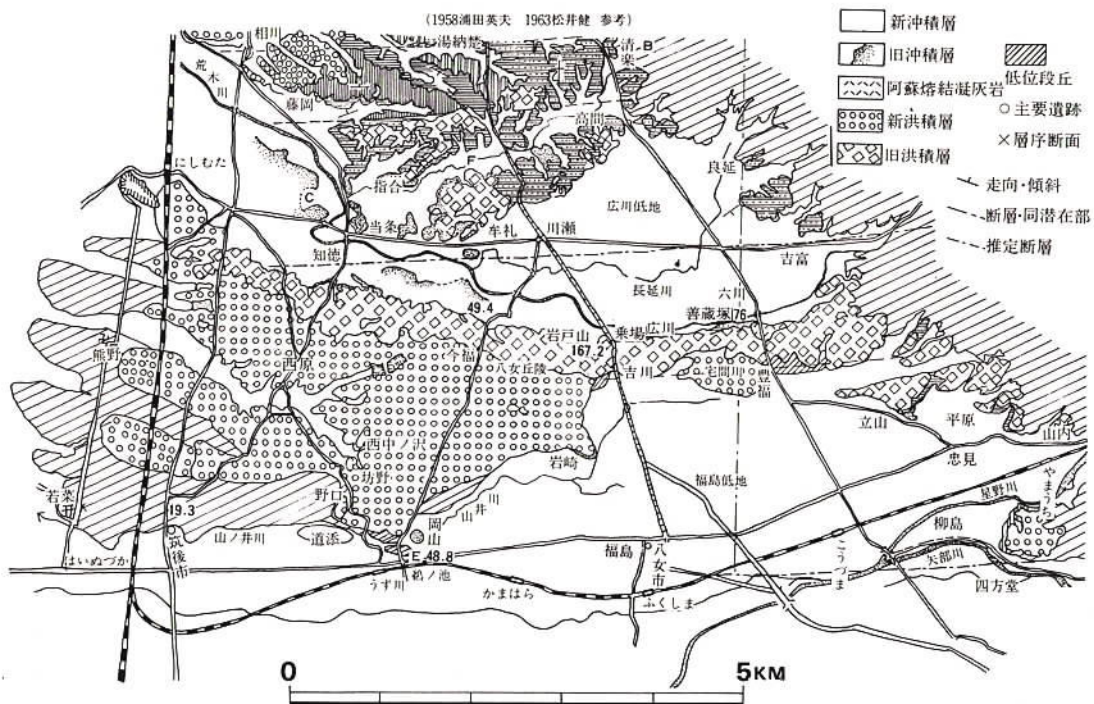


Fig. 4 八女洪積台地の地形区分 (註1・2)

1,231mの釈迦岳，その南西にやや低い御前岳と，竹原・虎伏木の諸溪谷の水を集め，矢部村，黒木町の山間部を経て八女低地に現れる。一方北の大支流たる星野川は，耳納山脈南東縁から源流を発し，星野火山群諸溪谷の水を集めて南西流，八女市南東，字柳島下川原にて矢部川に合流している。従って八女低地は，星野・矢部両川の複合扇状地をなして居り，室岡付近は，その西端に隣接している。

ここで室岡，亀ノ甲両地名について言及する。岡山に石室（いしむろ）があるところから起ったと伝えられている。亀ノ甲については見当がつかないが，弥生時代の鹿骨，亀甲の焼ト占を連想させるが，亀ノ甲なる地名は他にも例はある。1964年（昭和39年）の「亀ノ甲遺跡」の命名については説明を要する。遺跡所有者が，東の低地，亀ノ甲部落在住者であるというのに起因する。当時の調査区域は室岡と呼ぶ方が土地に即した呼称である。しかしその遺跡の拡がりは亀ノ甲に及んでいることは明らかであった。亀ノ甲の区域は南北走している県道広川～溝口線の以東にあたり，南は，残丘岡山の北東裾に達している。1972年（昭和47年）の発掘調査と区別出来る利点はある。

2. 八女丘陵，台地，低地の地形地質区分

八女丘陵及び台地は，従来長峰丘陵と呼びならわされていた。八女，筑後両市（前記のように長峰村，岡山村，羽犬塚町）の北部を東西走し，東端は筑後結昌片岩より成る耳納山塊の南支脈赤藪山塊（300m）に接する。広川低地を挟んで高間，牟礼，指合の北を経て久留米市高良台に南接する広川台地が拡がっている。この広川の台地は解析が進み地質は複雑である。

八女丘陵は，耳納山塊が傾動地塊運動で高い部分が北に偏しているように，最高所70mをはじめ，その尾根は北偏して東西走している。しかしその南の大部分は高度約40mの波状八女台地で凹地が介在し，東は八女市豊福，宅間田から吉田，岩崎，亀甲，室岡を経て筑後市前津，西原そして三潞郡に及んでいる。以上により明らかなように，八女西部は割合まとまった3つの地形（地質を加味した）に区分できる。

1) 高位段丘

前記の八女丘陵は，これに相当する。高度65～60mと45～40mに再区分される。高位段丘の北東隣が一段と高く筑後変成岩を母胎とする山地となって居ることは前述の通りで，第3紀の侵蝕面が高度65m前後で洪積世の礫層を被っている。即ち，高位段丘は大部分，拳大から人頭大の礫から出来ている。いわゆる高良台礫層で安山岩，結昌片岩，チャートなどがつまっている。この中，安山岩は風化変質がひどく，容易にスコップがつかささる。八女丘陵を縦断する国道3号線の沿道，または，久留米市上津荒木台地にもみられる。

2) 中位段丘

高位段丘面の南に続き，八女台地に当る。前者とは7.5m～10mの高度差である。37.5m前

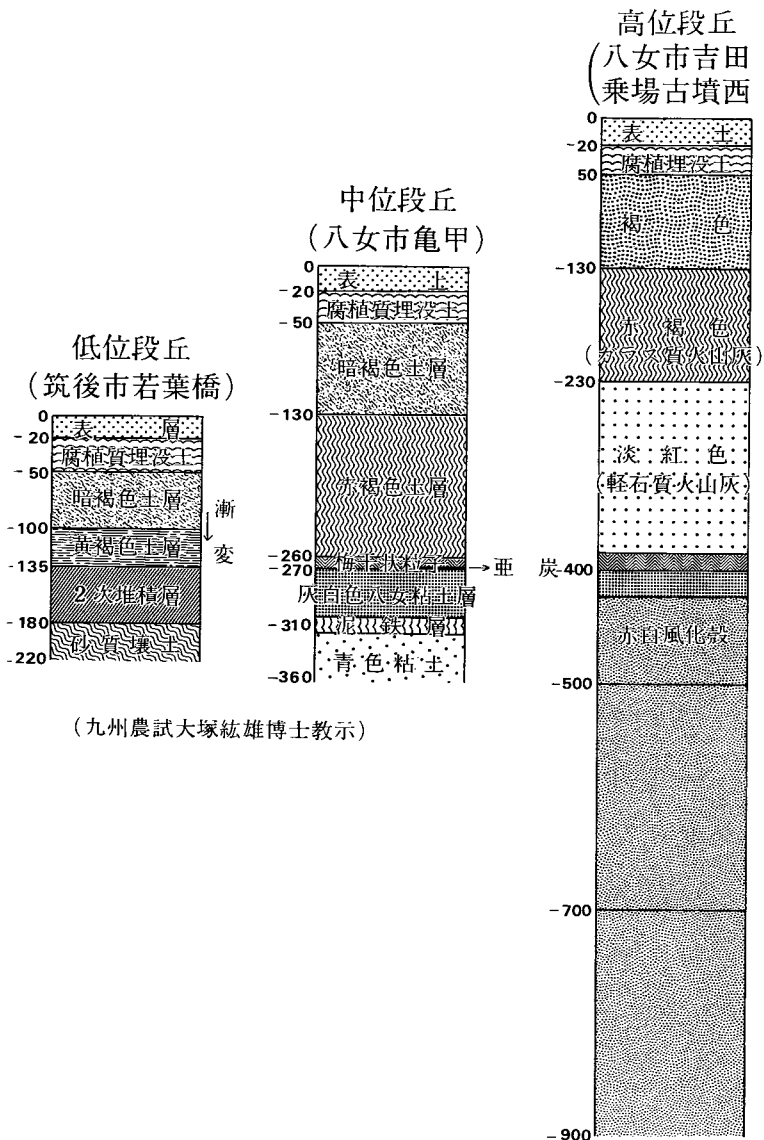
後と30~20mの面に分けられる。基盤には高良台礫層があり、その侵蝕面上に黄褐色風化の再堆積礫層、その上層の火山噴出物の最下部にガラス質火山灰中に灰白または淡黄色で中心部に梅干大の黒褐色の核が含まれている。黄灰色淡紅色の凝灰質粘土は、いわゆる八女粘土である。

中位段丘40~20mの八女台地の拡がりには前述のように東は八女市豊福から西は筑後市羽犬塚まで東西長約7km、南北の幅は、東の宅間田で500m、吉田~岩崎で1km、今福~室岡で2km、筑後市羽犬塚付近で500mを示している。

この地域が弥生、古墳時代人の生活基盤となったり、墓地となったことは4、5にその主要なものを表記したので、これを見て頂きたい。

3) 低位段丘

高度20m~10mで、中位段丘との比高2.5~5mほど低い。旧沖積世の新砂礫層の堆積面で、主として八女市室岡の西から帯状に前津~若菜~高江に接続して拡がる。筑後市前津の最高点22.5m、羽犬塚上町願長寺址東19.20mは中・低位段丘を区分するメドになる。即ちその以西に海草状の3つの小半島が突出している。北から坂東寺・久富そして高江で、西端は段丘崖を



(九州農試大塚絃雄博士教示)

Fig. 5 八女地区地層柱状断面図

して筑後市西部に拡がる沖積低地の二川水田地帯に臨んでいる。前津の最高点から西約 2.5 m に当る。

この段丘上は蔵敷・玄ヶ野・西原の弥生末期の住居址・甕棺・石棺群これに伴う遺物を包含し、前津・羽犬塚・若菜の古墳、奈良・平安期の住居址、石棺、土師器・須恵器・滑石経・直刀などを出し、坂東寺・久富・高江を中心として中世寺院関係がうかがわれる。

広義に低位段丘と呼ぶ場合、旧星野・矢部両河川分流の間に、表層に所謂黒ボクをのせ、その下層に細微な再堆積層をもつ微高地が存在する。その中で最も大きいものが、山ノ井川・花宗川に挟まれた八女インターチェンジ西、筑後市野村・長浜・山ノ井・和泉の東西 3 km、中央部山ノ井で南北の幅 1.4 km に及んでいる。東で 19.10 m、中央の山ノ井四ツ角で 13.86 m の高度を示している。この地域は原始古代関係遺跡が、ほとんど見られず再堆積層形成が新しく、水中に永くあったことを示すものといえよう。この大きな新低位段丘の南西辺縁部に弥生末期（花宗駅西）弥生後期（九州農試北部）土器包含地がある。その周辺に狐塚・常用・裏山など既発表の遺跡があり、いずれも上述の微高地即ち新低位段丘といわれるべき地の上にある。なお、裏山遺跡に関連し旧矢部川の氾濫と尾島土壌について 5 の項で述べることにしよう。

4) 水 系

上述の中で水系にふれて居るので、重複を避けて概述する。八女丘陵、台地を挟んで、北は広川、南は矢部川が東～西流している。広川は、その源流を筑後変成岩特に北東の小椎尾は白ツばい珪質片岩地帯に発し、支流長延川を合し、自ら運搬堆積した広川氾濫原の南に移行し、河岸段丘をも形成している。従って現在は、八女丘陵の北裾に沿うて西流するに至った。

矢部川本流は、現在、八女盆地の南縁、鳶形山 (450 m) を主峰とする筑肥山塊北縁を西流している。北の谷の支流たる星野川は、耳納山塊の南斜面、星野火山諸溪谷の水を集め、八女郡上陽町の緑泥片岩、八女市長野の凝灰岩塊を削り八女市柳島（三角州）の西で合流している。星野川は、八女市山内を頂点として、狭長な二等辺三角形の扇状地を堆積し、長さ約 5 km に及んでいる。主なる分流を北から順次にあげれば、

イ. 山内・大籠・立山・宅間田・岩崎の南縁を結ぶ水系

ロ. 山内・忠見・黒土・平田・寺田・大島・蒲原の北の山ノ井川水系

ハ. 矢部線山内駅南 300 m から井延・後之江・高島の南・八女市福島の間、花宗川水系イロハ各水系、河岸段丘が迎れる。その間に、後之江～高島・納楚～大島などの三角洲がある。その最も大なるものが福島で、東西 1.7 km、南北 1.5 km で高度は 30～31 m を示している。

矢部川は支流星野川が八女市山内に出てくるのに対し、その山内東端の南 1.5 km の北田形に出る。両河川を分ける高度 149.2 m の結昌片岩より成る山塊は東西 2 km 南北約 1 km 余。その西に続いた三角洲柳島の西、下川原で合流する。柳島の西では祈禱院、津ノ江の三角洲がある。後之江の段丘は長さ 500 m にわたり 2 m の落差を南に示して、見事である。段丘上には弥生中

期の合口甕棺10数基があり、北に船型石、西に小石室が残っていた。ここから西方の高島まで弥生末～古墳期の甕・壺・杯・高杯などを包含する住居跡が拡がっている。段丘下の旧星野川分流河底には、後之江南・津ノ江北に石棺群25基、かめ棺5基のあったことから、矢部川本流は、上の時期以降、遺跡以南を流れていたことは明らかである。関連事項であるが、津ノ江南方800m、新矢部川北岸は大福寺南端に当る。その河底部から、昭和41年中世の土師器皿2枚を出土していることから、ここも同様な解釈が成立つ。現在矢部川の流路は、立花町四方堂から野広尾まで東西約3kmの間は、北に500m近くも蛇行している。

さて八女盆地南半の矢部川堆積扇状地の頂点は、前記の新矢部川橋の対岸中洲付近と考えられ、扇状地を流れた主なる分流として、

イ. 中洲から西行する現在の花宗川に近い水系

ロ. 宮野・緒玉・平・新庄そして南の久恵との間を放流した水系

ハ. 八女市宮野・宮島間は3km。その上流の立花町四方堂～野広尾間と対照的に南にメアンダー（蛇行）している。その下流宮島～川犬～久恵の南には見事な河岸段丘が出来、現矢部川に至る前段階の水系がつかめる。宮島～川犬～鶴田～植松～野町～和泉西から山ノ井川（旧星野川）に礫層、自然堤防を形成したやや古い時期の一時的氾濫をうかがわせる。1923年（大正12年）1953年（昭和28年）にあった大洪水の如き水害のひどい地域は主としてローハの間であった。

立花町中洲を扇頂として、その西4.5kmの鵜ノ池～溝口を結ぶ約2.5kmが矢部川扇状地末端部になる。旧矢部川扇状地末端部と旧星野川扇状地とのズレは約2kmになる。蒲原の低湿地は両者のズレの北旋みに位置する。岡山の南東に文字通り鵜ノ池が出来たことが首肯される。

以上、現地地形の実検を基にしての所論であるが、さらに八女市鵜ノ池水道工事所勤務の島章氏よりボーリング結果を聴取したので紹介する。(i) 鵜ノ池から新庄まで砂・泥土2m～2.50m、その下20mは拳大から人頭大の礫層。(ii) 鵜ノ甲遺跡の東、赤褐色土層2.50m、礫層17m、その下層味噌岩（糜爛した結晶片岩）。(iii) 蒲原は粘土層20m鉄気が多い。その下は礫層になる。

江戸初期、田中吉政が福島築城を企画し、その名残りは僅かに偲べるが、星野・矢部両川の分流を巧みに利用して居る。「白花」「しげ繁」の銘酒醸造場は扇状地末端湧水を利用する位置に設定している。諸分流中、星野・矢部両河川いずれもが流入したと考えられる花宗川が、現在の流路をとるに至ったのは1688年（貞享5年）頃で、八女西部特に現在の筑後市下北島以西の灌漑、八女地方年貢米を榎津に運搬、久留米城収納のため、筑後市二本松に米倉、八女地方船溜りになっていた。花宗川、山ノ井川いずれも藩政時代開さくということになっているが、その先人たちは、地形・水系を実検して利用に成功したといえよう。

3. 気象および水系の推移

1) 中位段丘形成前

時期は、リス・ウルム間氷期で、12～7万年前に相当する。阿蘇熔結凝灰岩の噴出前の気象条件は年平均気温18℃以上、年降水量1,000mm以上とされ、現在の中国にもっていけば、揚子江以南、常緑広葉樹林の繁茂した植生を示すものである。赤色土壌を生成した当時の気温は現在より、年平均気温3℃以上、年積算すれば200～300℃高かったことに注意しておこう。

旧屋野・矢部両川が激しく氾濫し安山岩・結晶片岩礫を押し流し、中流から北西流し、東の鶴田、北西の野町・和泉などに点々と自然堤防または礫の堆積層を残したと思われる。

八女丘陵の北、広川においても同様の現象のあったことはいうまでもない。

2) ビュルム氷期

B. P. 7～1万年に当り、西南日本の南部以外を除いて、東京江古田植物化石層に示されるよう日本列島は落葉性広葉樹を混交した冷温性植物群を示している。気温の低下と海面低下がみられたことが、よく知られている。気温は7～8℃、終末期では5～6℃と推測されている。

広川台地の南縁、広川町北西の指合地区では地表下60cmから松葉を主とした泥炭が出ていることから、洪積世末から沖積世に入ろうとする時期の植物相を示し、その後、沼沢地が続いたことを物語る。厳寒期は1万4千年前後であったと思われる。

2万年前の海面低下は120mに達し、琉球弧から台湾・中国大陸と陸続きであったとされる。

3) 沖積世（縄文～弥生末期）

1万年前から気候の温暖化と共に、海面上昇し始め、縄文前期（B. P. 5000頃）には最高位に達している。

八女地方では黒木盆地周辺高度100m以上八女市立山80mで発見された押型文土器片は当時縄文人の地に相応しい。それにしても、矢部川中～下流間に出来た尾島三角洲の北端にある筑後市上北島裏山遺跡には押型文出土の住居址群がみられることは注目される。最高度が12mしかない。

尾島、及びその北端裏山について説明する。現在の矢部川の北岸舟小屋温泉から北に続く尾島部落は、東西1km、南北600mの長方形の微高地（新低位段丘）で、表土より黒色火山灰土壌（30cm）黒褐色漸移土壌（27cm）淡黄色ローム（60cm）、その下層は砂質土壌（47cm）基層は礫となっている。

九州農業試験場元土壌肥料研究室長菅野博士によれば、「暗褐色マンガン斑が多く、母材は火山灰を主としているが、これは両積性のもので結晶片岩の小礫を含み、粗砂をも含む。旧矢部川沖積物を混入している」と。以上により明らかなように、旧矢部川の一分流が緩かに流れ、沼沢地がその周辺に広く拡がったことが推察される。

4. 八女西部の主要遺跡

遺跡	立地	時期	住居跡 墓 地 数	プラン 形 状	土 器	そ の 他	破 壊
西 中ノ沢	中位段丘	弥生後期 中葉	7	長方形	「く」の字口縁	石庖丁	昭和46年10月以降 縦貫自動車道造成 のため調査
坊野	中位段丘	弥生後期 古墳	2	長方形 不整形	「く」の字口縁 須恵器	鉄器	
野口	低位段丘	弥生後期 古墳前期・後期	13	長方形 7 正方形 6	二重「く」の字口縁 須恵器		
道添	低位段丘 (水田化)	弥生後期 古墳前期 古墳後期	11 8 10	長方形正方形 正方形円形周 溝	「く」の字の他外反 口縁	第15号住居跡南壁 にハリ材	
亀ノ甲	中位段丘	弥生前・中期 弥生後期	住居跡 20 28 石 94	穴居 3 長方形 17	板付Ⅰ・Ⅱ 須玖式 西新式	黒耀石 サヌカイト 石鏃多数・炭化米 方角規矩鏡・小形羽裂鏡	昭和37年以降所有 者の土取作業の為
裏山	低位段丘	縄文 早期 弥生 末期	住居跡 25 住居跡 30	長方形敷石 長方形	押型文 西新式	黒耀石石鏃 丸小玉	昭和29年以降桃・ 葡萄園耕作の為
常用	低位段丘	弥生前・中期	住居跡 5 近くに支石墓	長方形?	夜臼式 須玖式	黒耀石石鏃 蛤刃石斧	昭和35年以降水田 化のため
狐塚	低位段丘	弥生末期 古墳時代	住居跡 12 住居跡 13	長方形	安国寺式 西新式	平窯 3	昭和44年以降工場 造成のため
石人山 古墳	高位段丘	5世紀末	陪冢 3 石棺 2	前方後円墳 全長 115m	熊形埴輪 須恵器・円筒埴輪 家形埴輪	丸小玉	昭和23開墾、昭和 35年以降周辺土地 削去
弘化谷 古墳	高位段丘	6世紀半	三角 重弧 鞠等の装飾	円墳 径35m	土師・須恵片		昭和46年葡萄園整 備のため
岩戸山 古墳	高位段丘	6世紀初	南西・岩崎 にかけ古墳 時代集落	前方後円墳 全長 127.5m	須恵・土師 円筒・人物・動物 埴輪	石刀・石埴・石人 ・石鳥・鳥獣など 石造物	昭和20年以降開墾 昭和35年以降周辺 宅地造成
乗場 古墳	高位段丘	6世紀中葉		前方後円墳 全長 85m	円筒埴輪	直刀(紛失) 金環頭・柄頭	昭和29年以降福島 高校整地、昭和40 年以降宅地造成
善蔵塚 古墳	高位段丘	6世紀初	東：茶臼山 古墳、南： 丸山古墳	三段築前方後 円墳全長100m	須恵器多し 円筒埴輪	曲玉	昭和40年土取り

5. 遺跡の破壊と現在

戦争末期に続く戦後の原野開墾，食糧増産が行なわれ，昭和25年前後以降の水田化，葡萄・梨・蜜柑など果樹園芸増産が盛行した。果樹園芸の場合は広大な地域と施肥のため深耕の溝が設けられたため，それ以降の遺跡の破壊は夥しく，これを記録するのも容易な業ではなかった。

一方，九州大学・久留米学芸大学をはじめ地元高校・中学など考古学ブームの波に乗り濫掘・出土品の収集があったが，当時の発掘の杜撰さは目を掩いたくなるものがあった。各期に於いて主なる遺跡の破壊について述べよう。

1) 食糧増産, 開墾期

遺跡名	立地	時期	住居跡数 甕棺・石棺数	規模 形状	土器	その他	破壊年月 その実状
八女市亀ノ甲	八女台地縁	弥生後・末期	石棺 3			鉄 戈	昭和7年飛行場・道路造成
八女市忠見地区立山	八女高位段丘	〃	石棺 5			人骨 石 鏃	昭和17年
筑後市水田山伏	低位段丘	弥生 中期	石棺 1 甕棺 20		須玖式甕		昭和28～30年 約 1ha 開田
筑後市水田	〃	弥生 後期	石棺	長方形?	炉址多し		昭和27～29年 約 1ha 開田
八女市上吉田	八女高位段丘	弥生後期	住居跡 5 石棺 7 甕棺 2	長方形?		人骨	昭和36年 果樹園中耕
筑後市若葉	中位段丘	古墳時代 平安時代	石棺 3	平地 高床	土師器高杯 椀・甕	曲玉直刀 昭和9年滑石 経出す	昭和31～35年 果樹園中耕
筑後市高江	低位段丘	弥生後期 鎌倉時代	石棺 6 窯 3	粘土椀 1	土師器皿 青白磁椀	人骨	昭和32年市道 造成のため
筑後市前津	中位段丘	古墳時代	住居跡20以上 石棺 5	円墳	壺・甕など		昭和33～35年 果樹園中耕の ため
八女市本真澤寺古墳	中(低)位段丘	古墳前期	石室 1	竪穴式石室		短甲 2 鉄 刀 3 振	昭和35年 開墾作業

2) 大型機械による土地変貌期

遺跡名	立地	時期	住居跡数 甕棺・石棺数	規模 形状	土器	その他	破壊年月 その実状
八女市津江石棺碑	沖積地	弥生末期	甕棺 4 石棺 30		甕 4	鉄 刀 1 振	昭和40年 農協倉庫建設 約 300m ²
八女市川犬古墳	沖積地 (低位段丘)	古墳前期		前方後円墳	円筒埴輪	ガラス玉 四獣鏡・刀子	昭和38年 市道拡張
筑後市蔵敷		弥生後期 古墳後期	甕棺 5 石棺 8 西南隣に住居跡	円形プラン	丹塗磨研須 玖式土器	子持勾玉	昭和35～36年 長 150m 幅 80m
八女市今福業師塚 古墳	高位段丘	古墳後期		前方後円墳	埴輪 須恵器		昭和40年
広川町太田 神南無田古墳	〃	〃	上記業師塚古 墳の南隣石棺 3基、住居跡 もあったと思 われる。	前方後円墳	〃		〃

昭和35年以降, ブルドーザの出現により土取作業は能率上昇し, 農業基盤整備, 道路拡張, 工場・宅地造成の名の下に地表は瞬時にして変貌し, 埋蔵文化財は損壊, 隠滅したもの枚挙に遑ない。地方史考究の障害となり終った。就中, 昭和47年から開始せられた九州縦貫自動車道工事は, 北は久留米市高良山西部より南は山門郡瀬高町, その間長さ約 3 km 幅約 30 m, 調査・記録の行なわれた広川町, 平原・山ノ前古墳群・鈴ガ山古墳群, 八女市室岡, 瀬高町大道端などの遺跡の他, その周辺において調査を要すべき場所を闇にしてしまった。

善蔵塚, 弘化谷古墳損壊防止策も行なわれたが(筆者微力致す), 昭和 51 年冬以来, 国道 3

号線西鉄バス池田停留所から西 300m にある高島古墳群12基中残っているのは5基のみ。八女郡広川町教育委員会によれば2業者による宅地造成が実施中で、これは筑後地区郷土研究会が中心となり、発掘届にまでこぎつけた。亀ノ甲遺跡の北の方は、現在土取作業が目立たぬ恰好で毎日のように続けられている。地域文化財に最も関係深い市町村自治体の行政担当者の姿勢と、市町村教育委員会の対処能力の緊要性が加わってくることになるろう。少なくとも市町村に専門的技師または識見のある担当者1人を是非置いて貰い度い。

6. 亀ノ甲遺跡に関する資料紹介

A 亀ノ甲遺跡97号石棺陰刻

昭和39年9月「亀ノ甲遺跡」の北隣地下の地下げが、所有者江崎与次郎氏によって行なわれた。

(1) 位置

「亀ノ甲遺跡」平面図北東角から北へ30m、県道新伐線から西10m坊野遺跡へ向う農道を入った地点にあり、現在石棺のあった東面は残っている。

(2) 出土状況

昭和39年9月末、発見当時、表土は椎・榎の林に掩われ、表土は流失していたが、暗褐色洪積土、地上から丁度50cmに石棺蓋石が出て居り、ブルドーザが西側々石下部にその爪を当てていたところであった。東側石の内壁面をのぞくと、陰刻が施されている。蓋石と側石の間、側石・小口石の下から36cmまで青灰色粘土がつめられていた。

(3) 石材 緑泥片岩

(4) 法量 東側石（内部）長1 m 32.9cm 幅約45cm 厚さ最大7.5cm

西側石（内部）長1 m 46.5cm（中央）幅42～52cm 厚さ最大6.5cm

(5) 東側石内壁の陰刻

陰刻は明らかな部分が、左上・右下に見える刀の尖端状のものである。左上は長さ14.5cm幅4.5cm、下辺に間をおいて長さ29cmの線があり、右手に辿ると、柄に相当する部分もうかがえる。右下の刀はみねの長さ69.5cm、尖端部は幅5.5cmで長さ11cmである。

(6) 西側石内壁の陰刻

この面は、陰刻が多いが、形象がつかみ難い。上の方の明確な陰刻線は中央から右に69.5cm、右下の幅18cm、上部の割れはみね部を刻む際の剝落と思う。

B 「亀ノ甲遺跡」報告の補遺

この際、2点を補充して置く。

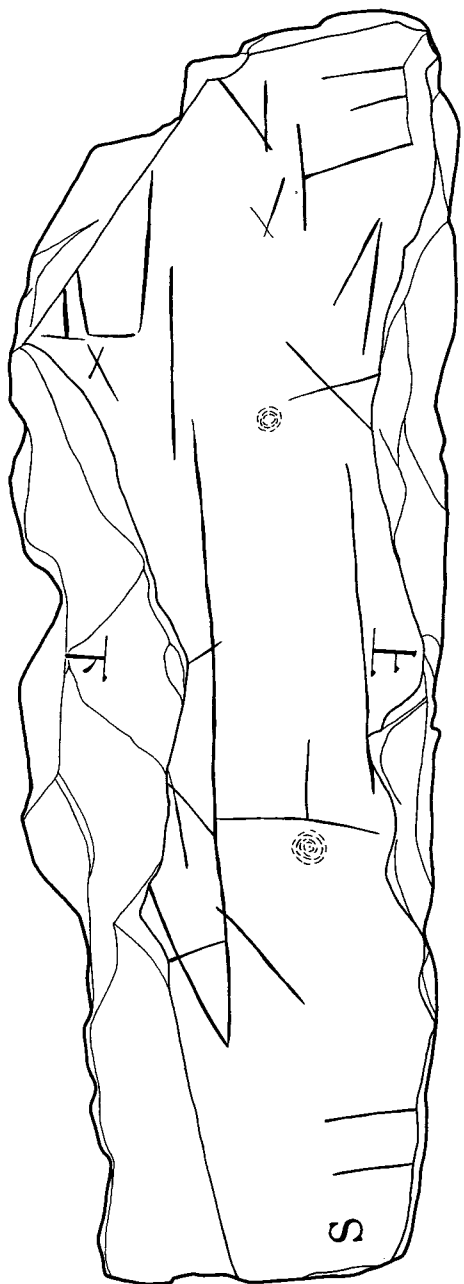
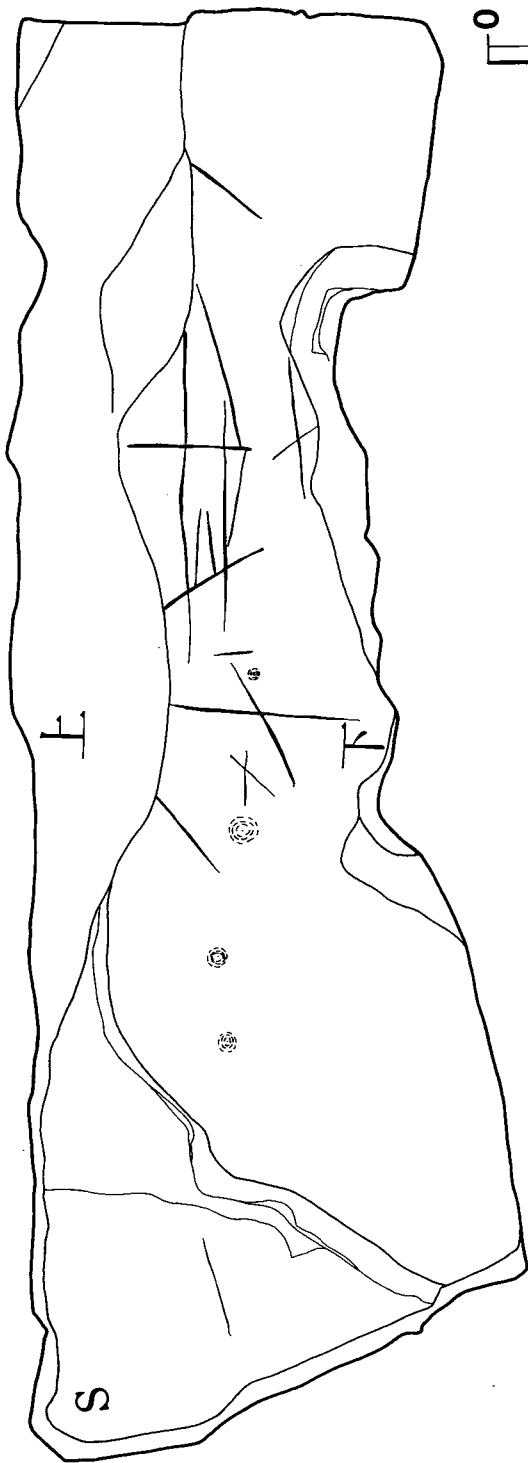


Fig. 6 亀ノ甲第97号石棺陰刻 (縮尺 1/8)

(1) 環壕として紹介されているものの中に、炉と思われる焼土を含む穴居，中期甕棺，後期石棺が設けられていたこと。

(2) 西壁に5の層序を示す高さ2.80m幅2.50m（中央部）の穴居の存在で第3～第4層間に炭化米を含んだ，縄文晩期，所謂亀ノ甲式土器を示す層が現存していること。

C 岡山小学校蔵亀ノ甲遺跡出土土器

縦貫道関係の調査期間中，浜武七蔵氏より岡山小学校に寄贈された弥生式土器を実見したので紹介する。浜武七蔵氏より，出土の状況等について尋ねたところ，亀ノ甲遺跡の出土品と判明した。しかし状況等については不明瞭であった。同時出土かどうか不明である。

1はソロバン玉状胴部の壺である。表面をへら磨きし，頸部から上半の中央部にかけて楕状

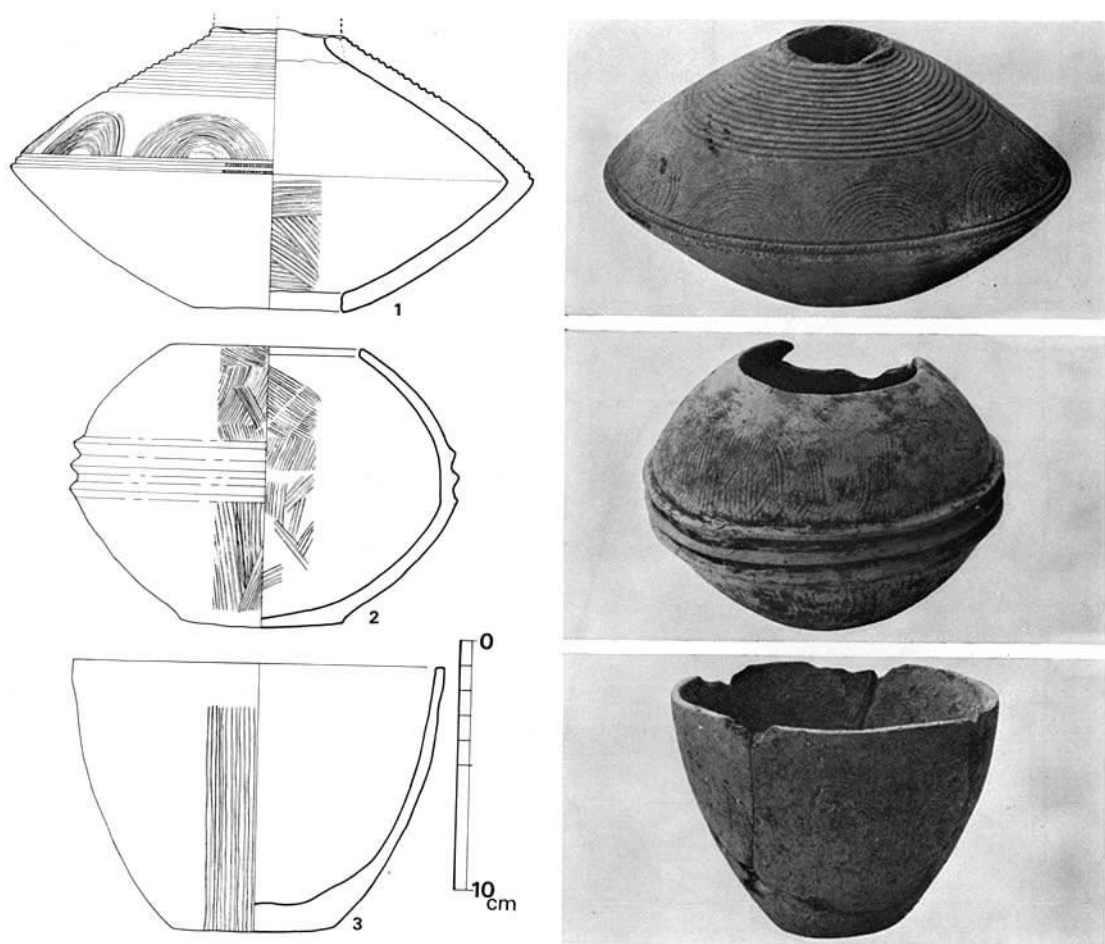


Fig. 7 亀ノ甲遺跡出土土器（縮尺 1/3）

工具による平行沈線を，下半を10連の連続弧状紋でうめている。胴部の中央接合部の上側に2本の平行沈線を引き，その間に刻紋をつけている。上下の刻みは同時に付されている。胎土中の砂は少ない。焼成はむらがあるが，概ね良好で，赤橙色～黄橙色を呈する。底部は穿孔されている。

2は無頸壺である。偏球状を呈し，底部は丸味をもって凸出する平底である。内外面全体にわたってハケメ調整され，その後胴部中央に3本の凸帯を貼り付けている。灰黄色を呈し，焼成不良である。

3は深鉢である。口縁部は直立し，端部は平坦である。底部は僅かに張り出すが胴部との境に明瞭な稜を生じている。外面はタテのハケメ調整である。胎土中の砂粒は多く，暗橙色を呈する。

以上3点の土器は同時に出土したものではあるが，共伴したものかどうかは不明である。このうち1の土器は肥後地方に多く見られるいわゆる免田式土器であり，筑後における資料としては極めて稀である。

- 註 1) 浦田 英夫「福岡県久留米市南方の新第三系について」九州大学 教養 学部『地学研究報告第5号』1958
2) 松井健「筑紫平野周辺の赤色土の産状と生成時期—西南日本の赤色土の生成にかんする古土壌学的研究第1報」『資源科学研究所集報第60号』1967

Ⅱ 調査の経過



Fig. 8 野口遺跡の実測作業

1. 調査の進捗過程

昭和46年9月20日 八女市岡山大字室岡に所在する遺跡の調査を開始した。八女市教育委員会の尽力で手配していただいた作業員の手で、調査予定地の伐採作業をただちに実施した。

調査予定地は中央を北西側より開析された南北2つの中位段丘上に位置しており、亀ノ甲遺跡の西側に接していた。北側の丘陵は茶畑であり、西中ノ沢遺跡と呼ぶこととし、南側の丘陵は荒地で坊野遺跡と呼ぶこととした。当初の伐採作業は西中ノ沢遺跡南端より開始し、次に坊野遺跡へと進めた。

9月22日 建設工事担当者との打合せにより、調査は南より北へ向けて進行させていくこととなった。坊野遺跡の南に広がる低位段丘のうち160m分についても遺構の存在が予想されたので調査対象地とすることとした。

調査はまず路線中央より20m離れた4mの間をAライン、中央線より東側4mの間をBライン、中央線から西側16m離れた4mの間をCラインとした。Aラインは工事用道路を急ぎ設ける必要性のあることから、全区間通してのトレンチとし、B及びCラインは4×10mのグリッドを10mおきに設定した。掘削はブルドーザーとバックホーを利用して荒削ぎし、その後を人力で遺構の有無を探った。全区間720m中の1本のトレンチと72個のグリッドを完掘したのは10月8日であった。

その結果、低位段丘と考えた水田面は沖積層であり、遺構は検出されなかった。遺物の出土も皆無であった。中位段丘上では住居跡が確認された。

10月9日より住居跡の検出された区域を全面的に掘り広げた。西中ノ沢遺跡では10月17日に、坊野遺跡では18日に遺構面までの掘削を終了した。坊野遺跡の掘削作業が終るに伴い、山ノ井川と既調査地点との中間の下位段丘上へと機械力を移動し、Cラインで4m×10mのグリッドを従来通り設定し遺構の有無を確認した。その結果北側の既調査地点より地山線がしだいに高まり、河岸段丘をなしていることが判明し、多くの住居跡が確認され、野口遺跡と呼ぶことにした。さらに山ノ井川対岸の南側もほぼ同じ標高を示し、周辺水田面



Fig. 9 坊野遺跡付近の試掘



Fig. 10 野口遺跡付近の試掘

より30～50m高い段丘をなしており、遺構の存在が想像された。山ノ井川南岸はインターチェンジ建設予定地であった。橋梁工事は既に始まっており、5月末の完成を急いでいた。

10月14日 現場で工事関係者と新発見遺跡の調査について打診する一方、文化課で調査の実施方法について打合わせた。合議のすえ、野口遺跡は即時調査を開始することとし、10月15日より全面調査に入った。畢竟作業員が不足し、10月20日より20名を増員し、計80人が各遺跡に分散して作業に従事した。

10月22日 公団瀬高工事事務所に公団福岡支社総務課員、県教育委員会文化課関係者が集合して事情説明を行なったのち、現地で工事担当業者とインターチェンジ建設予定地内の調査について打合わせた。その結果、すでに杭打ちの始まっている構造物建設地及び工事道路を除いた地区に限り、調査を実施することとなった。

10月26日 インターチェンジ中央線にそって南北のトレンチを設けたところ、住居跡が2軒確認され、11月2日さらに東西のトレンチ3本を掘削したところ、各トレンチで遺構の存在が認められた。当地域を道添遺跡と命名した。全面調査は工事の進捗と合わせながら実施することとなり、昭和47年1月20日を調査終了予定日とした。

2. 各遺跡の調査過程

各遺跡の調査過程は次の通りである。

西中ノ沢遺跡

- 10月9日～10月17日 遺構面検出
- 11月13日～11月19日 各遺構完掘及び写真撮影
- 12月4日～12月9日 各遺構実測及び全体測量



Fig. 11 調査前の道添遺跡



Fig. 12 道添遺跡の試掘状況



Fig. 13 秋の西中ノ沢遺跡



Fig. 14 3時の休養

坊野遺跡

10月16日～10月18日	遺構面検出
10月18日～10月22日	各遺構完掘
11月16日～11月19日	写真撮影及び各遺構実測
12月4日	全体測量

野口遺跡

10月18日～11月2日	遺構面検出
11月3日～11月10日	各遺構完掘及び写真撮影
11月9日～11月17日	各遺構実測及び全体測量
11月11日～11月19日	遺構面検出
12月2日～12月21日	各遺構完掘及び写真撮影
12月22日～12月26日	各遺構実測及び全体測量

道添遺跡

11月8日～11月24日	遺構面検出
11月19日～11月30日	各遺構完掘及び写真撮影
12月1日～12月3日	各遺構実測及び全体測量
12月13日～12月16日	遺構面検出
12月17日～12月27日	各遺構完掘及び写真撮影
12月22日～12月27日	遺構面検出
1月5日～1月12日	遺構面検出
1月6日～1月17日	各遺構完掘及び写真撮影 各遺構実測及び全体測量

3. 調査の体制

調査の担当者は次の通りである。

調査担当者	福岡県教育庁文化課技師	酒井 仁夫
庶務担当者	同	主事 加藤 久嘉
調査員	福岡県立浮羽工業高校教諭	佐藤 義幸
	東京大学大学院生	堀 暁
調査補助員		高田 一弘
		笹岡 規雄
		山下 和美
		福岡教育大学学生
整理担当者	福岡県教育委員会嘱託	岩瀬 正信
	東京大学大学院生	堀 暁



Fig. 15 西中ノ沢遺跡調査状況



Fig. 16 秋深き道添遺跡

九州大学大学院生 武末 純一

九州大学学生 岩崎 二郎

山下 和美

関 晴彦

宮原真裕美

また、住居跡の建築学的見地から、九州大学建築学教室の土田充義助教授にご指導願ひ、木材の材質鑑定は九州大学農学部松本勲教授にお願いした。筑後における文化財については筑後市郷土史会の岩崎光先生より御教示いただいた。上記の先生方からは各々玉稿を賜わり本書に掲載させていただいた。

調査期間中、終始一貫して八女市教育委員会の松延一男当時教育長、平島忠太郎当時中央公民館をはじめ江下淳氏、松延茂太氏ならびに渡辺勲氏の並々ならぬ御支援をいただいた。作業員として地元岡山地区のほか忠見、北田形、筑後市林、羽犬塚、上原々から 100 名以上の参加を得て、調査を円滑に進めることができた。

調査は予定地域をはるかに越える広範囲となり、並行して進んでいる工事面では大きくスケジュール上の変動がよぎなくなった。工事を担当された道路公団関係や熊谷組八女工事所長吉田庄二郎氏はじめ所員の方々には多大の迷惑をかけてしまった。紙面を借りて、深くお詫びします。

調査後 6 年を経た今日になるまで報告書を作成しえなかったのは私の怠慢のいたすところと深く反省します。

Ⅲ 西中ノ沢遺跡の調査



Fig. 17 遺跡西方より南方に入る谷部

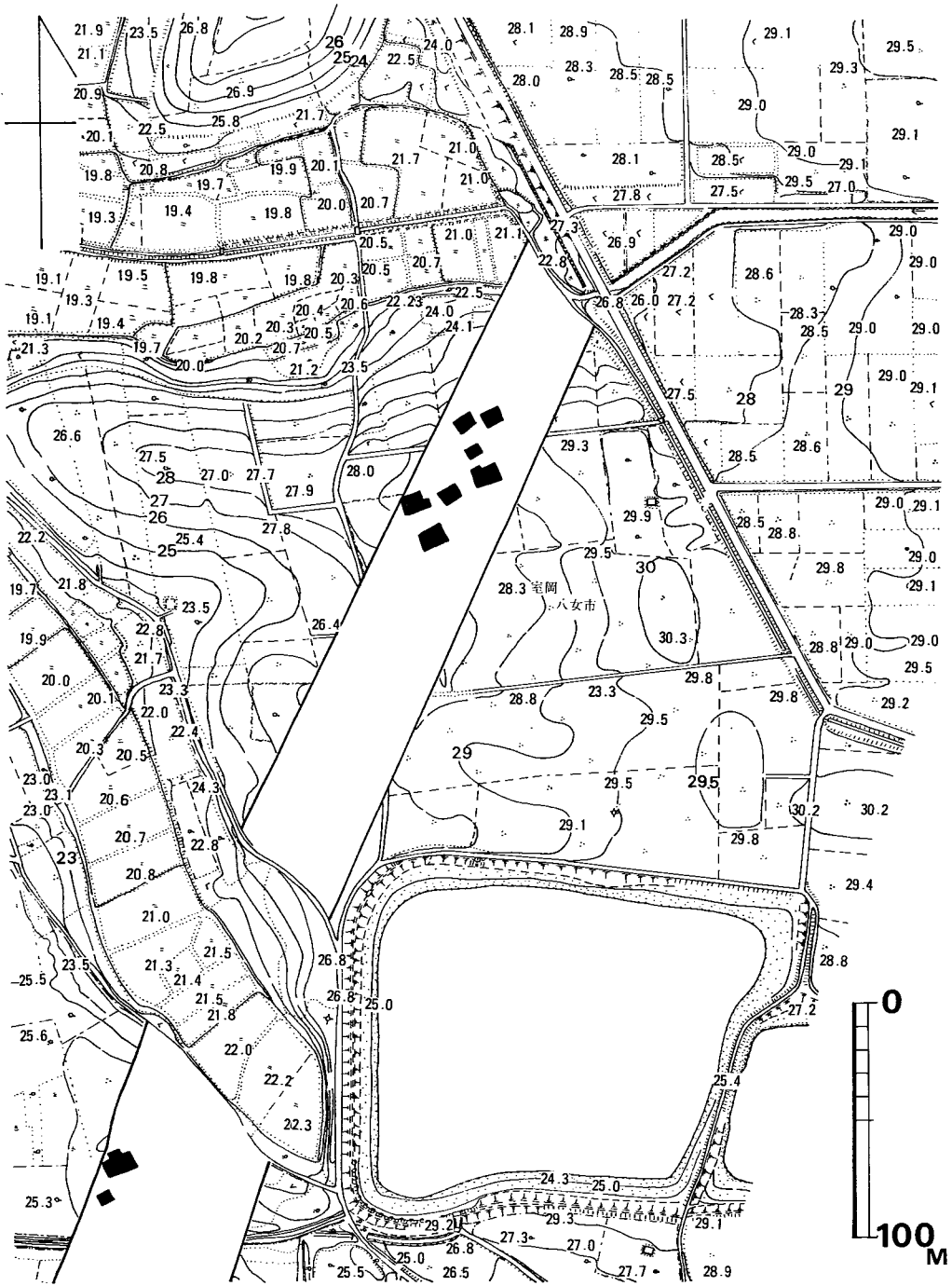


Fig. 18 西中ノ沢・坊野両遺跡周辺地形図 (縮尺 1/3000)

1. はじめに

中位段丘上にあり、標高27mである。西北より入り込んだ谷によって坊野遺跡と隔てられている。南東約700mで亀ノ甲遺跡に臨む。その中間地点には弥生式土器及び石器が濃密に散布している。

検出した遺構は住居跡のみで、概ね同一方位の長軸を示す7軒の住居跡である。調査地の東側にさらに住居跡群が広がると考えられる。

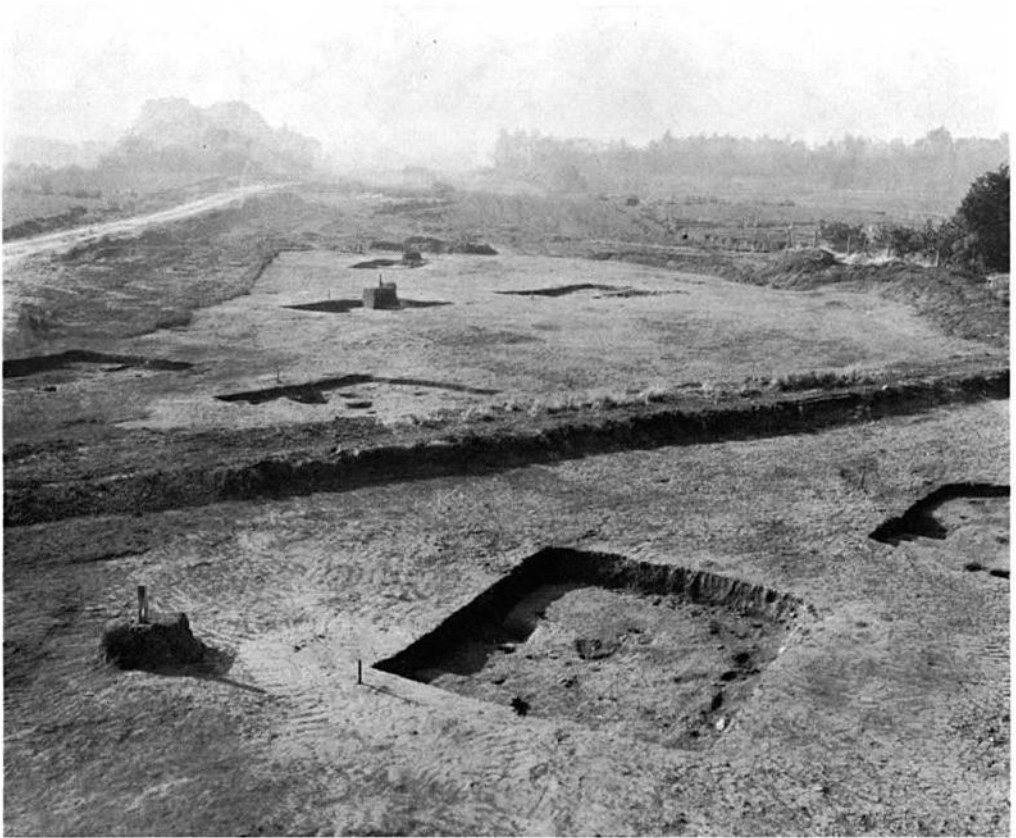


Fig. 19 西中ノ沢遺跡全景

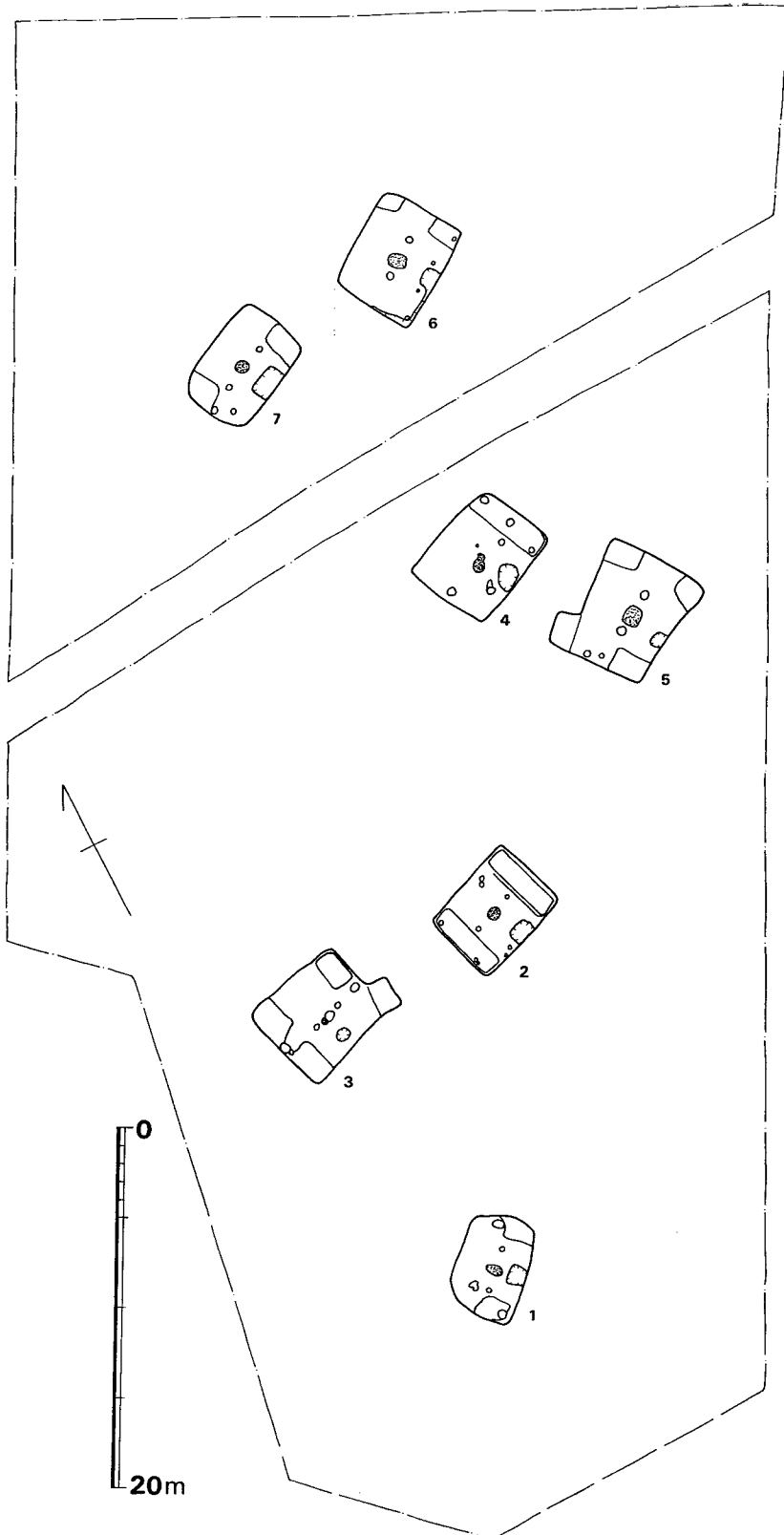


Fig. 20 西中ノ沢遺跡遺構配置図 (縮尺 1/400)

2. 住 居 跡

第1号住居跡 (Fig. 21~23)

発掘範囲の最南部に位置する。長軸5.72m 短軸3.63mで、床面積19.37m²を測る。平面プランは略長方形を呈するが、西隅と南隅は丸味をもち、北東辺は中央部付近が若干外方へ突き出ている。長軸上に2本の支柱穴があり、それらの心心距離は221cmである。主軸方位はN45°Eを指す。
(註1)
(註2)
 床面中央の支柱穴に挟まれた位置に浅い摺鉢状の掘り込みがあり、
 灰と推定される。南東
 辺中央の壁沿いに110×100cmほどの掘り込みがあり、貯蔵穴様土壙と思われる。なかから玄武岩の小塊が出土

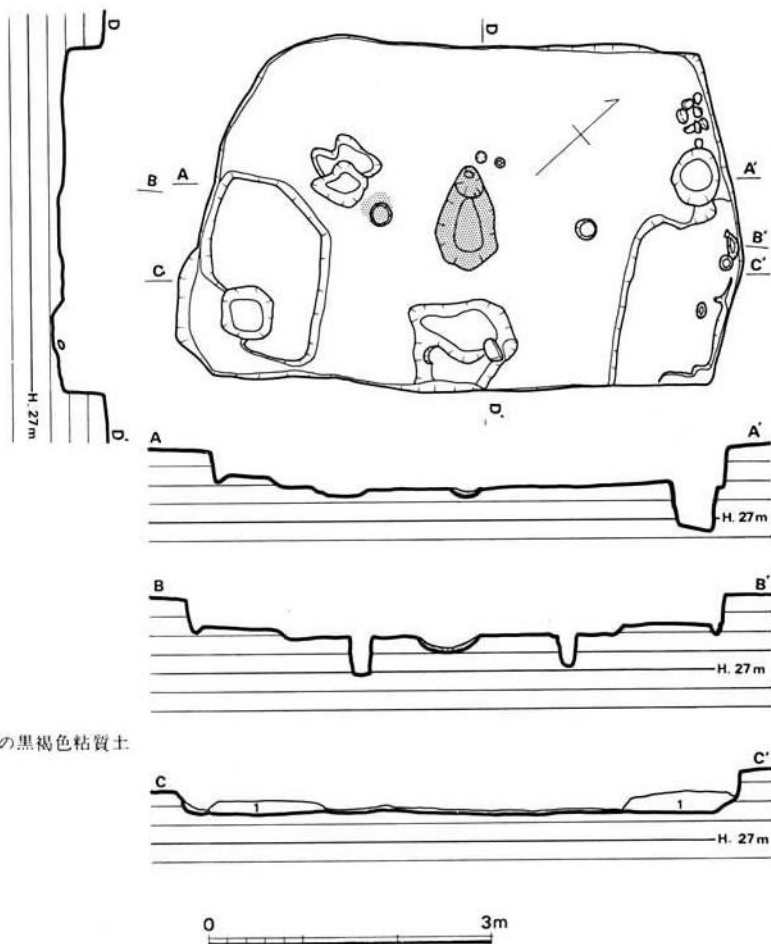


Fig. 21 西中ノ沢第1号住居跡実測図 (縮尺 1/80)



Fig. 22 西中ノ沢第1号住居跡



Fig. 23 床面上土器及び礫散布状況

した。両短辺に沿って、その南寄りに、貼り付けによるベッド状遺構が検出された。北側のベッド状遺構上から完形の壺1個体が出土している。そのほか、北東壁近くのユカから、玄武岩の小礫が散乱した状態で出土している。ユカは北東側がやや高く、南西側が低い。

第2号住居跡 (Fig. 24・25)

第1号住居跡の北東13.3mに位置する。第3号住居跡との最短距離は4mである。

長軸5.91m、短軸4.44mの長方形を呈し、床面積25.37㎡を測る。

長軸上に2本の支柱穴があり、ユカからの深さは西側45cm、東側34cm、心心距離は第1号住居跡と同じく、

221cmである。主軸方位はN72°E

を指す。炉は床面中央にあり、内部

は良く焼けていた。なかから、投弾4個が出土している。南辺沿いの中央には110×100cmほどの掘り込みがあり、なかから高杯・壺の完形品が出土した。ユカからの深さは、最深部で25cmである。東西の短辺沿いに貼り付けのベッド状遺構がある。このベッド状遺構と壁との間は溝状を呈している。ユカは平坦である。

なお、ユカから石庖丁が出土している。

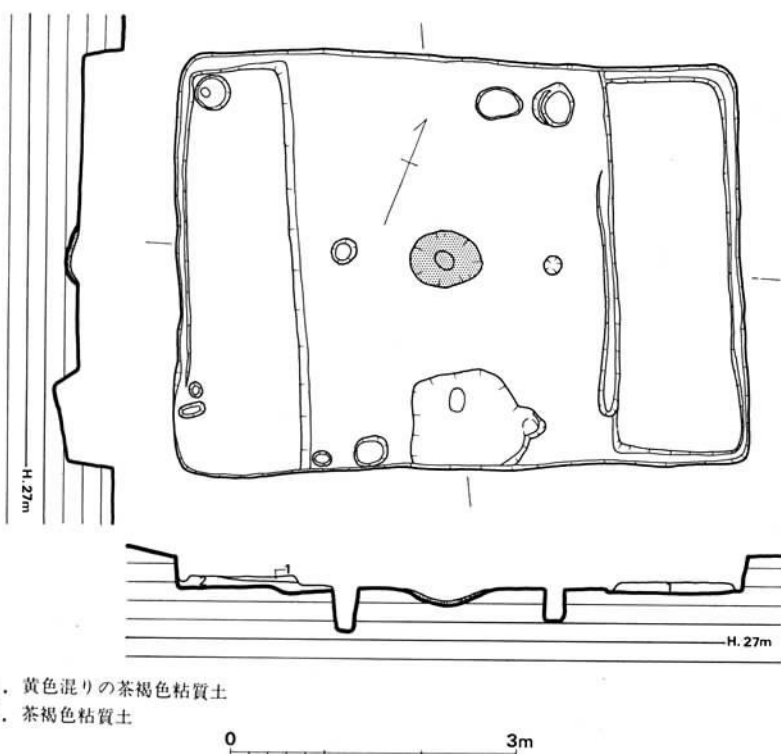


Fig. 24 西中ノ沢第2号住居跡実測図 (縮尺 1/80)

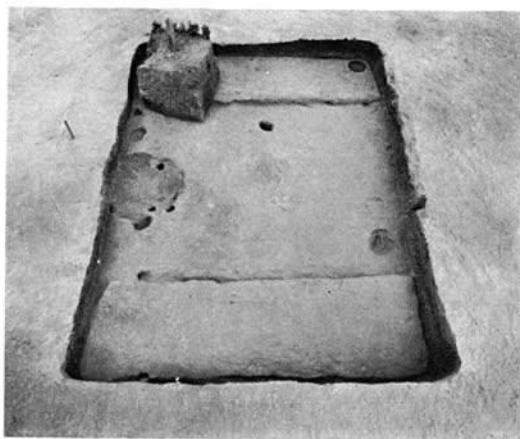


Fig. 25 西中ノ沢第2号住居跡

第3号住居跡 (Fig.26・27)

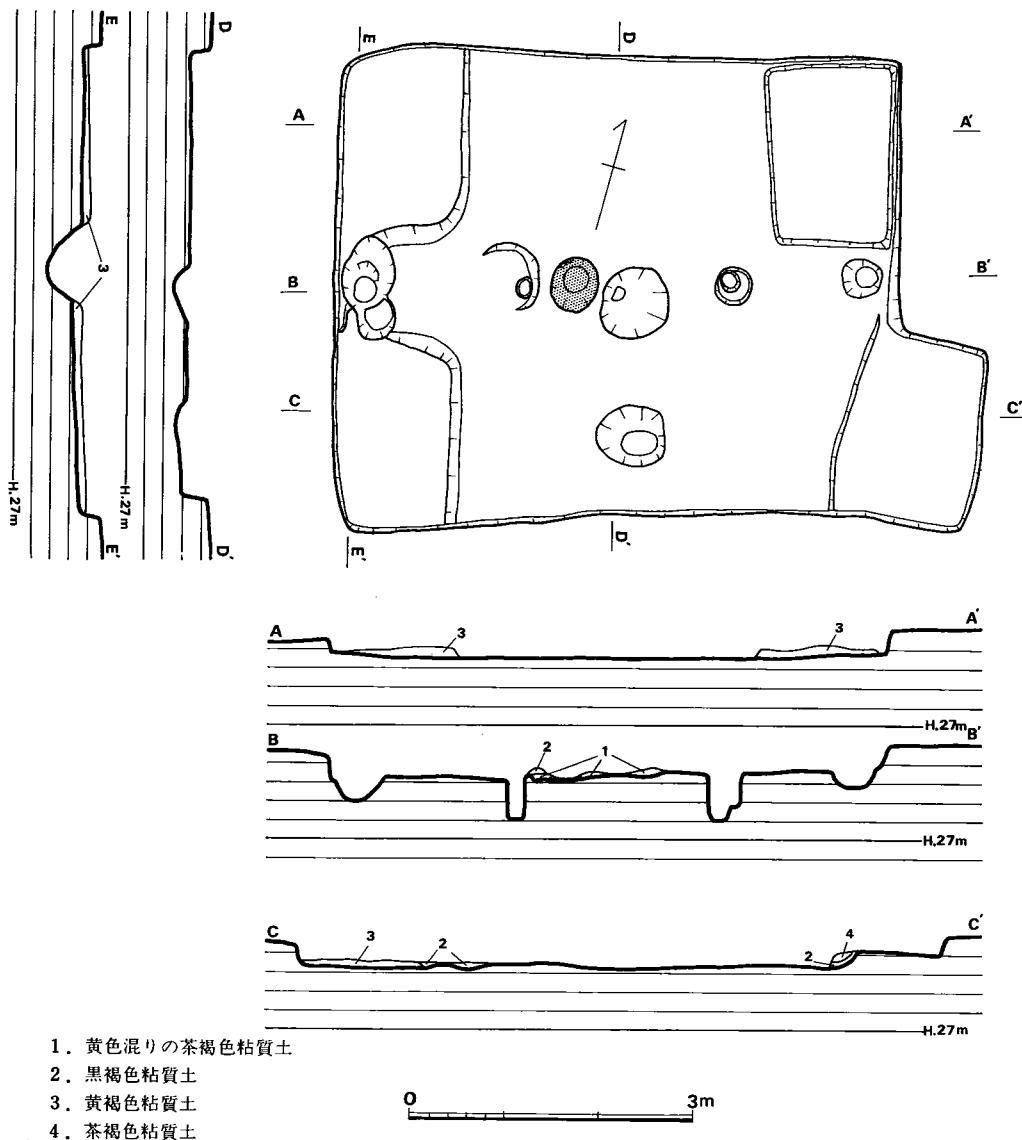


Fig. 26 西中ノ沢第3号住居跡実測図(縮尺1/80)

第2号住居跡の西側に位置する。長軸 $6.06m$ 、短軸 $4.85m$ で、南東限の短辺側に $140 \times 200m$ ほどの張り出し部をもつ。この張り出し部はユカより一段高くなっており、ここを含めた床面積は $30.92m^2$ である。^(註3)長軸上に並んだ6個のピットのうち、中央の2個を除いたピットを西側からa・b・c・dとすると、各ピットの心心距離はa~b: $167cm$ 、b~c: $217cm$ 、c~d: $148cm$ である。支柱穴はb・cであろう。bは径 $18cm$ ・深さ $40cm$ 、cは径 $34cm$ ・深さ $48cm$ を測る。

主軸の方位は $N73^{\circ}E$ で、第2号住居跡とほぼ同一である。炉は床面中央の西側の掘り込みと思われ、内部に焼土がつまっていた。炉のすぐ東側の掘り込みと、南辺に近い掘り込みは、いずれも径 7 cm 前後で浅く、柱穴とは考えられない。ベッド状遺構は北東隅、南西隅、北西隅の3ヵ所にある。いずれも貼り付けによるもので、張り

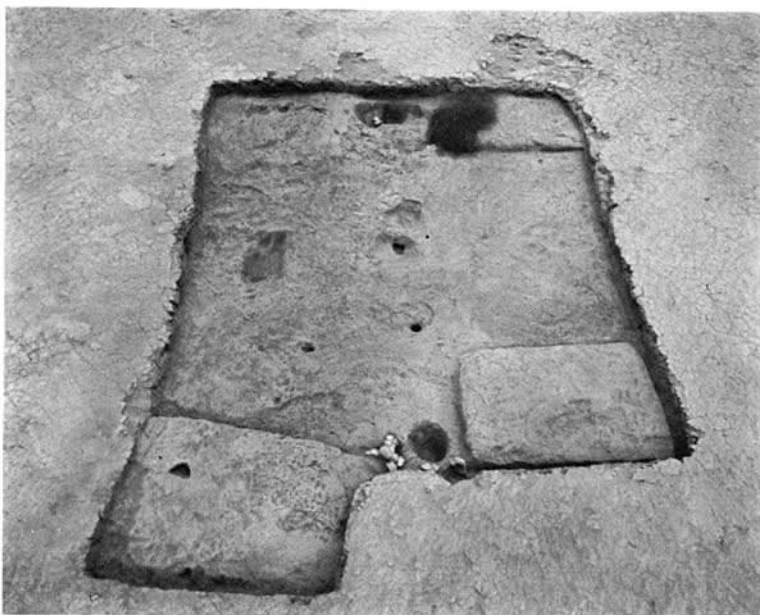


Fig. 27 西中ノ沢第3号住居跡

出し部が削り出しであるのと対照的である。北東隅のベッド状遺構と壁との間は溝状を呈しているが、他の2ヵ所には、それらしい空間はない。^(註4) ユカはほぼ平坦であるが、中央部が若干くぼんでいる。壁は $20\sim 30\text{ cm}$ を残していた。

第4号住居跡

(Fig. 28・29)

第2号住居跡の北東 12.4 m に位置する。東側の第5号住居跡との最短距離は 2.8 m である。長軸 6.41 m 、短軸 4.72 m で、床面積は 28.37 m^2 である。主柱穴は2本で、西側は径 31 cm ・深さ 25 cm 、東側は径 $22\sim 31\text{ cm}$ ・深さ 42 cm 、心心距離 353 cm を測る。主軸の方位は $N68.5^{\circ}E$ をとる。炉は

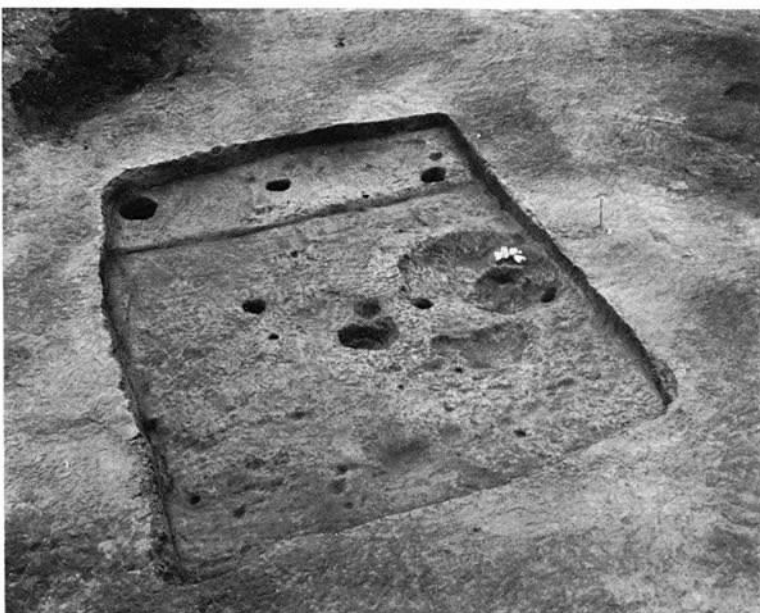
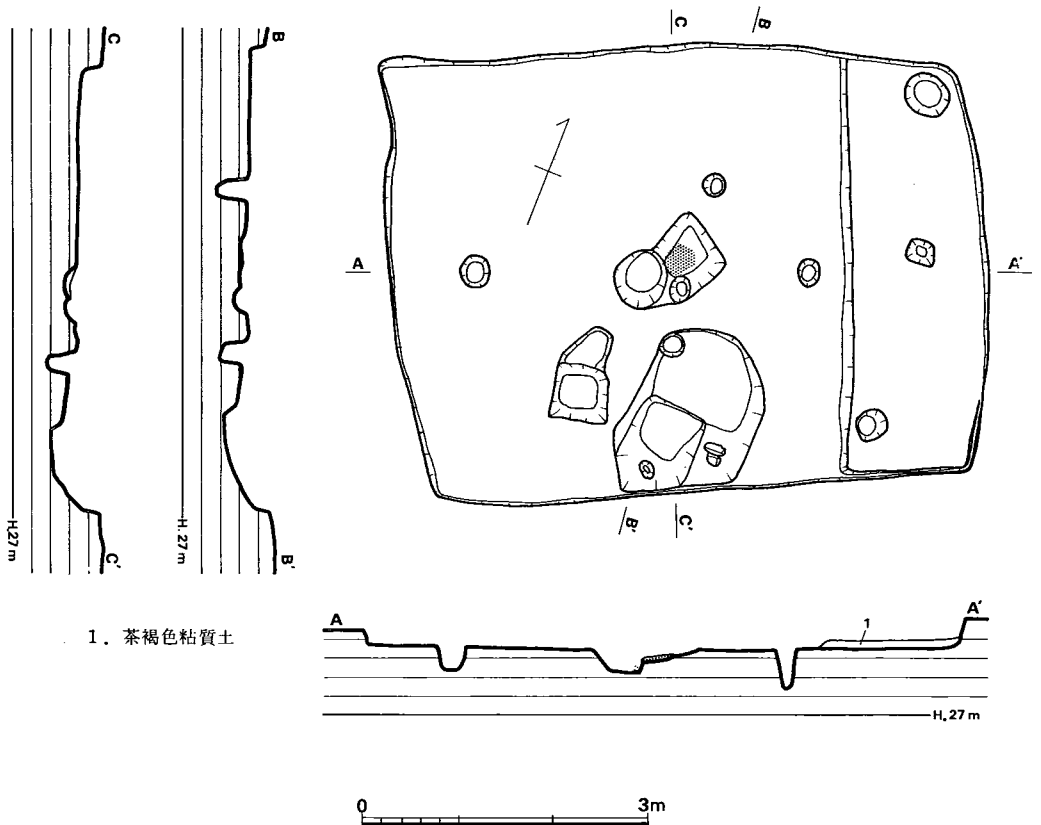


Fig. 28 西中ノ沢第4号住居跡



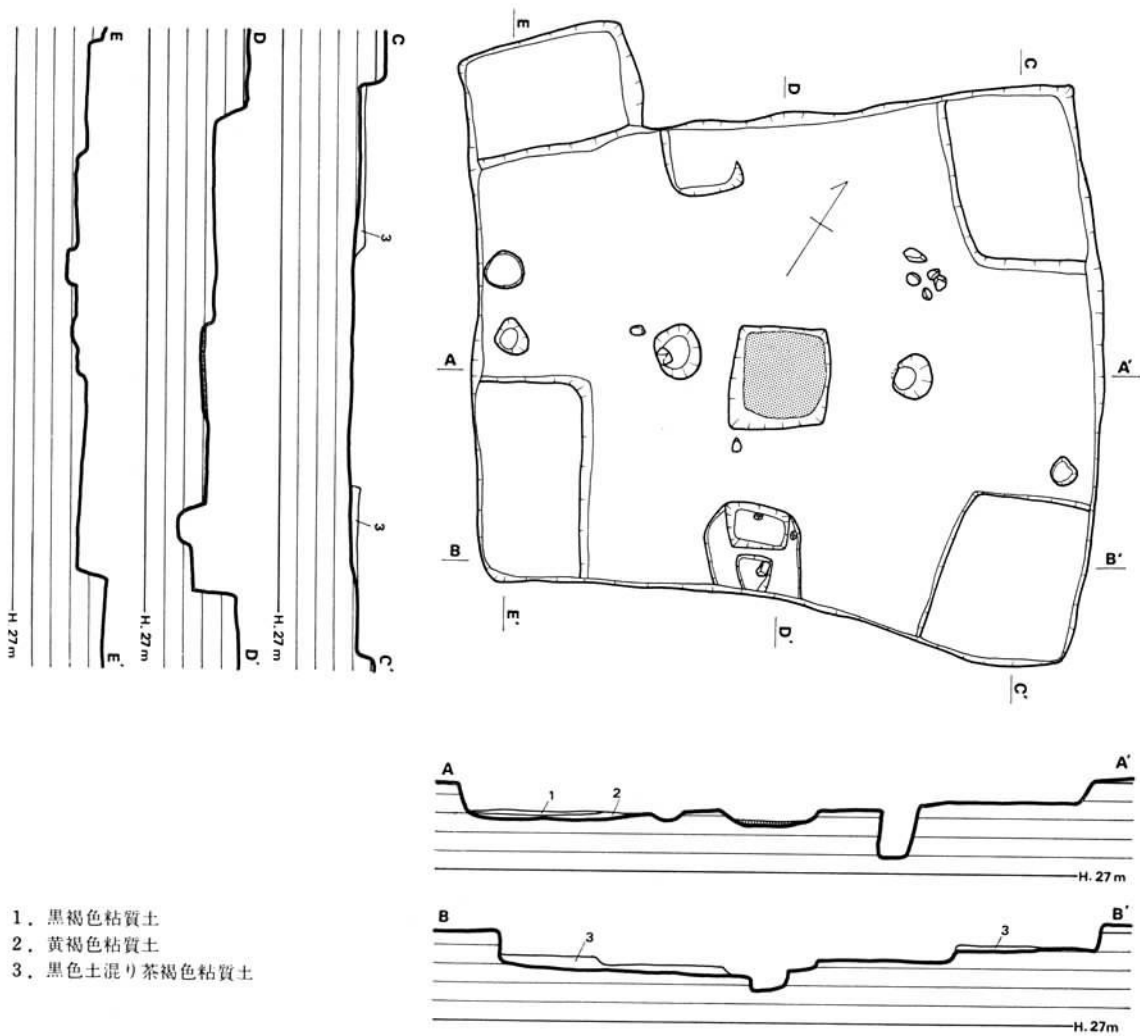
1. 茶褐色粘質土

Fig. 29 西中ノ沢第4号住居跡実測図 (縮尺 1/80)

床面中央にあり、内部は良く焼けていた。南東辺中央の壁に接して不整形の掘り込みがある。東西133cm、南北202cm、ユカからの深さは15cmである。ベッド状遺構は北東辺にのみつくられている。このベッド状遺構は、床面に茶褐色粘質土を貼り付けてつくられている。南東隅の壁との間は溝状を呈している。ユカは中央部がわずかにくぼんでいる。壁は20cm前後を残していた。

第5号住居跡 (Fig. 30・31)

第4号住居跡の東側に位置し、それとの最短距離は2.8mである。長軸6.79m、短軸5.14m、床面積(張り出し部を含む)35.61㎡を測る。短辺は北東辺6.12m、南西辺4.47mで、張り出し部を除けば梯形を呈する。張り出し部は、第3号住居跡と同じく、ユカより一段高くなっている。しかし、第3号住居跡の張り出し部が短辺側につくられているのに対し、本遺構は長辺側につくられている。支柱穴は2本あり、西側：径48~60cm、東側：径47cm・深さ56cmで、心心距離は241cmである。主軸の方位はN63.5°Eをとる。中央に112×108cmの方形の掘り込みがあり、なかから焼土が検出された。炉であろう。南東辺中央の壁に接して略方形の掘り込みがあり、なかから石が出土した。ベッド状遺構は北隅、東隅、南隅の3ヵ所に検出された。いず



れも貼り付けによるものである。ユカは比較的平坦であるが、東側がやや高くなっている。壁は20~40cmを残している。なお、北側のベッド状遺構近くのユカから、小石が5個かたまって出土している。



Fig. 31 西中ノ沢第5号住居跡

第6号住居跡 (Fig. 32~34)

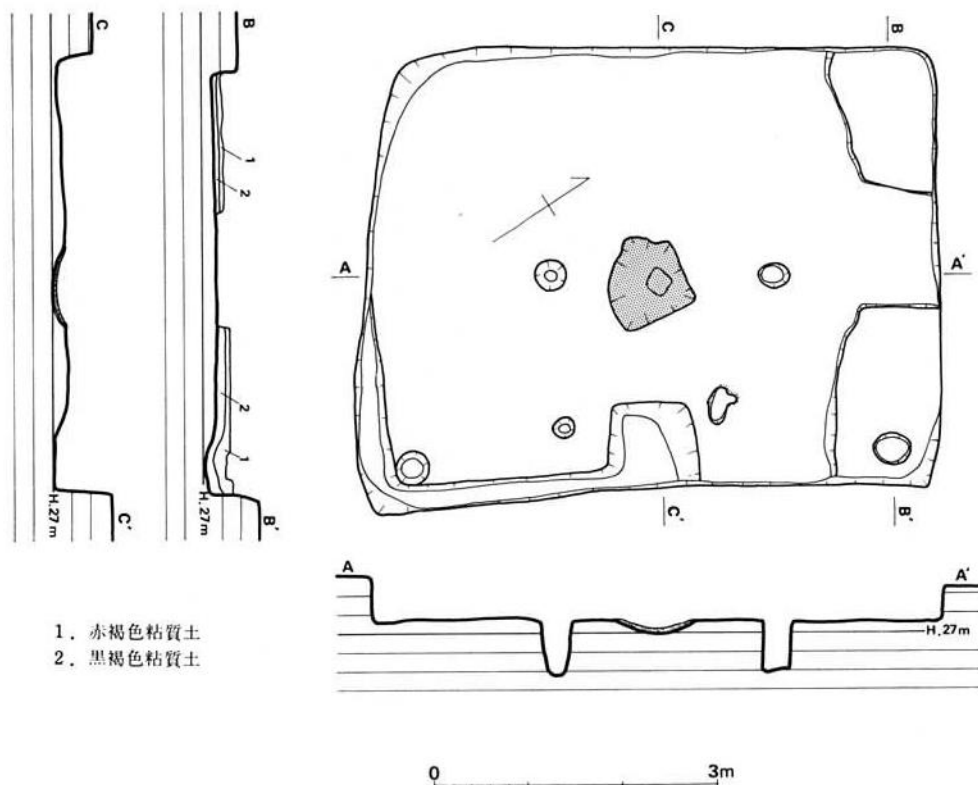


Fig. 32 西中ノ沢第6号住居跡実測図(縮尺1/80)

第4号住居跡の北方10.1mに位置する。発掘範囲内では北端にある。西側の第7号住居跡との最短距離は、3.9mである。長軸6.13m、短軸4.65m、床面積27.23m²を測る。主柱穴は2本あり、南西側：径34cm・深さ56cm、北東側：径28~35cm・深さ49cm、それらの心点距離は235cmである。主軸の方位はN56°Eを指す。炉は床面中央の主柱穴の中間にあり、不整形を呈



Fig. 33 西中ノ沢第6・7号住居跡

する。なかから焼土が検出された。南東辺中央に $90 \times 90 \text{cm}$ ほどの方形の掘り込みがあり、そこから南隅へ向って幅 30cm ほどの溝がのびる。この溝は、南西辺の中央部近くまで続いている。ベッド状遺構は北隅、東隅に認められた。いずれも貼り付けによるもので、東隅のピットは地山面には達していない。ユカはほぼ平坦である。壁は比較的遺存が良好で、南東壁高が $50 \sim 60 \text{cm}$ 、北西壁高は $30 \sim 40 \text{cm}$ である。

なお、南側のユカから勾玉が出土している。

第7号住居跡 (Fig. 35・36)

発掘範囲の北西端に位置する。第4号住居跡との最短距離は 12.3m 、東側の第6号住居跡とのそれは 3.9m である。長軸 6.42m 、短軸 4.27m 、床面積 23.92m^2 を測る。各隅が丸味をもち、隅丸長方形とも表現すべき平面プランで、第1号住居跡にも同様の傾向がみられる。支柱穴は2本あり、

西側：径 24cm ・深さ 51cm 、東側：径 $29 \sim 33 \text{cm}$ ・深さ 52cm で、それらの心心距離は 260cm である。主軸の方位は $N61.5^\circ E$ をとる。炬は床面中央に設けられている。南東辺中央の壁に接して、 $145 \times 100 \text{cm}$ ほどの長方形の掘り込みが検出された。ユカからの深さは約 20cm である。ベッド状遺構は東隅・西隅に認められた。東側は削り出し、西側は貼り付けによる。ユカは平坦である。壁は高さ $20 \sim 30 \text{cm}$ が遺存していた。



Fig. 34 西中ノ沢第6号住居跡



Fig. 35 西中ノ沢第7号住居跡

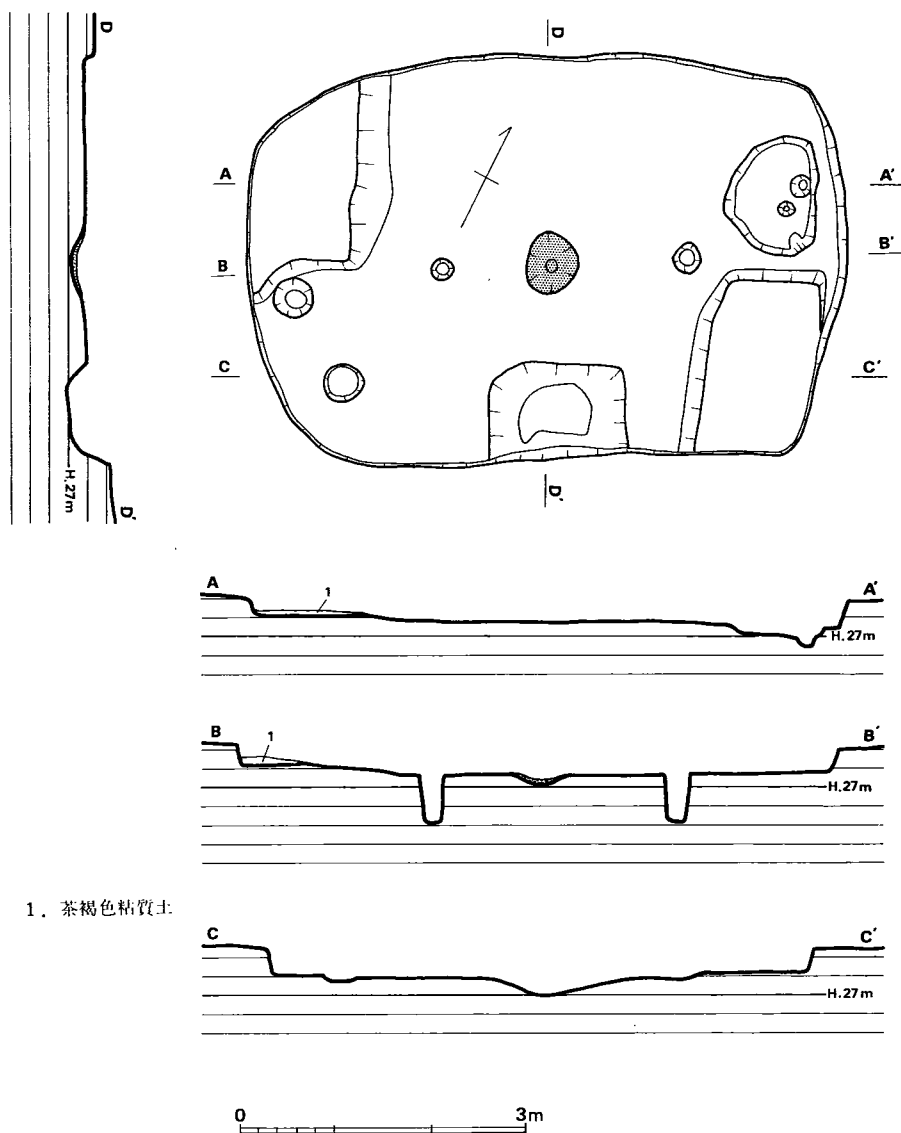


Fig. 36 西中ノ沢第7号住居跡実測図(縮尺 1/80)

註 1) 床面積は下で計測した。また、プランメーターを使用して算出した数値であるため、長軸×短軸から算出される数値とは原則的に一致しない。プランメーターの計測誤差は1%前後が期待できる。

なお、遺構の説明では床・ユカの語を用いるが、これらは次のように限定しておく。

床 大地を掘り込むことによって周囲の大地から区別される竪穴壁内側の底面を総称して床と呼んでおく。従ってこの名称は、竪穴内の凹凸を無視した底面一般を意味する。

ユカ “床”のうち、柱穴・壁溝・屋内小溝・ベッド状遺構・屋内土壇・張り出し部・炉・カマド等の諸施設・諸痕跡を除いた竪穴内の平坦面。

以上の名称は、さしあたり竪穴式住居跡に関する用語に限定しておき、高床式あるいは「平地

式」の建物、および別種の遺構における呼称としては使用しないものとする。平井聖氏の「ゆか」（平井氏はカギカッコを付して用いる）の概念は、本稿における床の規定を含んだ、より一般的な広義の概念であり、将来はこの規定に基づくべきであろう。

平井聖「床の構造よりみた古代の住居」大林太良編『日本古代文化の探究 家』社会思想社1975

- 2) 住居の主軸に関する規定については、橋本正「竪穴住居の分類と系譜」『考古学研究』23-3, No.91, 1976を参考としたが、後述の野口遺跡第8・9号住居跡のように支柱穴が不明の場合もあり、橋本氏の論旨からはずれているところもある。従って、本稿での主軸概念は一定の原則のもとに設定されている訳ではなく、個々の遺構によって異なっている。
- 3) ほかに“拡張部”・“造り出し”・“突出部”等の表現もある。しかし、拡張の確認ができないこと、造り出しは主に古墳の用語であるのでこれと区別するため、突出は単に語呂が良くないためなどの理由から“張り出し部”の表現を採った。
 なお、石野博信氏の「張出部」は、屋内貯蔵施設の一部として考えられている。後述の坊野第2号住居跡では、張り出し部は出入口であることも考えられるため、ここでは客観的な遺構の名称として用いることにする。
 石野博信「考古学から見た古代日本の住居」大林太良編『日本古代文化の探究 家』社会思想社1975.
- 4) 実際には掘り残したために、ユカ面よりも一段高くなっている。一度掘り込んだのちに土を貼り付けて面をつくりだす方法を貼り付け、掘り込みをユカ面に達する以前にやめ、意図的に浅く（標高からいえば高く）しておく方法を削り出しと呼んでおく。ほかに適当な名称があれば、それに換えたい。

3. 出土遺物 (Fig.39~43)

第2号及び7号住居跡から弥生式土器が集中して出土した他は出土例がまれで、第3号及び4号住居跡では皆無であった。また第2号、4号及び6号住居跡からは石庖丁が、第2号住居跡では土製投弾が、第6号住居跡からは勾玉が出土した。

(1) 土器

第1号住居跡出土土器

北側ベッド上から完形の小形甕1点(0101)が出土した。口縁部外面にはハケメの上にヘラで細かい刻目をめぐらしている。体部外面はタテハケメで、下半をヘラ削りしている。

第2号住居跡出土土器

南壁側中央のピット中より0201と0202が出土した。また炉中より投弾が、床面より石庖丁が出土した。

壺 0207は直口壺で、端部はややふくらんで丸い。肩が張った球形胴部となろう。内外面に横位の細かいハケメを施したのち、ナデツケている。0208の口縁部は短かく、軽く外反する。胴部は球形である。

高杯 0201は平坦な口縁部

をもち、体部との境内面は三角形に張り出している。体部は深く、脚部との境に突帯を一条めぐらしている。内外面をハケメ調整し、口縁部はの上からヨコナデしている。

甕 0212, 0214共に口縁部は短かく、外反は弱い。胴部の張りも弱い。0210は甕の底部であろう。平底で、僅かに直立したのち、外上方へのびる。内外面ハケメ調整である。

小形鉢 0202, 0209, 0211の3点がある。平底で、口縁部は直立する。ハケメ調整のもの



Fig. 37 西中ノ沢第1号住居跡土器出土状況



Fig. 38 西中ノ沢第2号住居跡土器出土状況

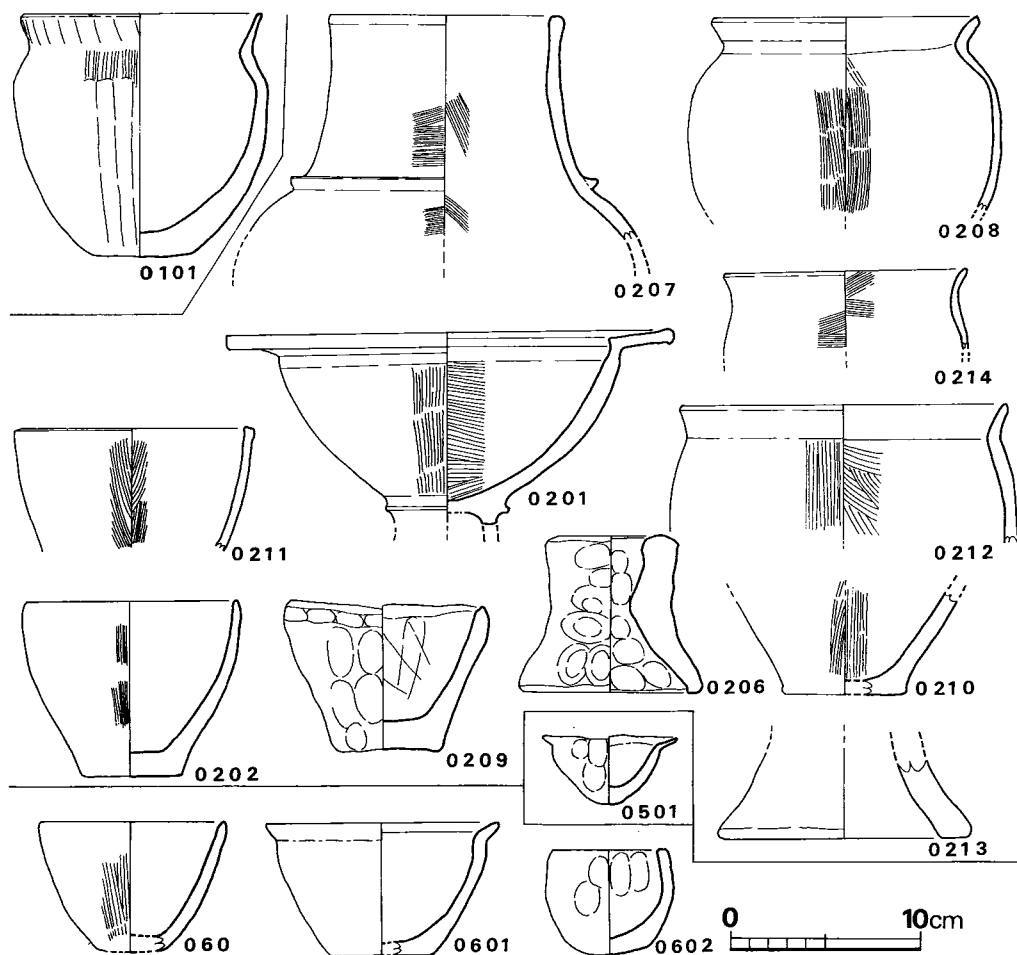


Fig. 39 西中ノ沢遺跡第1・2・5・6号住居跡出土土器実測図（縮尺 1/4）

と、指オサエ、ナデのままのものがある。

器台 0206は小形、0213は中形の器台である。脚部は大きく開き、頸部から口縁部にかけては直立気味である。0213の脚端下面は平坦に仕上げている。叩き技法はみられない。

第5号住居跡出土土器

手づくねのミニチュア土器1点が出土したのみである。浅鉢形をし、薄手である。

第6号住居跡出土土器

小形鉢 0603は直線的に開口する単純な器形で、外面はハケメ調整である。0601は短かく外反する口縁部を持ち、平底である。

小形土器 0602は碗形をしたミニチュア土器で、内外面に指圧痕が目立つ。

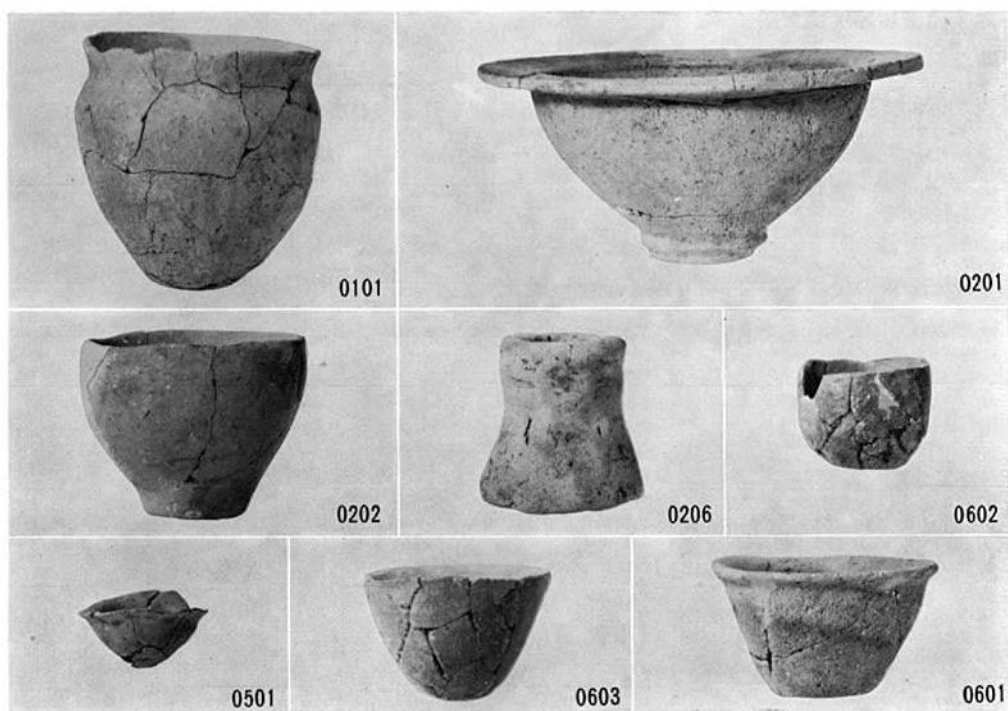


Fig. 40 西中ノ沢第1・2・5・6号住居跡出土土器

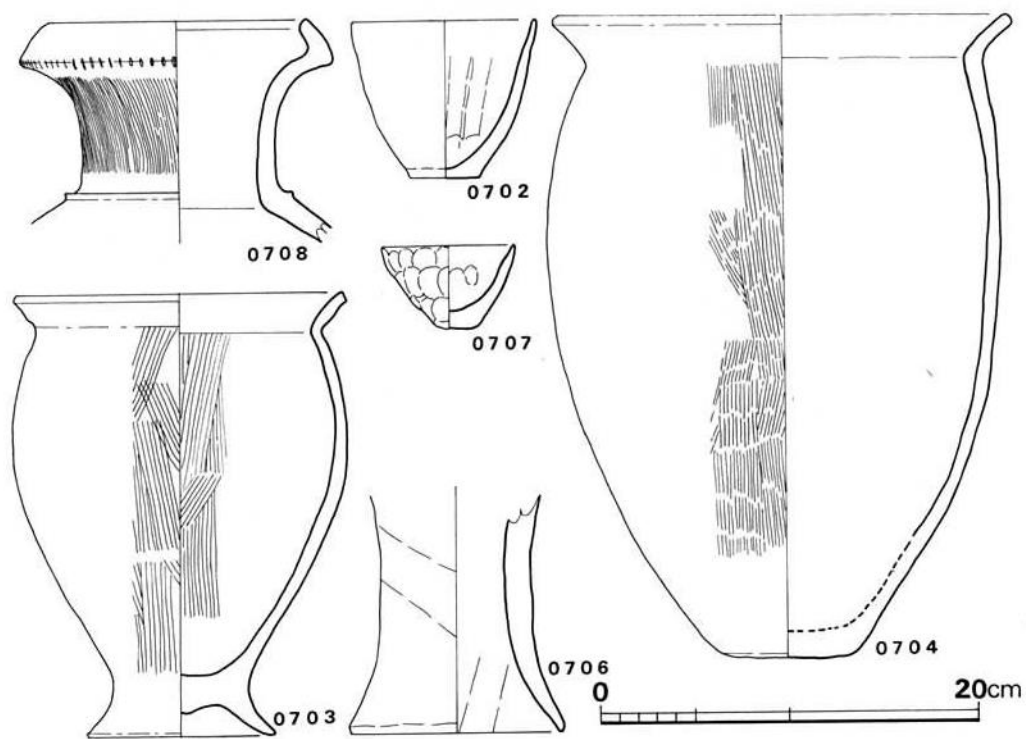


Fig. 41 西中ノ沢第7号住居跡出土土器実測図 (縮尺 1/4)

第7号住居跡出土土器

第2号住居跡と並んで、ややまとまって土器が出土した。

壺 0708は逆「く」字口縁部をもち、屈曲部に刻み目を施している。頸部付ケ根に小さな凸帯を持つ。頸部はハケメ調整である。

甕 0703, 0704共に「く」字口縁で、0703は外反する高台を有する。いずれもハケメ調整であるが、0704の胴下部外面はヘラでナデアゲている。0704の底部は丸味を帯びた平底であり、胴下部との境の稜はあいまいである。

小形鉢 0702は平底で直立気味に立ったのち、外上方へ一方向的にのびる。内面は底部指オサエ、体部ヘラ削りである。外面はナデアゲている。

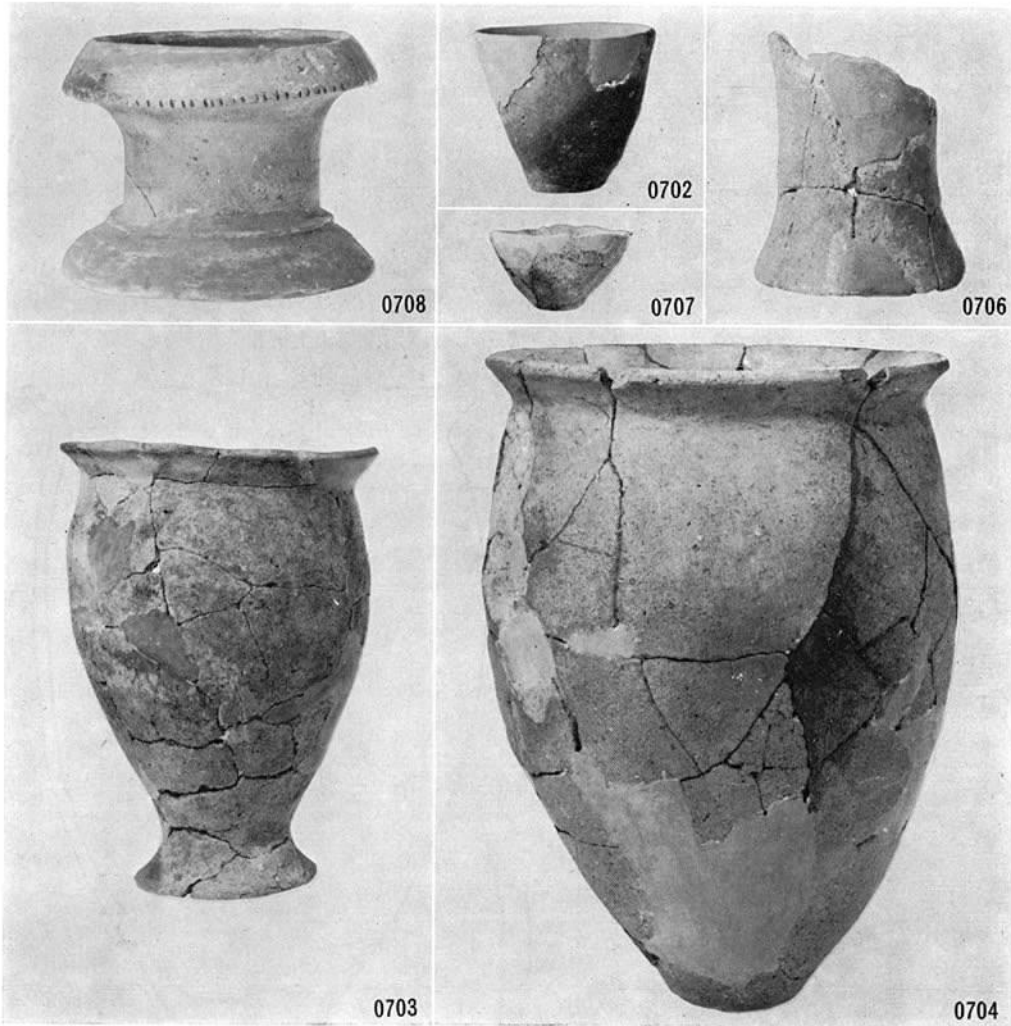


Fig. 42 西中ノ沢第7号住居跡出土土器

小形土器 0707は鉢形をしたミニチュアで、内外面に指痕が明瞭である。

器台 0706は大形の器台で、朝顔形の口縁部をもつと思われる。脚下半の内面にヘラ削りが認められる。

(2) 石器・石製品 (Fig. 43)

第2号, 4号, 6号住居跡から各々一点の石庖丁が出土した。1は第2号住居跡床面の出土品である。表裏を交互に刃付けしており、左右非対称形である。片岩質の変成岩製である。2は第4号住居跡の覆土中からの出土品である。隅丸の長方形に近い形状をなし、左右両端を別個に研ぎ出している。片岩質の変成岩製であり、材質に粘りがないため、孔外径が大きな円をなしている。厚手である。3は第5号住居跡の床面に近い覆土中から出土した。図上左半が細く尖り、左右非対称形である。同様の例は野口遺跡第9号住居跡からも出土している。前二者と同様の片岩質の変成岩製である。

第6号住居跡床面からは質の悪いメノウ質の勾玉(4)が出土している。頭部が大きく、孔は両削りである。

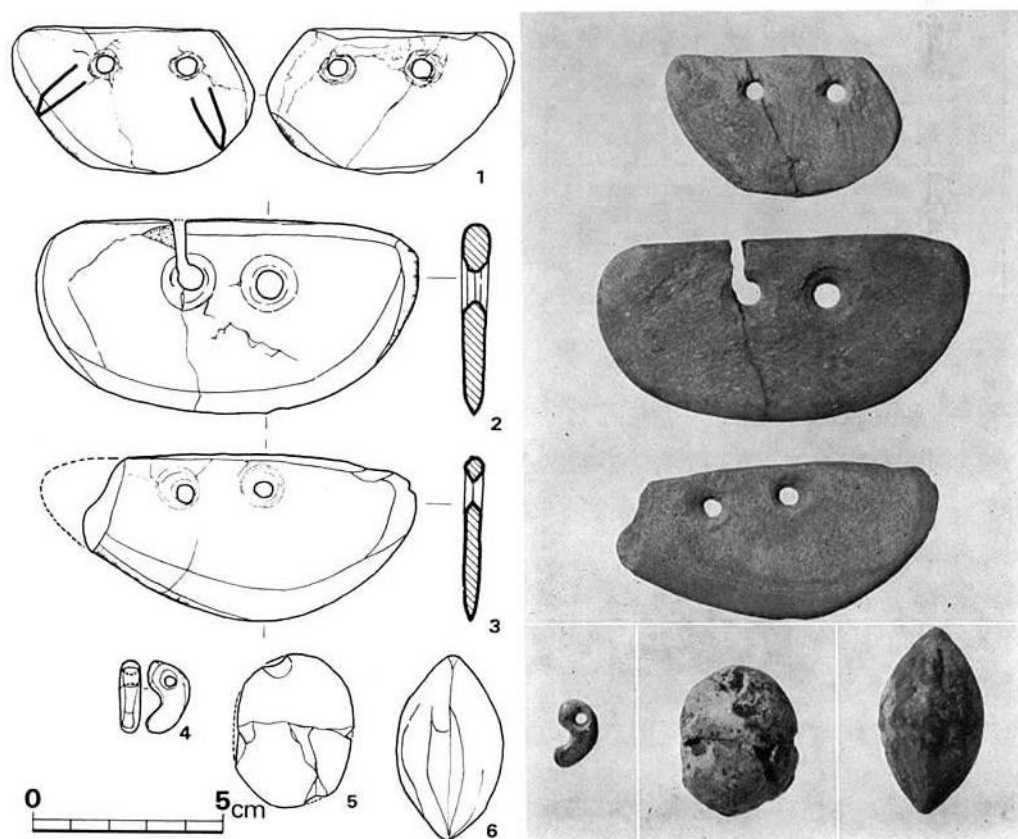


Fig. 43 西中ノ沢遺跡出土石器・土製品実測図

(3) 土製品

第2号住居跡の炉中から4点の投弾が出土した。上下両端が尖るもの(6)と、尖らないもの(5)がある。横断面は両者共円形である。6の表面には若干のナデ稜がみられる。

4. おわりに

(1) 遺構

本遺跡で発見された遺構は、住居跡のみ計7軒である。これら7軒の住居跡の内容を整理すると、Tab. 1 のようになる。

Tab. 1 西中ノ沢遺跡住居跡一覧表 ()は推定

番号	時期	規模 m	面積m ²	主柱穴		主軸方位	焼土	炉	貯蔵穴様土壙	ベッド状遺構	壁溝	土器以外の遺物	発掘時番号	備考
				数	心心距離 cm									
1	弥生後期	5.72×3.63	19.37	2	221	N45° E	○	中央	南東壁中央	東隅隅	なし		1	
2	弥生後期	5.91×4.44	25.37	2	221	N72° E	○	中央	南壁中央	東西辺	なし	石庖丁投弾	2	
3	弥生後期	6.06 6.99×4.85	30.92	2	217	N73° E	○	中央	南壁中央	北西隅隅 北東隅	なし		3	南東隅に張り出し部あり
4	弥生後期	6.41×4.72	28.37	2	353	N68.5°E	○	中央	南壁中央	東辺	なし	石庖丁	4	
5	弥生後期	6.79×5.14	35.61	2	241	N63.5°E	○	中央	南東壁中央	東北隅隅 南隅	なし		7	北西隅に張り出し部あり
6	弥生後期	6.13×4.65	27.23	2	235	N56° E	○	中央	南東壁中央	北東隅隅	なし	勾玉	5	
7	弥生後期	6.42×4.27	23.92	2	260	N61.5°E	○	中央	南東壁中央	東西隅隅	なし		6	

以下、主な項目別に記したい。

平面プラン

長方形を基調とする。第1・7号は各隅が丸味をもち、隅丸長方形とも称すべき形態である。第3・5号は張り出し部を設けている。従って、端整な長方形を呈するのは第2・6号で、第4号は西隅がやや外方へ突き出ている。

主柱穴

2本を基本とする。

主軸の方位

「主軸」概念については註2でふれた通りである。本遺跡では、上記主柱穴2本を通る線の方向に設定しておく。この場合、長軸線上に2本の主柱穴が乗ることになる。方位はN45°EからN73°Eのあいだ(28°)という比較的小さな角度のなかにおさまる。方向性への意識は、かなり明瞭といえるだろう。

炉

2本の支柱穴のあいだにつくられている。本遺跡の場合、定式化した共通の位置を占めている。いずれも浅い摺鉢状の掘り込みであるが、平面は楕円形・方形・円形・不整形のものがみられる。

貯蔵穴様土壇

南東辺または南辺の中央壁に接して（あるいはその近くに）、共通してやや大きめの掘り込みが検出されている。従来「貯蔵穴」と推定されていた掘り込みである。本遺跡では遺構・遺物の遺存は良好とはいえず、これらの土壇中からは第2号で高杯・小形鉢が発見されたほかは土器の出土がなく、第1・4・5号では玄武岩が出土したのみである。果して「貯蔵穴」であるかどうか、本遺跡ではそれを充分裏付けるような遺物の出土状況ではなく、ここでは保留の意味をこめて“貯蔵穴様土壇”と呼んでおきたい。この掘り込みを「貯蔵穴」として認定するときには、何を・何のために・どのような方法で貯蔵したのかという問題も同時に説明されるべきであろう。

張り出し部

第3・5号の2軒にある。どちらもユカ面より一段高くなっており、ベッド状遺構とは対照的に、削り出しによるものである。

ベッド状遺構

7軒の住居すべてにつくられている。設置個所は1～3で、隅または短辺に沿っており、長辺全体に沿った設置の仕方はない。第7号の東隅のものが削り出しである以外は、すべて床面に、地山とは別の土を貼り付けて設けられている。第2・4号は短辺全体に沿ってつくられており、第1・3・5・6・7号は短辺長の半分以下の長さで隅につくられている。このうち、第3号と第5号はいずれも張り出し部をもっているが、第3号は短辺の外方に、第5号は長辺の外方に張り出している。この2棟は、どちらか一方を180°回転するとベッド状遺構の位置はほぼ同一になるが、貯蔵穴様土壇の位置は対称的になってしまう。従って数と位置からみると発掘された範囲内では、ベッド状遺構の設置形態は住居の数だけ、即ち7通りの仕方があることになる。その限りで、本遺跡でのベッド状遺構の設置形態は各住居ごとに個性的であるといえるだろう。ベッド状遺構はいったいどのような機能をもっていたのか。寝所、作業場、道具置き場、祭祀の場等が考えられるが、現在の段階ではいずれも説得力ある推定ではないように思う。上に確認された、設置すること自体は共通していながら、その設置形態はバラエティーに富んでいることが一つの鍵となるのではないだろうか。

以上のことから、さしあたり時間性を無視して遺構の共通点をもとにグルーピングすれば、第1号と第7号、第3号と第5号、第2号と第4号と第6号の3つに分類することができる

だろう。

(2) 遺物

第2号住居跡と第7号住居跡の出土土器を比較し、その関係について若干述べてみたい。

第2号住居跡出土の高杯は口縁部が水平に開き、中期の様相を色濃く残している。甕は底部が平底で、胴部は上位が球状に張る。口縁部は端部が丸い。第7号住居跡出土の甕は長胴化し、底部は凸レンズ状に丸味をもつ。0703は台付甕である。器台にはヘラ削りが施されている。

以上の事から、第2号跡は第7号跡に先行するものと考えられる。

第2号・4号・6号住居跡から出土した石庖丁は弥生時代後期の資料として重要である。後述する野口遺跡の出土品と同様に片岩質の変成岩製である。使用による磨耗が著しく、その都度研ぎなおし、第2号住居跡出土品のごとく小形品となっている。その使用の頻度からいって鉄製鎌の使用は当時期以降に限られるであろう。

(3) 小結

第2号と7号の土器の差から、当遺跡の住居跡は2時期にまたがるものと推定された。また住居跡の形態は3タイプあることが判明した。この2点を総合するならば、3タイプ各1軒の住居よりなるグループが2時期にわたって存在したものと推定される。つまり第1～3号住居跡よりなるグループが第4～7号住居跡のグループに変化したかと考えられる。但しその変化が一度に起ったとは考えられず、個々別々に移転したと考えるべきであろう。

西中ノ沢遺跡の乗る台地は亀ノ甲遺跡まで続いており、ここに検出した7軒の住居跡と同時期の住居跡がまだかなり埋まっているであろうかと推定する。

IV 坊野遺跡の調査



Fig. 44 坊野遺跡の試掘調査

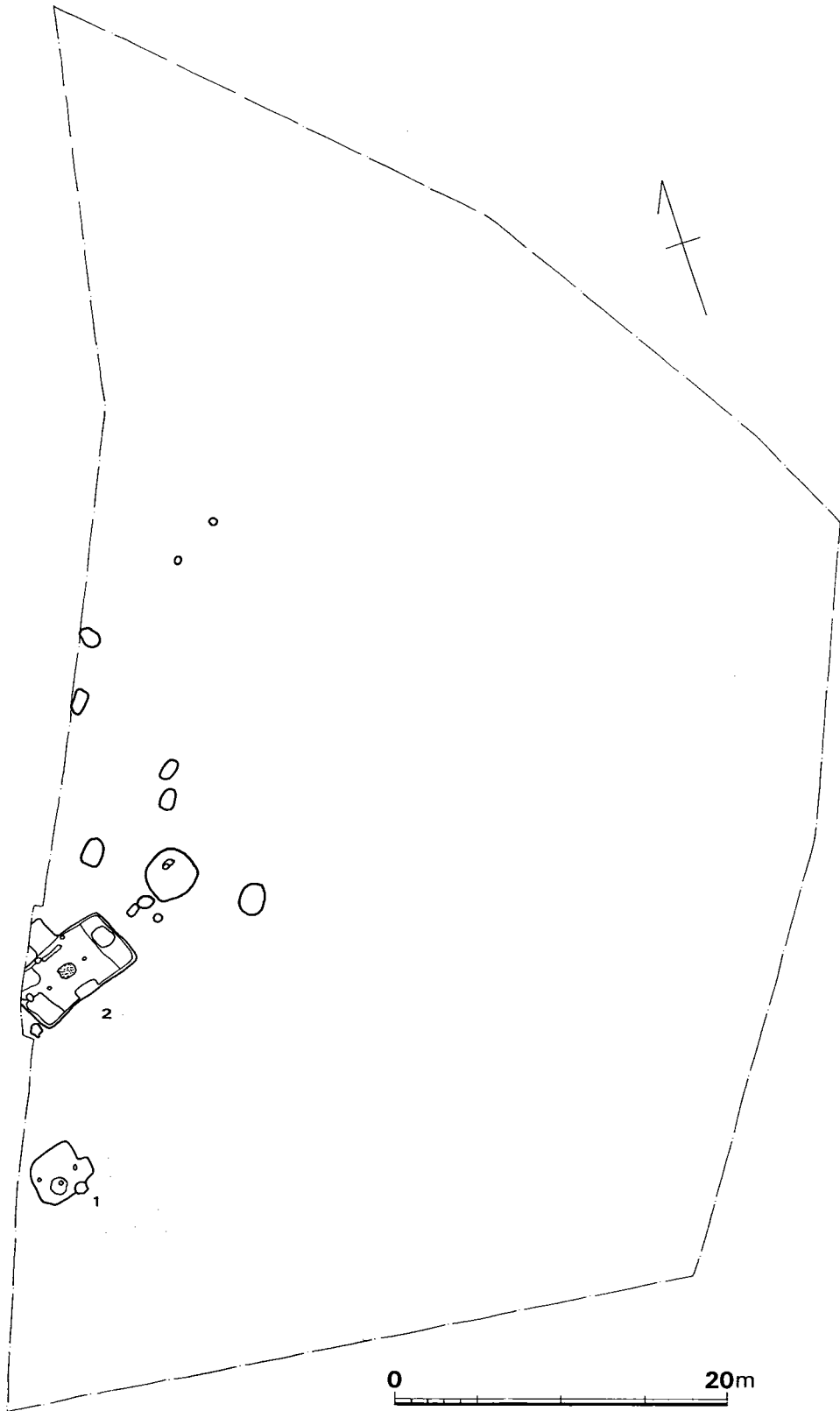


Fig. 45 坊野遺跡遺構配置図 (縮尺 1/400)

1. はじめに

八女市岡山大字室岡字坊野に所在し、筑後市との市境に接する中位段丘上にあり、標高25mである。以前より須恵器、土師器散布地として知られており、その東端が今回の調査対象地となった。調査地点の東側より亀ノ甲遺跡調査時に石棺が出土していたといわれる。

調査は丘陵上の平坦面を全面的に剥いだが、2軒の住居跡と若干のピット群を検出したにすぎない。

2. 住居跡

第1号住居跡

(Fig. 47・48)

発掘範囲最南端に位置する。長軸3.63m、短軸3.10m、床面積8.77㎡を測る。南東隅は外側へ張り出しているが、壁が削平されていることからすれば、北東隅にベッド状遺構があったのかもしれない。長軸上に2本の支柱穴があり、西側：径17cm・深さ33cm、東側：径19~25cm・深さ35cm、心心距離は224cmである。主軸の方位はN103°Eをとる。炉と思われる掘り込みはなく、また焼土も検出されなかった。南側の壁近くに100×120cmほどの略楕円形を呈する掘り込みがある。貯蔵穴様土壇



Fig. 46 坊野遺跡全景



Fig. 47 坊野第1号住居跡

であろうか。さらにその南東側に、 $75 \times 60 \text{cm}$ ほどの瓢形の掘り込みがある。ユカからの深さは 53cm 前後である。ユカは中央部に向かって低くなっており、中央部には若干の凹凸がある。壁高は東側が 30cm 前後、西側 5cm 前後、南北は 20cm ほどである。

第2号住居跡

(Fig. 49・50)

第1号住居跡の北東7mに位置する。長軸 6.94m 、短軸 3.84m で、北西側長辺の中央に 155×173

mの長方形の張り出し部があり、推定床面積 26.3m^2 を測る。支柱穴は2本で、西側：径 $20 \sim 22 \text{cm}$ ・深さ 28cm 、東側：径 $20 \sim 24 \text{cm}$ ・深さ 35cm 、心心距離 274cm である。主軸の方位は $N 70^\circ E$ をとる。炬は床面中央の長方形の掘り込みで、内部は良

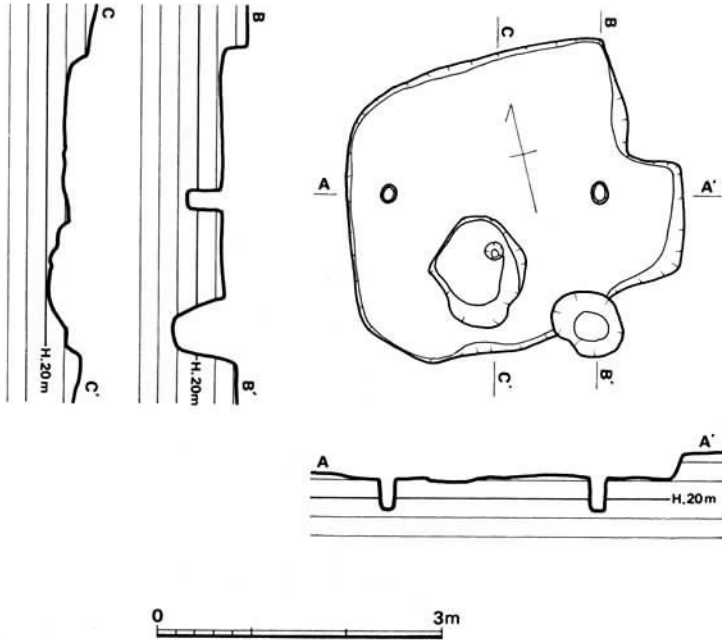
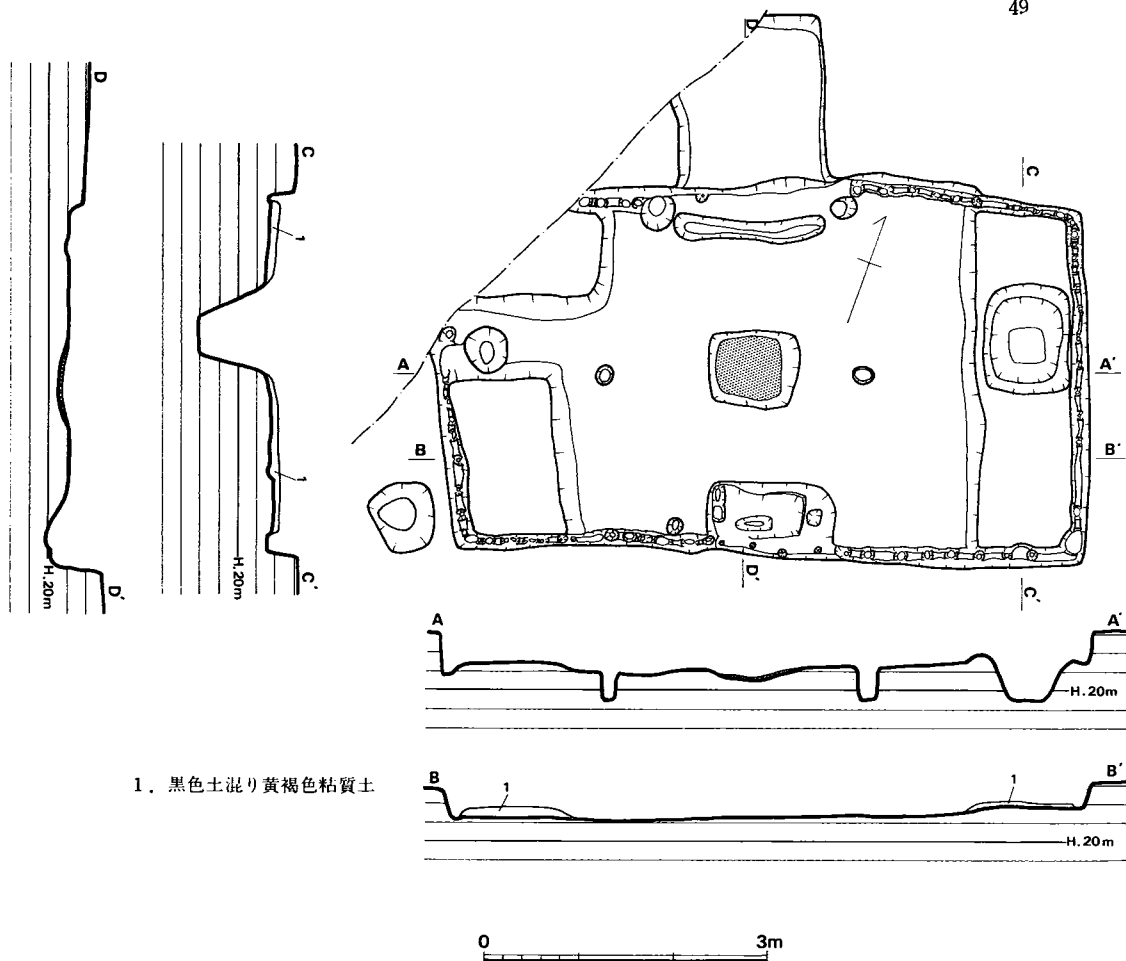


Fig. 48 坊野第1号住居跡実測図 (縮尺 1/80)



Fig. 49 坊野第2号住居跡



1. 黒色土混り黄褐色粘質土

Fig. 50 坊野第2号住居跡実測図 (縮尺 1/80)

く焼けていた。南側長辺の中央の壁に接して、 $140 \times 75 \text{cm}$ ほどの長方形の土壇がある。ユカからの深さは約 25cm である。ベッド状遺構は北東隅、南西隅、北西隅に認められた。いずれも貼り付けによるものである。ユカは踏み固められており、炬から東側ベッド状遺構にかけては、火を受けて赤変していた。

本遺構の注目すべきことの一つは北西辺中央部である。張り出し部はユカよりも一段高くなっており、張り出し部下端から内側へ $20 \sim 25 \text{cm}$ 離れたところに、壁と平行に幅 $20 \sim 30 \text{cm}$ ほどの溝がある。長さは張り出し部の東西長と殆んど同じである。この小溝の両脇には、径 $30 \sim 40 \text{cm}$ ほどのピットがあり、その心心距離は 197cm を測る。この部分には壁溝はなく、北西隅の未掘部分を除いて、壁溝が全周する。

本遺構の注目すべき他の一つは、上記の壁溝内に小穴が多数検出されたことである。(壁溝に対応させる意味で、壁に近接したこの種のピットを、本稿では以下「壁小穴」と呼ぶことに

する。壁直下の床面に、ほぼ規則性をもって並んだ小穴の総称としておく)。各小穴の径は、東隅のものがやや大きめであるが、ほぼ10cm前後である。張り出し部直下の溝両脇ピットに挟まれた小穴を除いて、北西端の長辺側から時計回りに1, 2, 3, …, と番号を付した。計63個が検出されている。これらの壁小穴の中心距離は(4~5間を除く)、最小が50~51間の8cm, 最大は26~27間の73cmで、平均24.3cmであった。

なお、張り出し部中央付近の床面直上から完形の壺が、東側のベッド状遺構上の略方形のピットから器台が、東南のユカから鉄器がそれぞれ出土している。

Tab. 2 坊野遺跡住居跡一覧表 ()は推定

番号	時期	規模 m	面積m ²	主柱穴		主軸方位	焼が	貯蔵穴様土壇	ベッド状遺構	壁溝	土器以外の遺物	発掘時番号	備考
				数	心-心距離 cm								
1	弥生後期	3.63×3.10	8.77	2	224	N103° E		南寄壁り	なし?	なし		1	南東隅に張り出し部?
2	弥生後期	6.94×3.84	(26.3)	2	274	N70° E	○ 中央	南中壁中央	北東辺南西隅北西隅	張り出し部を除き全周	鉄ノミ 砥石	2	北西辺中央に張り出し部有

3. 出土遺物

両住居跡の床面から弥生式土器が集中的に出土し、第2号住居跡からは鉄器と砥石が検出された。

(1) 土器 (Fig. 52・53)

第1号住居跡出土土器

甕 0101は「く」字口縁をもつ長胴甕である。内外面を幅3.5cmの粗い同一板で縦方向のハケメを施している。胴下半の外面はヘラ削りである。



Fig. 51 坊野第2号住居跡土器出土状況

碗 0102は半球形を呈し、口縁部は内傾し、端部は丸い。内外面共ナデツケしている。

第2号住居跡出土土器

方形張り出し部より0202の甕が東側ベッド上のピット中より器台が出土した。他の土器は西南のベッドに接した床面上から集中して出土した。

壺 0203は口縁部に歪みが多いが「く」字を呈し、胴部は大きく脹る。下半でいったんせば

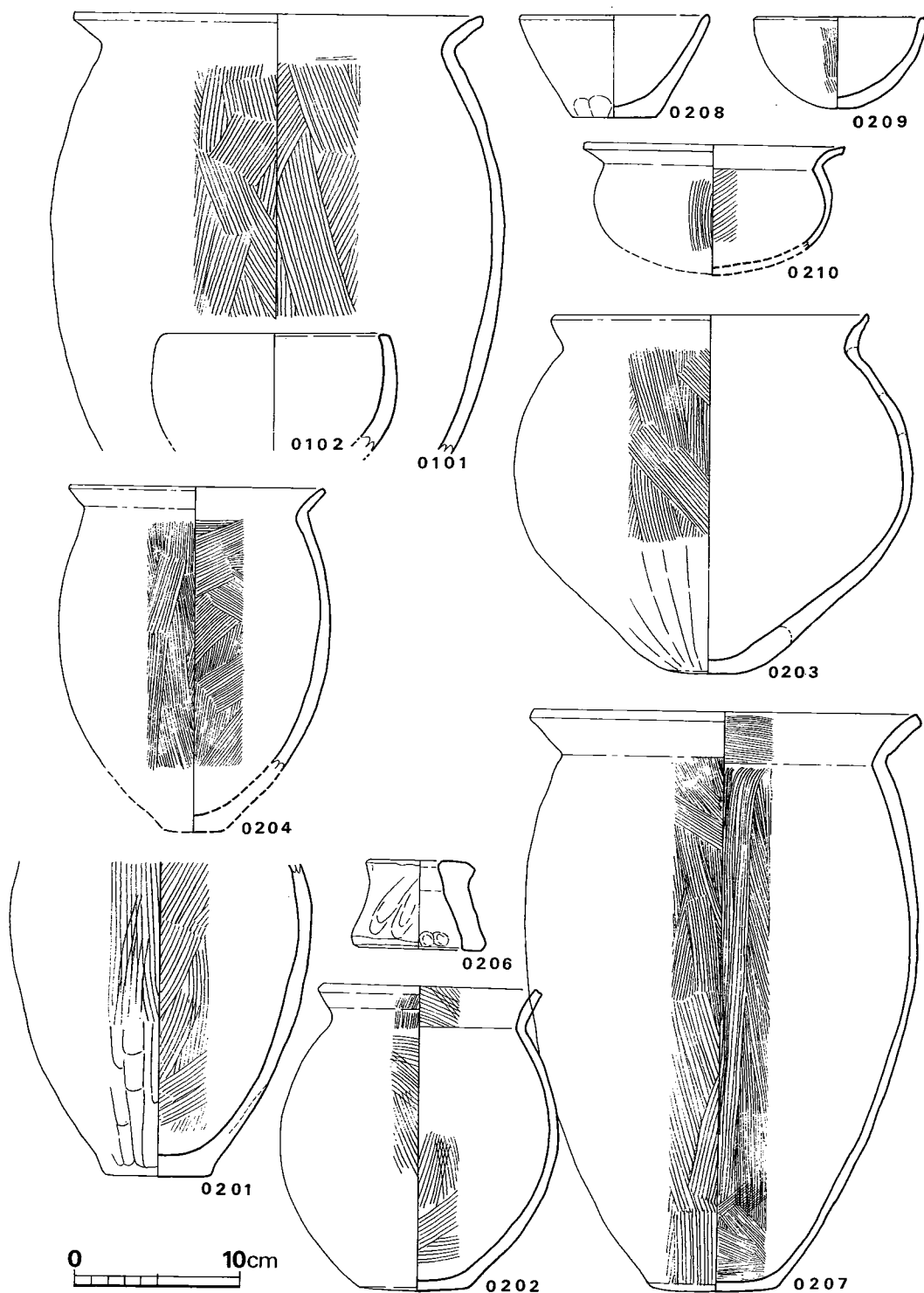


Fig. 52 坊野遺跡出土土器実測図 (縮尺 1/4)

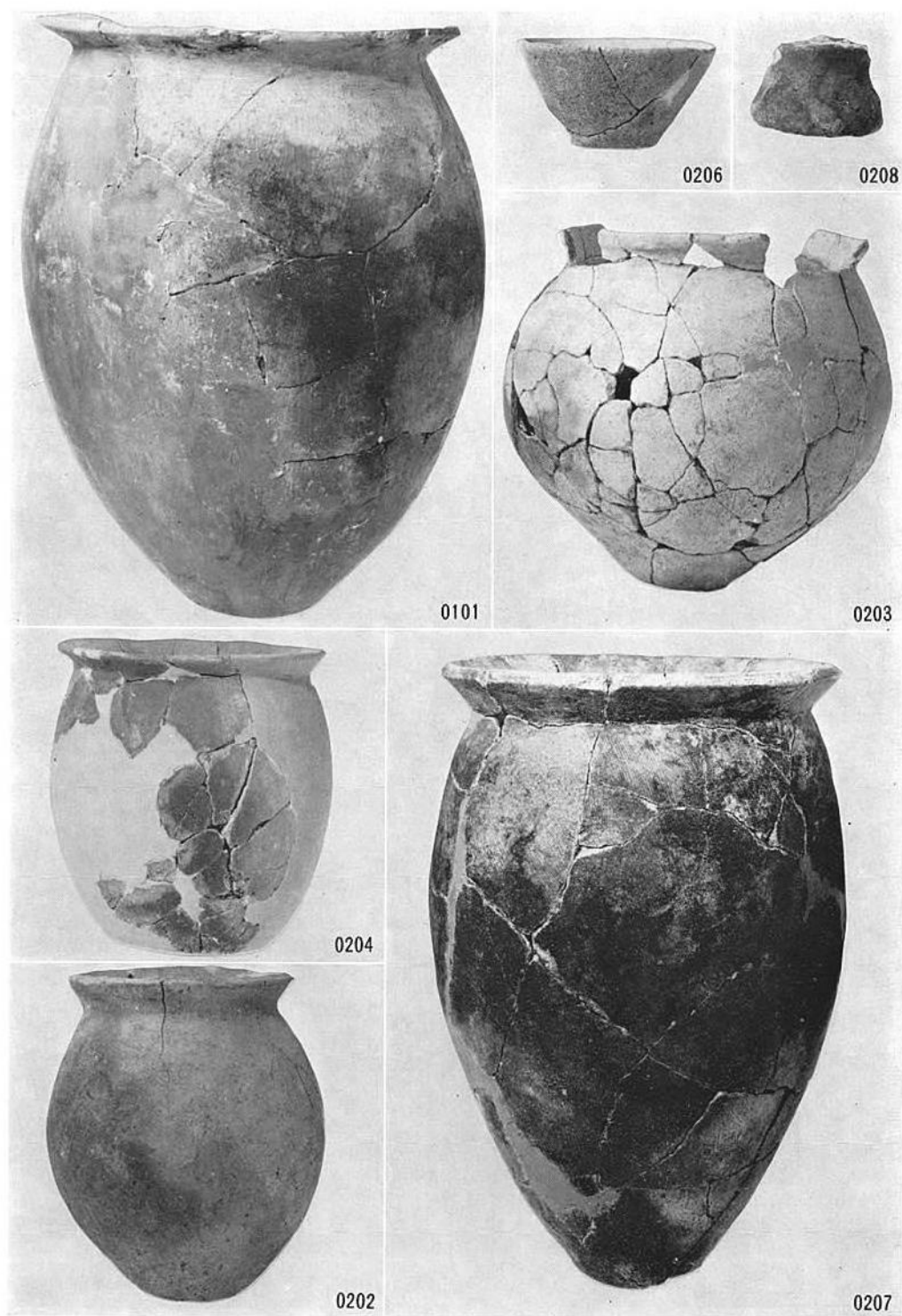


Fig. 53 坊野遺跡出土土器

まりを見せてからさらに脹って底部へいたる。底部は丸底に近く、胴下部との境稜は不明瞭である。体部外面は板幅2.5cmの目の細かいハケメを施し、胴下部はヘラ削りしている。

甕 胴部が大きくなって球状に近いもの(0202)、胴部が口径より僅かに大きい中胴のもの(0201, 0204)と長胴のもの(0207)とがある。口縁部は全て「く」字口縁で、0202は端部が平坦である。底部は丸味を帯びた平底で、胴下半との稜は明瞭である。体部は全てハケメ調整であるが、0201と0202の外面上部にヘラ削りが認められる。

鉢 0208は平坦な底部から直線的に外上方へのび、端部は丸い。内外面ナデアゲ調整で、外面底部は指オサエしている。0201は「く」字口縁をもち、端部は平坦で、中央がやや窪む。偏球状の胴部をもち、底部は丸底になると考えられる。胎土中には砂粒が多く、粗質である。

碗 0209は半球形を呈し、口縁端部は丸い。体部外面にはタテのハケメを施し、底部と内面をナデツケて平滑に仕上げている。

器台 0206は小形の器台上端部は僅かに開く。内孔は「ハ」字形に開き、上下両端は平坦である。内外面は指調整である。

(2) 鉄器 (Fig. 54)

第2号住居跡の床面上から1個が出土している。方柱形を呈し、刃部付近の両角はやや丸味を帯びている。現存長11.7cm、刃部幅0.75cmである。

(3) 石器 (Fig. 54)

同じく第2号住居跡床面から砥石が出土した。キメの細かい砂岩質で、表裏両面ともよく使い込んでいる。

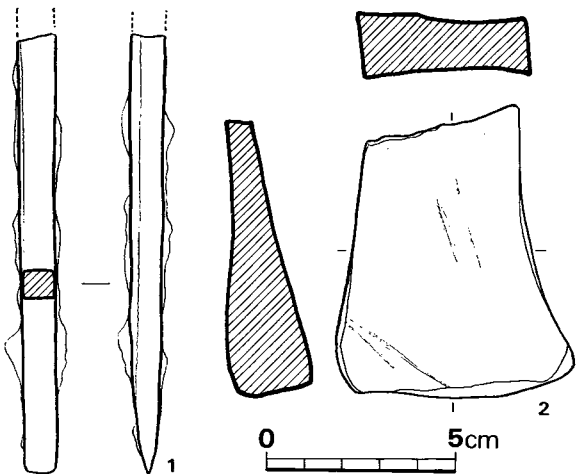


Fig. 54 坊野遺跡出土鉄器・石器実測図 (縮尺1/2)

2軒の住居跡を検出したのみであり、集落跡として構造を云云する事はできない。西側に広がる遺跡の東端を明らかにしたのみである。

2軒の住居跡は規模においても構造においても明らかな差が認められる。第2号住居跡は周溝がめぐり、周溝中に小穴が多数穿たれていたことから、壁材がしっかりしていたと考えられる。また北側の方形張り出し部は張り出し部下の溝や溝両脇の柱穴を考慮して、出入り口と考えられる。つまり第2号住居跡は家屋のヒラ中央に出入り口を持っていた事になる。それに対し第1号住居跡にはベッド状段部を持たず、東南隅の張り出し部を第1号住居跡と同様に出入り口と考えるならば、ツマの方向に入口を持つ事になる。以上のような明らかな差はあるが、

2本の支柱穴と貯蔵穴様土壙を持つ点では同一である。

第2号住居跡出土の遺物はセット関係を示す貴重な資料を提出した。

壺や甕は全て「く」字口縁をもち、底部は丸味を帯びた平底である。0203の底部はほとんど丸底に近い。また胴部下半の外面をへう削りする例が多い。0207の甕や0210の鉢は道添遺跡第7号住居跡出土例と同形である。また0101の甕は0207と同形のものと考えられるので、第1号住居跡と2号跡は同一時期のものと思われる。

V 野口遺跡の調査

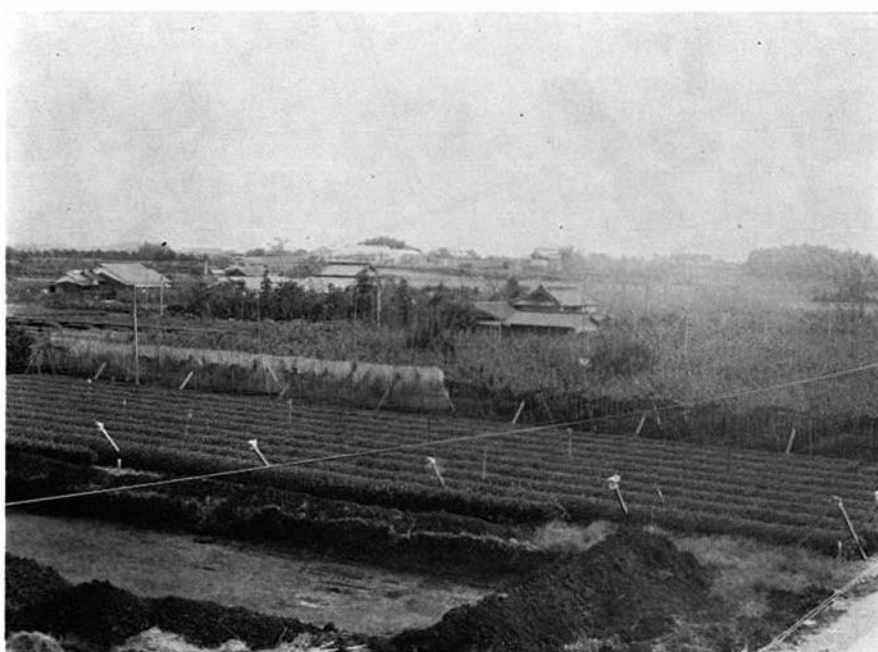


Fig. 55 野口遺跡より亀ノ甲遺跡を臨む

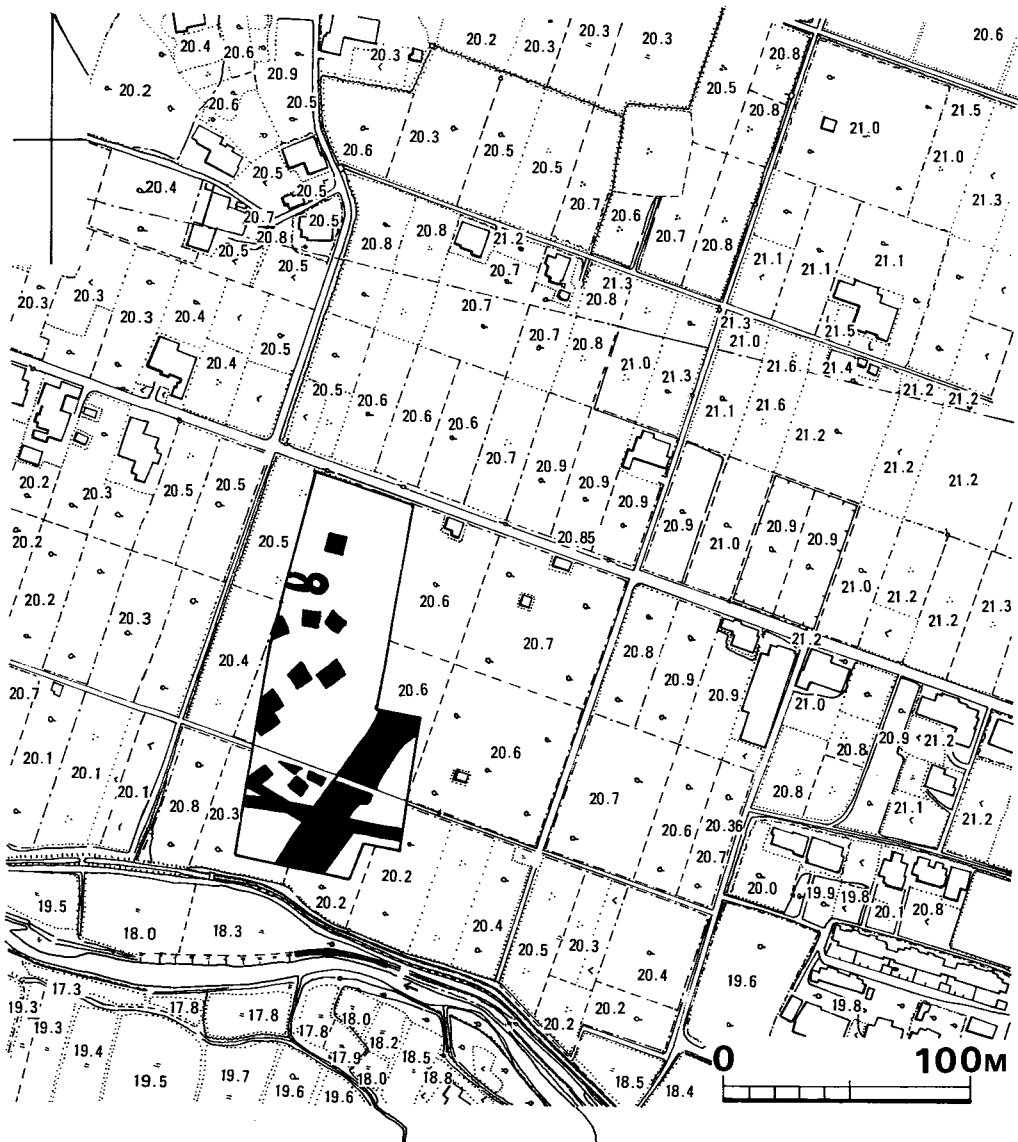


Fig. 56 野口遺跡周辺地形図 (縮尺 1/3000)

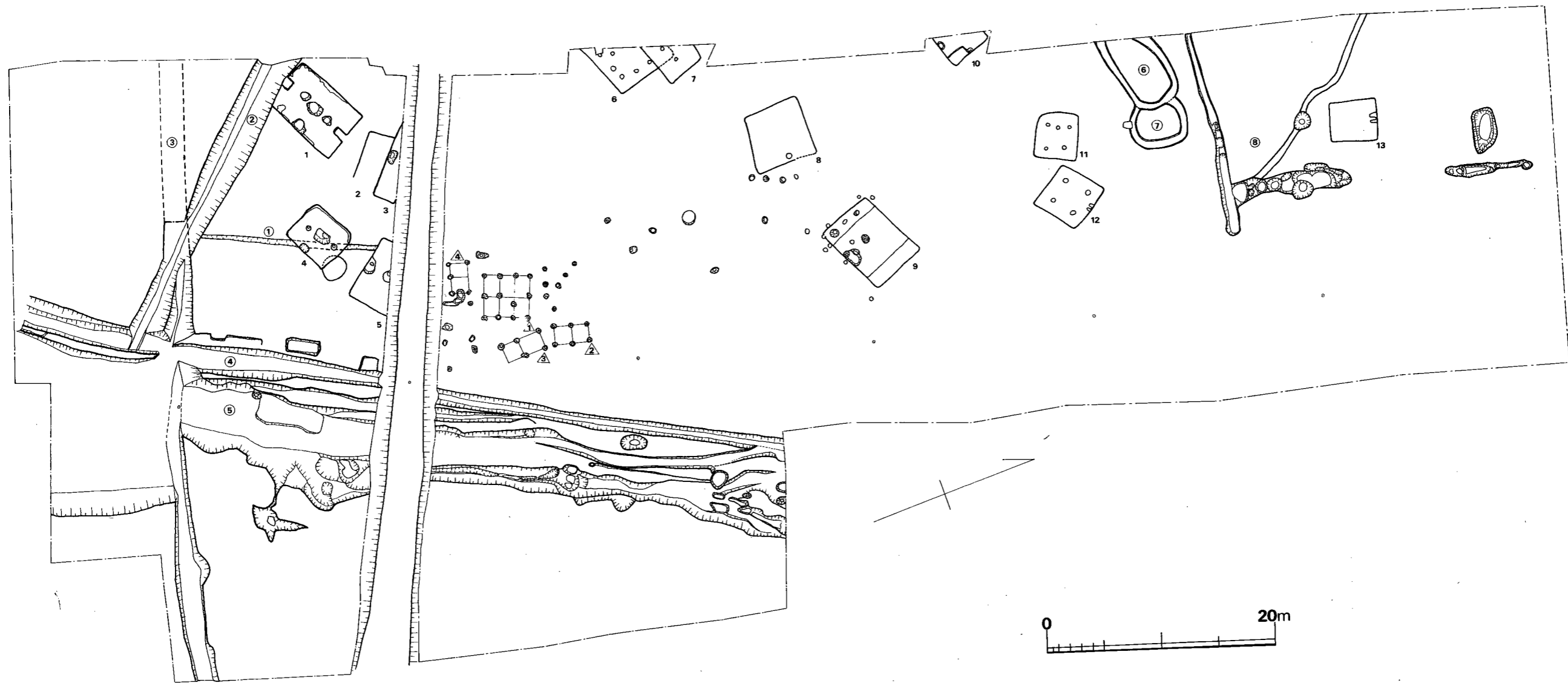


Fig. 57 野口遺跡遺構配置図 (縮尺1/400)

1. はじめに

八女市岡山大字室岡字野口に所在する。山ノ井川の北岸段丘上にあり、標高20.7mである。水田面との比高は1.2~2mである。この段丘は東西長約500m、南北長約150mを測る。段丘の西端崖面には溝断面が観察された。調査地点の西約100m付近ではかって果樹園造成中に石棺が掘り出されている。

検出した遺構としては、住居跡13軒、自然流路やV字溝を含めた各種溝8本その他、掘立柱遺構4棟分がある。住居跡は弥生時代に属するもの8軒、古墳時代前半に属するもの1軒、後半のもの4軒である。これらの住居跡や掘立柱遺構はいずれも検出された自然流路の西側にあり、東側では遺構はなく、土器の出土さえまれであった。

各種溝のうち、最も古いのはV字溝(②号溝)で、5世紀代に掘られ、6世紀末まで埋まり切っていなかったと思われる。その後遺跡地の東側に川(⑤号溝)が流れ出し、③号溝がV字溝を切って流入した。川は中世まで流れ、そのころ⑥~⑧号の各種溝が何らかの目的で掘られている。川が流れを止め、埋まり切



Fig. 58 野口遺跡北半遺構全景



Fig. 59 野口遺跡南半遺構全景

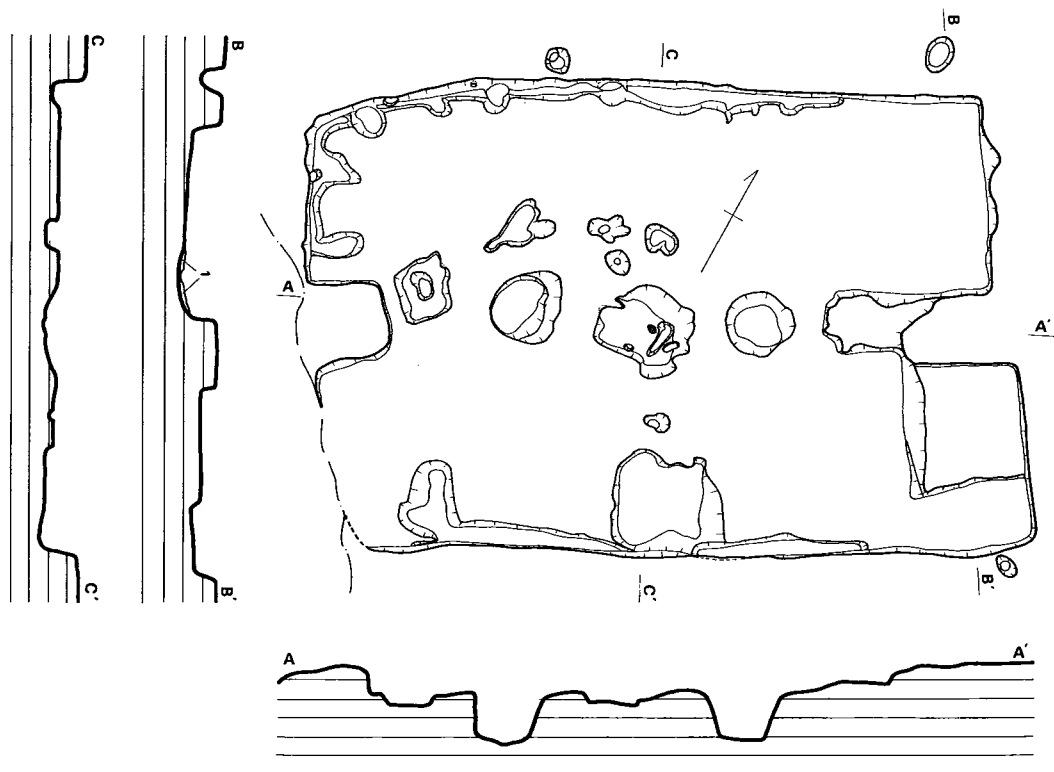
ってから、④号溝が掘られている。時代は明確ではないが、少くとも近世以降の陶片は出土していない。この溝は水田用水路として設けられたと考えられ、事実調査区南端で水田跡が確認された。現地表面より約2m下である。

2. 弥生時代の遺構と遺物

(1) 住 居 跡

第1号住居跡 (Fig. 60・61)

発掘範囲の南西端に位置する。南隅は第2号溝（V字溝）と重複し、第1号住居跡→V字溝の順に新しい。長軸7.47m、短軸5.07m、床面積35.13m²を測る。両短辺の中央部に階段状の遺構があり、北東側は二段になっている。支柱穴は2本で、西側：径74~80cm・深さ55cm、東側：径70cm前後・深さ48cm、心心距離は260cmである。主軸の方位はN64°Eを指す。両支柱穴



1. 小礫混り黒色土

0 3m

Fig. 60 野口第1号住居跡実測図 (縮尺 1/80)

の中間に不整形の掘り込みがあり、炬と思われるが、焼土は検出されていない。南東辺中央の壁に接して、 $120 \times 100 \text{cm}$ ほどの貯蔵穴様土壇が検出された。壁溝は南東辺、北東辺、南西辺の北半に確認されている。西隅付近では壁小穴のような部分もあり、それらは内側に向って突き出ている。ベッド状遺構は北東側階段状遺構の南側に接して検出された。ユカからの高さは、階段状遺構の低い部分とほぼ同じである。床面は柔らかく、壁は $30 \sim 40 \text{cm}$ の高さを残していた。



Fig. 61 野口第1号住居跡

なお、本住居跡の床面出土遺物は、比較的多い方である。北西側中央のユカから碗が、北東側の階段状遺構及びベッド状遺構の床面から台付碗・甕が、その近くのユカからは小形土器がそれぞれ出土した。また、南東側の貯蔵穴様土壇のなか（西寄り）と、土壇の東側のユカから砥石が出土している。

第2号住居跡

(Fig. 62)

第1号住居跡の北東 1.3m (最短距離)に位置する。第3号住居跡と重複しており、 $2 \rightarrow 3$ の順に新しい。南西辺 3.54m 北西辺約 2.5m を検出したが、全体に遺存が悪



Fig. 62 左上第3号・左下第2号・右上第5号・右下第4号各住居跡

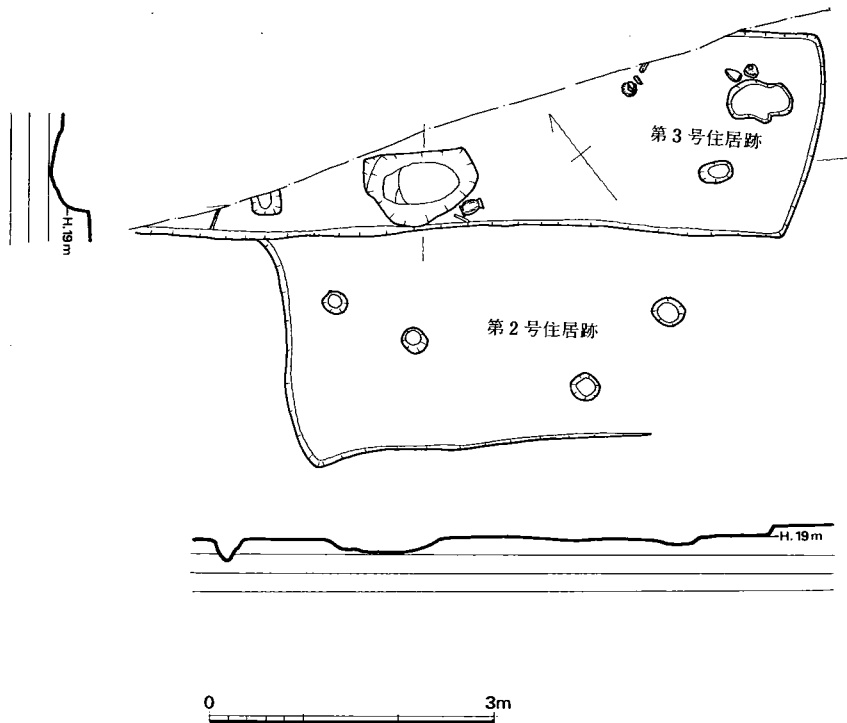


Fig. 63 野口第2・3号住居跡実測図 (縮尺 1/80)

く、詳細は不明である。

なお、床面より椀が出土している。

第3号住居跡 (Fig. 62・63)

第2号住居跡と重複し、2→3の順に新しい。南西辺6.90m、南東辺2.15mを検出した。南東辺はさらに北西へ曲るので、あるいは張り出し部の一部かもしれない。北半は道路下にあるため、詳細は不明である。

南西辺の方向はN134°E前後である。南西辺に接して、120×80cmほどの略楕円形の貯蔵穴様土壇が検出され、その南東側のユカから台付甕が発見された。そのほか、北東側のユカからも若干の土器片が出土している。

第4号住居跡 (Fig. 64・65)

第1号住居跡の東側4m (最短距離)、第3号住居跡の南東3.7m (同)に位置する。第1号溝および円形土壇と重複しており、これら三者の関係は土壇→住居跡→溝の順に新しい。

長軸4.61m、短軸4.06m、床面積18.54m²を測る。北隅と北西辺の西寄りに張り出し部があり、これらの中間の床面に径20cmほどのピットが位置する。支柱穴は2本で、西側：径38cm・深さ41cm、東側：径50～55cm・深さ62cm、心心距離は284cmである。主軸の方位はN62°Eをと

る。2本の支柱穴のあいだに浅いくぼみがあり (Fig. 65のB-B'断面) 炉と思われるが、内部は焼けていなかった。南東辺中央の壁に接して、略五角形の貯蔵穴様土壇があり、ユカからの深さは約30cmである。壁溝は北隅から西隅にかけて検出されており、竪穴内を全周しない。ベッド状遺構はないようである。床面は柔らかく、平坦である。壁は10~20cm残存していた。

東側で本住居と重複している円形土壇は、上端径193~208cm、下端径175~183cm、深さ40cm前後を測る。北側に径30cmほどのピットがあり、土壇底面からの深さは約10cmである。底面からは焼土が検出され、とくに中央部が厚い。第4号住居跡の床面は、この円形土



Fig. 64 野口第4号住居跡

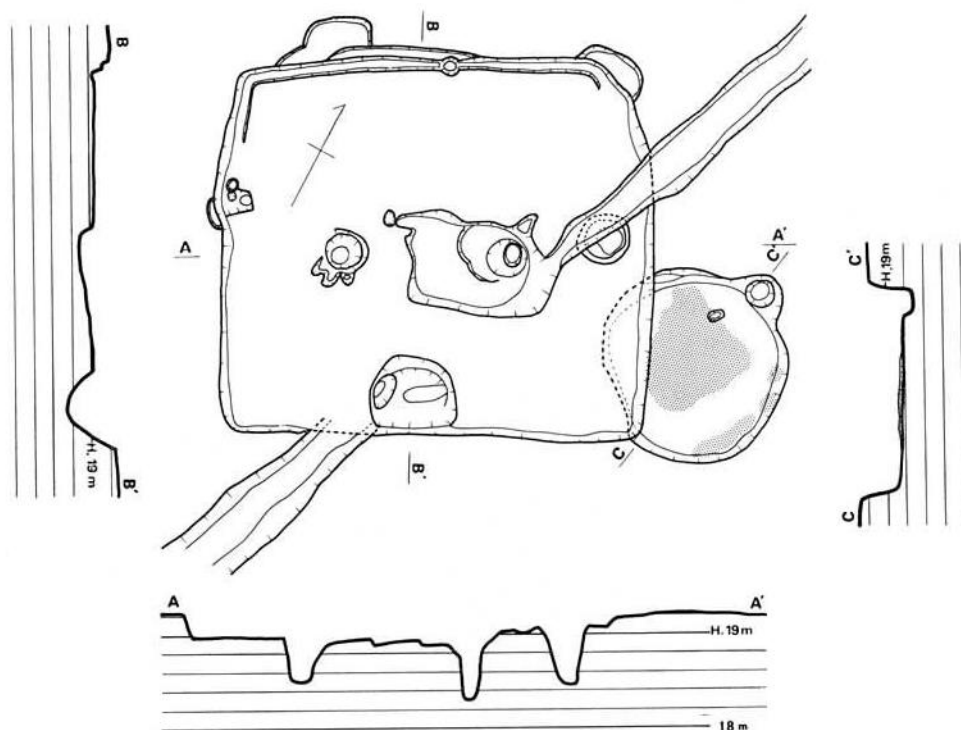


Fig. 65 野口第4号住居跡実測図 (縮尺 1/80)

墳が埋められたのちに、その上面に約5cmの厚さの黄褐色粘質土を貼ってつくられていることが、土層断面によって観察できた。

第5号住居跡 (Fig. 66)

第4号住居跡の北東2.3m(最短距離), 第3号住居跡の東3m(同)に位置する。北半は道路下にあるため、詳細は不明である。

南西辺5.75m, 南東辺3.9m, 北西辺1.1mを確認した。南東辺の方向はN139°Eをとる。支柱穴・炉は不明である。南東辺中央付近の壁に接して貯蔵穴様土壌が検出され、なかから土器片が出土した。壁溝・ベッド状遺構は検出されていない。壁は25cm前後が残存していた。

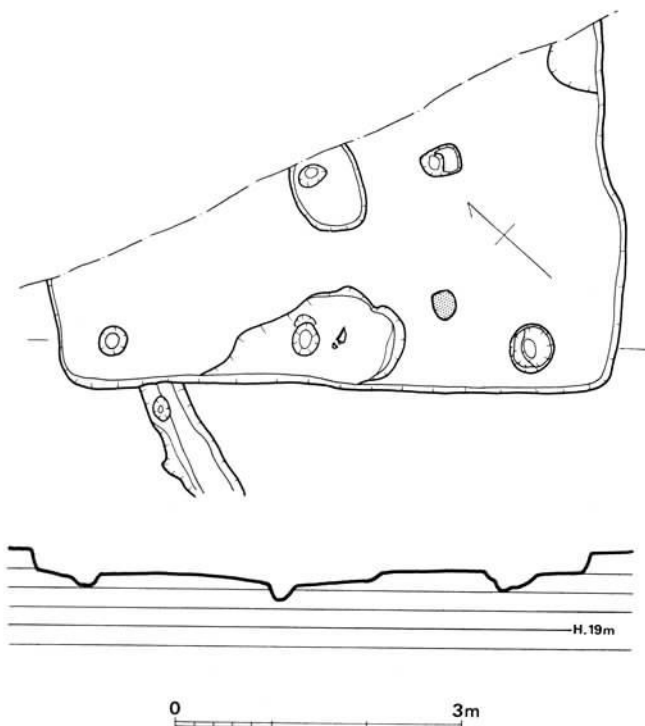


Fig. 66 野口第5号住居跡実測図(縮尺 1/80)

第7号住居跡 (Fig. 67・68)

第6号住居跡の北側で重複している。南東辺4.3m, 北東辺3.4m, 北西辺1.3mを検出したが、西半は発掘区域外にあるため詳細は不明である。第6号住居跡の床面より下に焼土を伴う掘り込みを確認した。炉であろう。東側のピットは支柱穴の一つかもしれない。主軸方位は不明である。貯蔵穴様土壌・壁溝・ベッド状遺構等は検出されなかった。壁高は20~35cmある。

第9号住居跡

(Fig. 69・70)

第8号住居跡の東5.5m(最短



Fig. 67 野口第6・7号住居跡

距離)に位置する。

長軸6.90m、短軸5.27mで、床面積34.44m²を測る。主柱穴は不明である。長軸の方位はN68.5°Eをとる。焼土は検出されず、灰も不明である。南東辺中央の壁に接して不整形の貯蔵穴様土壙が検出された。ユカからの深さは20cmほどである。壁溝はない。ベッド状遺構は両短辺沿いに確認した。いずれも、削り出しによるものである。床面は中央部に向かって低くなる。壁高は約20cmを遺存していた。

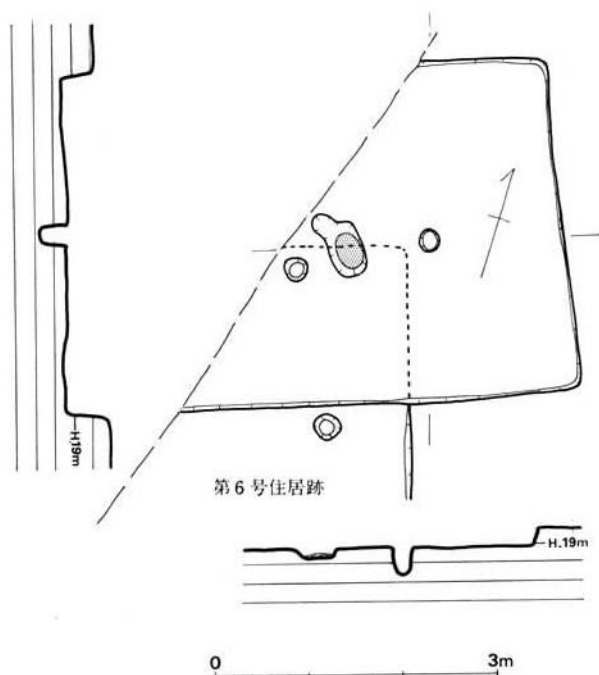


Fig. 68 野口第7号住居跡実測図(縮尺 1/80)



Fig. 69 野口第9号住居跡

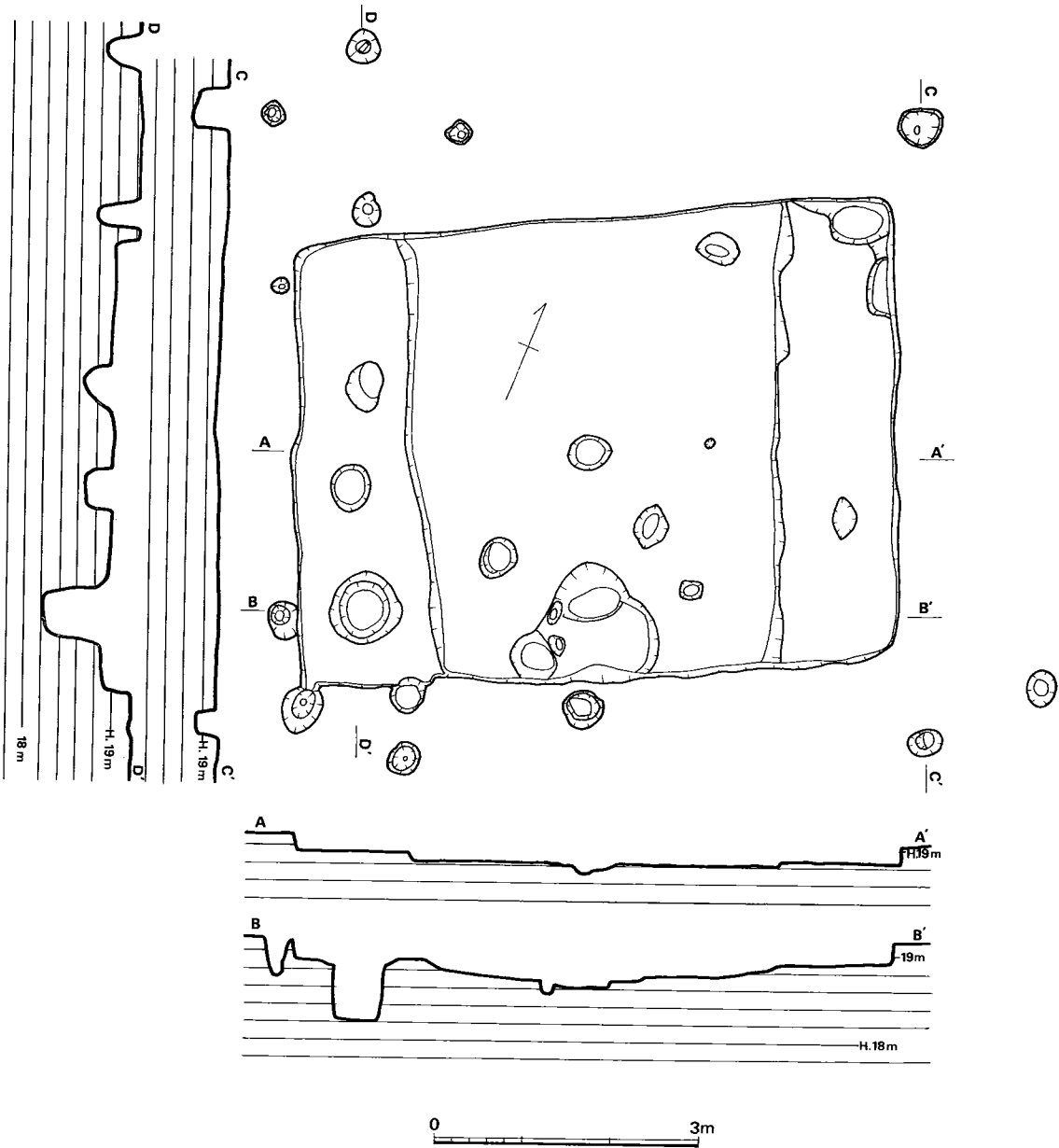


Fig. 70 野口第9号住居跡実測図 (縮尺 1/80)

第10号住居跡 (Fig. 71・72)

発掘範囲内の北西端に位置する。第8号住居跡との最短距離は13m, 第9号住居跡とのそれは13.8mである。

南東辺3.42m, 北東辺3.68m, 北西辺0.75mを検出した。西半は発掘区域外にあるため詳細



Fig. 71 野口第10号住居跡

は不明である。主柱穴・炉は検出されなかった。南東辺の壁に接して径60cm前後・深さ63cmの貯蔵穴様土壇が検出された。ベッド状遺構は東隅にあり、削り出しによるものである。壁高は18cmほどである。

なお、床面から完形の壺および砥石が出土している。

(2) 出土遺物

a 土器

第1・4・7号各住居跡から集中的に土器が出土したので主にこの3軒の住居跡の出土土器について記述し、他住居跡出土土器については付随的に述べる。

第1号住居跡出土土器 (Fig. 73・74)

床面直上から夥しい量の土器が出土したが、若干浮いており、住居跡廃絶直後に棄てられた土器群としてとらえられる。出土した器種は壺2種・甕2種・鉢・小形土器・碗である。

壺 0101及び0102は逆「く」字口縁をもち、頸部と胴部中央に断面三角形の凸帯を一条づつめぐらしている。0102の口縁部は丸味を帯びて袋状に近い。外面はハケメ調整で、凸帯部と口縁部のみを上からヨコナデしている。内面はナデアゲである。0113は無頸の壺である。口縁部は強く内傾し、端部は平坦である。底部は平坦であるが、胴部境の稜は緩い。外面は粗いハケメ調整である。

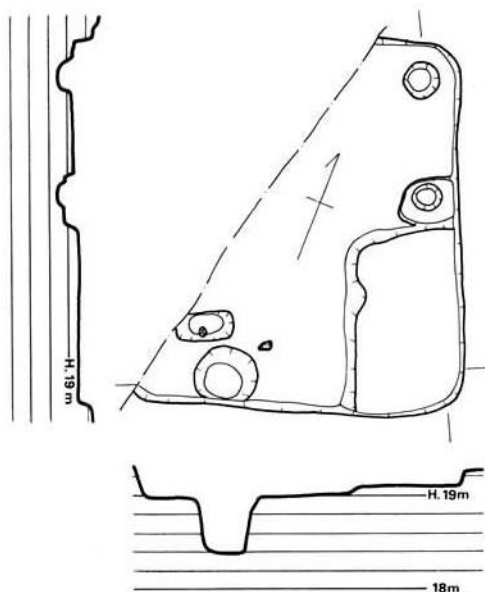


Fig. 72 野口第10号住居跡実測図 (縮尺 1/80)

甕 0105の口縁部は短く、強く「く」字に外傾する。内外面にふくらみをもち、端部は丸い。頸部は締まって球形胴へと続く。胴部下半外面はナデアゲである。0114は高台を付けた甕で胴部の脹りには歪みがある。胴部内外面をナデアゲ調整している。

深鉢 0103は口縁部と底部を欠損している。頸部と胴部下端が締まっている。0107は体部が

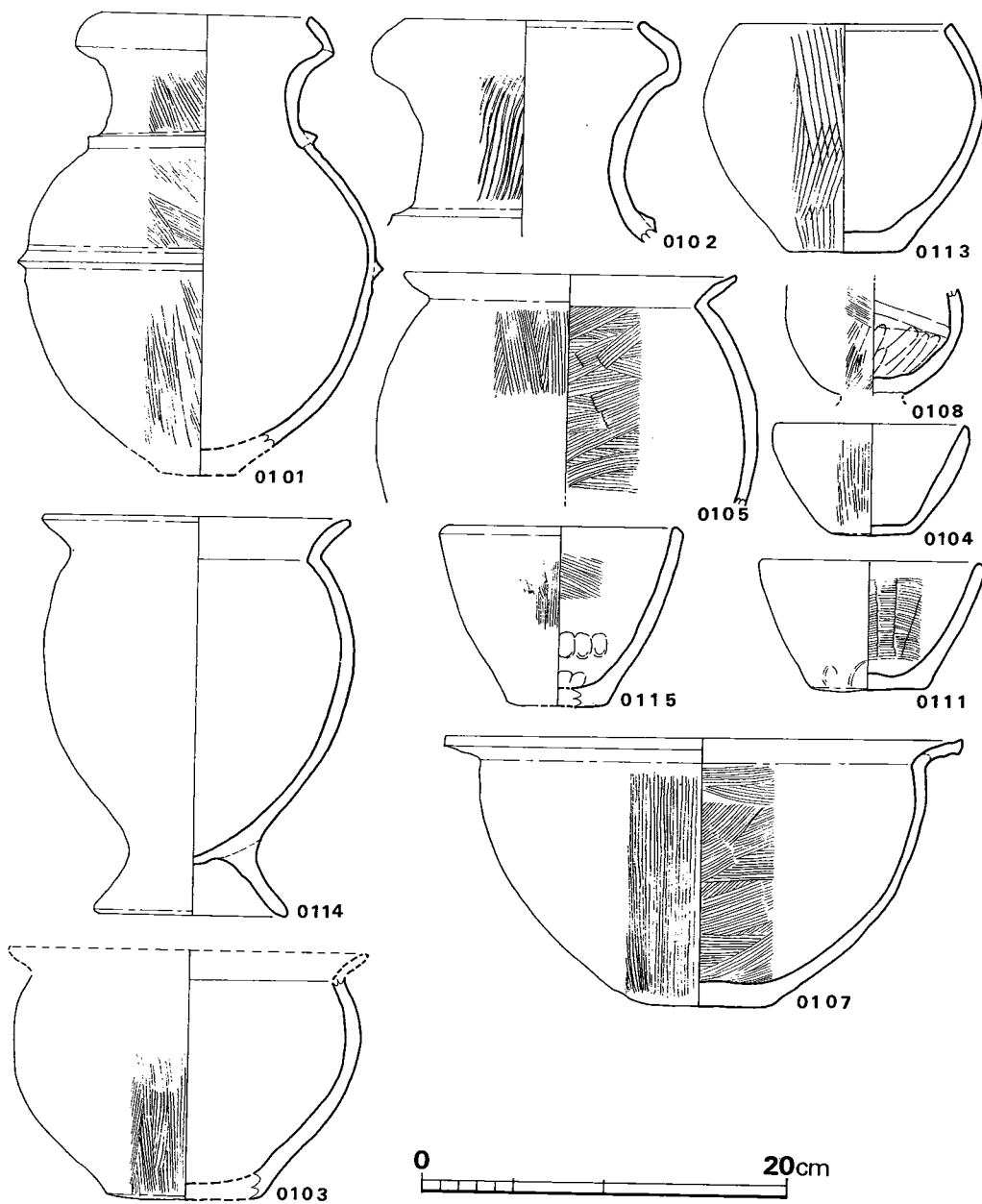


Fig. 73 野口第1号住居跡出土土器実測図（縮尺 1/4）

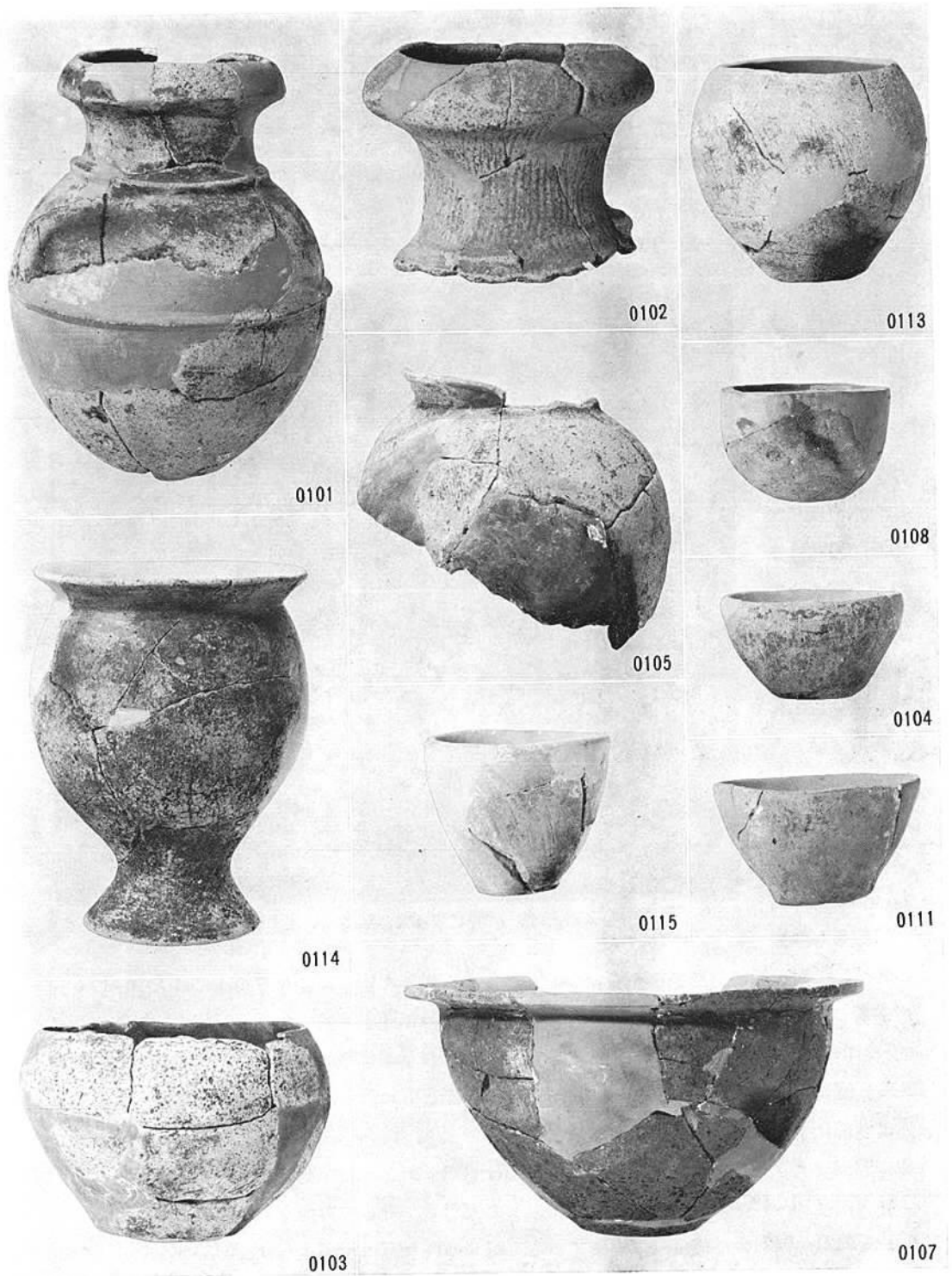


Fig. 74 野口第1号住居跡出土土器

大きく開き、直立してのち、水平近く開く口縁部へと移行する。端部は平坦である。底部は丸味をもつ平底で、胴部境の稜は緩い。

小形土器 0104・0111・0115はいずれも丸味をもった平底をもち、ほぼ直線的に開く鉢形土器で、底部と胴部下端を指オサエ、体部内外面ハケメ調整している。

脚付椀 0108は胎土が密で焼成も良いが、調整は雑で部厚い。内面を指ナデしているが、マキアゲ痕が残っている。

第4号住居跡出土土器 (Fig. 75~80)

床面中央部付近から集中して出土した。第1号住居跡と同様に床面から若干浮いており、住居廃棄直後に集中して投げ込まれた一群の土器であろう。出土した器種は壺3種・甕3種・鉢・器台2種と小形土器である。

壺 逆「く」字口縁をもつもの、朝顔状に開く口縁をもつもの

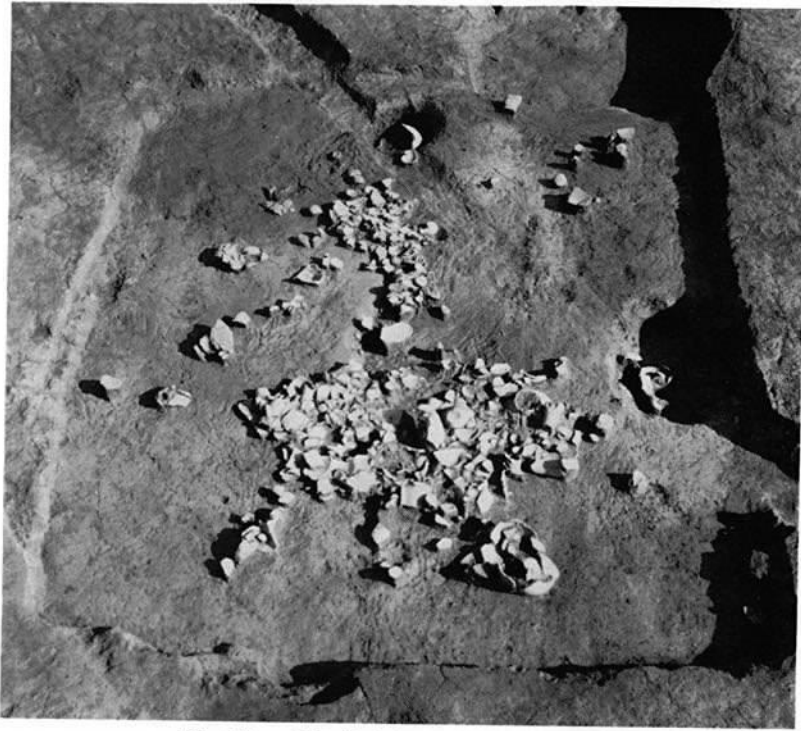


Fig. 75 野口第4号住居跡土器出土状況①

のと「く」字口縁で球形胴部をもつものがある。逆「く」字口縁をもつ壺には大中小の3種がある。0418・0429は大形品，0414・0404は中形，0412は小形品である。0429の口縁部屈折は強い。0412は口縁屈折が弱く、内面に指痕が残っており、同種のミニチュア化したものともいえる。底部はいずれも胴部下端との稜が明瞭な平底と思われる。0428は朝顔形に開く口縁をもち、端部は平坦である。頸から肩にかけてのカーブはなだらかである。0425の口縁部は短かく、胴部は大きく脹って球状を呈する。底部は胴部下端との稜が明瞭な平底である。

甕 口径16~17cmの中形品と口径26cm以上の大形品，そして高台をもつものの3種がある。0412と0421~0424の口径はほぼ同一である。胴部の脹り方に差がみられ、0423は直立する胴部

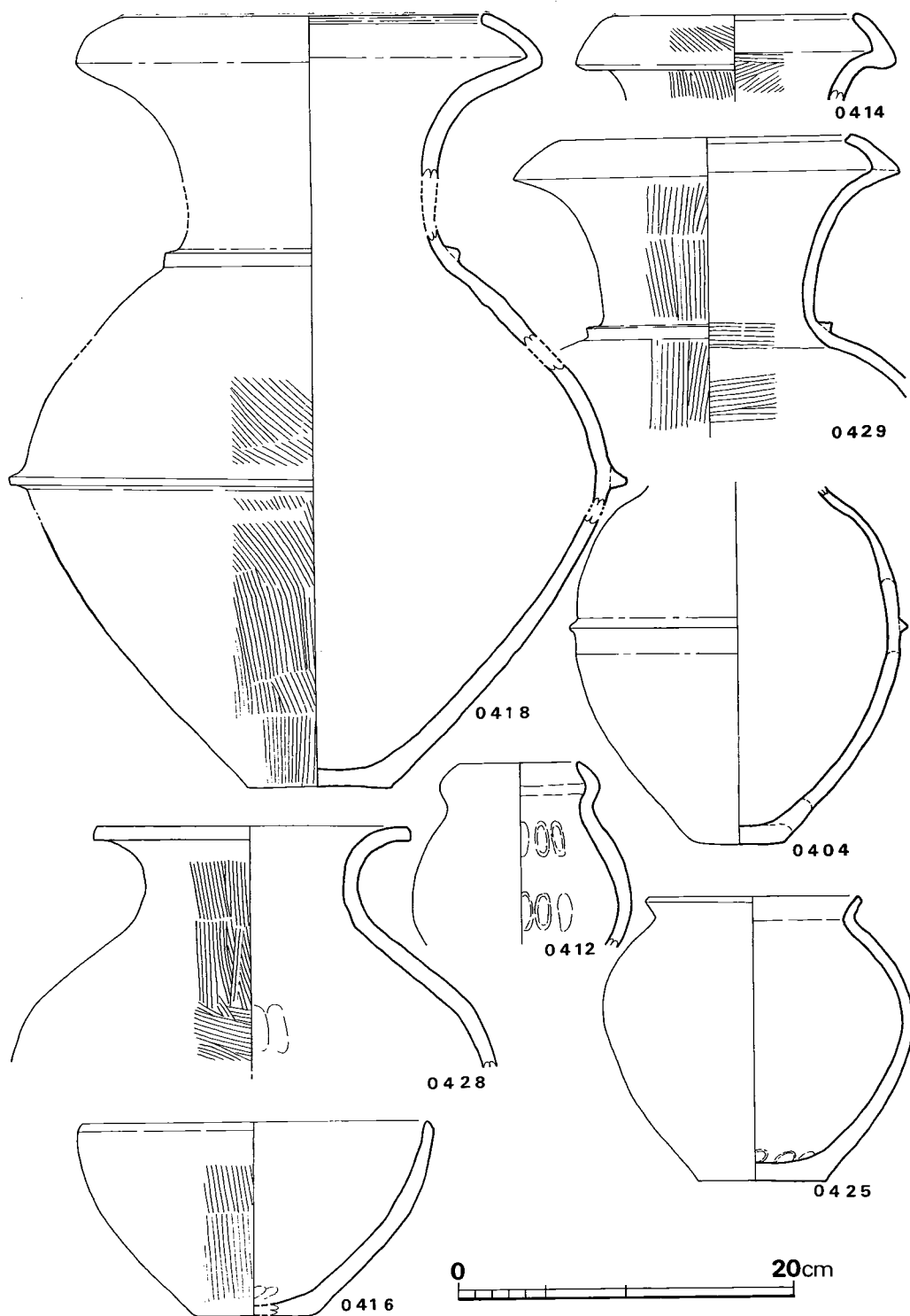


Fig. 76 野口第4号住居跡出土土器実測図① (縮尺 1/4)

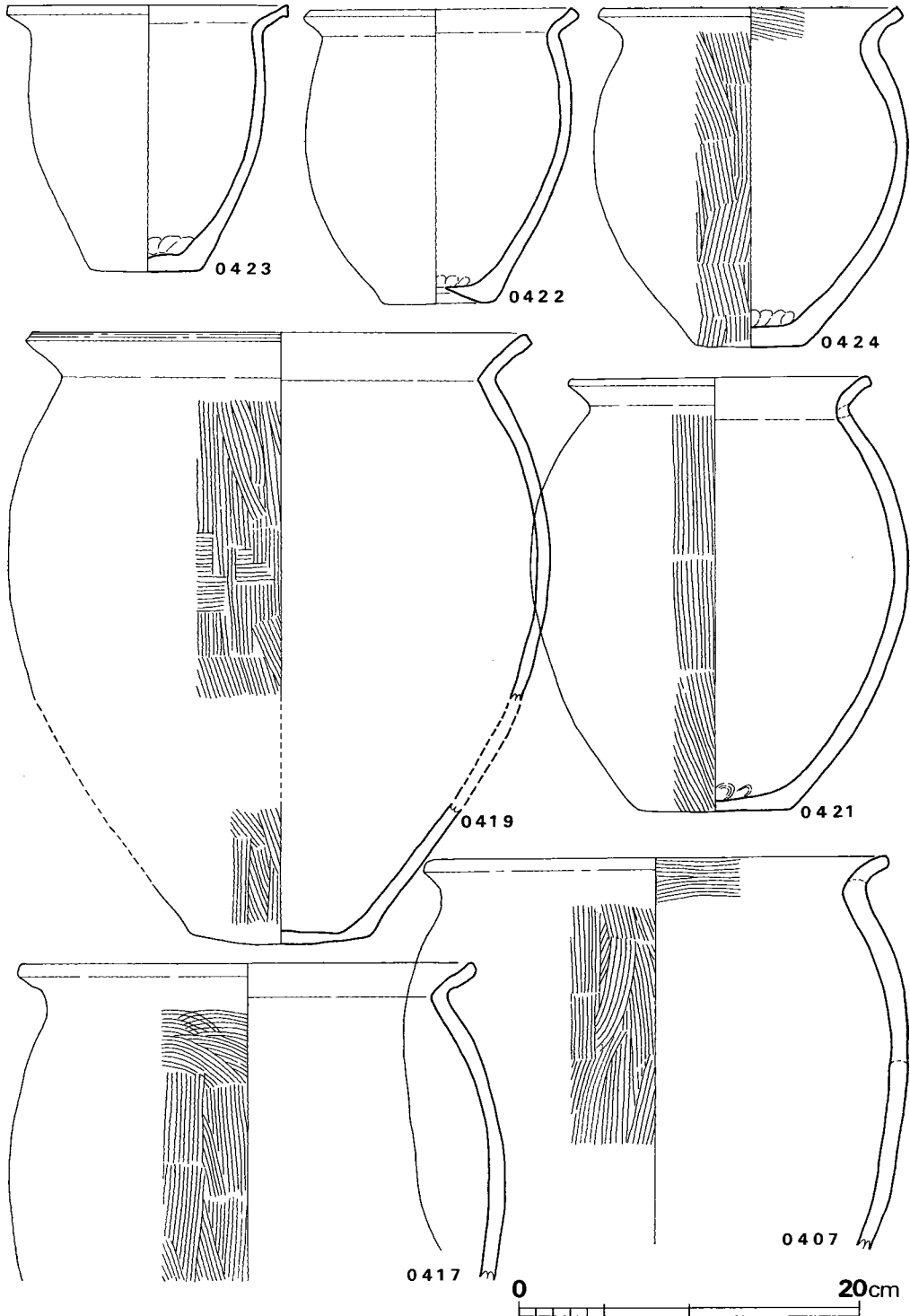


Fig. 77 野口第4号住居跡出土土器実測図② (縮尺 1/4)

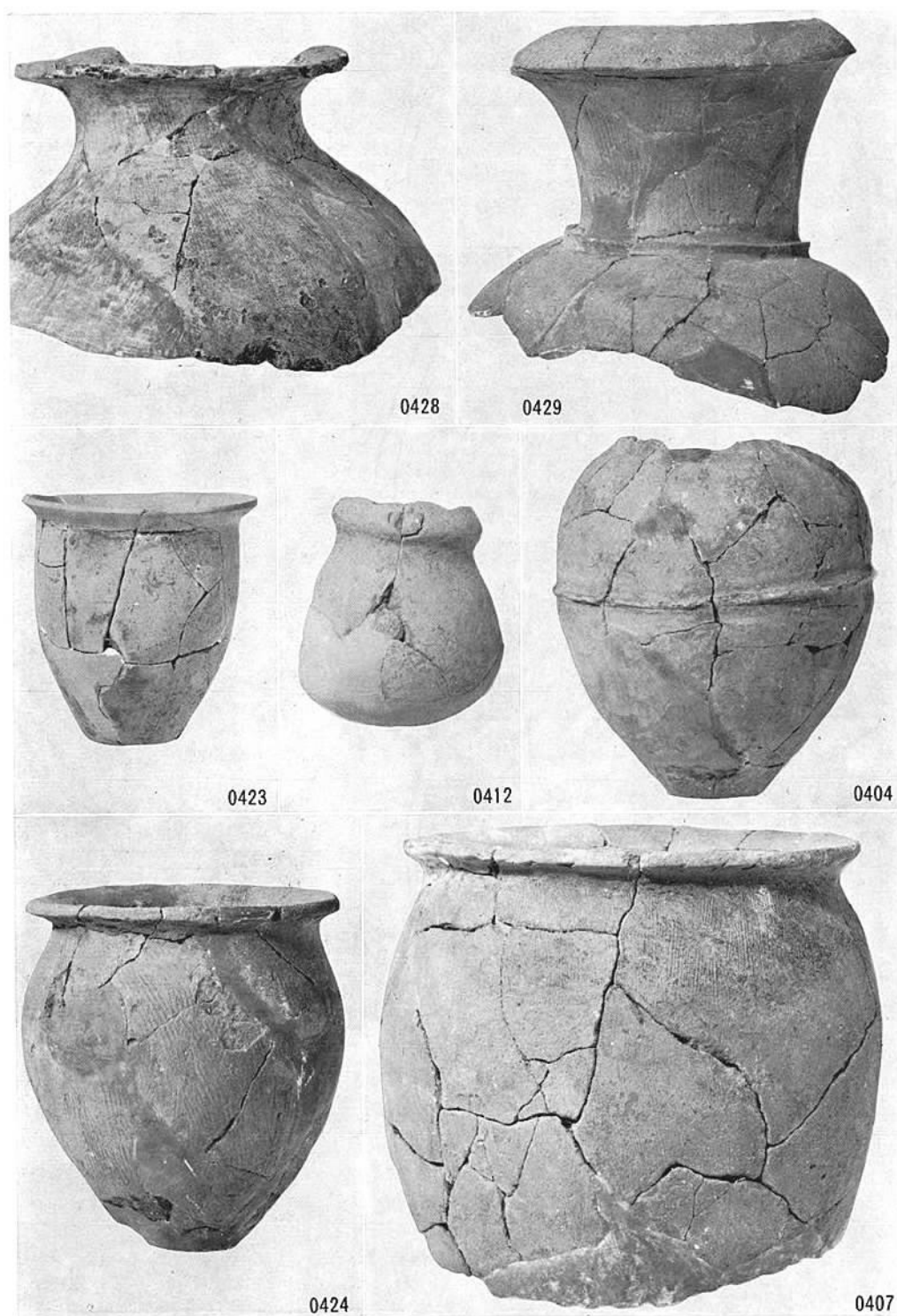


Fig. 78 野口第4号住居跡出土土器

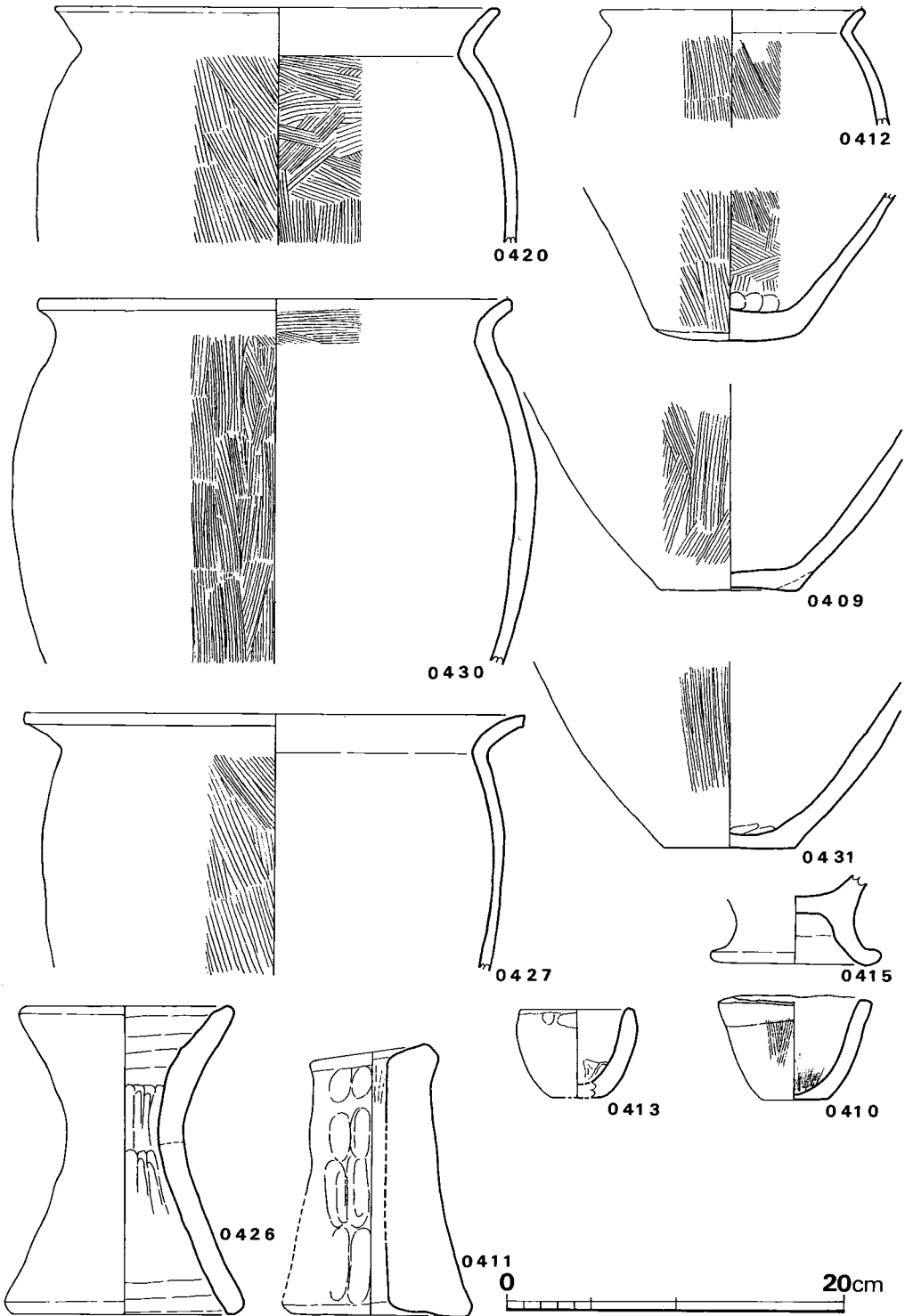


Fig. 79 野口第4号住居跡出土土器実測図③ (縮尺 1/4)

から強く外傾する口縁部へと続いている。0424は口径と胴部最大径がほぼ同一で、底部は小さい。0421は胴部中央が大きく脹って底部も広く、一種樽形を呈する。0422の底部は焼成後に外面から一孔穿たれており、甌として再利用されたものと考えられる。いずれ



Fig. 80 野口第4号住居跡土器出土状況②

も外面を底部近くまでタテのハケメ調整をし、内面をナデアゲて、底部を指オサエしている。大形品についても胴の脹り方、口縁部の屈折の仕方に差がみられる。底部は平坦なものと、若干凸レンズ状にふくらむものがある。調整法は小形品と同様である。0415は高台付甕の底部であり、端部は短かく跳ね上がる。

鉢 0416は深鉢で、大きく開いてから口縁部は直立気味になる。

器台 0426は朝顔形に開く口縁をもち、上下両端を指でナデている。二次加熱のため外面の保存状態が悪い。0411は筒状の器台で、杓形器台に似て上端の一方が部厚く、若干斜めに上がる。外面は粗い指オサエである。

小形土器 0410・0413は鉢形の小型土器である。手づくねである。0410は外面ハケメ調整、0413は指オサエである。

第7号住居跡出土土器 (Fig. 81・82)

東壁に近い二ヵ所の床面上から集中して土器が出土した。出土した器種は壺2種・甕2種・鉢2種・器台、碗2種と小形土器である。

壺 逆「く」字口縁を持つものと、「く」字口縁で球形胴部をもつものがある。0721は球形胴部と長い頸部をもつ。突帯断面は三角形で、器面調整はナデツケである。0702・0705・0712は球形胴部と丸味のある平底をもつ。0705の口縁部は短かく、端部は丸い。

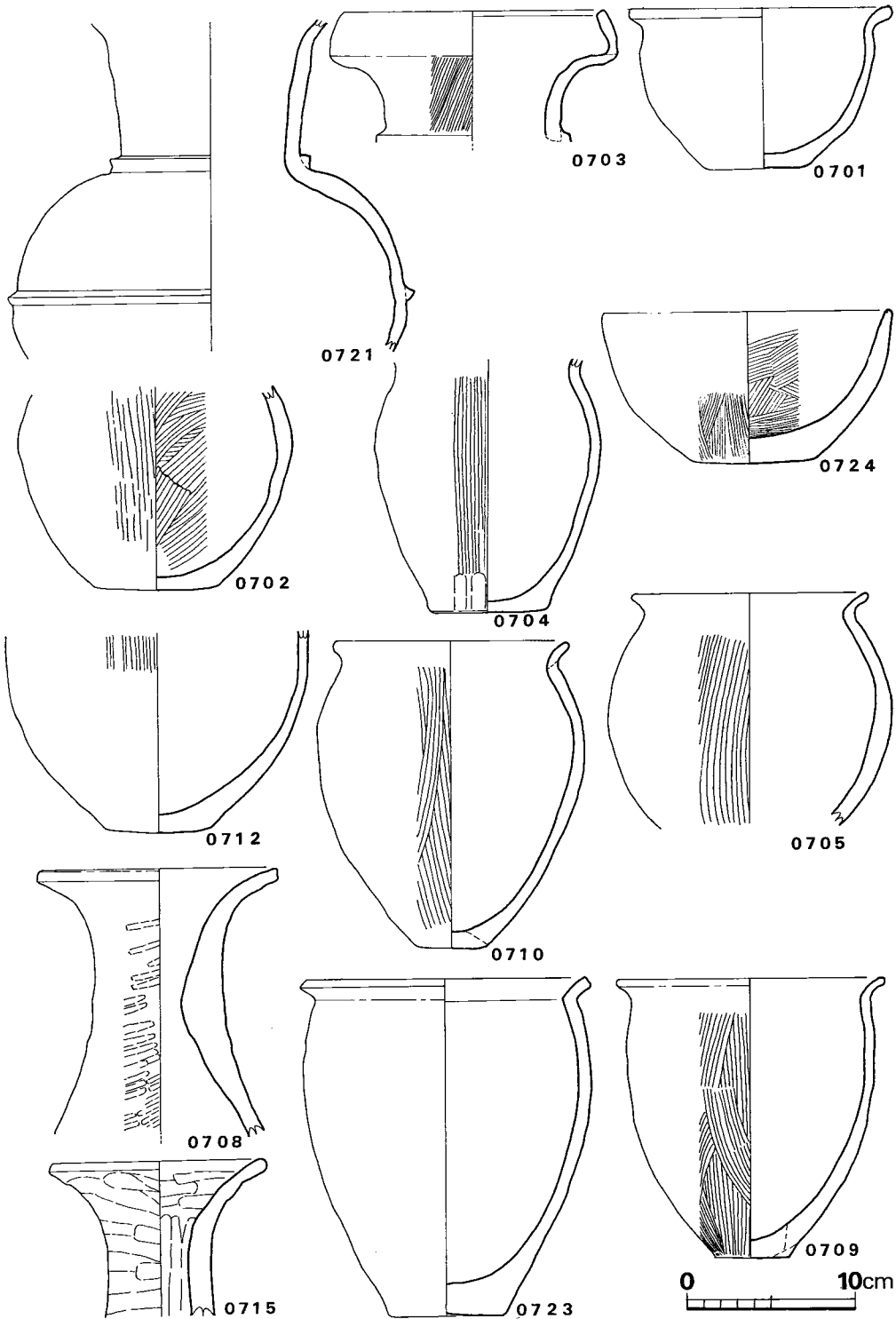


Fig. 81 野口第7号住居跡出土土器実測図 (縮尺 1/4)

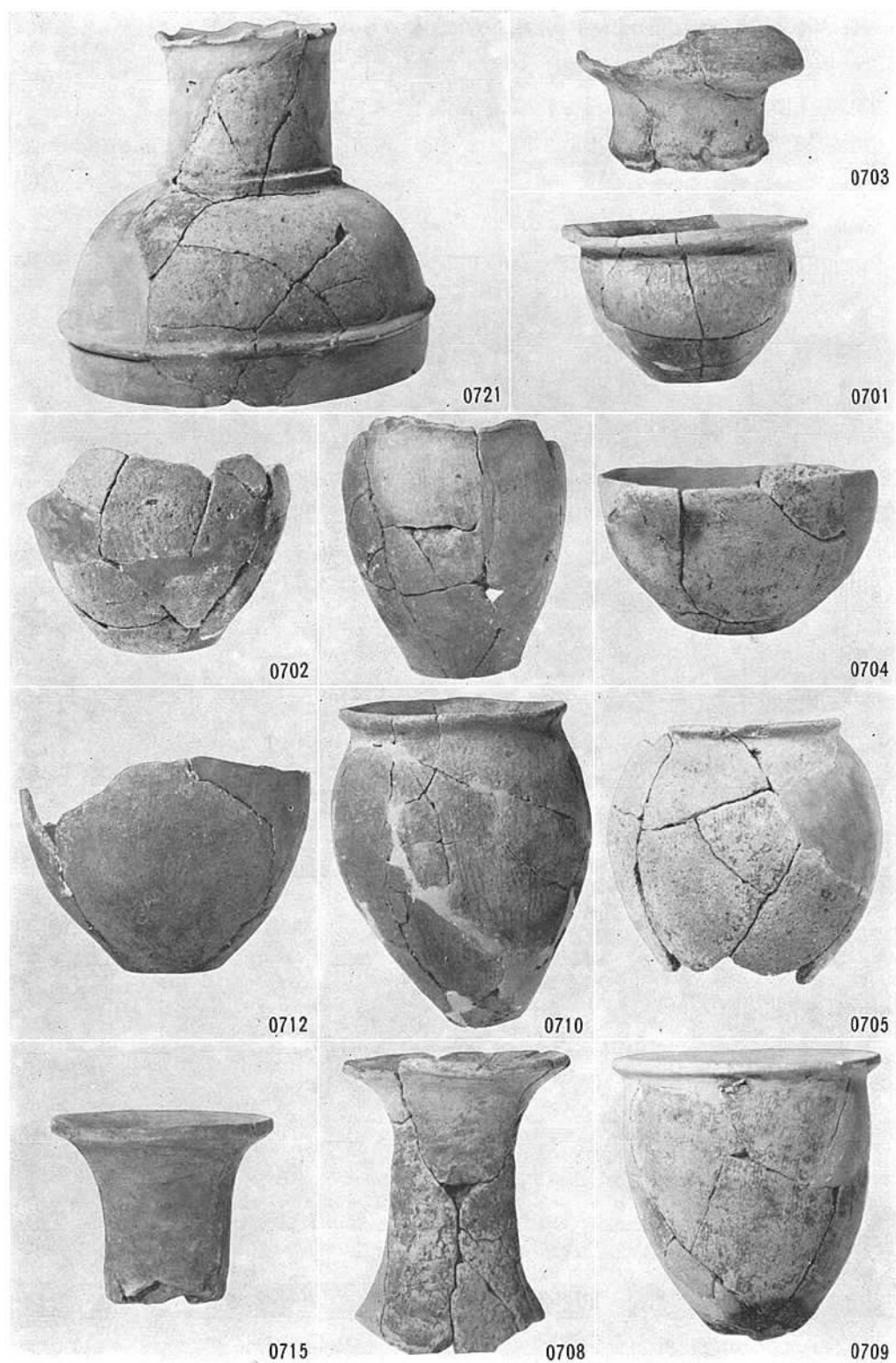


Fig. 82 野口第7号住居跡出土土器

甕 大小2種ある。小形品は胴部の脹り方に差がみられ、0710は胴部上位が大きく脹り、0709と対称的である。0704の胴下端はヘラ削り調整している。0717は大形品である。大ききの割には薄手で、内面下部には有機物が外面胴部の全体にススが付着している。

深鉢 外反する口縁部をもつものを持たないものがある。0701の胎土が密であるのに対し、0724と0706は砂粒を多く含み粗い。

器台 朝顔形に開く口縁部をもつ。0708はタタキを、0715はヘラ削りを施している。

碗 口径に比して器高の高いもの(0718・0727・0728)と口が広く高台のつくもの(0725・

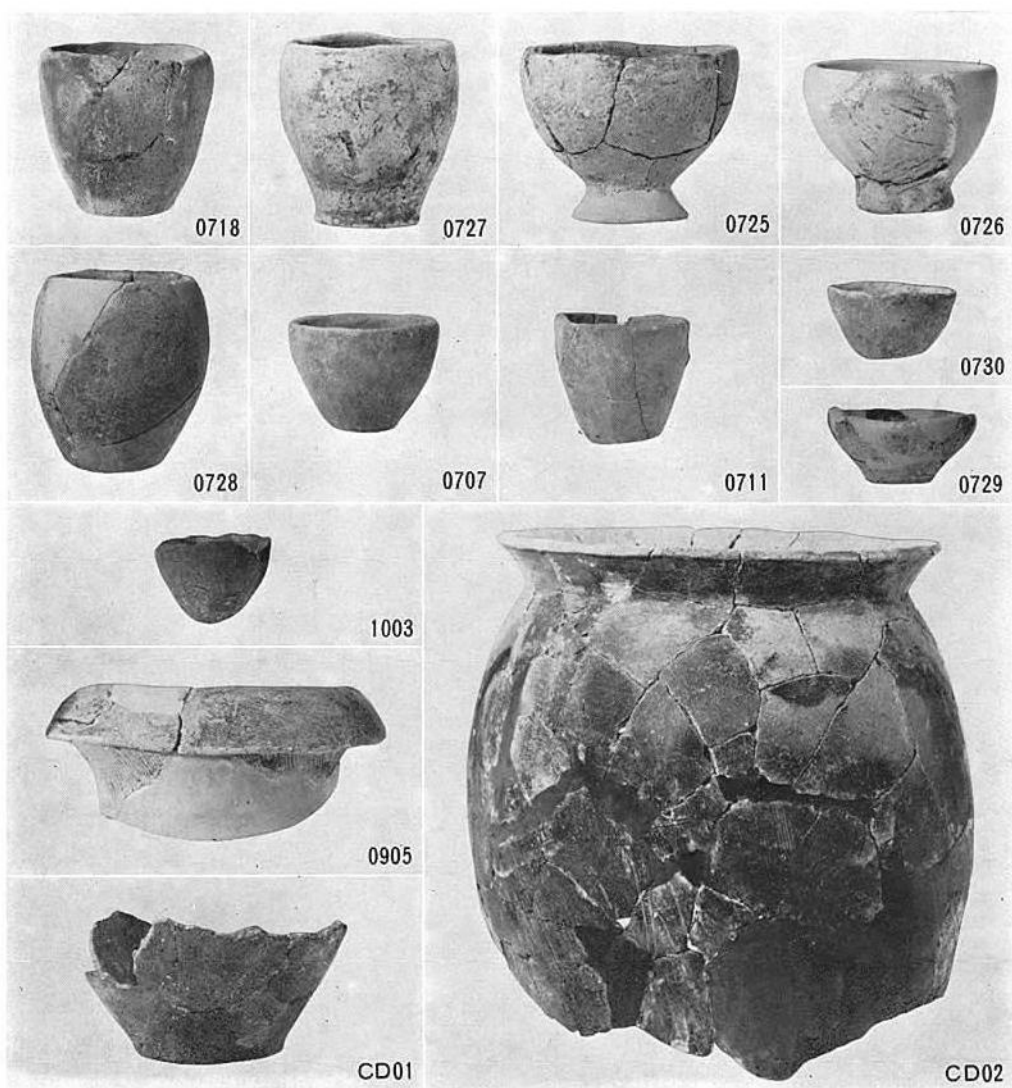


Fig. 83 野口第7・9・10号住居跡及び円形溝中出土土器

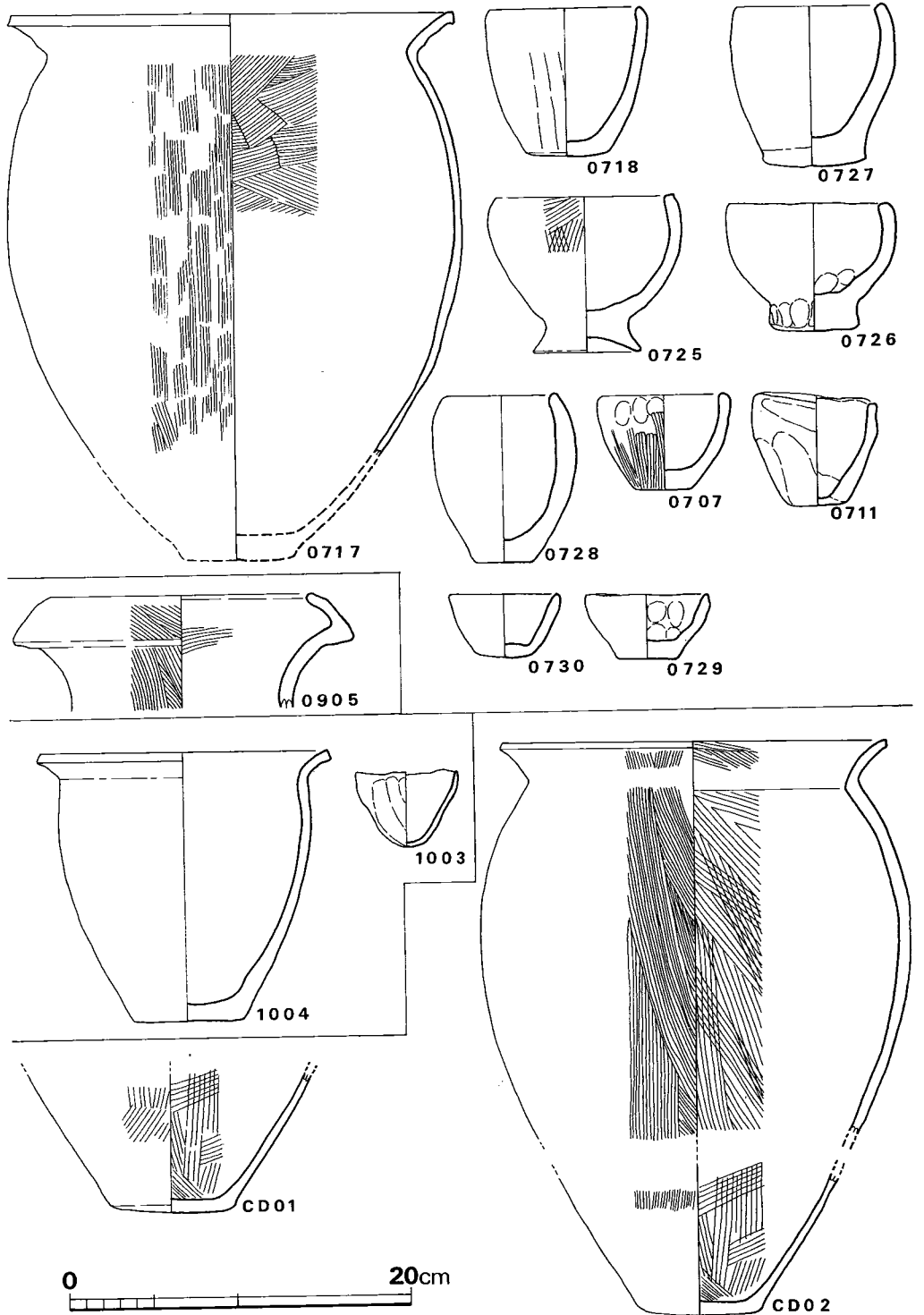


Fig. 84 野口第7・9・10号住居跡及び円形溝中出土土器実測図 (縮尺 1/4)

0726) とがある。0718の体部外面はヘラ削りである。

小形土器 0707と0711は碗形, 0730と0729は皿形の小型土器である。全て指調整であり, 0707はその上にハケメを施している。

第9号・10号住居跡及び円形溝中出土土器 (Fig. 83・84)

第9号住居跡からは図示した壺口縁部の外に0708に類似した器台が出土している。1003は薄手の碗形小形土器で, 歪みが大きい。C D02は円形溝中に落込んだ状態で出土した甕である。この種の長胴甕は野口遺跡では唯一の出土例であり, 坊野遺跡第2号住居跡出土品中に類似品がある。

b 石器・土製品

第9号住居跡床面から2点の石庖丁と投弾2点が出土した。1は片岩質の変成岩製で, 片側

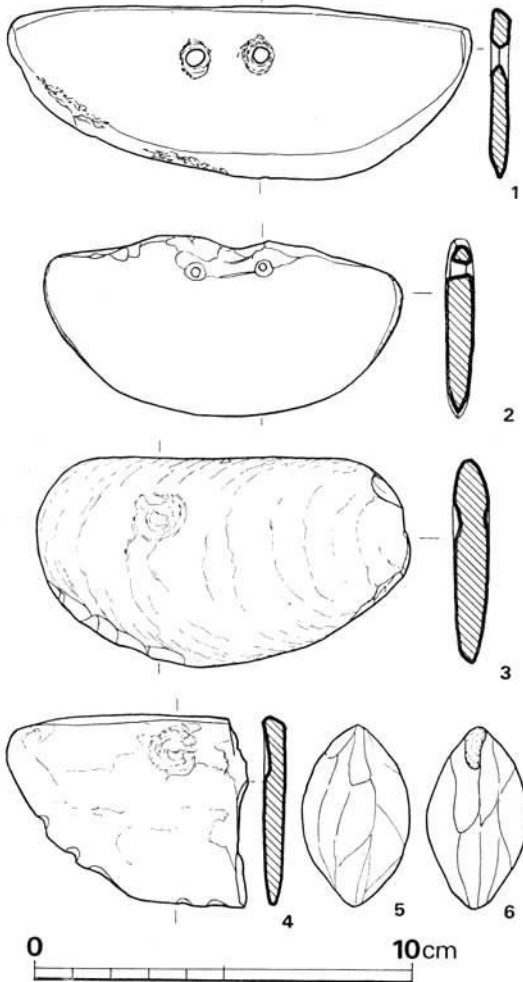


Fig. 85A 野口遺跡出土石器・土製品実測図 (縮尺1/2)

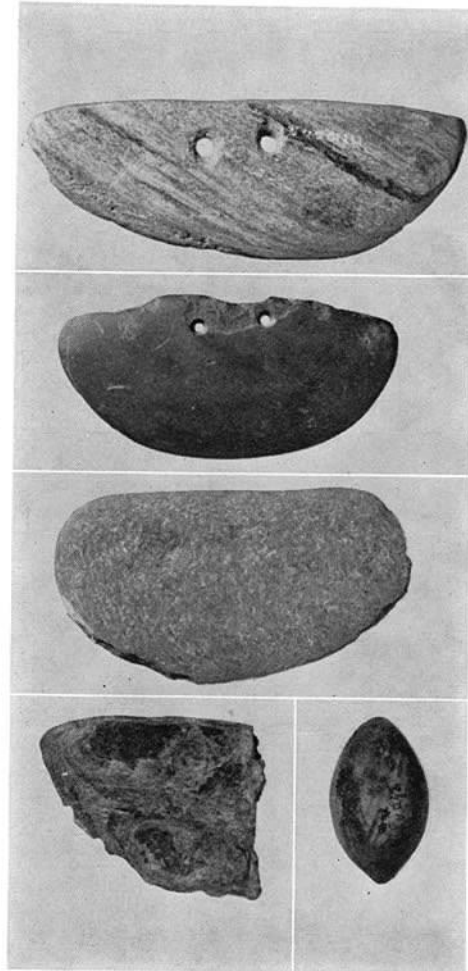


Fig. 85B 野口遺跡出土石器・土製品

が研ぎ上がり、西中ノ沢遺跡第5号住居跡出土品に類似している。2は輝緑凝灰岩製の石庖丁である。刃部中央は滑らかに研ぎ上げられ、体部との境稜が立っていない。背部は中央と両脇が窪んでいる。製作当初からの窪みではなく、使用時の打ち欠きによるものである。その後磨耗している。両孔は小さく細い。3は1と同一石材の石庖丁未製品である。概形をすでに研いでおり、左孔を両面より穿ちつつある。刃付けはまだなされていない。4はすでに刃付けされているが穿孔途中である。石材は同一である。3は自然流路中の出土品、4は表面採集品である。5・6は両端の尖る投弾である。表面にナデ稜がみられ、断面は正円である。

(3) 小 結

弥生時代の住居跡としてとらえたのは第1～第5号住居跡と第7・9・10号住居跡の計8軒である。このうち完掘できたのは第1・4・9号住居跡の3軒のみであり、他は道路下や調査対象地外に伸びたため、部分的に調査したのみである。土器が集中的に出土した住居跡は第1・第4及び第7号住居跡のみである。第3号住居跡床面からは高台付きの甕が出土したが、紛失した。第2号住居跡はその詳細が不明であるが、第3号住居跡に切られていた。

住居跡主軸の方位は相直交する2群に分けられる。つまり第1・4・7・9号及び第10号住居跡は北東—南西に主軸をおくのに対し、第3及び第5号住居跡は北西—南東方向を主軸とする。第4号住居跡と第5号住居跡は近接しすぎており、同時存在とは考えられないが、第5号住居跡の出土土器がなく、時期差を判定しかねる。第3号出土の甕は第1号出土品中に類品がみられる。

第2号住居跡を別とした7軒の住居跡は土器の型式に大差はない。住居跡間に時代差を求めるとすれば、第1・4号各住居跡出土の土器は廃棄された状態で床面近くから出土したものであり、近接した第3・5号住居跡居住者が棄てたものではなかろうかと消極的ながら想像される。つまり、第1・4・7・9号及び第10号住居跡が並立した時期があり、その後に棟方向を違えて第3・5号住居跡が建てられたと考えている。

3. 古墳時代の遺構と遺物

(1) 住 居 跡

第6号住居跡 (Fig. 67・86)

第1号住居跡の北に位置する。最短距離は約20cmである。第7号住居跡と重複していたが、断面観察では前後関係の確認はできなかった。しかし、第7号住居跡の埋土に若干の土色変化がみられ、第6号住居跡の床面が第7号住居跡の上のびていると考えられることから、7→6の順に新しいと推定される。

南東辺4.9m、北東辺3.9m、南西辺0.8mを検出したが、前述のことから、北東辺は5.6m前

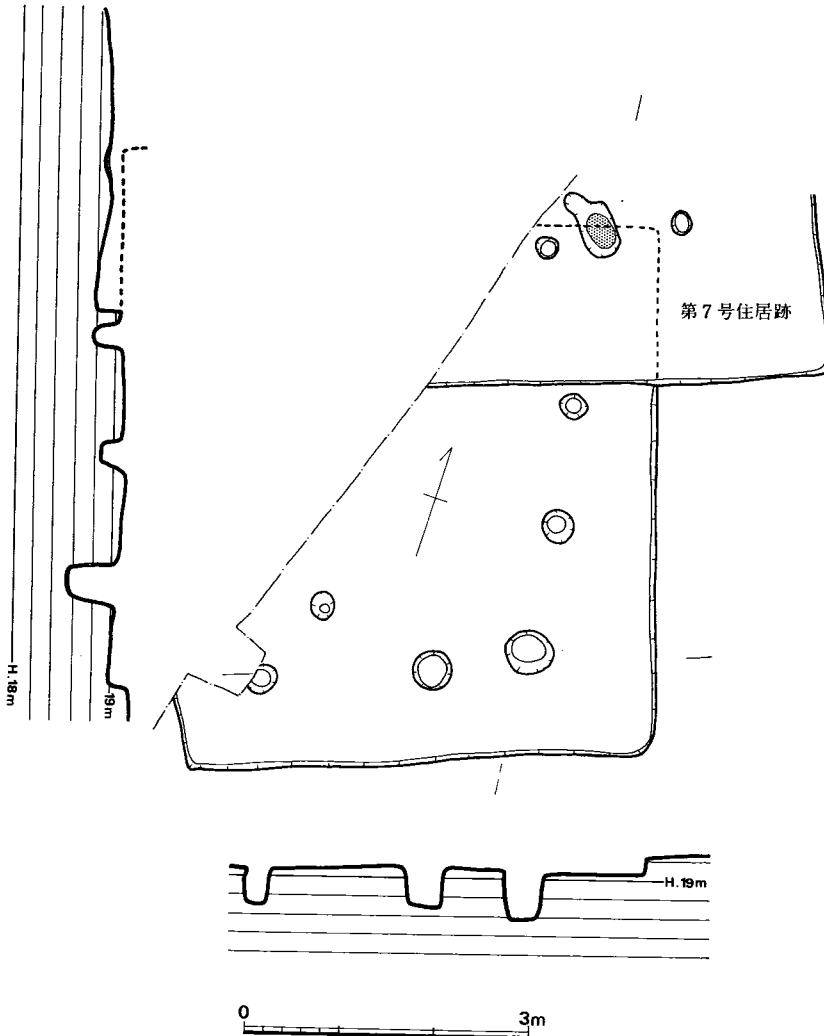


Fig. 86 野口第6号住居跡実測図 (縮尺 1/80)

後が推定できる。主柱穴は不明であるが、北東辺、南東辺近くにピットが並んでいる。第7号住居跡の炉の西側のピットから時計回りに1, 2, 3, …, と番号を付すと、それらの心心距離は次の通りである (単位cm)。

1～2 (168) ・ 2～3 (129) ・ 3～4 (135) ・ 4～5 (104) ・ 5～6 (181)

主軸方位は不明である。炉・貯蔵穴様土壌・ベッド状遺構等は検出されなかった。床面は西側に向かって低くなり、壁は南側で約20cm残存していた。

第8号住居跡 (Fig. 87・88)

第7号住居跡の北東6.4m (最短距離) に位置する。第9号住居跡との最短距離は5.5mであ

る。

東西 $5.31m$ ，南北 $5.12m$ （いずれも中央部での計測値）で，床面積 $26.33m^2$ を測る。各辺の長さは北辺 $5.16m$ ，東辺 $5.16m$ （推定），南辺 $5.25m$ ，西辺 $4.57m$ で，平面プランは梯形を呈する。東辺中央付近に径 $50\sim 58cm$ ・深さ $25cm$ ほどのピットがあり，なかから砥石・小形丸底土器が出土した。また北西隅にも小ピットがあるが，支柱穴ではないようである。竪穴外の東側に4個のピットが並んでいるので，これらが本遺構に関連するものかもしれない。炉・貯蔵穴様土壇・ベッド状遺構等は検出されなかった。壁高は $20cm$ 前後あり，床面は中央部がやや高い。

なお，北壁沿いの東辺から約 $1m$ のところでは小形丸底土器が1点出土し，また東壁近くで石が出土している。

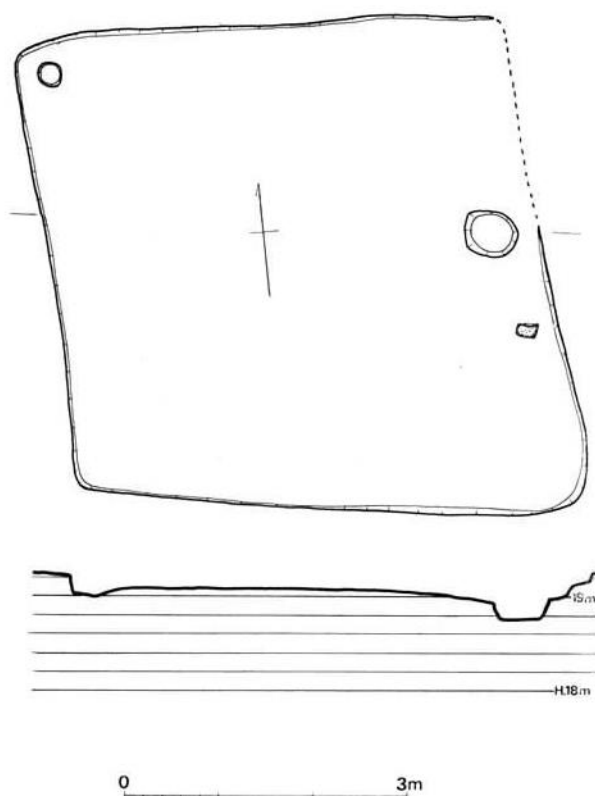


Fig. 87 野口第8号住居跡実測図（縮尺 1/80）

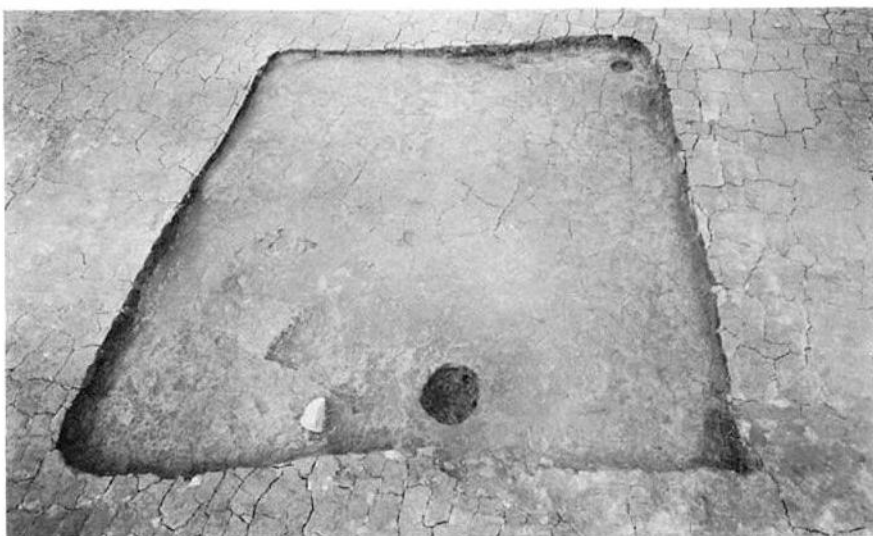


Fig. 88 野口第8号住居跡

第11号住居跡 (Fig. 89・90)

第10号住居跡の北東に位置する。第10号との最短距離は8.1mである。

各辺長は、北東辺3.90m、南東辺3.62m、南西辺3.71m、北西辺3.11mで、床面積13.66㎡を測る。東西方向にやや長い。支柱穴はa・b・c・dの4本であろう。各支柱穴間の心心距離は、a～b:188cm、b～c:203cm、c～d:179cm、d～a:178cmを測る。なお、a～e:95cm、e～b:94cmで、eはa～bの中央にある。主軸方位は、平面プランが東西方向にやや長いことから、仮りにeの中心と、c～dの中央とを結ぶ線をとれば、この線はN114°Eを指す。炬・貯蔵穴様土壇・壁溝はない。床面は凹凸が多くみられる。壁は5～20cm残っていた。なお、北東辺から中央部にかけては、後世の攪乱を受けている。

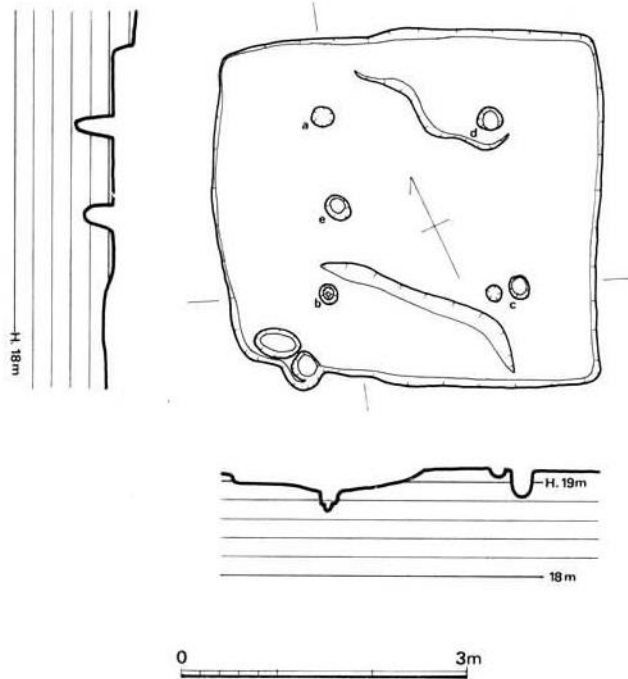
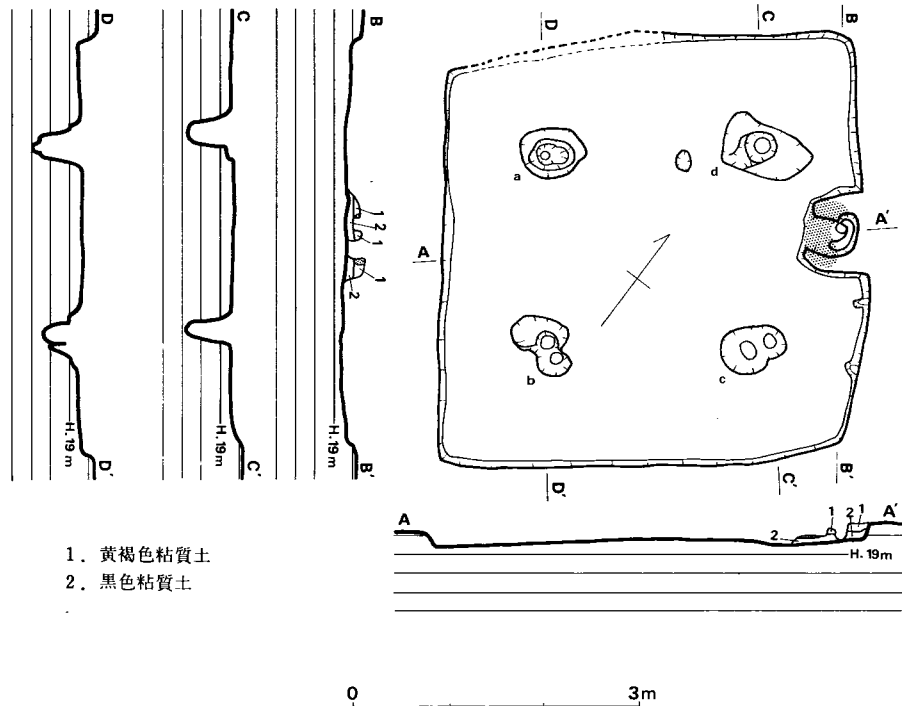


Fig. 89 野口第11号住居跡実測図(縮尺 1/80)

炬・貯蔵穴様土壇・壁溝はない。床面は凹凸が多くみられる。壁は5～20cm残っていた。なお、北東辺から中央部にかけては、後世の攪乱を受けている。



Fig. 90 野口第11・12号住居跡



1. 黄褐色粘質土
2. 黒色粘質土

Fig. 91 野口第12号住居跡実測図 (縮尺 1/80)

第12号住居跡 (Fig. 90・91)

第11号住居跡の東側に位置する。第11号との最短距離は0.6mである。

各辺長は、北東辺4.29m、南東辺4.25m、南西辺4.15m、北西辺4.27mで、床面積18.20m²を測る。主柱穴はa・b (南東側)・c (北側)・dの4本で、各柱穴間の心心距離は、次の通りである。a～b: 216cm, b～c: 226cm, c～d: 209cm, d～a: 231cm。なお、bの北西側のピット (b') およびcの南側のピット (c') のa・bとの距離は、a～b': 199cm, b'～c': 213cm, b'～c: 235cm, b～c': 204cm, c'～d: 219cmである。主軸の方位は、カマドを通る中軸線をとるとN49°Eを指す。カマドは北東辺中央に検出された。黄褐色粘質土で築かれていたと思われる。内部は良く焼けていた。貯蔵穴様土壙・壁溝は検出されなかった。北東辺の、カマドの南側に壁小穴のような住居内側へ突き出た部分がある。ユカは中央部がやや盛り上がり、周辺部が低くなっている。壁は浅く、5～15cmほどである。

第13号住居跡 (Fig. 92・93)

発掘範囲内では北端に位置する住居跡で、第12号住居跡との最短距離は20mである。

各辺長は、北辺3.65m、東辺3.81m、南辺3.39m、西辺3.97mで、床面積13.15m²を測る。平面プランはやや南北に長い。主軸の方位は、カマドを通る中軸線をとると、N19°Eを指す。主柱穴はa・b・c・dの4本が考えられるが、d以外は浅く、疑問を残している。カマドは北辺中央に、黄褐色粘質土で築かれており、中央部に焼土が認められた。壁溝は検出されていない

い。本住居跡は遺存が悪く、壁高は10cm以下であった。



Fig. 92 野口第13号住居跡

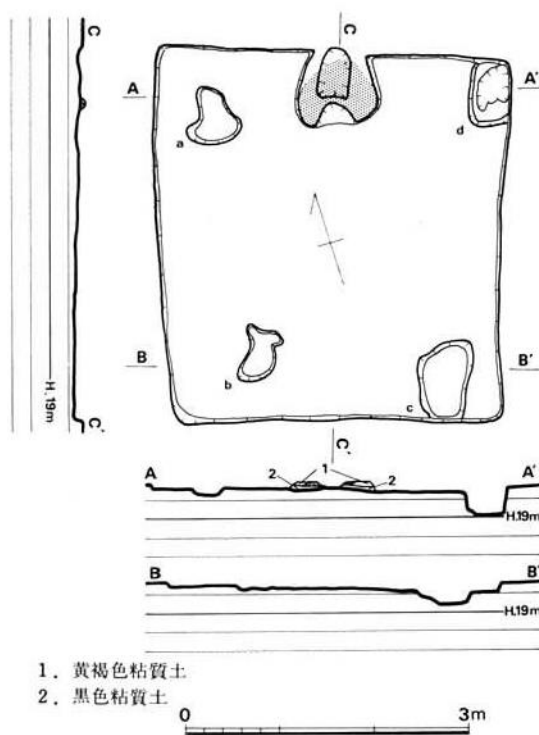


Fig. 93 野口第13号住居跡実測図 (縮尺 1/80)

(2) 掘立柱遺構 (Fig.94)

発掘範囲の中央部やや南寄りに、掘立柱の遺構がいくつか認められた。ピットの組合せは、概報では2棟分であったが、整理の過程でさらに2棟分が認められたため、今回新たに第3・4号を追加したものである。

第1号掘立柱遺構 (Fig.95)

3間×2間の建物で、桁行方位はN22.5°Eをとる。桁行の平均は409cm、梁行の平均は369cmである。各ピット間の中心距離は次の通りである(単位cm。以下同様)。

- 1~2 (130)・2~3 (136)・3~4 (147)
- ・1~4 (415)・5~6 (149)・6~7 (143)
- ・7~8 (149)・5~8 (407)・9~10 (140)

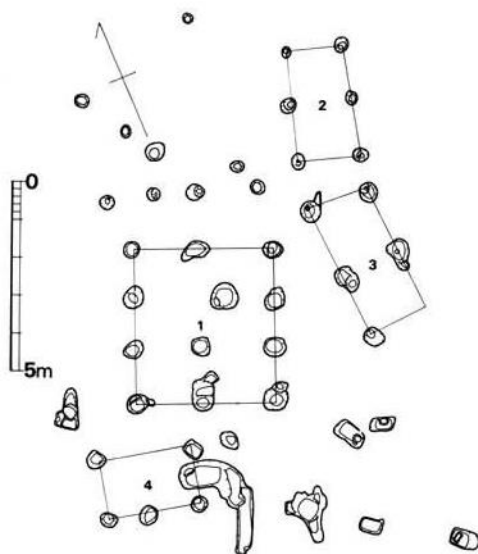


Fig. 94 野口遺跡掘立柱遺構とピット群 (縮尺 1/200)

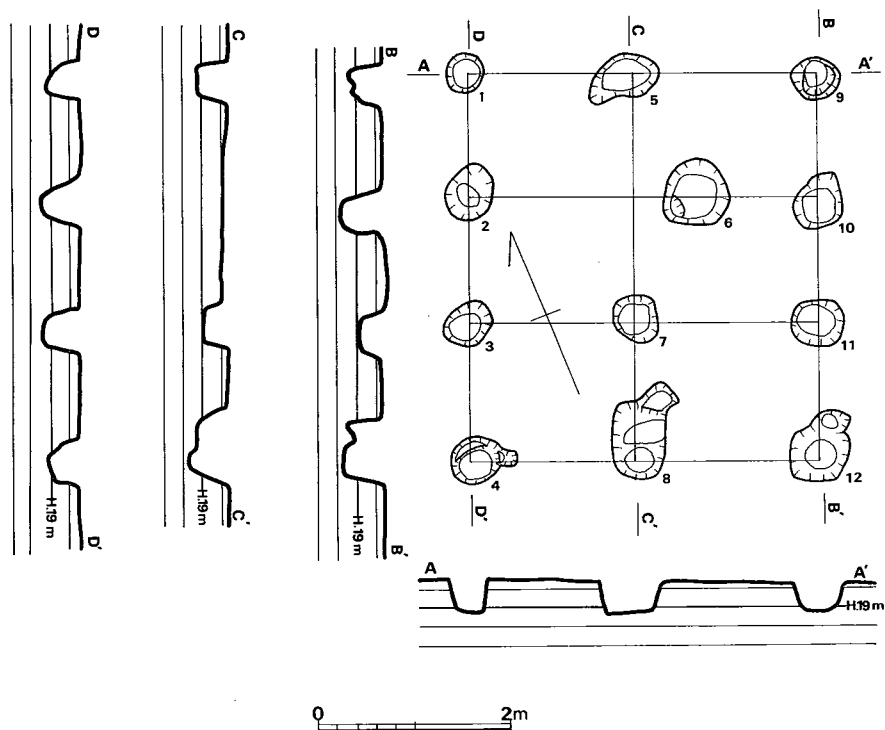


Fig. 95 野口第1号掘立柱遺構実測図 (縮尺 1/80)

- 10~11 (120) • 11~12 (144) • 9~12 (404) • 1~5 (167) • 5~9 (204) • 1~9 (371) • 2~6 (241)
- 6~10 (132) • 2~10 (373) • 3~7 (179) • 7~11(193) • 3~11(371) • 4~8 (172) • 8~12(191)
- 4~12 (364)

第2号掘立柱遺構 (Fig. 96)

2間×1間の建物である。B-B'側の桁行方位はN17.5°Eを指す。桁行の平均は296cmである。北側の梁行はやや狭い。

- 1~2 (143) • 2~3 (151) • 1~3 (295) • 4~5 (142) • 5~6 (153) • 1~4 (149) • 2~5 (161)
- 3~6 (167)

第3号掘立柱遺構 (Fig. 97)

2間×1間の建物で、南東隅の該当する位置のピットは検出されていない。B-B'の方位はN3°Wをとる。

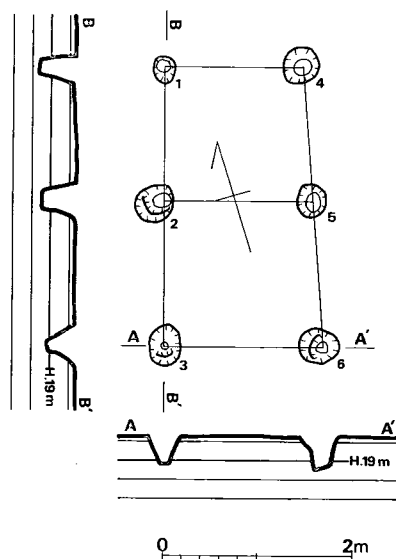


Fig. 96 野口第2号掘立柱遺構実測図 (縮尺 1/80)

1～2 (230)・2～3 (141)・1～3 (171)・4～5 (188)・1～4 (163)・2～5 (146)

第4号掘立柱遺構 (Fig. 98)

2間×1間の建物で、北側中央の該当する位置のピットは検出されていない。A-A'の方位はN77°Wを指す。周辺にはピット群があり、とくに3～6間の掘り込みは本遺構に関係するものかもしれない。

1～2 (110)・2～3 (134)・1～3 (243)・4～6 (258)・1～4 (162)・3～6 (141)

以上計4棟の柱穴間中心距離は、次の通りである(小数点以下四捨五入)。

第1号:梁行370cm(柱間184cm),桁行409cm(柱間138cm)
 第2号:梁行159cm,桁行296cm(柱間147cm)
 第3号:梁行154cm,桁行柱間186cm 第4号:梁行152cm,桁行251cm(柱間122cm)

これらの数値からみると、第2・3号の梁行の柱間

が比較的

近い数字を示

し、第4号

の桁行は第

1号の桁行

柱間2間分

に近い。また、

第3号

の桁行は第

1号の梁行

に近いこと

と、4棟の

配置状態か

らみてこれ

ら4棟は一

連の建物で

あったと思われる。

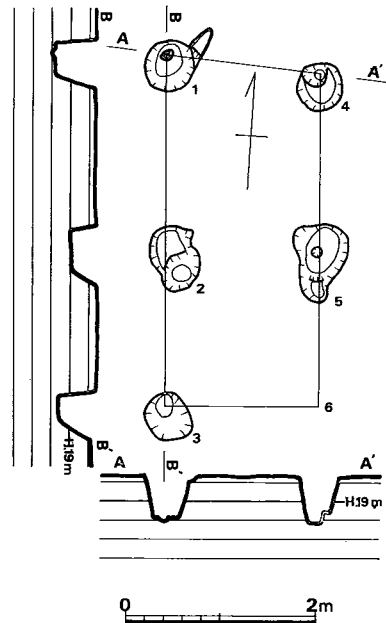


Fig. 97 野口第3号掘立柱遺構
実測図(縮尺 1/80)

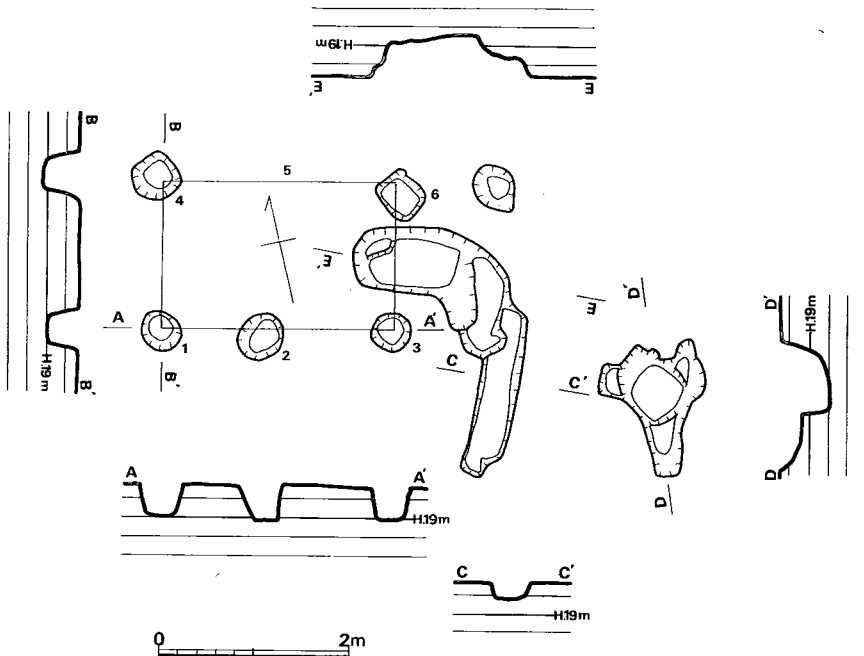


Fig. 98 野口第4号掘立柱遺構実測図(縮尺 1/80)

(3) 溝状遺構

溝状遺構は、V字溝（第2号溝）・旧自然流路（第5号溝）を含めて計8本を検出した。前述した諸遺構は、いずれも自然流路の西側にあり、東側では遺構の検出はなく、土器も殆んど出土しなかった。

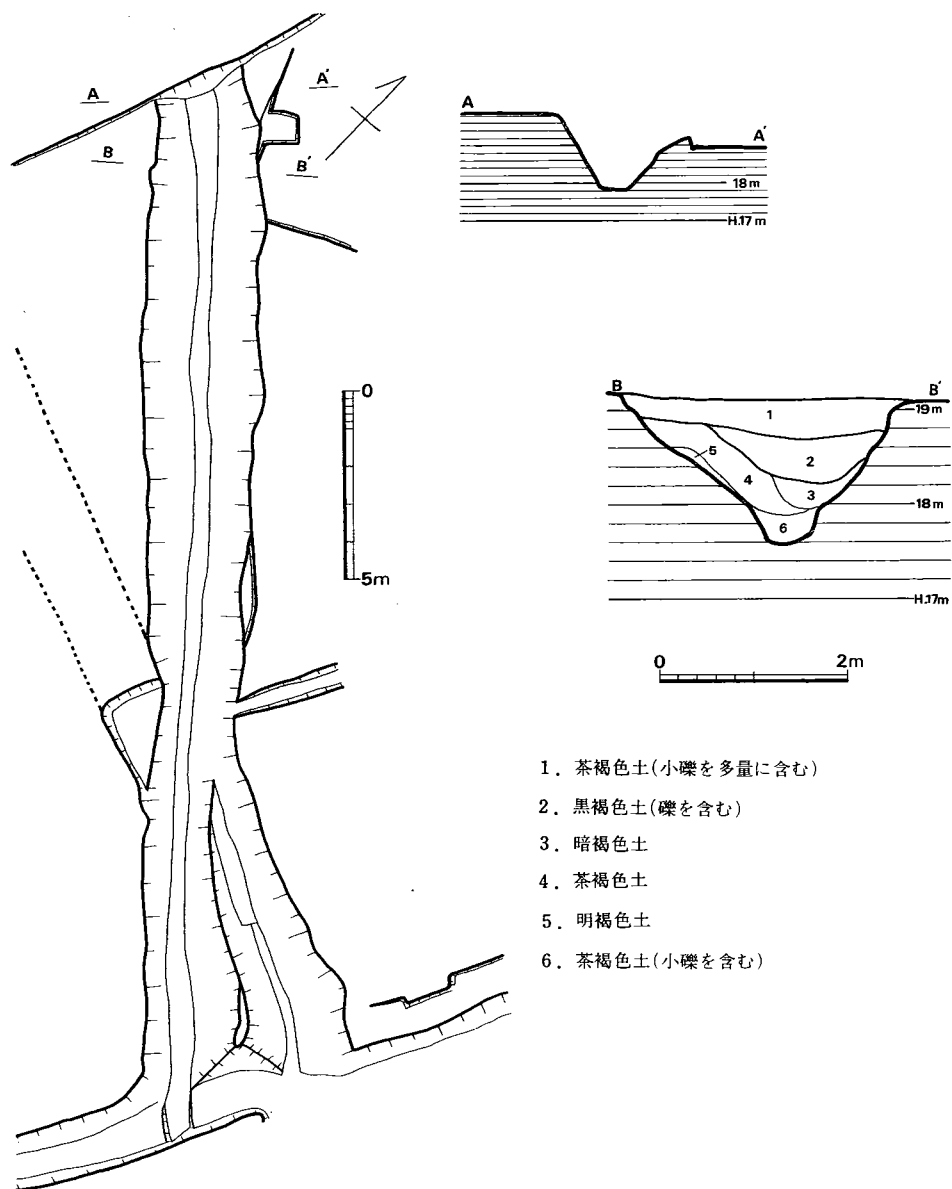


Fig. 99 野口第2号溝（V字溝）実測図（縮尺 1/200・1/80）

第1号溝 (Fig. 57)

第4号住居跡を切っており、第2号溝に注ぐように見えるが、第2号溝との前後関係は不明である。幅40cm前後で、長さ約15mを検出した。方位はN26°Eをとる。

第2号 (V字) 溝

(Fig. 99・100)

西側で第1号住居跡を切っている。南半は第3号溝と重複しており、2→3の順に新しい。南東端は第4号溝に接するが、第4号溝は中世以降の所産と考えられることから、第2号溝はさらに南東方向へ延びると思われる。幅2～3mで、長さ約27mを検出した。方位はN43.5°Wをとる。

第3号溝 (Fig. 57)

第2号溝と重複しており、2→3の順に新しい。幅2m前後、長さ約10mを検出したが、さらに西側へ延びることが確認された。方位はN70°Wを指す。

第4号溝

(Fig. 57・101)

第2号溝を切ってい



Fig. 100 野口第2号溝



Fig. 101 野口第4・5号溝

る。発掘範囲の南半で、北東—南西方向に長さ約67mを検出した。幅1~2.6mである。南側は水田に注いでいたと思われる、木の杭が2本残っていた。出土土器から中世以降の所産と推定される。北半の方位はN29.5°Eである。

第5号溝 (Fig. 57・101)

第4号溝とほぼ平行して延びる旧自然流路である。幅6~7mで、長さ約53mにわたって検出した。これより東側では、何ら遺構は確認されなかった。

第6号溝 (Fig. 102)

第11号住居跡と第8号溝のあいだに位置する。第7号溝と重複しており、7→6の順に新しい。本遺構は楕円形周溝とも称すべき形状で、A-A'断面の短軸外径は4.64m、短軸内径は3.35mを測る。長軸外径は9mほどになると思われる。溝の幅は60~70cmで深さは40cm前後である。周溝内の中央部は、やや凸面を呈する。

第7号溝 (Fig. 102)

第6号溝の南側で重複しており、本遺構の方が古い。

“円形周溝”の名称の方がふさわしいようである。B-B'

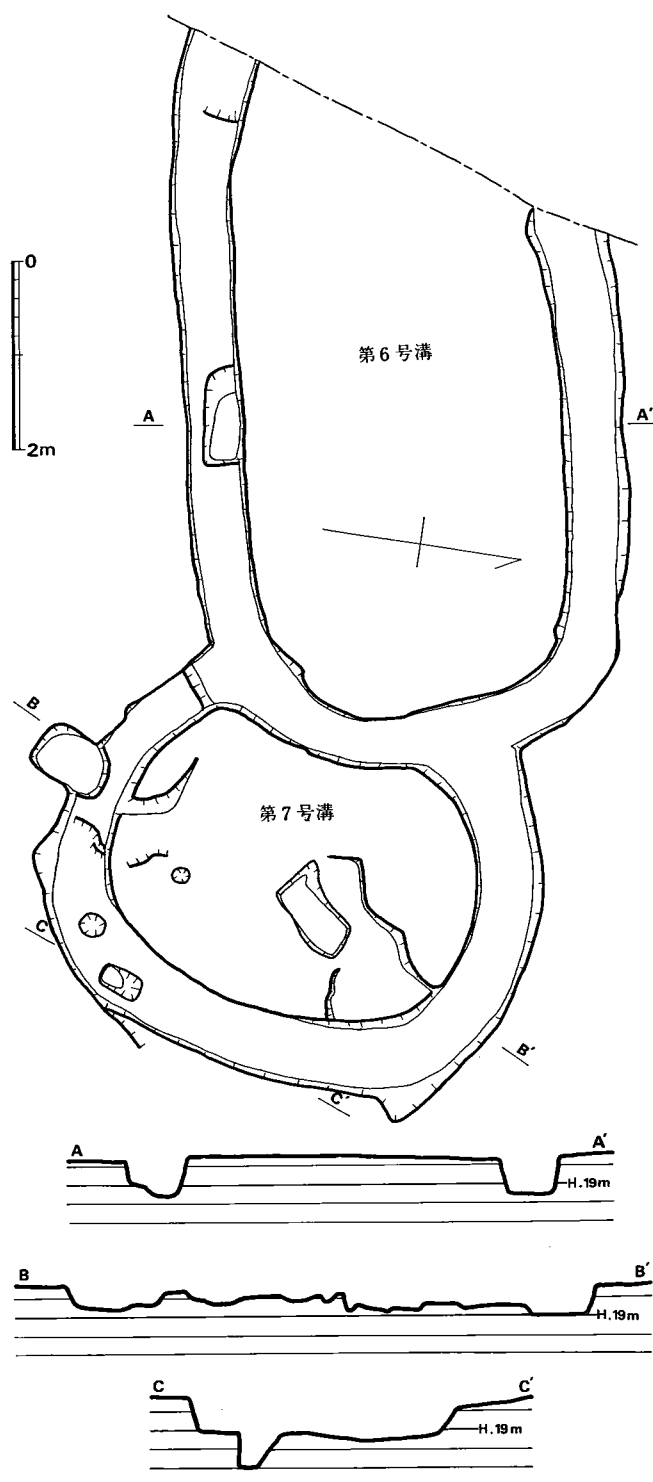


Fig. 102 野口第6・7号溝実測図 (縮尺 1/80)

断面での外径は5.18m, 内径は3.78mを測る。溝の幅は50~80cmで、深さ30~40cmである。中央部は凹凸が著しい。

第8号溝

(Fig. 103・104)

第6・7号溝と第13号住居跡とのあいだに位置する。全体にK字状を呈しており、西側へ延びる部分をa, 北西側へ延びる部分をb, 北側へ延びる部分をcと呼ぶことにする。

第8号溝aは幅0.6~1mで、長さ約18mにわたって検出した。中央部付近に浅いピットがある。方位はN83.5°Wをとる。

第8号溝bは幅0.6m前後で、長さ約17.5mを検出した。第13号住居跡の南側で、径150~170cm, 深さ1m以上の土壌が検出された。井戸の可能性もある。

第8号溝cは、実際は10個ほどのピットがつながって溝状を呈するものである。

全体で約10mの長さになる。この溝状遺構の北方にも、同方向をとる溝状遺構と、2×4mほどの土壌が検出されたが、時期・性格とも不明である。

これら第8号溝の時期は、周辺から出土した土器片から中世以前の所産と思われる。



Fig. 103 野口第6~8号溝



Fig. 104 野口第8-b号溝

(4) 出土遺物

出土遺物は土師器及び須恵器で、大きく2時期に区分される。第8号住居跡とV字溝の下層からは前期の土師器が出土した。第6号・11号～13号各住居跡とV字溝上層及び掘立柱遺構周辺からは後期の土師器と須恵器が出土した。

第8号住居跡及びV字溝下層出土土師器 (Fig. 105)

第8号住居跡からは小形壺と甕が出土した。0801の底部はやや尖り気味で胴部上半はハケメ調整を施し、下半を指オサエの後ヘラ削りしている。内面もヘラ削りである。0802の口縁部は直立してのち僅かに外反する。胴部の上位に孔を設けている。胴部の外面をハケメ調整、内面を指オサエしている。この2個の土器はいずれも淡赤褐色を呈しており、胎土、焼成共に良好である。

V字溝の下層からは高杯を中心とした土師器が集中出土した。高杯は杯部の中央接合稜が明瞭で「く」字に屈曲するものと、スムーズに開くものがある。前者の杯部上半はヨコナデによってハケメを

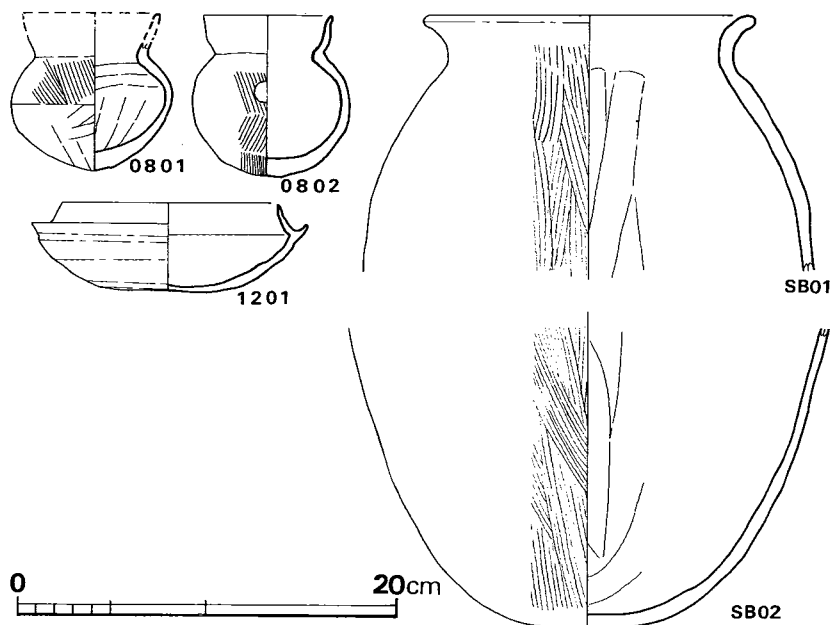


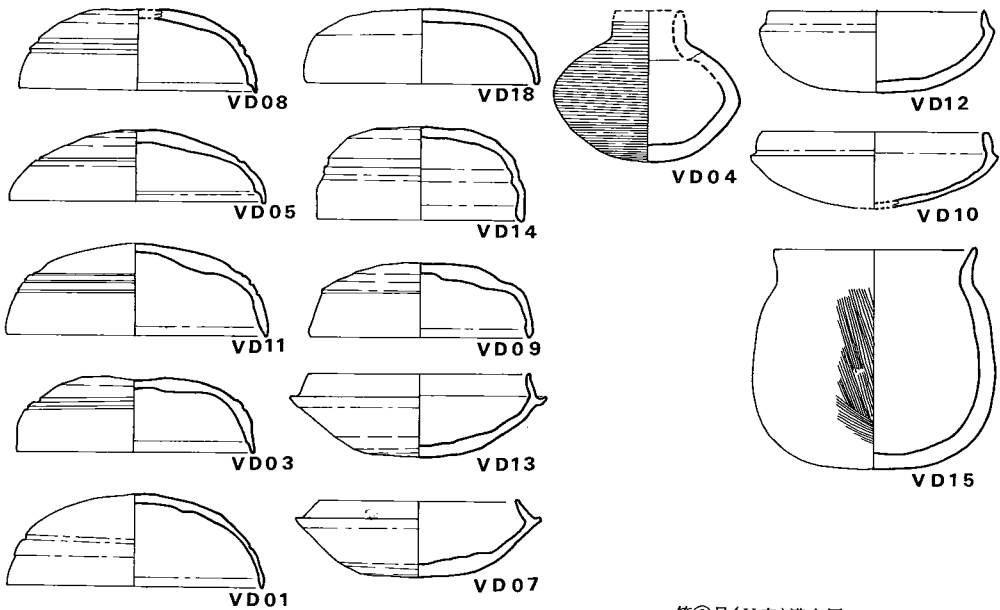
Fig. 105 野口第8・12号住居跡及び掘立柱遺構周辺出土土師器・須恵器実測図 (縮尺 1/4)

消している。VD06の壺は二重口縁で、器壁はほぼ均一である。内外面のハケメは別種で、外面は細かい。

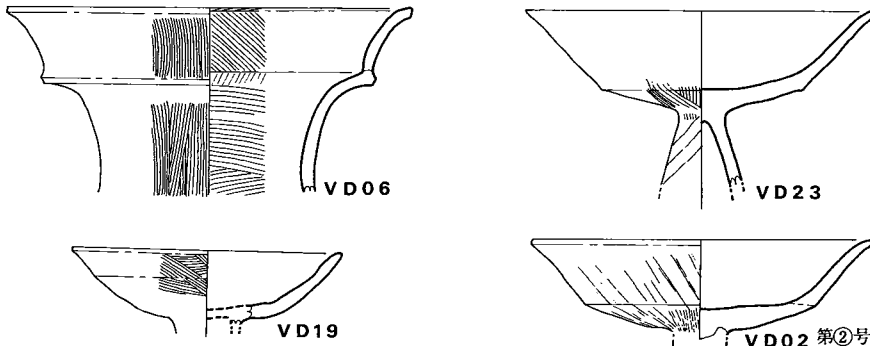
第12号住居跡・掘立柱遺構周辺及びV字溝上層出土土師器・須恵器 (Fig. 105～108)

1201のたちあがり高は1.4cmと長く、受部も深い。全体に薄手で、底部から体部中央部までヘラ削りされている。第6号住居跡からも同種の須恵器杯身片と甕把手が出土している。なお第11・13号住居跡からは土師器細片が出土したにすぎない。

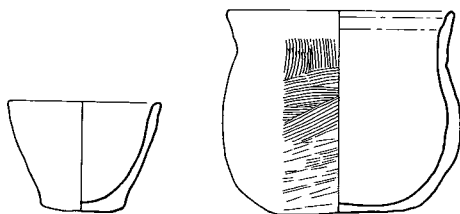
掘立柱遺構の周辺からは土師器、須恵器が割合まとまって出土した。SB01と02は胴部径、



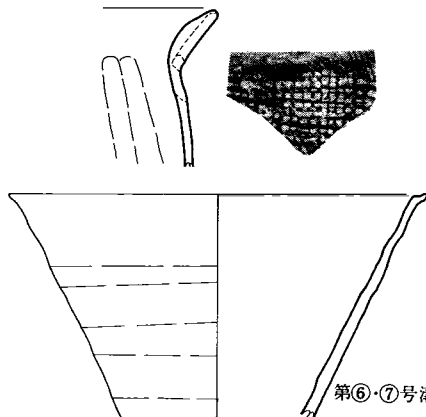
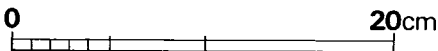
第②号(V字)溝上層



第②号(V字)溝下層



第③号溝



第⑥・⑦号溝

Fig. 106 野口各溝出土土師器・須恵器実測図(縮尺 1/4)

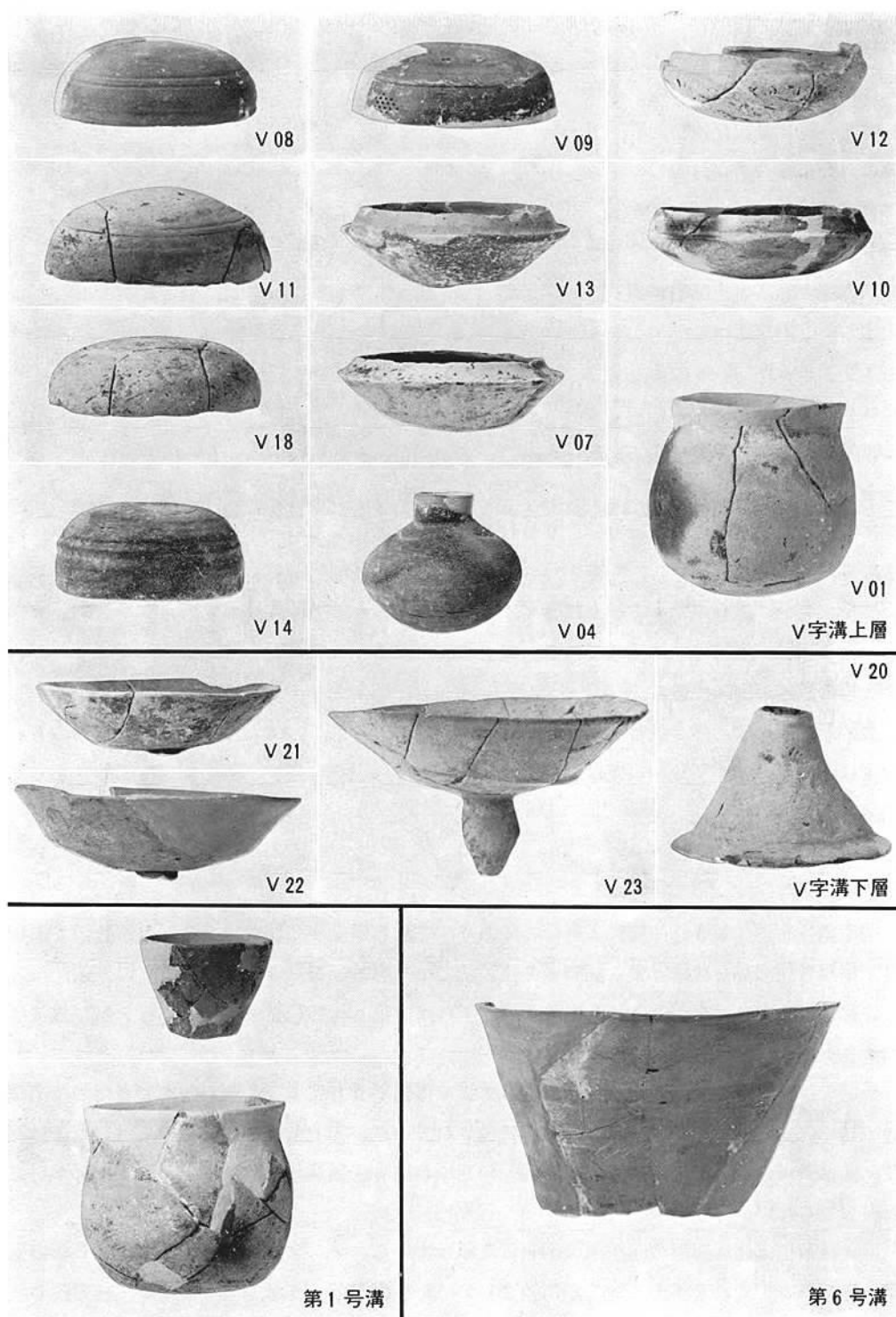


Fig. 107 野口各溝出土土師器・須恵器

外面ハケメの種類に差のある別個体であるが、胎土や製法は類似している。01の口縁部内面には炭化物が、02の外面にはススが付着している。

V字溝の上層からは多くの須恵器と若干の土師器が出土した。須恵器は蓋杯・坩・甕である。蓋杯の蓋にはバラエティーがみられる。VD08・05は体部に沈線をめぐらし、口縁端部内



Fig. 108 V字溝上層土器出土状況

側に段部を有する。天井部は丸い。VD11と03は体部に沈線を有することは同様であるが、口縁端部内側の段部は退化し、凹面となる。VD18・14の口縁端部は丸い。天井部はVD03を除いて全て丸い。杯身のたちあがり長は長く、VD13はたちあがり高1.4cmを計る。VD04は口径の小さな坩で、胴部はやや偏球である。以上の須恵器のヘラ記号は5種あるが、このうちVD08と13の記号が同一である。

土師器は僅かで、杯と甕とがある。杯は体部外面をヘラ磨きしており、薄手のVD10の方が胎土は精良である。VD15の甕は胴部下位が最も脹り、平底に近い。外面は二次加熱によって黒変している。

(5) 小 結

前期の住居跡は第8号住居跡1軒のみであり、それも構造が不明確である。道添遺跡で第12号・第17号住居跡を代表とする同時期の住居跡では方形の場合は4柱構造で、その一辺にそって貯蔵穴様の掘り込みがある。その事を考慮すれば、第8号住居跡東壁側のピットが貯蔵穴様のピットとして捉えられる。

後期の住居跡はいずれも壁高を僅かに残すまでに削平されており、竈が検出できたのは第12号・13号住居跡のみで、北東及び北壁に付設されていた。第6号住居跡は他の住居跡とは柱数、面積共に差があり、大形である。同一時期における住居規模については、第Ⅶ章において考察してみたい。

竪立柱遺構は住居跡群の南東隅の川辺に集中している。2×3間の建物1棟、1×2間の建物3棟である。これらが全て同時期に並立していたものかどうかは不明であるが、柱方向や柱

間距離は近似しており、時期を違えたにしても近時点のものと考えられる。周辺出土の土師器や須恵器にしても単純な時代相を示しており、竈を有する住居跡群と同時期のものと考えられる。

V字溝は弥生時代の住居跡を切り、東西方向の3号溝によって上半を切られている。検出した限りでは直線的に伸びている。溝中からは上下2層にわたって土師器、須恵器が出土した。この2層間は深さ50cmを計り、中間は無遺物層である。つまり下層土器が埋まった後、50cmの土砂が堆積する間、人工遺物は流入あるいは廃棄されなかったと考えられる。この事は住居跡においても前期の8号住居跡が廃棄されて後、第6・第11~13号住居跡が設営されるまでの間が空白である事と軌を一にする。

4. おわりに

本遺跡で検出された遺構は、住居跡13軒、掘立柱遺構4棟分、各種溝8本である。このうち、弥生時代の遺構は住居跡8軒で、ほかは古墳時代以降と考えられる。

弥生時代の住居跡は、第1・2・3・4・5・7・9・10号住居跡で、これらを整理すると Tab. 3 のようになる。

Tab. 3 野口遺跡弥生時代住居跡一覧表 () は推定

番号	時期	規模 m	面積 ^m	主柱穴		主軸方位	焼土	炉	貯蔵穴様土壇	ベッド状遺構	壁溝	土器以外の遺物	発掘時番号	備考
				心	心距離 cm									
1	弥生後期	7.47×5.07	35.13	2	260	N64°E		(中央)	南東壁中央	北東辺南側	南東辺・北東辺・南西辺の北半	砥石	B-2	南短辺中央に階段状遺構あり
2	不明	南西辺3.54+α 北西辺2.5+α	—	—	—	(北西—南東)	—	—	—	—	—	—	B-5	
3	弥生後期	南西辺6.9+α 南東辺2.15+α	—	—	—	(南西辺 N134°E)	—	—	南西壁	—	—	—	B-3	第2号→第3号
4	弥生後期	4.61×4.06	18.54	2	284	N62°E		(中央)	南東壁中央	なし	北隅~西隅	—	B-1	土壇→住居跡→溝
5	弥生後期	5.75 ×3.9+α	—	—	—	(南東辺 N139°E)	○	中央	南東壁中央	—	—	—	B-4	北半は道路下
7	弥生後期	4.3+α ×3.4	—	—	—	(北東—南西)	○	西寄り	—	—	—	—	A-2	第7号→第6号
9	弥生後期	6.90×5.27	34.44	不明	不明	N68.5°E		不明	南東壁中央	北東辺南西辺	なし	石砲丁・投弾	A-4	
10	弥生後期	3.42+α ×3.68	—	—	—	(南東辺 N71°E)	—	—	南東壁	東隅	—	砥石	A-6	

これらのうち、完掘したのは第1・4・9号住居跡の計3軒である。

平面プランは、完掘例3軒および推定可能な第3・5・7号住居跡を加えると、西中ノ沢遺跡と同じく長方形を基調としているといえる。完掘例3軒の短軸長:長軸長の比の値(短軸/長軸)は、第1号0.679, 第4号0.881, 第9号0.764で、第1号は細長く、第4号はより方形に近いといえよう。

主柱穴は、第9号では不明であるが、第1・4号では2本であり、やはり2本を基本として

いるようである。

長軸の方位は、前述したように第1・4・7（推定）・9・10（推定）号住居跡のAグループと、第3・5号住居跡のBグループとに分けられる。

焼土の検出例は少なく、従って炉の所在も不明であるが、おそらく住居中央部に設けられたのであろう。

貯蔵穴様土壌は、Aグループでは南または南東辺に、Bグループでは南西辺に位置している。いずれも南側長辺の中央に設けられるという傾向がみられる。これは前述した西中ノ沢・坊野両遺跡におけるあり方と共通している。

ベッド状遺構は第1・9・10号住居跡で認められた。第9号では両短辺に沿って、第10号では南東隅に設けられている。いずれも削り出しによるものである。

張り出し部は、発掘された範囲では見られない。

以上のほか、第1号住居跡では階段状の遺構が検出されている。これは両短辺のほぼ中央部に、相対するようにつくられており、東側は2段になっている。ともに削り出しによるものであるが、明らかにベッド状遺構とは異なっている。この遺構の類例は、今のところみられないようである。

ここでは、以下の2つの推定を記しておきたい。一つは、ここを出入口とみるもので、この場合第1号住居では妻側に2つの出入口があったことになる。もう一つは、前述の西中ノ沢第3号住居跡(29頁)の両短辺近くのピット、坊野第2号住居跡(49頁)の両短辺近くのピット、後述の道添第3号住居跡の両短辺中央部のピットがこの階段状遺構と同位置にあることである。ユカ面に対して凸と凹の違いがあるが、ここを住居の上部構造（とくに軸組）に関連したものとみることにはできないだろうか。

古墳時代以降の遺構は、第6・8・11・12・13号住居跡、第1～4号掘立柱遺構、及び各種溝である。

このうち古墳時代前期と考えられる住居跡は第8号のみである。第8号は、床面にピットが2個あるのみで、主柱穴と思われるピットは検出されていない。調査が不充分であった場合を除けば、次の4つのケースが考えられる。

- ① 屋根のない竪穴
- ② 竪穴外に柱を建てる
- ③ 竪穴内に柱を建てるが、
 - i) 柱穴を掘る手間を省き、ほかは他住居と同様にする
 - ii) 住居構造（とくに上屋の）が他住居と異なる

通常は②のケースが考えられ、本遺跡でも同様と思われるが、③—ii)のケースを含めて、竪穴の機能上の相異を考えることはできないだろうか。例えば、竪穴式の倉庫など。(①のケ

ースは、住居としての機能を十分に果たすことができない。

古墳時代後期の住居跡は、第6・11・12・13号住居跡の計4軒で、これらを含めた古墳時代の住居跡を整理すると、Tab. 4 のようになる。

Tab. 4 野口遺跡古墳時代住居跡一覧表 () は推定

番号	時期	規模 m	面積 ^{m²}	主柱穴	主方軸位	焼土	炉	カマド	貯蔵穴様土漿	壁溝	土器以外の遺物	発掘時番号	備考
6	古墳後期	5.6± ×4.9	(27)	(8?)	—	—	—	—	—	—		A-1	第7号→第6号
8	古墳前期	北辺 5.16、東辺(5.16) 南辺 5.25、西辺 4.57	26.33	不明	(断面方向 N107.5°E)	なし	なし	なし	不明	なし	砥石	A-3	
11	古墳後期	北東辺3.90、南東辺3.62 南西辺3.71、北西辺3.11	13.66	4	N114°E	なし	なし	なし	なし	なし		A-8	北東辺～中央部は攪乱
12	古墳後期	北東辺4.29、南東辺4.25 南西辺4.15、北西辺4.27	18.20	4	N49°E	あり	なし	北中 壁中央	なし	なし		A-7	
13	古墳後期	北辺 3.65、東辺 3.81 南辺 3.39、西辺 3.97	13.15	(4)	N19°E	あり	なし	北中 壁中央	なし	なし		A-10	

平面プランはほぼ方形となり、この点本遺跡の弥生時代の住居跡とは異なっている。第6号は北東辺5.6mが推定され、他の古墳時代の住居が4m前後であることと比較すれば、本遺跡では大形であるといえよう。

主柱穴は4個を基本とするが、第6号は未掘部分があるので不明であり、第13号は歪んでいる。

カマドは第12・13号で検出されたが、第11号では火所は認められなかった。第11号はピットe (Fig. 89, 82頁) を炉の残存とみることもできるが、ユカ面からの深さが30cmほどもあり、他の例からみると疑問である。

各辺の方向は、第6号と第12号、第11号と第13号がそれぞれ近い。

古墳時代の住居跡では、壁溝は検出されなかった。

掘立柱遺構は、周辺から土師器・須恵器 (Fig. 105) が出土しており、古墳時代の遺構と考えられる。計4棟を認定した。しかし、これらのピットの組合せの最短距離は、第1号～第2号: 195cm, 第1号～第3号: 93cm, 第2号～第3号: 55cm, 第1号～第4号: 76cmで、上部構造を含めて考えると4棟の同時存在は考えられず、同時期存在は1～2棟と推定される。前述のようにこれら4棟は、第6・11～13号住居跡と同時期のものと考えられるので、比較的短かい時間のうち建てかえられたことになる。さらに、これらが一定の限られた場所に建てられたことは注目したいところである。

溝は計8本検出された。このうち第2号溝は断面V字状を呈し、出土遺物から5世紀代に掘られ、6世紀末頃まで埋まり切っていなかったと推定される。時期的に前後する期間もあるが、この溝の性格を考える上で、本遺跡の古墳時代の住居跡および掘立柱遺構の存在、それらとの関係は無視できない要素であろう。

第6・7号溝は、形態上は後述の道添遺跡の円形周溝と類似しており、ここではほぼ円形を呈する第7号が古く、楕円形の第6号の方が新しいということを指摘するにとどめたい。

- 註 1) 千葉県船橋市外原遺跡第4号址で、これとやや類似した遺構がみられるが、地域・時期が異なり、設置情況も違うので、これを“類似”というには強弁が過ぎるだろう。
八幡一郎・岡崎文喜・松浦宥一郎編『外原』船橋市教育委員会，1972.

Ⅵ 道添遺跡の調査



Fig. 109 道添遺跡航空写真

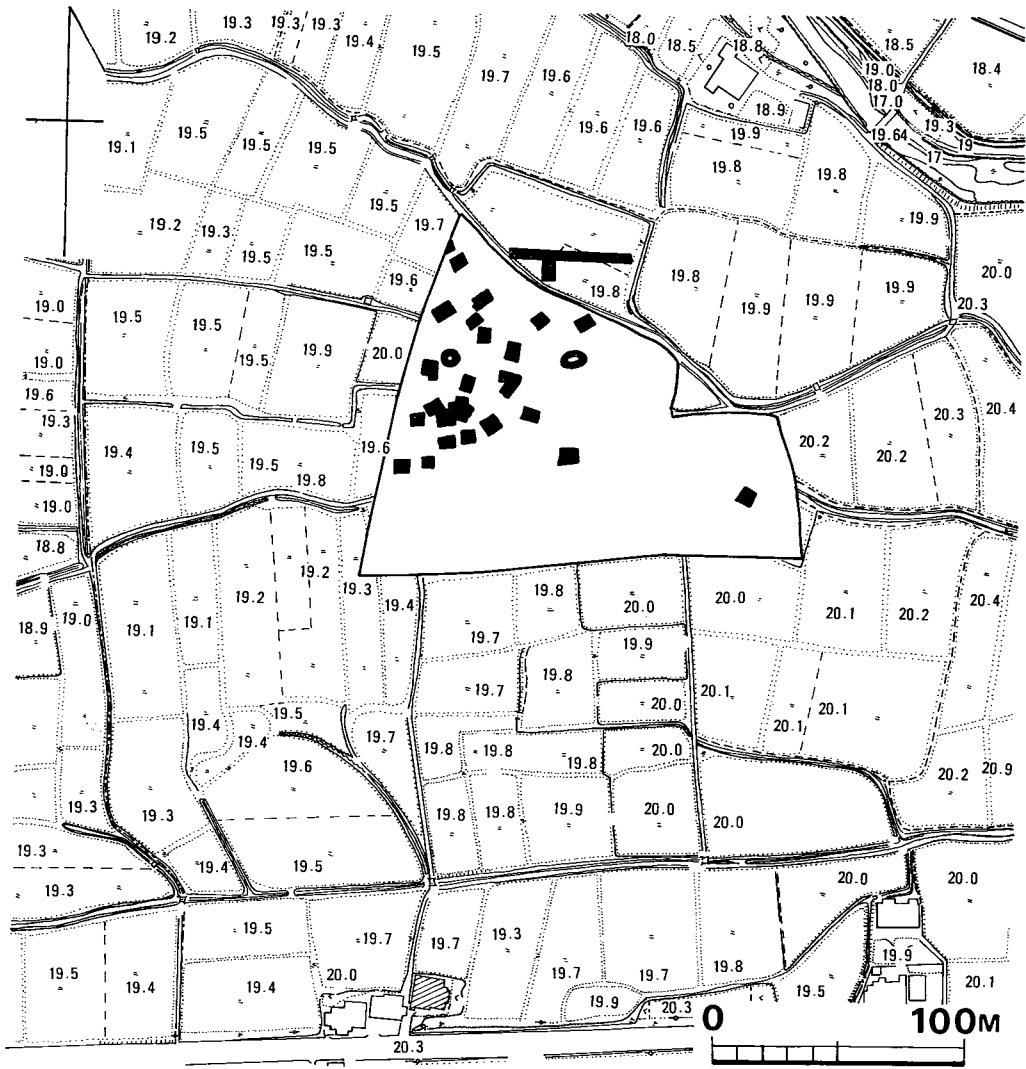


Fig. 110 道添遺跡周辺地形図 (縮尺 1/3000)

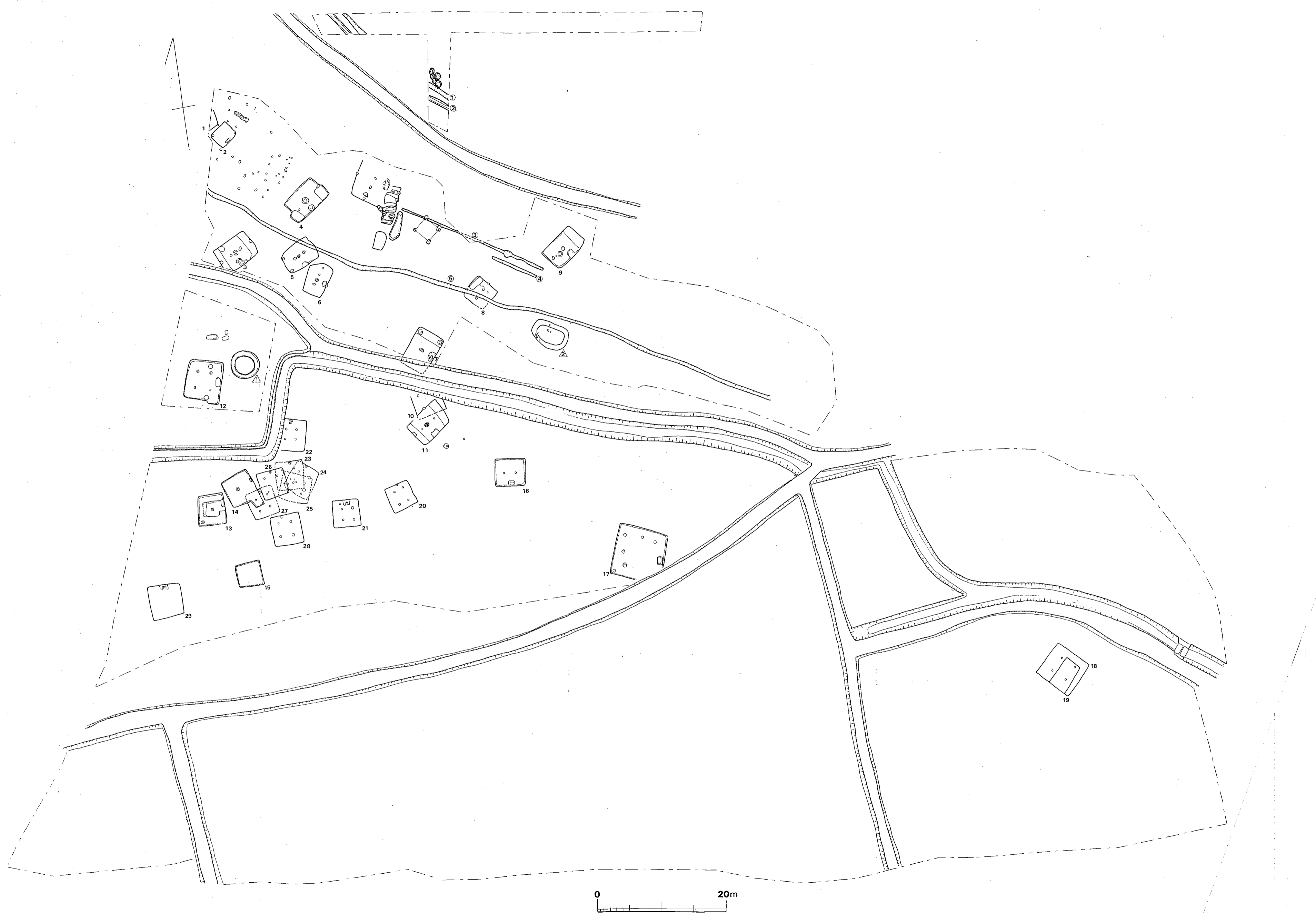


Fig. 111 道添遺跡遺構配置図 (縮尺1/400)

1. はじめに

八女市岡山大字室岡字道添及び野中・二反田・島ノ本・溝代に所在し、主に道添・野中に遺構は集中する。標高は19mである山ノ井川の南岸に接し、野口遺跡と川を挟んで対峙する。現在水田化され、周辺の水田面との比高は40~50cmにすぎない。古老の話によれば明治期に行われた改田以前には1m前後の比高差があったという。段丘は調査区内の遺構分布範囲が南丘及び東の限界を示すと考えられ、南側は耕地整理以前は湿田だったといわれる。西側にはさらに200m程広がって低い崖となっている。つまり遺跡は川と湿地に南北を挟まれた東西300m、南北100mの東西に長い河岸段丘上に位置していたわけである。

検出された遺構内容は時代的に野口遺跡とほぼ同様に、住居跡29軒・特殊な円形周溝2本・その他の溝5本・高床の掘立柱遺構2棟である。

弥生時代後期の遺構としては住居跡10軒と円形周溝がある。また掘立柱遺構1棟(第2号)はこの時期の住居跡群の中央に位置し、同時期の所産ではないかと想像される。これらの遺構



Fig. 112 道添北半遺構群



Fig. 113 道添南半遺構群

は調査区内の北半、つまり河岸段丘の北縁にそって分布している。

古墳時代前期の遺構は住居跡のみ8軒が検出された。この時期の住居跡は弥生時代住居跡群の東南に位置を替えている。

古墳時代後期の遺構としては住居跡のみ10軒が検出された。この時期の住居跡は前期住居跡群の西側へ位置を替えているが、その分布中心地では夥しい切り合いを見せている。

調査区北側で東西方向の5本の幅の狭い溝が検出されている。これらの溝の所属する年代について明確な事は言えないが、古代末から中世にかけての土錘が出土しており、同時期のものではないかと想定される。なお遺跡は調査直前まで水田耕作されており、その用水路によって縦横に遺構が切られていた。また調査区内を通る小道は農作業をするには必需の用路であり、調査の時点ではそれを裁ち切る事はできなかった。そのため調査未了部分を生じている。

2. 弥生時代の遺構と遺物

(1) 住 居 跡

第1号住居跡跡 (Fig. 111)

発掘範囲の北西端に位置する。第2号住居跡との最短距離は0.5mである。東辺2.1m、南辺1.5mを検出したが、遺構の大半は発掘区域外にあり、詳細は不明である。

第2号住居跡 (Fig. 114)

第1号住居跡の南側に位置する。第4号住居跡との最短距離は12.6m、第3号住居跡とのそれは12.9mである。これら3者(第2・3・4号)に囲まれた空間にはピット群があり、あるいは掘立柱の建物があったかもしれない。

各辺長は北西辺2.63m、北東辺3.25m、南東辺2.74m、南西辺2.95mで、床面積8.68m²を測る。主柱穴は不明であるが、竪穴外のピットa・cを含む4本柱を考えることもできる。各ピット間の心心距離は、次の通りである。a~b:327cm, b~c:230cm, c~d:313cm, d~a:265cm, c~e:171cm, e~d:162cm。南西壁中央付近に径50~65cm・深さ

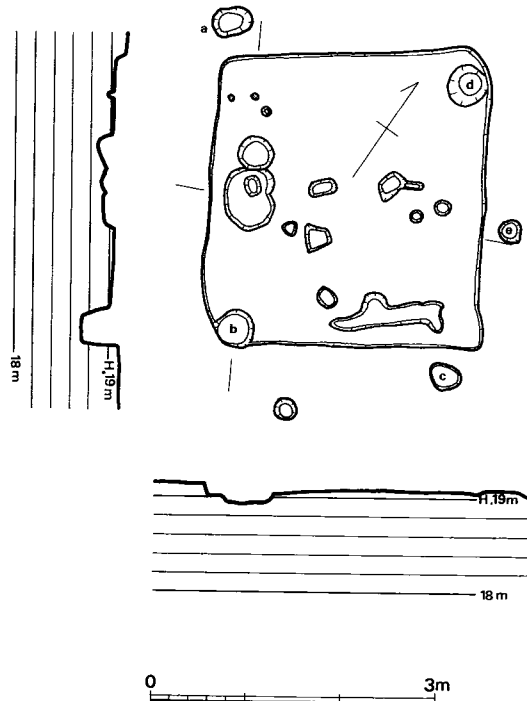


Fig. 114 道添第2号住居跡実測図(縮尺 1/80)

15cmほどの貯蔵穴様土壌があり、この土壌内の小ピットの中心とeの中心を結ぶ線の方向はN65°Eを指す。炉は不明である。壁高は5~15cmほどが残っており、遺存状況は悪い。

第3号住居跡

(Fig. 115)

第2号住居跡の南側に位置する。第4号住居跡との最短距離は6.8m、第5号住居跡とのそれは3.7mである。南西隅は道路下にある。

長軸6.03m、短軸4.39mで、床面積は推定22.8m²を測る。

長軸上に4本の深いピットが並んであり、中央の2本が支柱穴

と思われる。各ピットの規模は西側から、径60cm・深さ42cm、径35~40cm・深さ35cm、径30~48cm・深さ33cm、径50cm・深さ37cmである（深さはユカからの計測値）。これら4本の心心距離は西から189cm、170cm、188cmである。主軸の方位はN68°Eをとる。炉は床面中央の浅い掘り込みと思われるが、焼土は検出されていない。南東辺中央の壁に接して瓢形の貯蔵穴様土壌が確認されており、なかから砥石・土器が出土した。ベッド状遺構は東西の両短辺に沿って検出された。ともに貼り付けによるものである。ユカは中央に向かってやや低くなっており、壁高は20cmほどである。南東辺の貯蔵穴様土壌の両脇は階段状を呈している。

第4号住居跡 (Fig. 116・117)

第3号住居跡の東側6.8m（最短距離）に位置しており、第5号住居跡との最短距離は2.3mである。

北西辺5.65m、南東辺6.40m、短軸4.05mで、床面積は22.76m²を測る。支柱穴は2本と思われるが、規模がやや小さい。心心距離は311cmである。主軸の方位はN58°Eをとる。炉は床

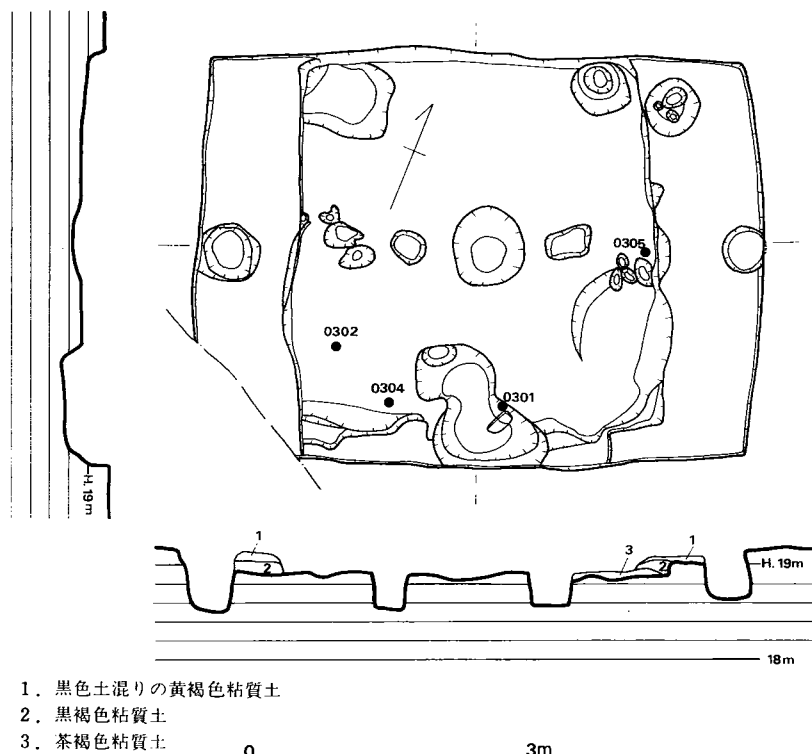


Fig. 115 道添第3号住居跡実測図 (縮尺 1/80)

面中央の径90cmほどの浅い掘り込みと思われるが、焼土は検出されなかった。南東辺の中央に略梯形の貯蔵穴様土壇があり、ユカからの深さは18cmほどである。壁溝はほぼ全周しており、ベッド状遺構と壁とのあいだも溝状を呈している。ベッド状遺構は東隅、南隅にあり、それぞれ外方へ70cmほど張り出している。いずれも削り出しによるものである。南隅のベッド状遺構の上からは5個の河原石が出土しており、西隅付近にも石が出土している。この西隅付近の石の上面は平滑で、砥石または台石として使用されたとと思われる。ユカはほぼ平坦で、壁高は25cm前後である。

なお、西側ベッド状遺構の北側ユカ面から石庖丁が出土している。



Fig. 116 道添第4号住居跡

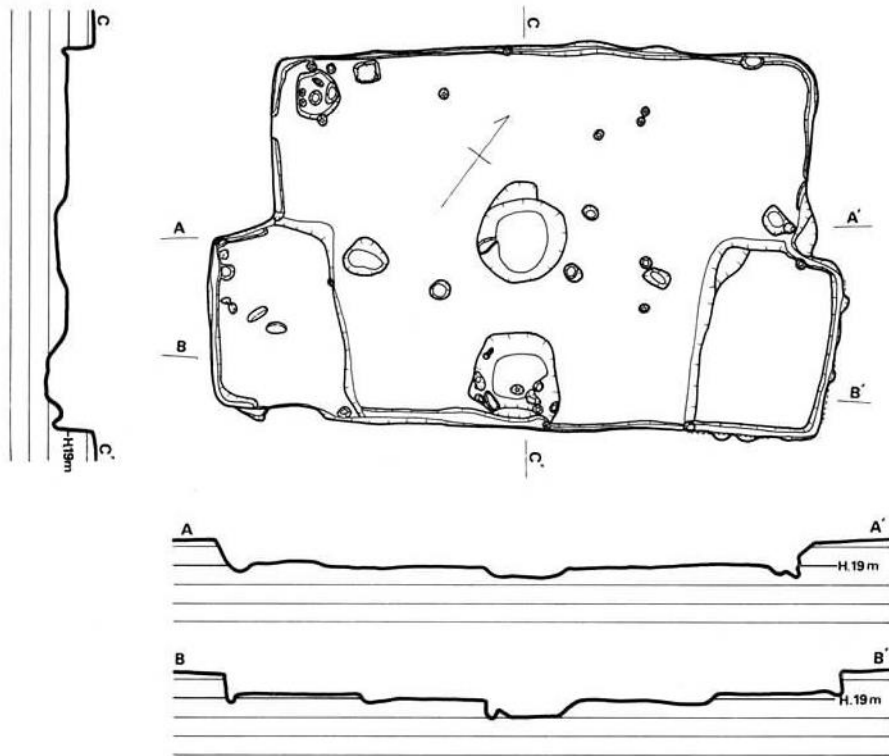


Fig. 117 道添第4号住居跡実測図 (縮尺 1/80)

第5号住居跡 (Fig. 118・119)



Fig. 118 道添第5号住居跡

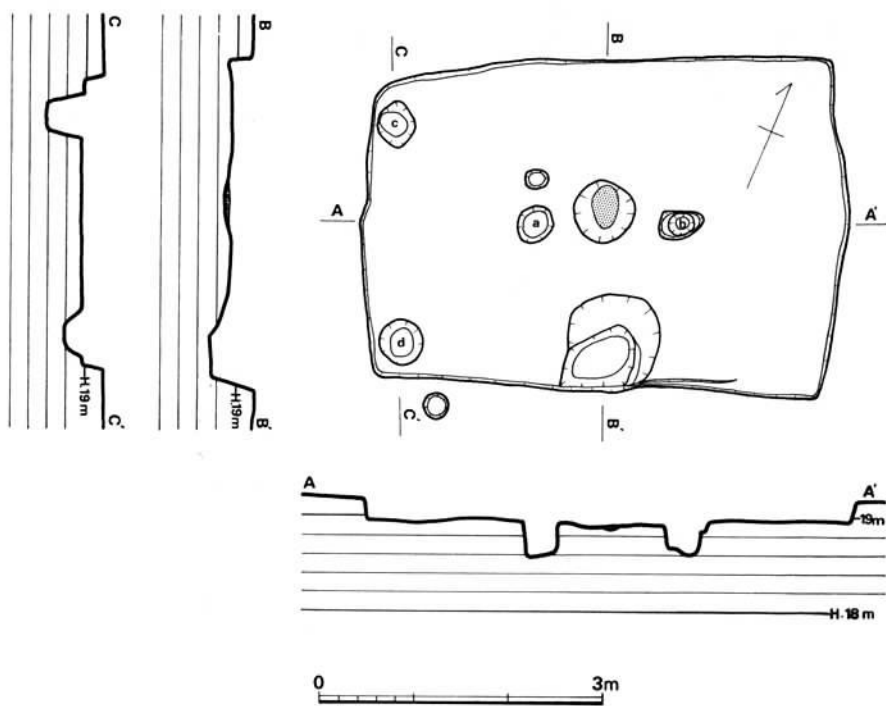


Fig. 119 道添第5号住居跡実測図 (縮尺 1/80)

第4号住居跡の南側に位置しており、最短距離は2.3mである。本住居跡の南側に位置する第6号住居跡とは、わずかに0.3mしか離れていない。

長軸5.38m、短軸3.47mで、床面積16.67m²を測る。東辺3.60m、西辺は3.02mで、平面プランは梯形を呈する。支柱穴は2本で、西側：径38cm・深さ35cm、東側：径30~50cm・深さ36cm、心心距離は157cmである。北西隅にc、南西隅にdのピットがそれぞれあり、c~dの心心距離は233cmである。なお、a~c：184cm、a~d：190cmで、a・c・dはほぼ二等辺三角形を呈し、この部分はやや低くなっている。炬は床面中央にあり、なかから焼土が検出された。主軸の方位はN67.5°Eをとる。南東辺中央の壁に接して、100×100cmほどの貯蔵穴様土壇が検出されている。床面はほぼ平坦で、壁高は20cm前後である。

なお、東側支柱穴のなかより鉢が、貯蔵穴様土壇より完形の甕が出土している。

第6号住居跡 (Fig. 120・121)

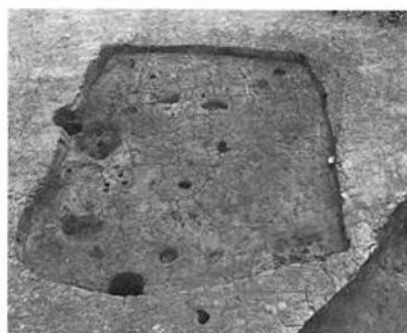


Fig. 120 道添第6号住居跡

第5号住居跡の南側に位置する。

長軸4.90m、短軸3.54mで、床面積15.70m²を測る。北東辺中央部は外方へ張り出している。支柱穴は2本で、北側：径25~30cm・深さ16cm、南側：径30~53cm・深さ8cm、心心距離は170cmである。主軸の方位はN38°Eをとる。炬は床面中央にあり、なかから焼土が検出された。南東辺中央の壁寄りに70×100cmほどの貯蔵穴様土壇がある。ユカからの深さは約11cmである。ユカ面は西側が高く、東側に向かって低くなる。壁高は15cm前後である。

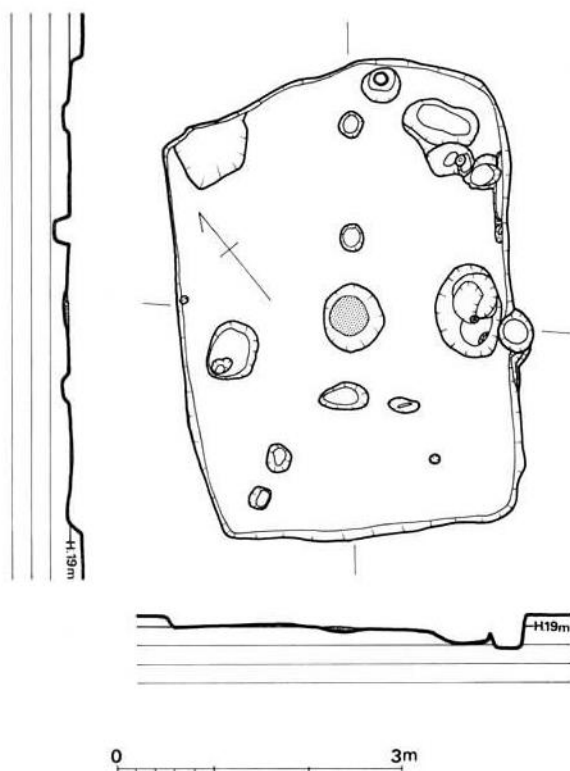


Fig. 121 道添第6号住居跡実測図 (縮尺 1/80)

第7号住居跡 (Fig. 122・123)

第6号住居跡の南東15.2m(最短距離)に位置する。第8号住居跡との最短距離は7.1mである。南西辺は道路下であり、さらにこの道路の南側の第10号住居跡と重複する可能性もある。

北西辺4.85m, 北東辺4.02m, 南東辺3.80mを検出した。南西辺を図の点線位置に推定すると, 長軸6.00m, 短軸4.24mで, 面積は25.44m²となる。支柱穴は

不明である。なお, 北東辺近くの2つのピットの心心距離は342cmを測る。主軸の方位は不明である。C—C'の方位はN37°Eをとる。炉も不明であるが, 道路下付近のユカ面では焼土が混じっており, この近くに炉があったと思われる。南東辺に接して100×150cmほどの貯蔵穴様土壌が検出された。この土壌の内部に一段がある。ベッド状遺構は北東辺に沿って検出されており, 削り出しによるものである。ユカ面はほぼ平坦で, 壁高は20~25cmである。

なお, 北隅のユカから甕が, 貯蔵穴様土壌のなかおよびベッド状遺構と中央のピット群とのあいだのユカから土器が集中的に出土した。そのほかピット群とベッド状遺構とのあいだのユカから鉄斧が, 北西辺南寄りの壁直下からガラス小玉がそれぞれ出土

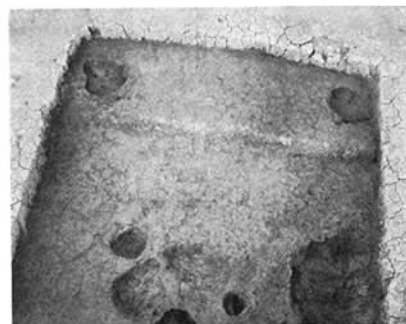


Fig. 122 道添第7号住居跡

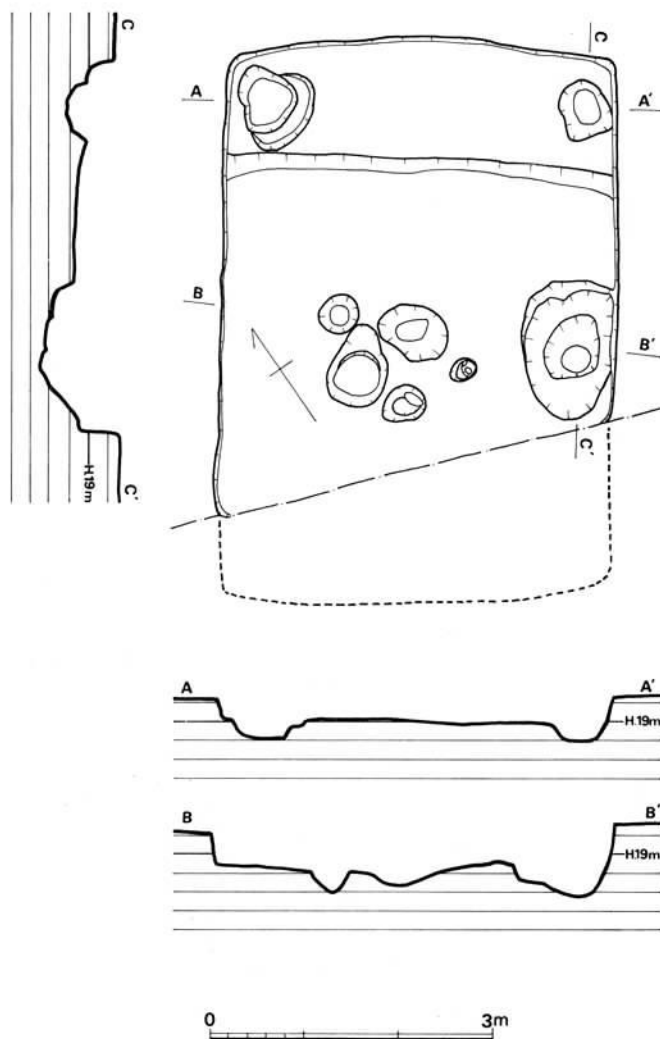


Fig. 123 道添第7号住居跡実測図(縮尺 1/80)

した。

第8号住居跡 (Fig. 124)

第7号住居跡の北東7.1m (最短距離) に位置する。南東の第2号円形周溝との最短距離は7.1m, 北東の第9号住居跡とのそれは8.9mである。本遺構は北西隅を長方形土壇に、中央を東西に延びる第5号溝に切られている。遺存壁から推定復原すると、3.9×3.8mの略方形を呈するものと思われる。主柱穴・炉等是不明である。遺存壁高は2~4cmである。

第9号住居跡 (Fig. 125~127)

発掘範囲の北東端に位置する。第2号円形周溝との最短距離は6.8mである。

長軸6.01m, 短軸3.77mで, 床面積は21.22m²を測る。主柱穴は不明である。なお, a・b・dの各ピット間の心心距離は, a~b:352cm, b~d:252cm, d~a:212cmである。長軸の方位はN53.5°Eをとる。炉はb~d間の浅い掘り込みと思われるが, 焼

土は検出されていない。南東辺中央の壁に接して, 110×90cmほどの貯蔵穴様土壇が検出された。ユカからの深

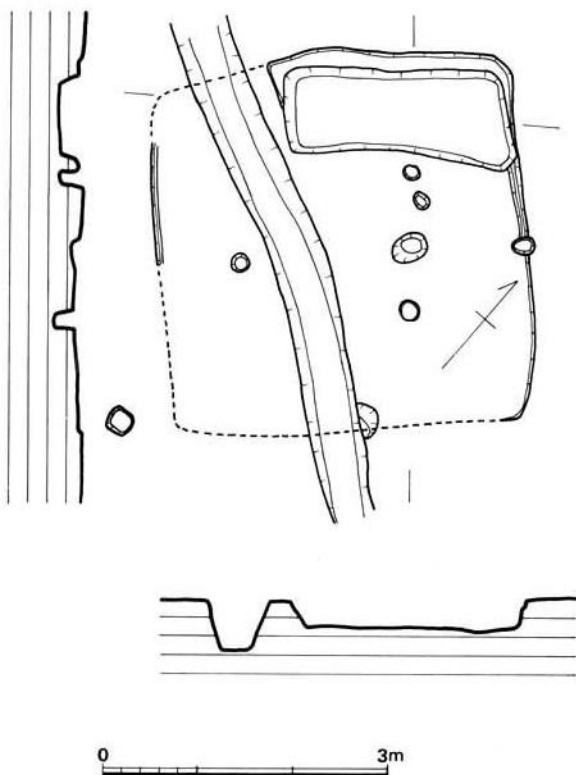


Fig. 124 道添第8号住居跡実測図 (縮尺 1/80)



Fig. 125 道添第9号住居跡床面土器及び炭化材出土状況

さは約10cmである。壁溝は北西辺の東寄り、西隅から貯蔵穴様土壇にかけて認められた。壁溝の内側寄りに壁小穴が計9個検出されている。西隅のものから反時計回りに番号を付すと、これらの心心距離は、2～3：70cm、3～4：54cm、4～5：48cm、6～7：33cm、8～9：50cmで、これらの平均は51cmである。ベッド状遺構は北東辺に沿って検出された。削り出しによるものである。ユカは平坦で柔らかく、壁高は20～25cmである。

なお、床面か

らは壺・甕を中心に多量の土器が出土した。このほか、石庖丁3点、投弾3点、南西壁直下から土錘が、また炭化物が床面に散乱して出土した。



Fig. 126 道添第9号住居跡

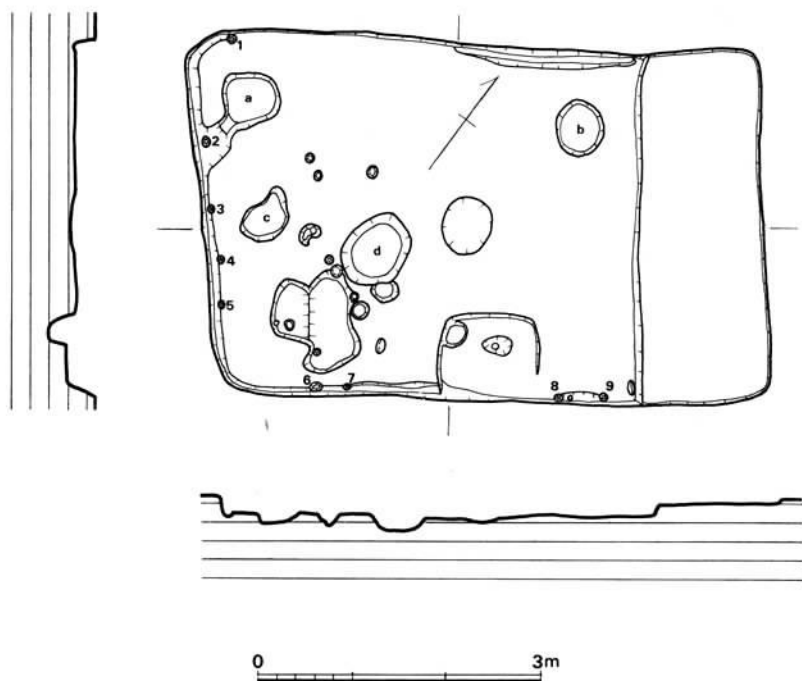


Fig. 127 道添第9号住居跡実測図 (縮尺 1/80)

第11号住居跡 (Fig. 128・129)

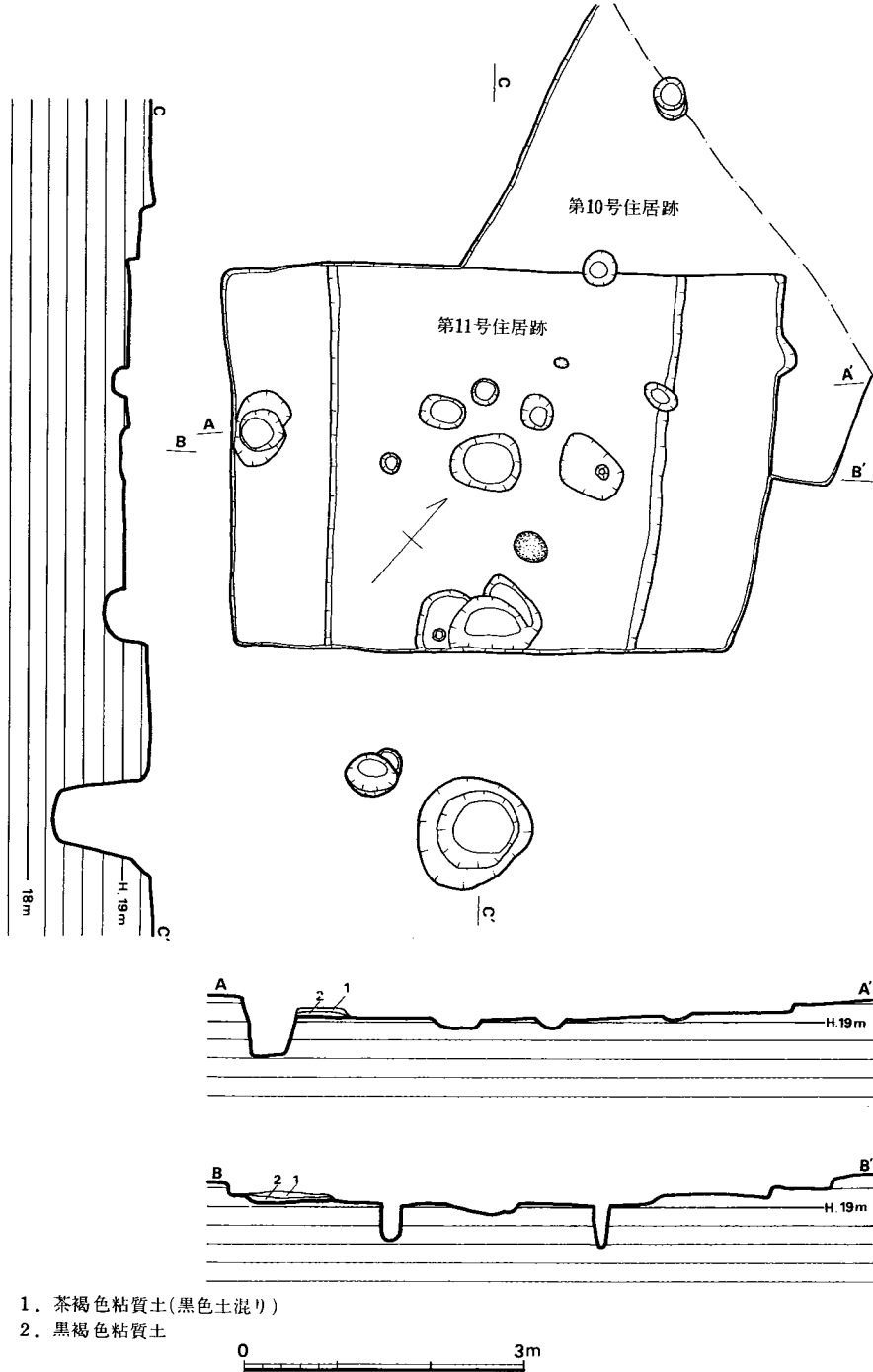


Fig. 128 道添第10・11号住居跡実測図 (縮尺 1/80)

第2号円形周溝との最短距離は17.7m, 第7号住居跡とのそれは約4mである。竪穴外の南東約1.5mのところに径120~125cm・深さ105cmほどのピットがある。性格は不明だが、本住居跡と何らかの関係のある遺構であろう。

長軸5.78m, 短軸4.20mで, 床面積は23.30m²を測る。主柱穴は2本で, 西側: 径21cm・深さ38cm, 東側



Fig. 129 道添第10・11号住居跡

: 径15cm・深さ43cm, 心心距離は229cmである。主軸の方位はN51°Eをとる。炬は主柱穴間の浅い掘り込みと思われるが, 焼土は検出されていない。南東辺中央の壁に接して, 不整形の貯蔵穴様土壌が検出された。ユカからの深さは22cmほどである。壁溝はなく, ベッド状遺構は両短辺に沿って認められた。西側は貼り付け, 東側は削り出しによるものである。ユカは平坦で, 壁高は10~20cmである。

なお, 貯蔵穴様土壌と東側ベッド状遺構とのあいだ, および西側ベッド状遺構上のピット中から酸化鉄が出土した。このほか, ガラス小玉が出土している。

(2) 円形周溝

野口遺跡における第6・7号溝に近似した遺構が, 当遺跡でも検出された。発掘範囲内のほぼ中央部の東西に位置する。両者の最短距離は約41mである。

第1号円形周溝 (Fig. 130・131)

外径4.30~4.40m, 内径2.93~3.01mのほぼ正円形を呈する。溝の幅は上端65~70cm, 下端43~58cmで, 深さ約40cmで



Fig. 130 道添第1号円形周溝

ある。溝の底面は平坦であり、壁は直に近く立つ。中央部の台状部分は僅かに凸レンズ状をなす。中央台状部分の中心部には何ら施設等の掘り込みは認められなかった。

なお、周溝中からは Fig. 130・143の通り、土器が破損した状況で出土した。

第2号円形周溝 (Fig. 132)

長軸外径5.85m、短軸外径3.90mの楕円形を呈する。溝の幅は上端60~97cm、下端52~87cmで、深さは10~20cmである。溝の底面は第1号と同じく平坦であるが、南北に径25cmほどのピットがそれぞれ底面に1個ある。中央部の台状部分はわずかに凸レンズ状を呈し、中央やや北寄りにピットが検出された。

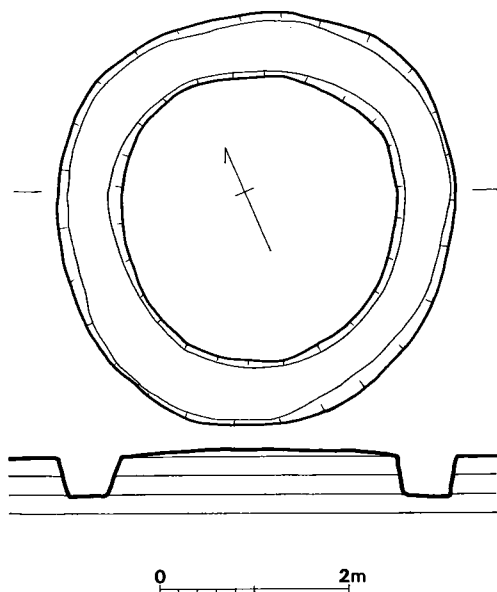


Fig. 131 道添第1号円形周溝実測図 (縮尺1/80)

(3) 土 壙 (Fig. 133)

第1号円形周溝の北西4mの位置に2基の土壙が並存しており、それに接するように第1号掘立柱遺構が検出された。

第1号土壙

主軸をN96°Eにとる。平面は隅丸の長方形であるが、東辺は歪んで、北東隅がふくらみをもっている。深さは約30cmで、

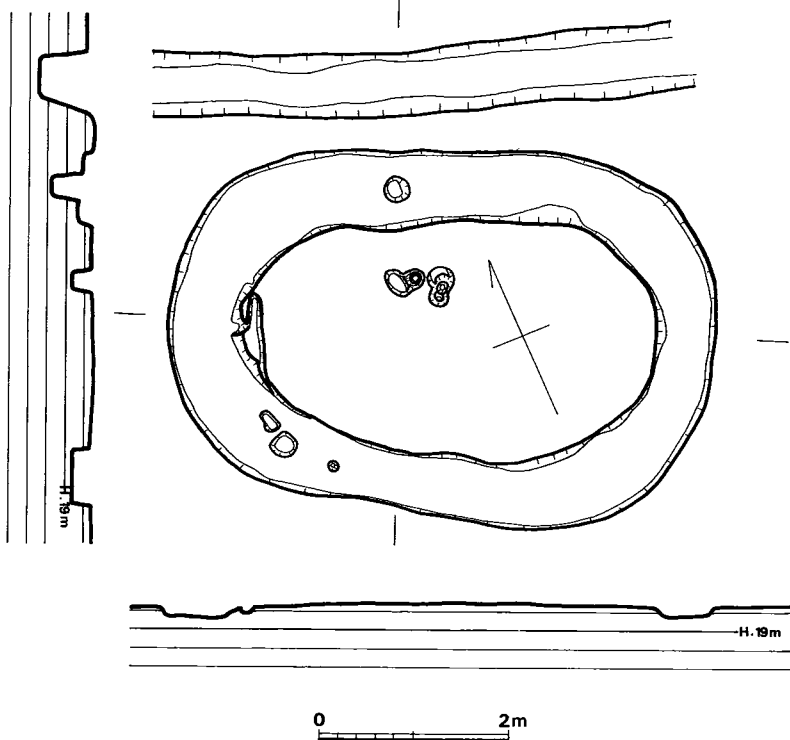


Fig. 132 道添第2号円形周溝実測図 (縮尺1/80)

底面は平坦である。

第2号土壇 (Fig. 134)

第1号土壇との距離は0.6mである。主軸はN88°Eである。平面は整美な隅丸長方形を呈し、壁は垂直に立って、深さ約40cmである。底面は平坦である。

なお、内部からは完形の器台2点と若干の甍片が出土した。



Fig. 133 道添第1・2号土壇と第1号掘立柱遺構

(4) 掘立柱遺構

計2棟分が検出された。両者共1間×1間の建物である。時期については不明確で、弥生時代のものとは断言できない。但し次の2点の理由から、弥生時代の建物であると推定した。1) 柱間は1間×1間であり、柱間距離も広い点、古墳時代後期の野口遺跡のそれに比して明らかな差がある。

2) 住居跡は弥生時代・古墳時代前期・古墳時代後期と分布を各々異にしており、それら弥生時代住居跡の分布範囲内に掘立柱遺構が存在している。

第1号掘立柱遺構 (Fig. 135)

1間×1間の建物で、各柱穴とも浅く、深さ20cm前後である。各柱穴間の心心距離はa～b:306cm, b～c:184cmである。なお、南西隅の柱穴は検出されなかった。

第2号掘立柱遺構 (Fig. 136)

本遺構は第4・8・9号住居跡に囲まれた部分に位置している。

1間×1間の建物で、各柱穴とも深さ60cm前後と揃っている。各柱穴間の心心距離はa～b:249cm, b～c:289cm, c～d:252cm, d～a:260cmである。



Fig. 134 道添第2号土壇

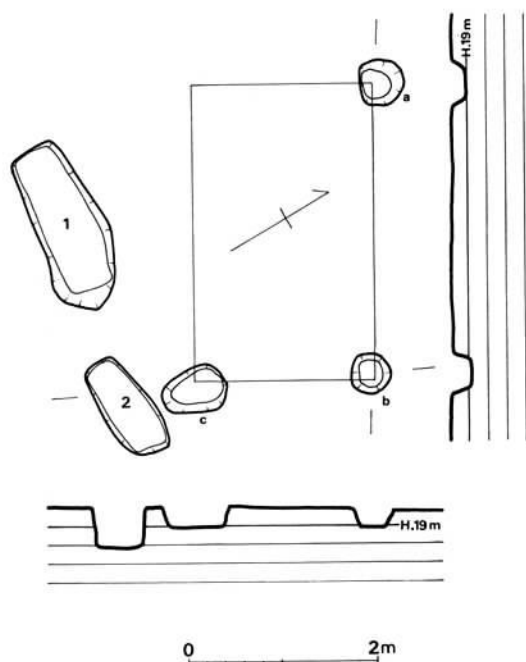


Fig. 135 道添第1・2号土壇及び第1号掘立柱遺構実測図 (縮尺1/80)

このほか、第2・3・4号住居跡に囲まれた部分のピット群では、明瞭な組合せは得られなかったが、この部分にも掘立柱建物の存在を推定することが可能ではないだろうか。

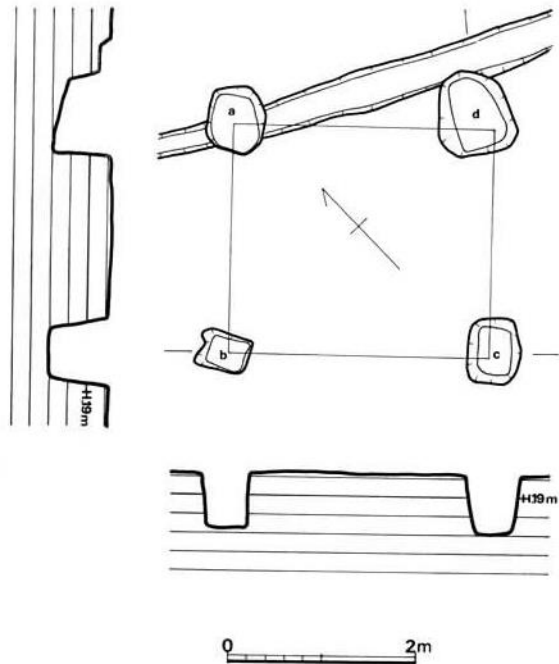


Fig. 136 道添第2号掘立柱遺構実測図（縮尺1/80）

(5) 出土遺物

a 土器

第7号住居跡及び第1号円形周溝中から土器が集中して出土したので、主にこの2セットの土器について記述する。その他の住居跡出土の土器は破片しかなく、図示しうるものは僅かであった。但し、いずれも前述2セットの土器群中にその類例を見ることができる。

第7号住居跡出土土器 (Fig. 137~142)

0717は床面近くから出土した完形品であるが、土師器である。弥生式土器は東壁側の貯蔵穴様ピット中や床面上北半から密集して出土した。その数は50個体をこえる。器種は壺4種・甕3種・深鉢2種・脚付深鉢・高杯・器台2種と小形土器である。

壺は口縁部が短かく、端部内側を上方へ僅かにつまみ上げたもの(0711)、「く」字口縁で球状胴部をもつもの(0721)、逆「く」字口縁をもつもの(0728~0730・



Fig. 137 道添第7号住居跡土器出土状況

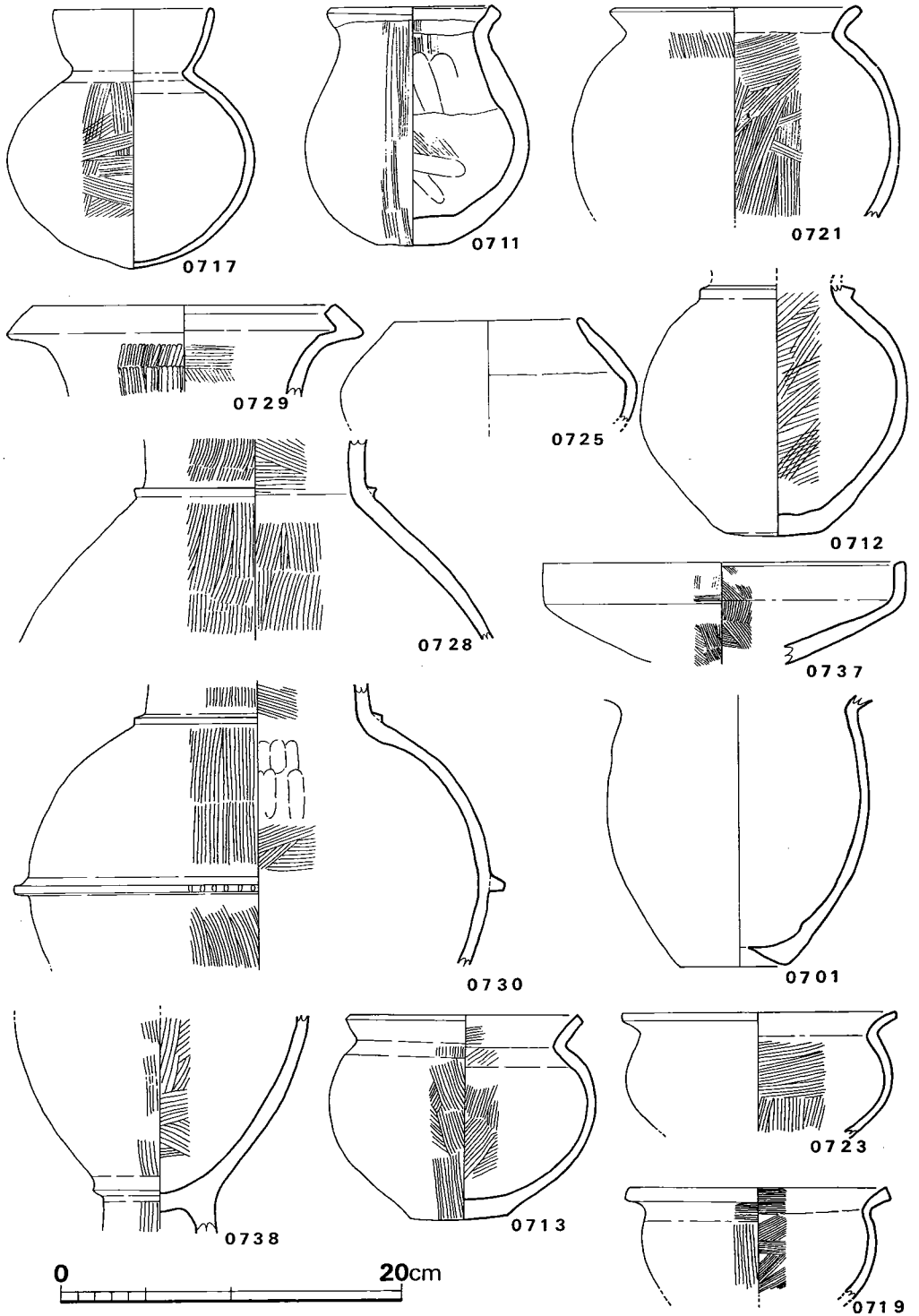


Fig. 138 道添第7号住居跡出土土器実測図① (縮尺1/4)

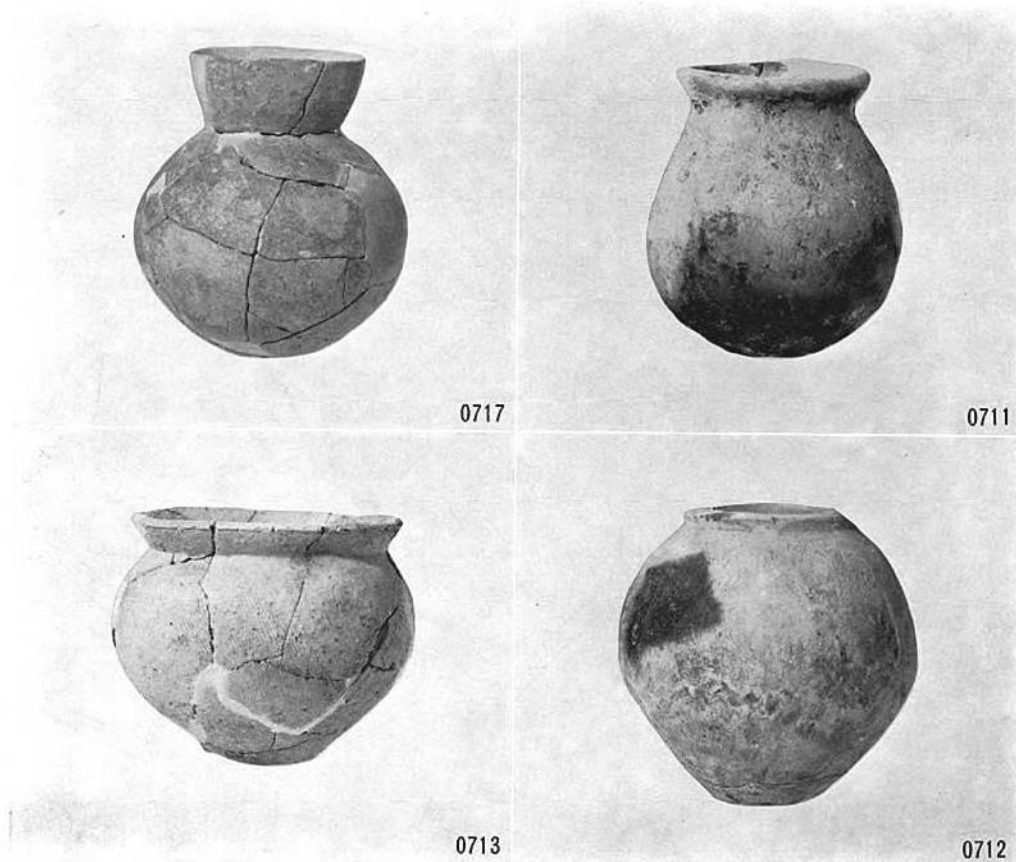


Fig. 139 道添第7号住居跡出土土器①

0712) と、無頸壺 (0725) とがある。逆「く」字口縁をもつ壺は頸部と肩部の境に断面三角形の凸帯を貼り付けており、大形品はさらに胴部中央に断面方形の凸帯をめぐらしている (0730)。0725の内部面調整法は不明であるが、胴部中央が脹って稜をもち、外形はソロバン玉状を呈する。口縁部は僅かに反り気味である。

高杯の出土例は少なく、0737のみである。浅く大きく広がって、口縁部は直立する。0738は脚付きの深鉢である。脚部は筒状で、長く伸びるものと考えられる。

深鉢は大きく「く」字口縁をもつものと、無頸のものに区分される。いずれも底部は平底である。前者には0713・0719・0723が含まれ、胴部の脹り方に若干の差がみられる。後者には0705・0710・0731・0739があり、0705は小形であるが、他はほぼ同大である。0739の口縁端部は平坦であるが、他は丸味をもつ。0710の底部は丸味をもち、凸出している。0705と0731の外胴部下半にヘラ削りが施されている。

甕は多量に出土した。0722は口縁部が直立し、深鉢に近い無頸の甕である。他は全て「く」字口縁部をもつ類で、このうち0727と0734は大形の長胴甕である。調整法は内外面ハケメを施

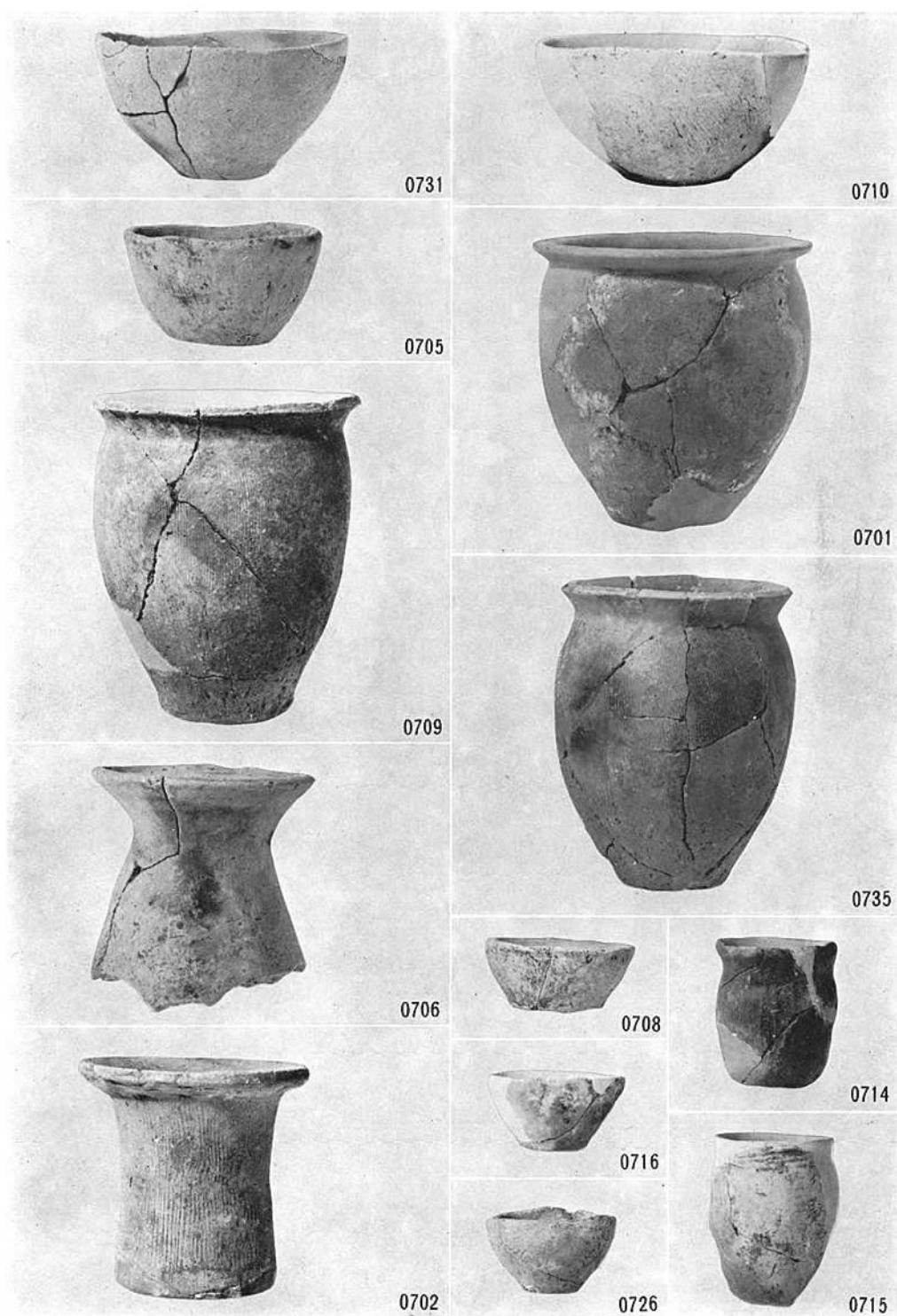


Fig. 140 道添第7号住居跡出土土器◎

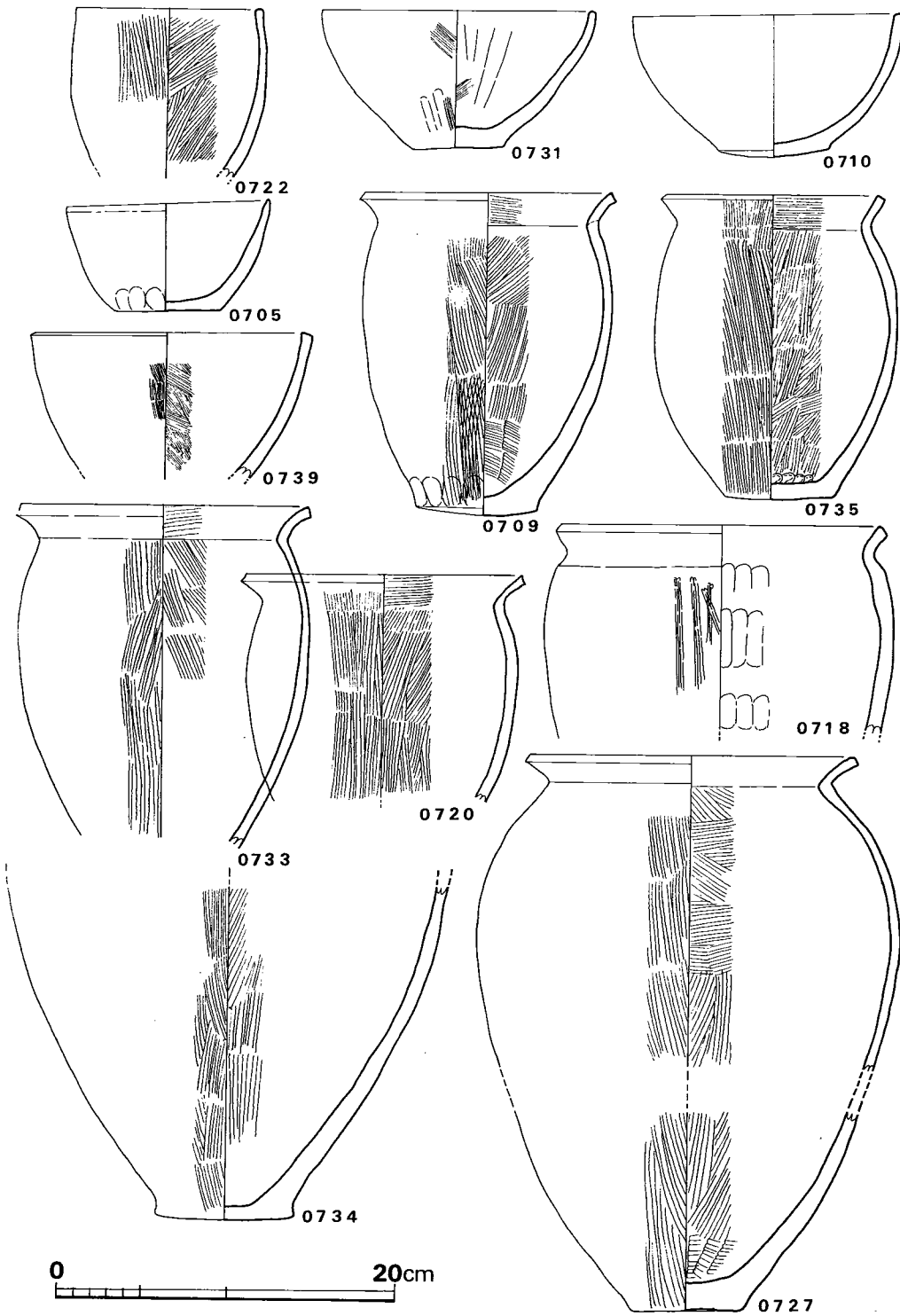


Fig. 141 道添第7号住居跡出土土器実測図 ② (縮尺1/4)

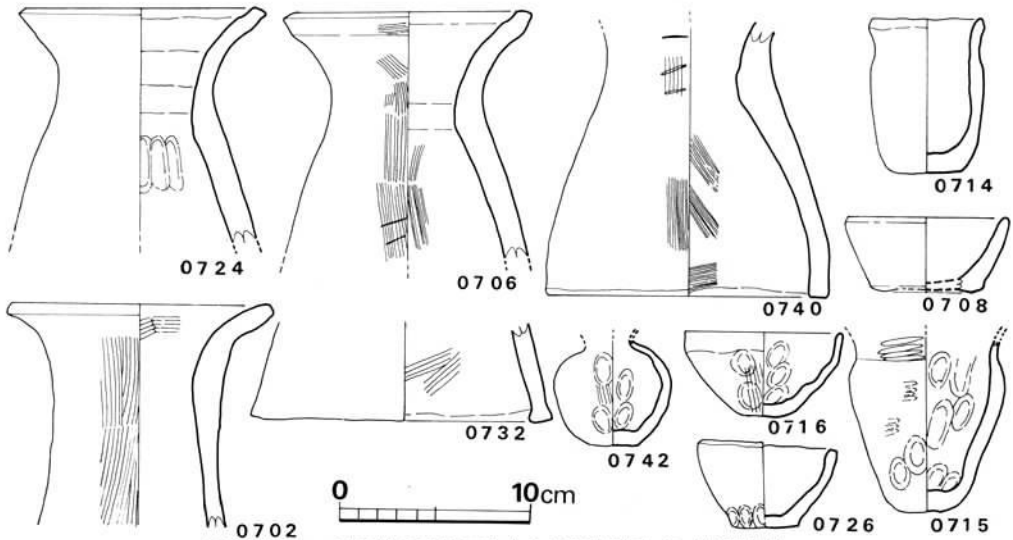


Fig. 142 道添第7号住居跡出土土器実測図③ (縮尺1/4)

しており、ヘラ削りはみられない。底部は平底であるが、ほとんどが丸味をもつ。0701は底部を焼成後に穿孔しており、甕から甕へと使用法を変えたものであろう。

器台は全て口縁部が朝顔状に開くが、脚部が開いて全部が鼓形になるものと、筒状のもの(0702・0732)とがある。0740は脚端が直立する。この種の完形品が17号住居跡から出土している(1701)。0706・0740の外面にはタタキ痕が観察される。

小形土器はバラエティーに富み、甕・鉢・壺形を忠実に模倣している。0715の外面にはタタキ痕がみられ、その上を指ナデしている。

第1号円形周溝出土土器 (Fig. 143~145)

溝の埋土は上から暗褐色土・黒色土・黒色土混りの明褐色土の三層に分かれる。このうち中間の黒色土中より土器が集中出土した。器種は壺4種・甕5種・深鉢2種と碗2種であり、壺と甕はバラエティーに富み、器台や小形土器を含まない。

壺は短かく外反する口縁部と球状胴部を持つ類(CD01・03)と無頸壺(CD04)と大きく外反する口縁部をもつ大形壺(CD03)とがあり、他に図示しなかったが逆「く」

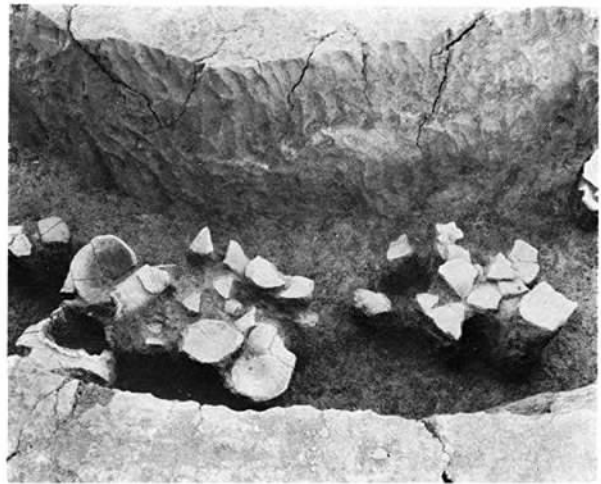


Fig. 143 道添第1号円形周溝土器出土状況

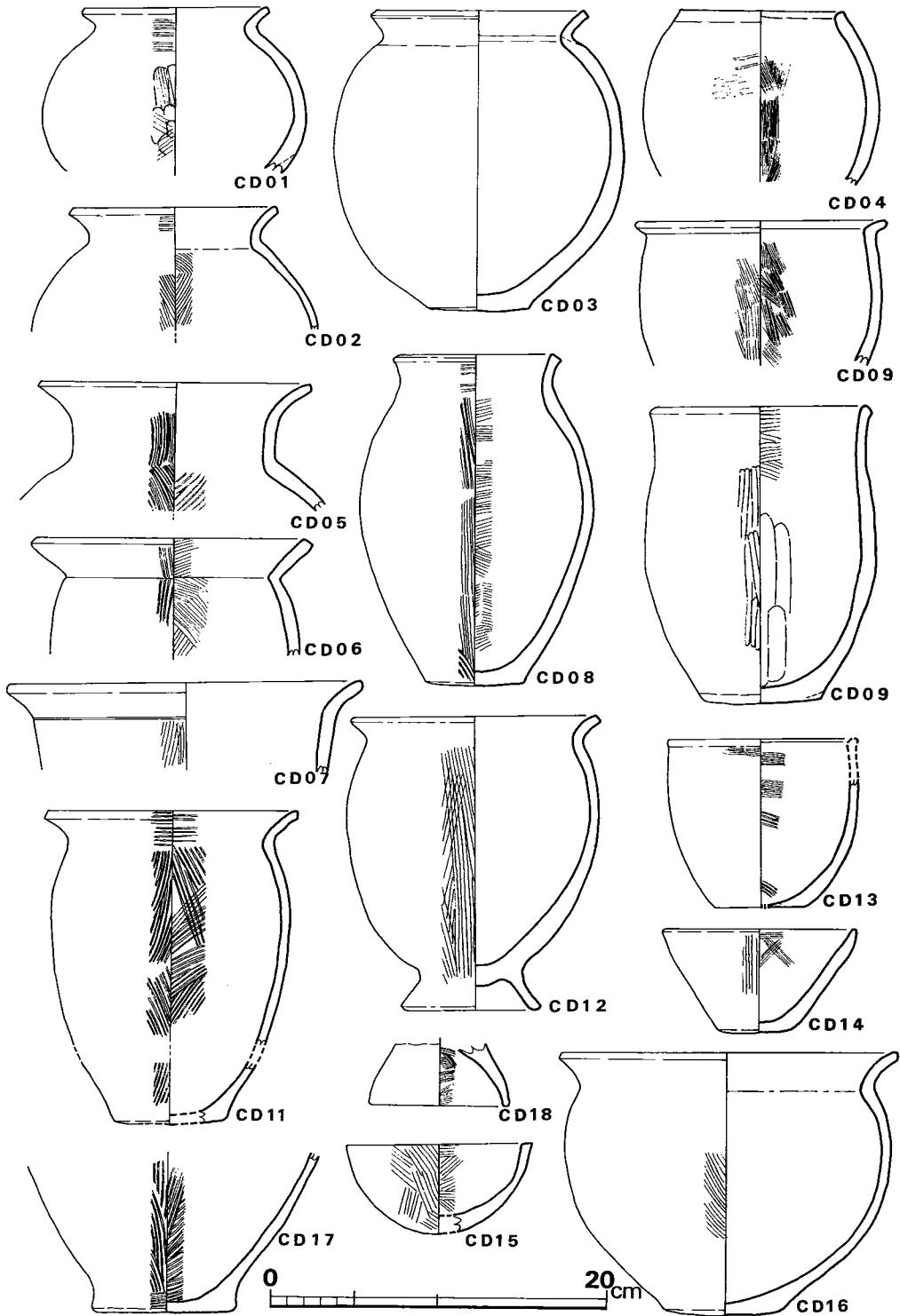


Fig. 144 道添第1号円形周溝出土土器実測図 (縮尺1/4)

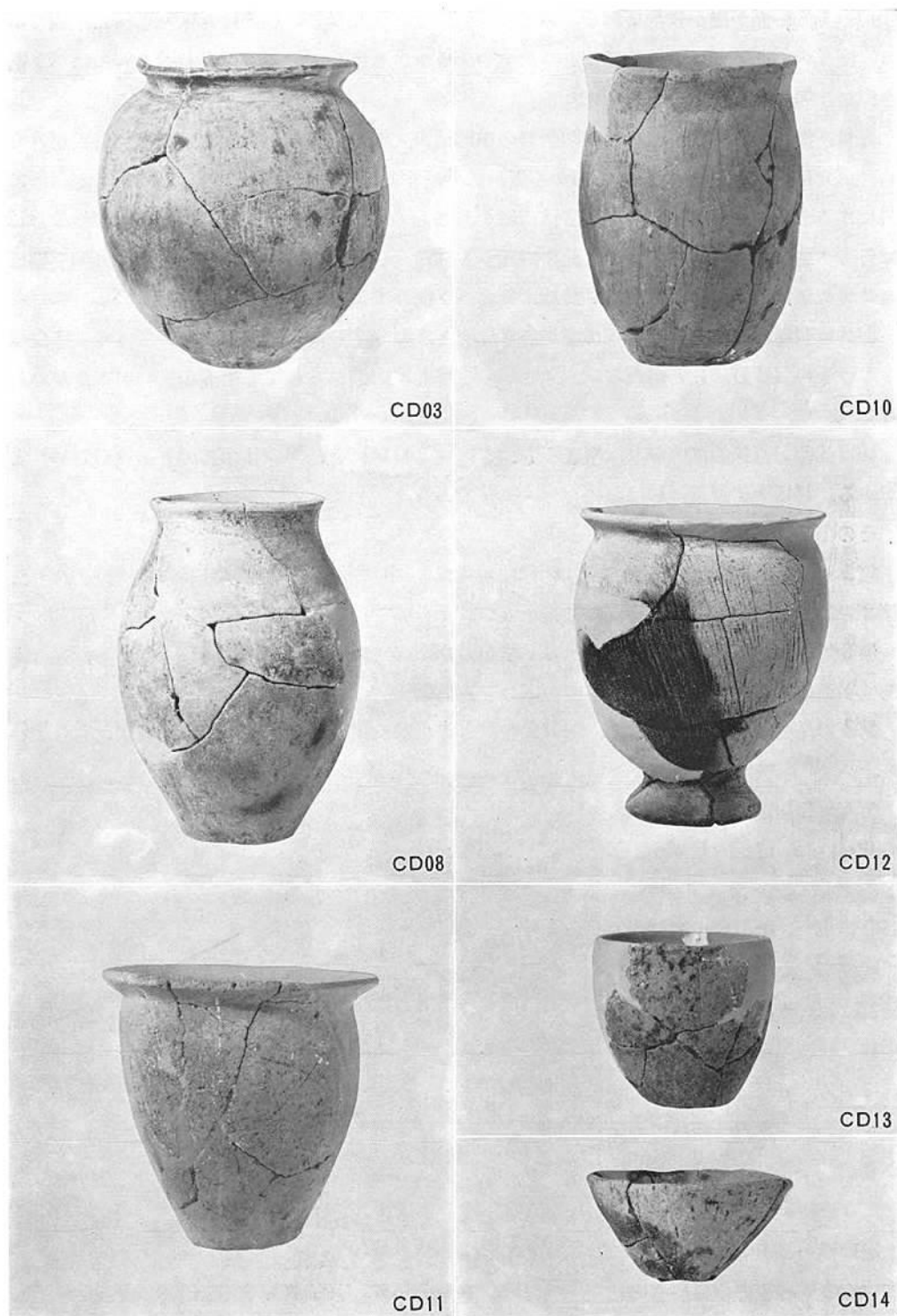


Fig. 145 道添第1号凹形周溝出土土器

字口縁をもつ類が僅かに含まれる。いずれも胴部は球状をなし、底部は丸味をもった平底である。胴部の外面調整は最終的にはヨコナデやナデツケを施しているが、CD01と03にはヘラ削り痕が、04にはタタキ痕が観察される。

甕は大形品が極く少なく、器高20cm弱の中形品が大半を占める。口縁部の形状に差異がみられ、直立に近いもの(CD10)、短かく僅かに外反するもの(CD07・09)、緩やかに如意形に外反するもの(CD08)と「く」字状口縁をもつもの(CD06・11・12)がある。なおCD12は外方へ脹る高台を持っている。他に内彎する高台(CD18)もみられる。胴部の外面調整はヨコナデがほとんどであるが、CD10は外面ヘラ削りである。

深鉢は胴部が直立し、口縁部が僅かに外反するもの(CD13)と、球状胴部で「く」字口縁をもつもの(CD16)とがある。大きさからしても、形態からしても用途の違いがうかがわれる。

碗は体部が直線的に広がり、平底をもつもの(CD14)と、半球状体部のもの(CD15)とがある。14はナデ調整、15は粗いハケメ調整である。

その他の住居跡出土土器

第1・2号住居跡からの出土土器は少なかったが、中に逆「く」字の壺口縁部を含んでいた。第2号住居跡出土のそれは肩部に凸帯をもつ。

第3号住居跡の床面上、北東側ベッド横から0305の甕が完形で出土した。「く」字口縁の端部は平坦であり、器高の割りに口幅が広い。内外面ナデアゲている。

第4号住居跡出土土器のうち、0401は台付きの小形碗形土器で、外面全体に煤が付着している。

第5号住居跡の柱穴中から0502が、貯蔵穴状ピット中より大甕が出土した(Fig. 146)。0501は小形の球状胴部をもった壺で、口縁部は短かく鋭く外反し、内側に明瞭な稜を持ち、端部は尖る。外面は丁寧にナデツケされ、光沢を持っている。

第6号住居跡からの出土土器は僅かであるが、中に逆「く」字形の壺口縁片や



Fig. 146 道添第5号住居跡貯蔵穴内土器出土状況

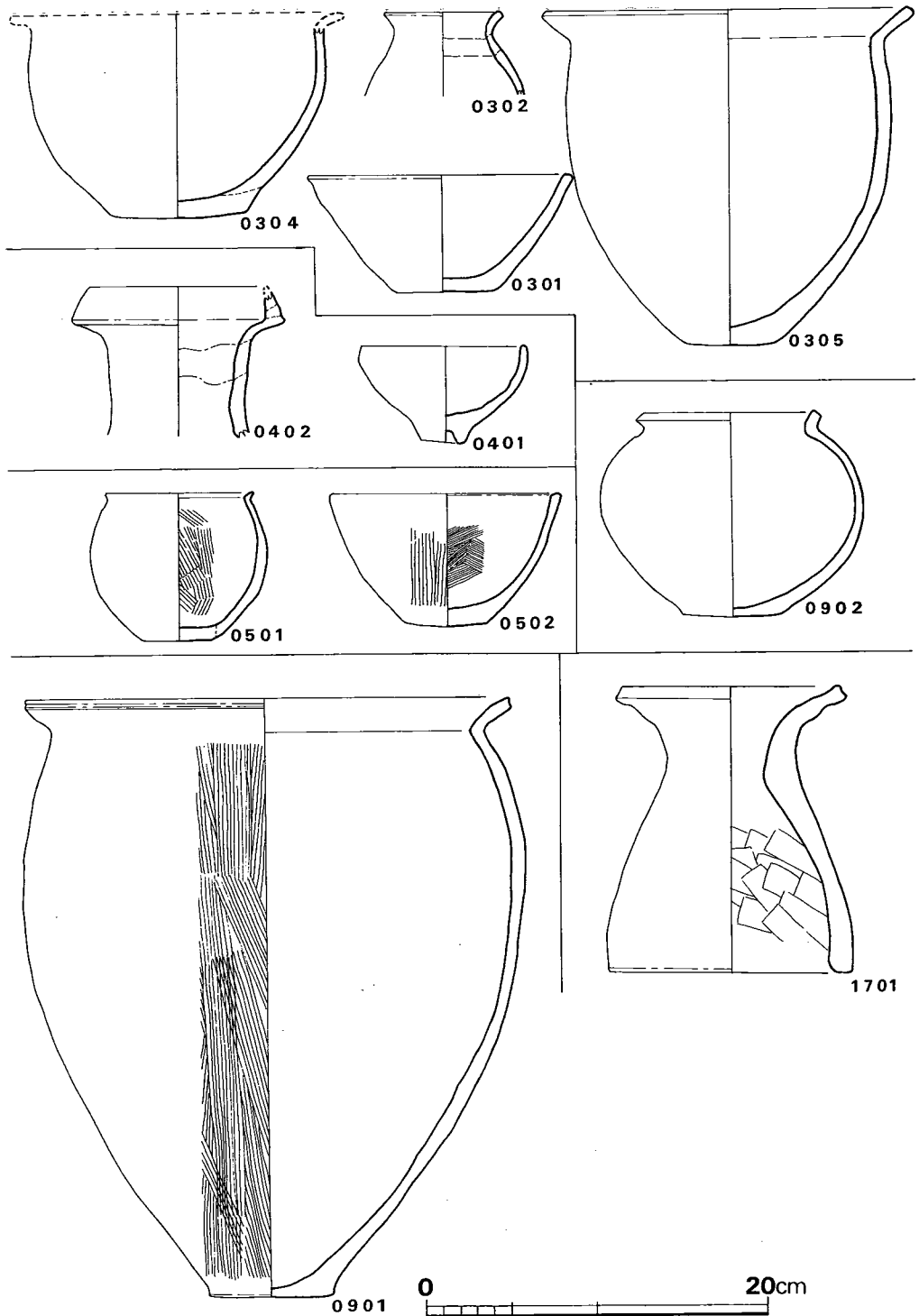


Fig. 147 道添第3～5・9・11号住居跡出土土器実測図（縮尺1/4）

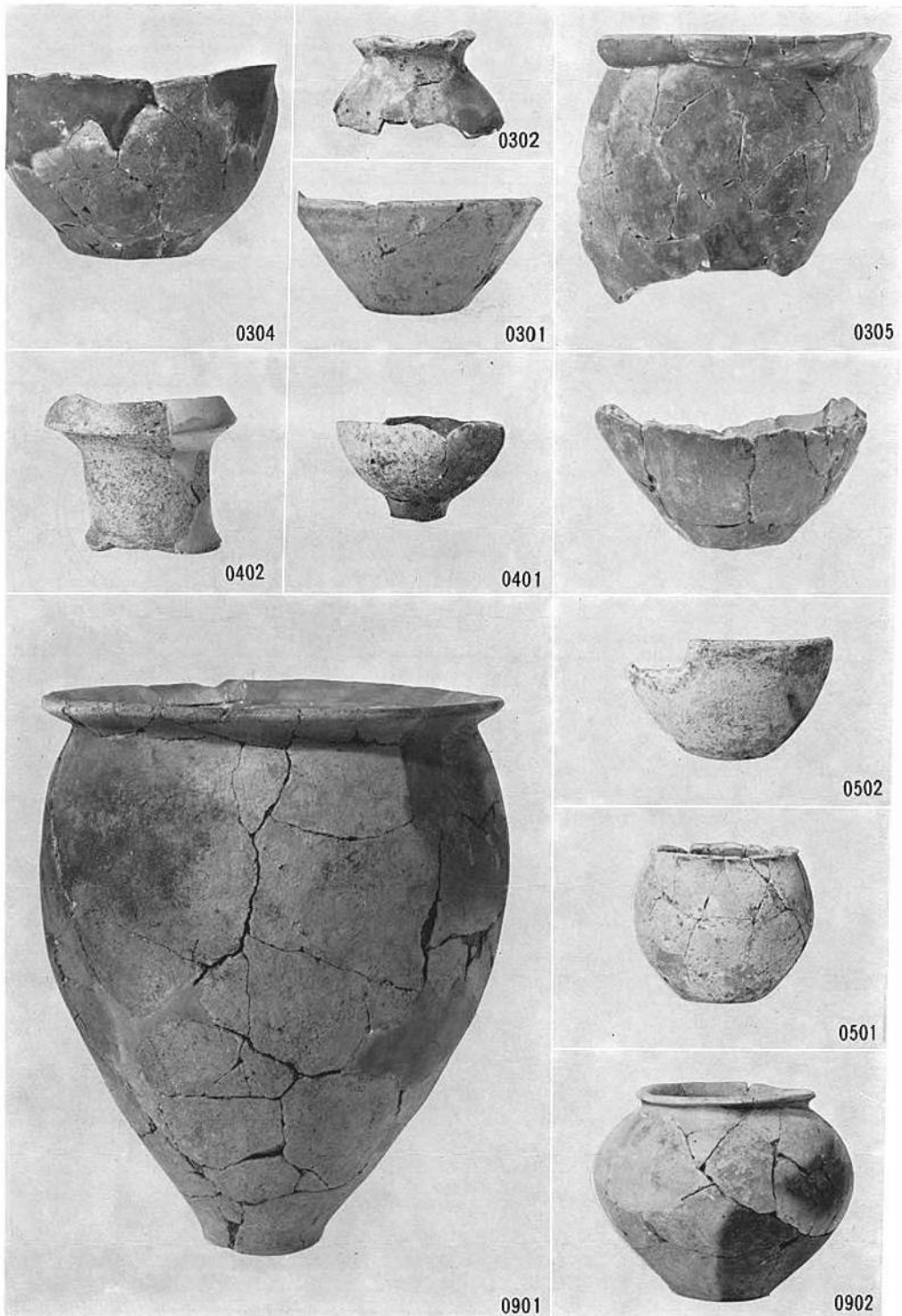


Fig. 148 道添第3～5・9・11号住居跡出土土器

ヘラ削りされた甍片を含んでいる。

第8号住居跡からはまったく遺物は出土していない。

第9号住居跡の床面からは北東側ベッド横で壺と甍を中心とした土器片が集中して出土した (Fig. 125)。0902は短かい口縁部を持ち、端部は平坦である。胴部は球状で、CD01に類似している。0901の甍は長胴で、「く」字口縁部をもつ。西中ノ沢遺跡第6号住居跡や坊野遺跡第2号住居跡出土品中に類似がみられる。

第11号住居跡からも土器は出土していない。

以上が各住居跡床面出土の土器類である。その他に第7号住居跡の覆土中や第2号土壙から器台が出土している (Fig. 134・140・142)。

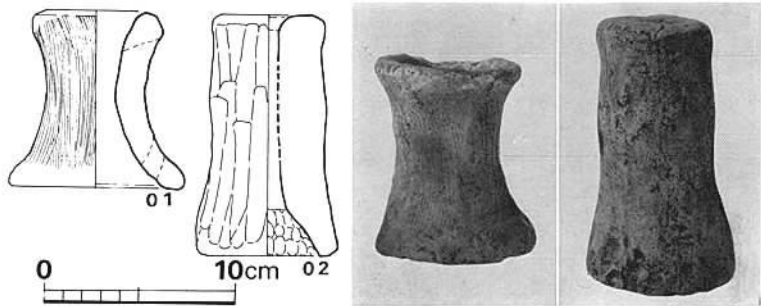


Fig. 149 道添第2号土壙内出土支脚 (縮尺1/4)

b 鉄器 (Fig. 150・151)

第7号住居跡床面出土の鉄斧1点のみである。全長6.1cm、最大幅3.3cmである。袋部は厚さ0.6cmの鉄板を折り曲げて作り出している。刃部はゆるやかな弧状を呈する。

c 石器

第4・9号及び第12号住居跡床面から石庖丁が出土している。このうち第9号跡出土の石庖丁 (Fig. 150-2) は肩が張り、外形は野口遺跡第9号住居跡出土品に類似している。表面には磨研痕が縦横に走っているが、

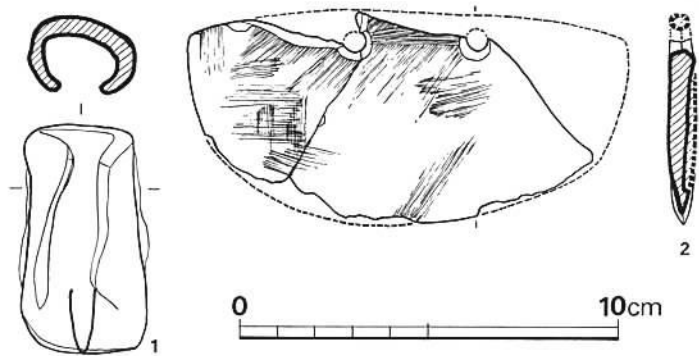


Fig. 150 道添遺跡出土鉄器・石器実測図 (縮尺1/2)

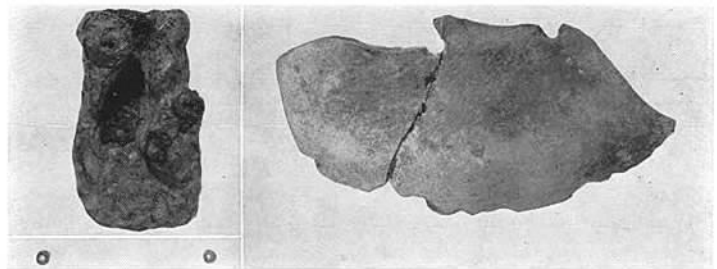


Fig. 151 道添遺跡出土鉄器・石器・ガラス玉

両孔間の条痕は使用による紐痕かとも考えられる。凝灰岩製である。

砥石は第4号及び第9号住居跡床面から出土した。Fig. 153-1は第4号跡より出土した。4面を全て用いており、表面の擦痕が最も著しい。裏面には長軸方向の磨痕がみられる。粘板岩製で粒子は細かい。3も4号住居跡の出土品である。平面の3面と側面の左側の計4面を使用している。このうち平面の左面と中央面の使用が最も著しく、凹面を呈している。凝灰岩製で、粒子は荒い。4は第9号住



Fig. 152 道添遺跡出土砥石

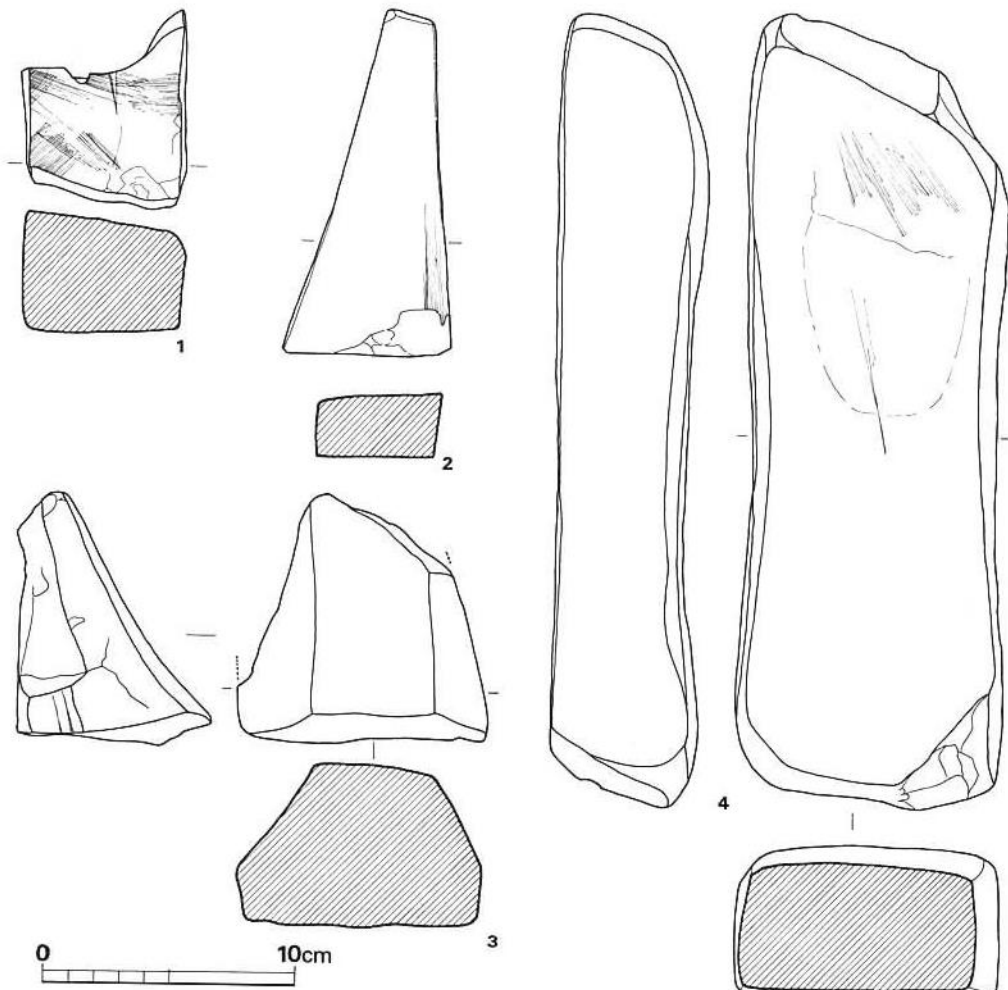


Fig. 153 道添遺跡出土砥石実測図 (縮尺1/3)

居跡から出土した。表面と両側の3面を使用している。表面の一部は剥げ落ちているが、その後もさらに使用している。凝灰岩製の荒砥である。

d ガラス小玉

第7及び第11号住居跡床面より各1個のガラス小玉が出土した。色調はライトブルーで、径3mmである。

3. 古墳時代の遺構と遺物

(1) 住 居 跡

第10号住居跡 (Fig. 128)

第7号住居跡の南側に位置する。第11号住居跡と重複しており、11→10の順に新しい。

本住居跡は、南東隅と西辺の一部を検出したのみで、詳細は不明である。短軸は4.5mほどであろう。

第12号住居跡

(Fig. 154~156)

発掘範囲中央部の西端に位置する。第1号円形周溝との最短距離は1.1mである。また、本遺構の北側に2個の土壇が検出され、なかから土器が出土した。

東西5.65m、南北5.61mで、床面積28.84m²を測る。各辺

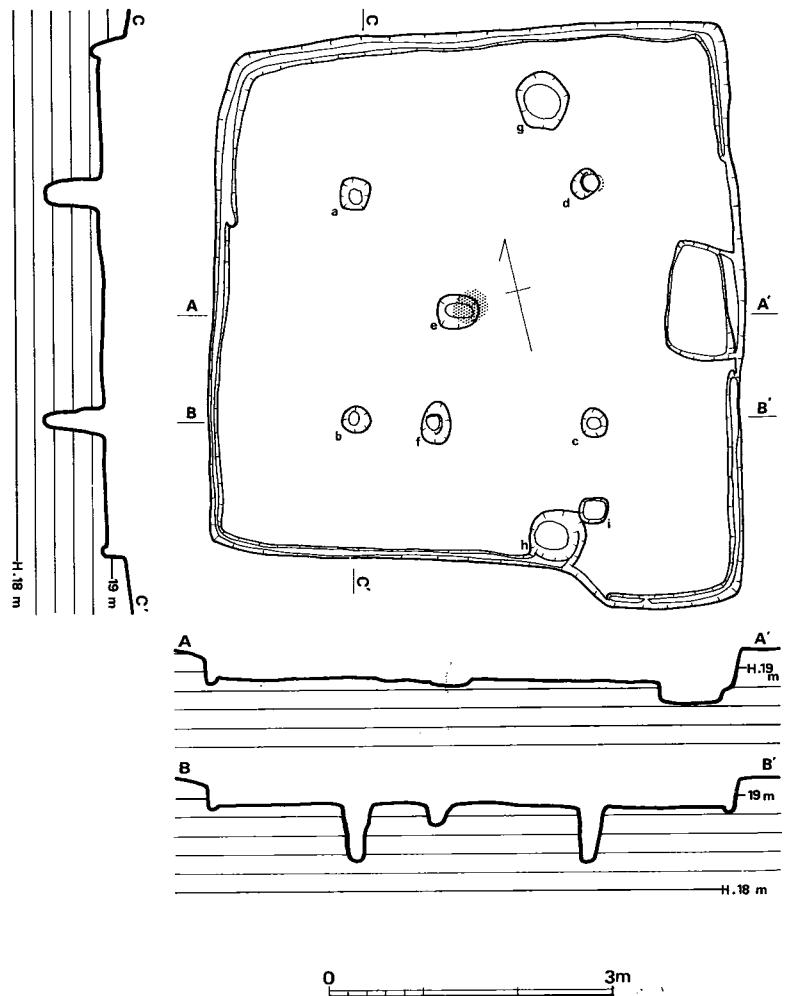


Fig. 154 道添第12号住居跡実測図 (縮尺1/80)

長は北辺5.11m, 東辺6.04m, 南辺5.76m, 西辺5.10mで, 南東隅の南辺側に50×150cmほどの張り出し部がある。主柱穴はa~dの4本で, a:径30~33cm・深さ58cm, b:径30cm・深さ61cm, c:径28~30cm・深さ58cm, d:径30cm・深さ59cmである。各柱穴の心心距離は, a~b:235cm, b~c:257cm, c~d:255cm, d~a:255cmで, fはb-c上に, iはc-dの延長上にある。なお, b~f:85cm, f~c:172cm, c~i:92cm, g~h:461cmである。主軸の方位はN14.5°Eをとる。炉は中央部のピットeで, 焼土が出土している。東辺中央の壁に接して65×125cmの長方形を呈する貯蔵穴様



Fig. 155 道添第12号住居跡と円形周溝



Fig. 156 道添第12号住居跡

土壌が検出された。ユカ面からの深さは23cmほどである。ベッド状遺構は検出されていない。壁溝は貯蔵穴様土壌の北側を除き, ほぼ全周している。幅10~20cm, 深さは5~10cmである。ユカは柔らかく, 壁高は25~30cmである。

ユカ面からは多量の土器と石庖丁が出土している。

第13号住居跡 (Fig. 157・158)

第12号住居跡の南側13.1m (最短距離) に位置する。

南北4.69m, 東西4.12mで南北に長く, 床面積は16.61m²を測る。各辺長は北辺3.84m, 東辺4.53m, 南辺4.16m, 西辺4.37mである。主柱穴は4本と思われるが, その組合せには2案が考えられる。I案: a・b・c・d, a~b; 211cm, b~c; 208cm, c~d; 217cm, d~a; 211m。II案: a・f・c・g (g'), a~f; 237cm, f~c; 123cm, c~g; 292cm, g~a; 173

cm, なお, $c \sim g'$; 257cm, $g' \sim a$; 162cmである。I案の組合せは柱間距離はほぼ同じであるが, 各柱穴を結ぶ線が竪穴の各辺と平行にならない。主軸の方位は, 仮りに長軸をとれば $N13^\circ E$ である。炉は床面中央のピットeと思われるが, 焼土は検出されていない。東辺中央のやや北寄りに 40×100 cmほどの楕円形の貯蔵穴様土壌が検出されている。また, ピットbの南側の掘り込みも, その可能性があるだろう。壁溝は竪穴内を全周しており, 幅10~20cm, 深さ6~10cmである。床面は平坦で, 壁高は30cmほどである。

本遺構で特徴的なことは, 東辺の一部を除く各辺に沿って(切れ目なく), 幅1m前後の“高床部”のあることである。この“高床部”はユカ面より一段高くなっており, 貼り付けによるものであるが, これまでみてきた西中ノ沢遺跡や本遺跡の弥生時代後期の住居跡におけるベッド状遺構とは, その設置形態が異なっている。この遺構について



Fig. 157 道添第13号住居跡

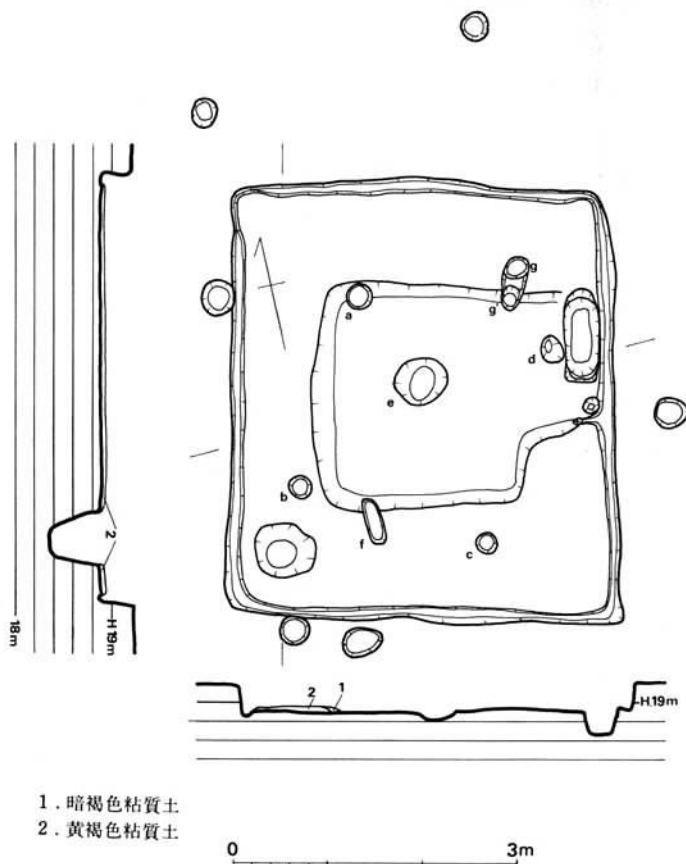


Fig. 158 道添第13号住居跡実測図(縮尺1/80)

は、ベッド状遺構とともに後に記したい。

第14号住居跡

(Fig. 159・160)

第13号住居跡の東側0.4m(最短距離)に位置し、南東部を第27号住居跡に切られている。

東西4.39m, 南北4.44mで南北にやや長く、南東隅に80×150cmほどの張り出し部があり、床面積は18.15m²を測る。主柱穴は、検出された範囲では4本柱の組合せは得られない。強いて求めれば、a・cとk・l・mおよび竪穴外のpのうちのどれかによる3本柱が考えられる。この場合ピットbはa-c線上にあり、a-cの垂直二等分線はk・l・mを通過してピットpの中心に乗っている。参考までに、これらピット間の中心距離を記しておく(単位cm)。

a~b(164), b~c(79)
a~k(207), k~c(220),
a~l(232), l~c(248),
a~m(263), m~c(258),
a~p(356), p~c(360),

炉は床面中央部付近に検出され、なかから焼土



Fig. 159 道添第14号住居跡

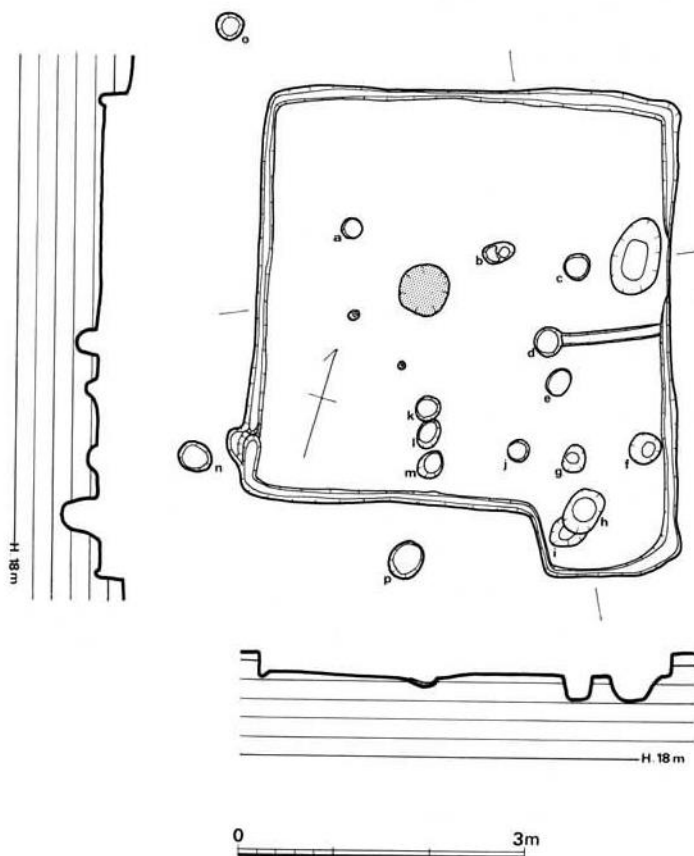


Fig. 160 道添第14号住居跡実測図(縮尺1/80)

が出土した。東辺中央のやや北寄りに $50 \times 84 \text{cm}$ の楕円形を呈する貯蔵穴様土壇が検出されている。ユカ面からの深さは 26cm である。壁溝はこの貯蔵穴様土壇の部分を除いて全周している。幅 $10 \sim 24 \text{cm}$ 、深さ $5 \sim 10 \text{cm}$ である。また、ピットdから東辺に延びている溝は、間仕切り溝と思われる。ベッド状遺構はなく、床面は中央部に向かって低くなっており、壁高は $30 \sim 40 \text{cm}$ である。

第15号住居跡 (Fig. 161~165)



Fig. 161 道添第15号住居跡

第13号住居跡の南側 6.5m (最短距離)に位置する。第14号住居跡との最短距離は 7.8m である。東西 4.11m 、南北 4.00m で(いずれも中央部での計測値)、床面積は 13.96m^2 を測る。各辺長は北辺 3.63m 、東辺 4.10m 、南辺 3.95m 、西辺 3.57m である。支柱穴は2本と考えられ、西側：径 31cm ・深さ 12cm 、東側：径 $21 \sim 27 \text{cm}$ ・深さ 25cm で西側がやや浅く、心心距離は 225cm である。主軸の方位は、仮りに2本の支柱穴を結ぶ線の方角をとれば、 $\text{N}81^\circ \text{E}$ である。炉は不明である。焼土は北西隅付近、南西隅付近、貯蔵穴様土壇のなか等から出土しているが、これらは本住居が火災を受けたためであろう。壁溝は全周しており、一部に壁小穴が認められた。壁小穴は計10個

検出され、北東隅付近から時計回りに1, 2, ……と番号を付した。それらの中心距離は、1～2 : 40cm, 2～3 : 168cm, 3～4 : 63cm, 5～6 : 54cm, 7～8 : 31cm, 8～9 : 32cm, 9～10 : 88cmで、2～3間を除く平均値は51.3cmである。床面は平坦で、壁高は30cm前後である。

炭化材の出土状況 (Fig. 163～165)

住居跡の南壁下より炭化材が集中して出土した。建築材であり、南から北方向に焼け落ちた状況である。炭化材は折り重なっており、その状況が、建築構造の一部を示したものと見えよう。炭化材中床面に密着し、最下層にあるのは、南北方向に平行して並んだ径10cm前後の丸太材である。3・5・7・9・10・11の6本の材がそれである。14はやや細味であるが、焼け細りという事も考慮して、同様の材かと思われる。5の材の上に北西から南東方向の材が乗り、住居跡南東隅よ

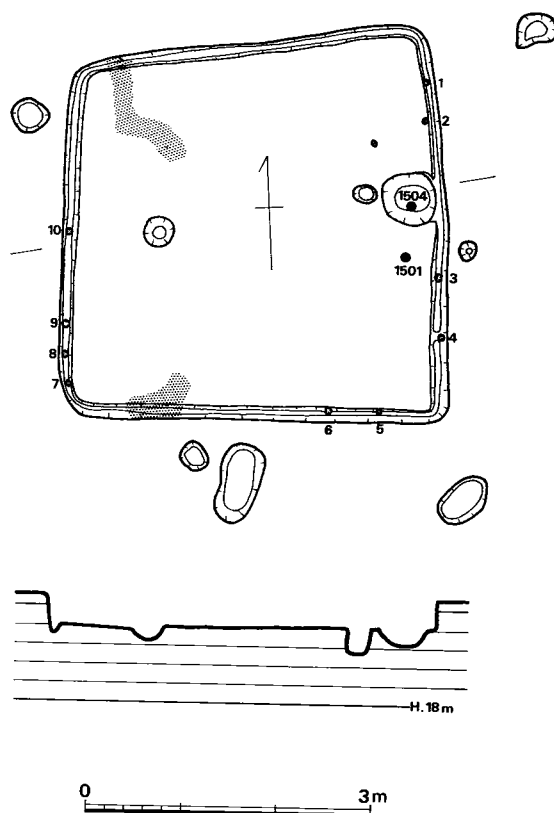


Fig. 162 道添第15号住居跡実測図 (縮尺1/80)

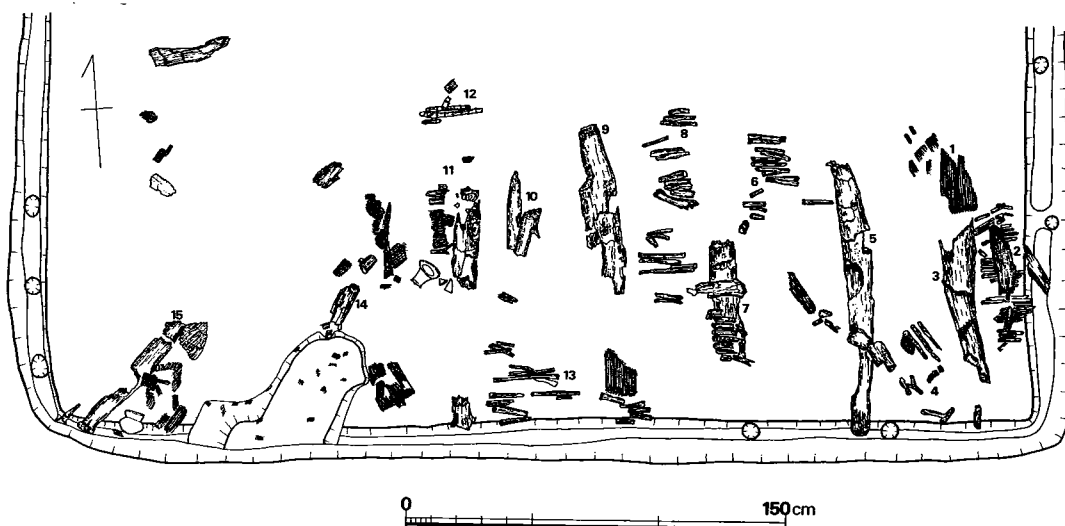


Fig. 163 道添第15号住居跡炭化物出土状況実測図 (縮尺1/30)

り落ち込んだと思われる。南西隅にも同様の材がみられる。7の材の上には竹を横組みしており8本分が密着していた。12も同様の竹である。密に横組みした材は竹のみでなく、小板も含まれている。2の小板の上にはカヤが南北方向に密着していた。住居跡南西隅に近い南壁側からは熱を受け赤変した土が出土し、下からはカヤや竹が出土した。

以上をまとめると建築材のうち最初に述べた平行する材が最も住居跡内側にあり、その外に竹や小板、その他にカヤ、その外に土という順序になる。それらを復元するならば、囲み材（第Ⅶ章第2節参照）を40cm前後の間隔で壁線と平行に建て並べ、住居隅のみは壁線と45°の角度をもって建てられる。それらの囲み材の上には密集する竹や小枝を横組みし、その外にカヤで屋根が葺かれた。また屋根材と地表の接する所には土手が築かれた、と以上のように想像される。なお、材質は別記の通りであるが、この内8と9はアオ



Fig. 164 道添第15号住居跡炭化物出土状況①



Fig. 165 道添第15号住居跡炭化物出土状況②

ダモと共通しており、垂木として用いる材と屋根内側に横組みした小枝が同種だという事は、材の加工法を知る上で興味深い。建築構造についての詳細は第VII章第2節の考察を参照されたい。

第16号住居跡 (Fig. 166・167)

第15号住居跡の東側37.6m (最短距離) に位置する。南東の第17号住居跡との最短距離は15.3mである。

長軸4.77m, 短軸4.07mで, 床面積は16.84m²を測る。支柱穴は長軸上の2本で, 西側: 径23cm・深さ40cm, 東側: 径22cm・深さ32cm, 心心距離は205cmである。主軸の方位はN98.5°Eを指す。炉は支柱穴間の掘り込みと思われるが, 焼土は検出されなかった。南辺中央の壁に接して, 70×90cmほどの略長方形を呈する貯蔵

穴様土壌が検出された。ユカ面からの深さは15cmほどである。なかから高杯が出土している。壁溝はこの土壌部分を除き全周している。幅10~24cm, 深さ7~10cmである。北辺中央部と西辺の北寄りでは, それぞれ一対のピット状の掘り込みが住居内側に向かって突き出ている。それらの心心距離は北辺側: 93cm, 西辺側: 100cmである。また, 貯蔵穴様土壌の西側に, 壁に対して直

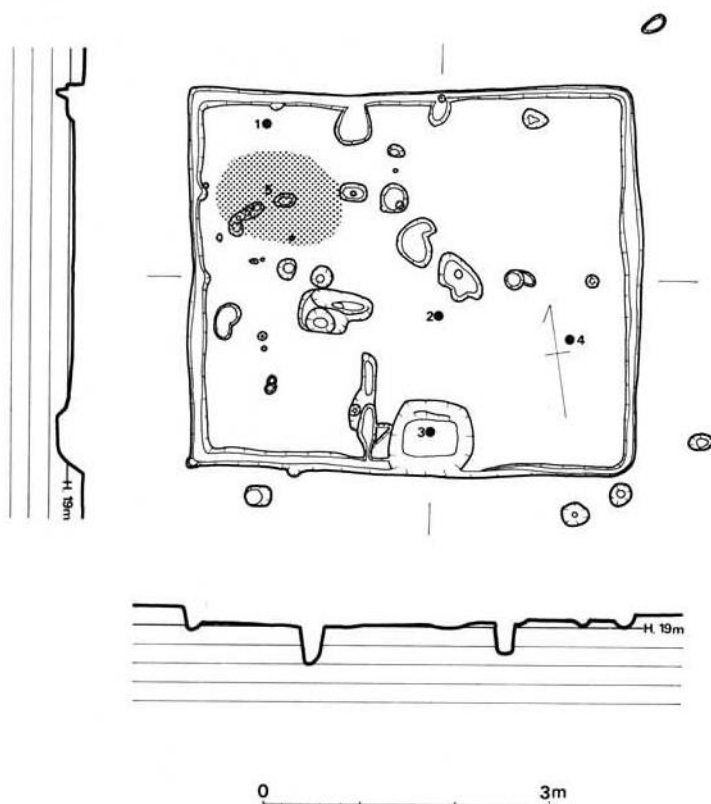


Fig. 166 道添第16号住居跡実測図 (縮尺1/80)



Fig. 167 道添第16号住居跡

角の方向に長さ114cmの溝が検出された。この溝の底面は2つに分けられ、下端中央部での計測値は北側：幅7cm・長さ35cm、南側：幅10cm・長さ43cmである。この溝は間仕切りに関連する遺構と思われる。ユカ面は柔らかく平坦で、壁高は15~20cmである。

なお、Fig. 166 の・は土器の出土地点で、1. 小形丸底壺（ユカ面）、2. 高杯（ユカ面）、3. 高杯（落込み）、4. 壺（ユカ面）がそれぞれ出土し、5の周辺はユカ面上に土器片が多数散乱していた。

第17号住居跡 (Fig. 168~171)

第16号住居跡の南東15.3m（最短距離）に位置する。本遺跡では、最大の規模をもつ住居跡である。

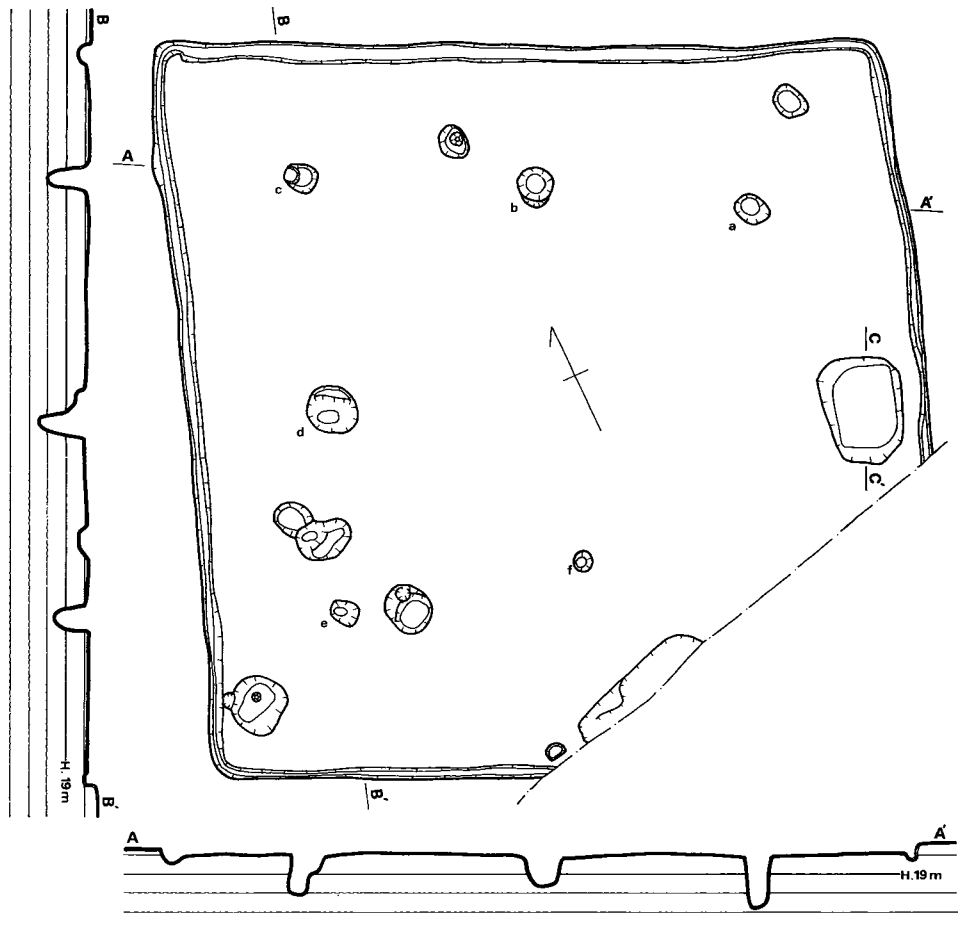


Fig. 168 道添第17号住居跡実測図（縮尺1/80）

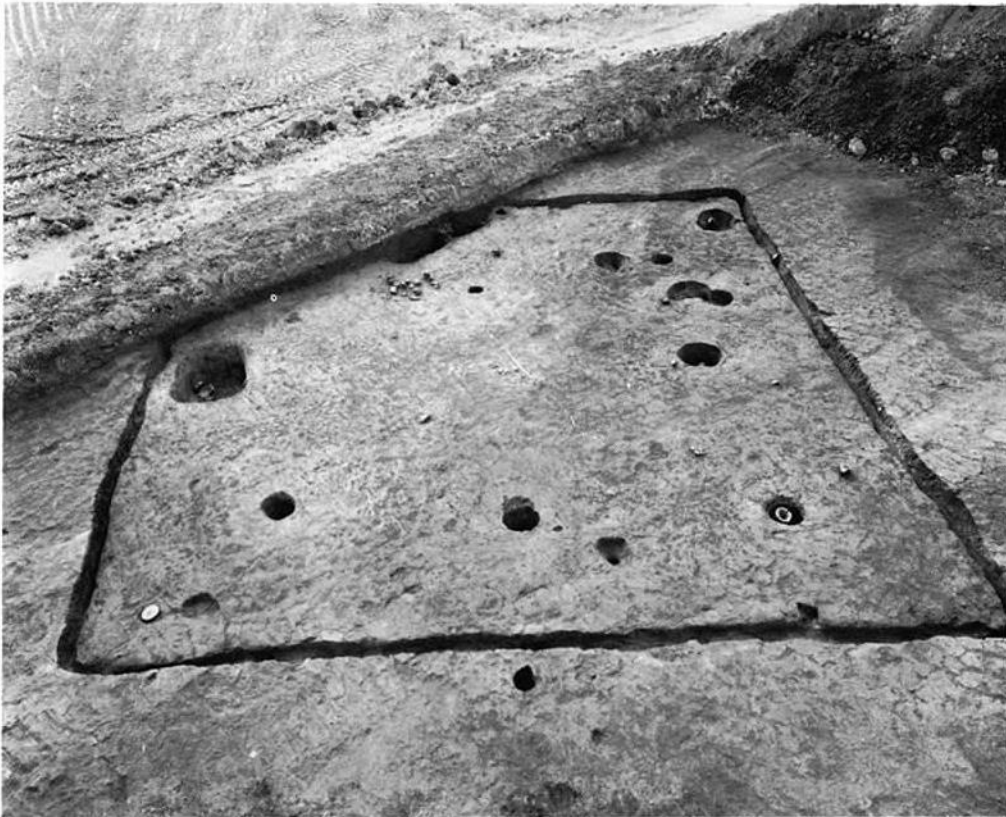


Fig. 169 道添第17号住居跡

東西7.85m, 南北7.82mで, 床面積は61.23m² (推定) を測る。北東辺7.55m, 南東辺4.40m, 南西辺3.41m, 北西辺7.74mを検出したが, 南隅は道路下にあるため調査できなかった。プランは平行四辺形状に歪んでいる。主柱はa~eの5個の柱穴位置からみると, 2間×2間の8本柱と考えられる。各主柱穴の規模は, a: 径33~40cm・深さ54cm, b: 径40cm・深さ29cm, c: 径30~37cm・深さ41cm, d: 径50~54cm・深さ48cm, e: 径22~30cm・深さ35cmである。各柱穴間の心距離は, a~b: 230cm, b~c: 257cm, a~c: 487cm, c~d: 260cm, d~e: 207cm, c~e: 466cmで, a~cはc~eよりも21cm長い。また, ピットfは予想される位置よりも若干内側にあるが, b-fラインはc-eラインおよび北西辺とほぼ平行する。b~f: 405cm, e~f: 258cmを測る。A-A'の方位はN119°E, B-B'の方位はN18°Eをとる。焼土は一ヵ所のみ, 壁溝のなかからユカ面にかけて少量みられたが, 灰はなかったようである。南東辺中央の壁近くに85×110cmほどの貯蔵穴様土壌が検出され, なかから蓋・高杯等が出土した (Fig. 170)。また, ピットfの南側の掘込みは2つのピットで, なかから甕・埴が出土している。壁溝は全周しており, 幅8~23cm, 深さは4~8cmである。ユカ面は平坦で

柔らかく、壁高は10~15cmである。

なお、西隅のピットから小形丸底壺が、ピットcから高杯が、東隅のユカ面から高杯がそれぞれ出土している。

第18号住居跡 (Fig. 172)

発掘範囲の南東端に位置しており、第17号住居跡との最短距離は約59mで、他の遺構からは離れている。なお、本竪穴内の長方形の掘り込みを、概報では第19号住居跡としていたが、これは第18号の一部と考えられることから全体を第18号として一括し、第19号は欠番とすることにした。

各辺長は北東辺5.94m、南東辺5.98m、南西辺6.20m、北西辺5.78mで、床面積は35.15m²を測る。主柱穴はピットa・b・c・dの4個で、各柱穴の規模はa：径21cm・深さ53cm、b：径19cm・深さ43cm、c：径30cm・深さ51cm、d：径23cm・深さ56cmである。各柱穴間の心心距離はa～b：257cm、b～c：257cm、c～d：244cm、d～a：256cmで

ある。d-c間の南東側に50×65cmほどの貯蔵穴様土壇が検出されており、なかから壺が出土した。炉・壁溝は認められなかった。南西壁の一部を除き、“高床部”が検出されている。幅は南東壁側約80cm、北東壁側約130cm、北西壁側240cm前後である。ユカは北西側がやや低くなっており、壁高は10cm前後である。



Fig. 171 道添第17号住居跡貯蔵穴様土壇

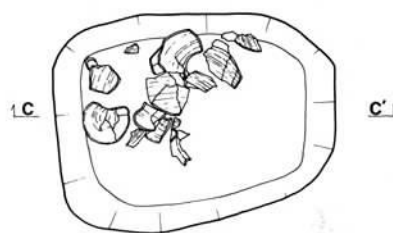
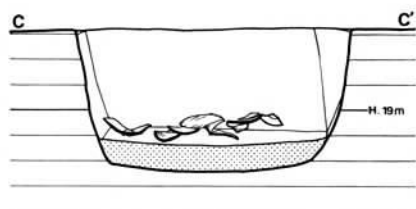


Fig. 170 道添第17号住居跡貯蔵穴様土壇内土器出土状況 (縮尺1/30)

第20号住居跡

(Fig. 173・174)

第15号住居跡と第16号住居跡とのあいだに位置する。古墳時代後期の住居跡群は本遺構を東端とし、これより西側の限られた範囲に集中して発見されている。

東西4.16m、南北4.25mで、床面積は17.05m²を測る。各辺長は北辺3.81m、東辺3.92m、南辺4.18m、西辺4.02mである。D-D'の方位はN158°Eを指す。

主柱穴はa・b・c・dのピットと思われる、各ピットの規模はa：径24~31cm・深さ28cm、b：径43cm・深さ24cm、c：径40cm・深さ25cm、d：径20cm・深さ36cmで、これら4個のピットの中央に径40cm前後・深さ30cmのピットがある。竪穴内で検出されたピットは、以上のほかに9個あるが、これがどのような機能をもっていたのかは不明である。

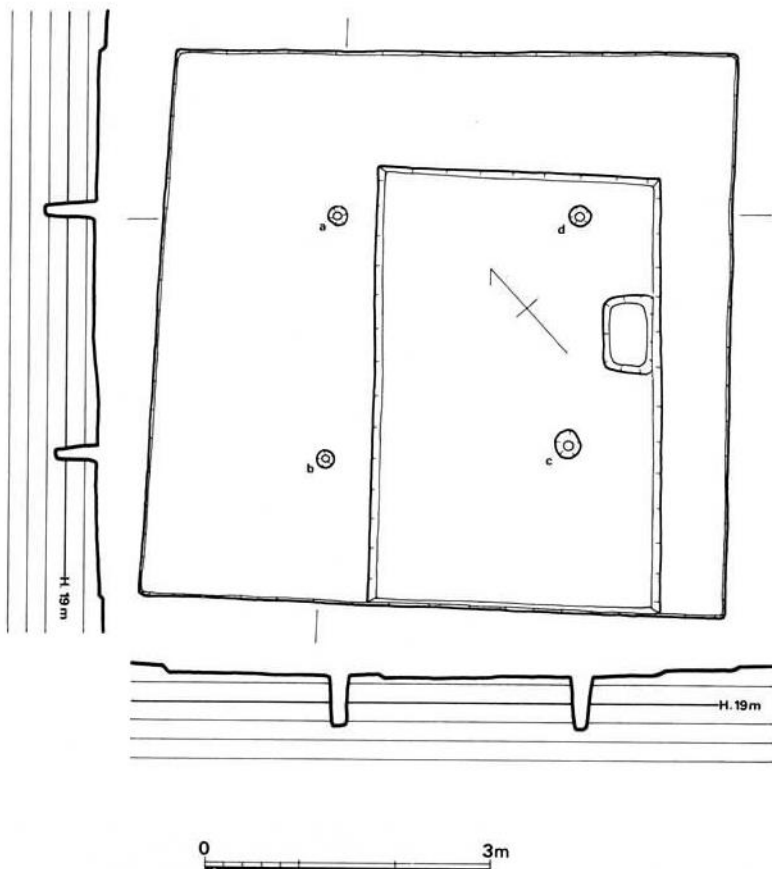


Fig. 172 道添第18号住居跡実測図 (縮尺1/80)

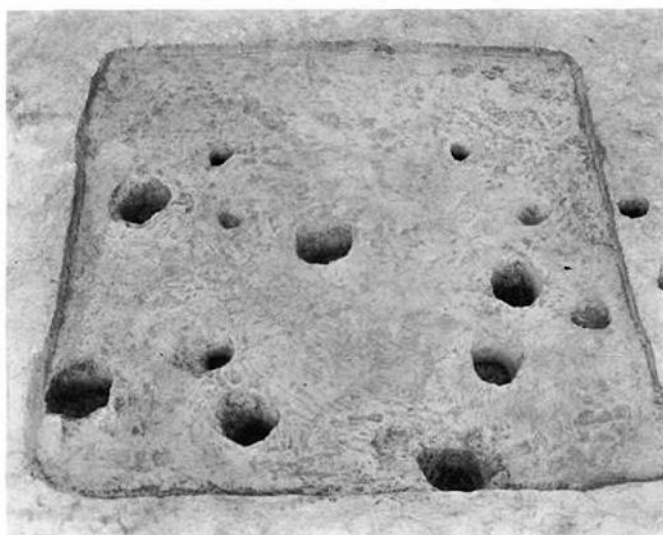


Fig. 173 道添第20号住居跡

る。焼土は北辺中央の壁に接して検出されており、おそらくこの部分にカマドが築かれていたと思われる。壁溝は認められなかった。ユカ面は平坦で、壁高は10cm前後である。

第21号住居跡

(Fig. 175・176)

第20号住居跡の西側4.3m(最短距離)に位置する。第28号住居跡との最短距離は約5m, 第25号住居跡とのそれは3.6mである。

東西4.29m, 南北4.20mで、床面積は15.78m²を測る。各辺長は北辺4.00m, 東辺4.09m, 南辺3.96m, 西辺4.05m

で、北辺の凹凸が著しく、東辺中央部が外方へ若干張っている。D-D'の方位はN10°Eをとる。支柱穴はa・b・c・dの4個で、径40~50cm・深さ40~60cmとしっかりしている。各柱穴間の心心距離はa~b:186cm, b~c:165cm, c~d:180cm, d~a:157cmで南北に長く、またa-d・b-cはそれぞれ北辺・南辺と平行にならない。カマドは北辺中央

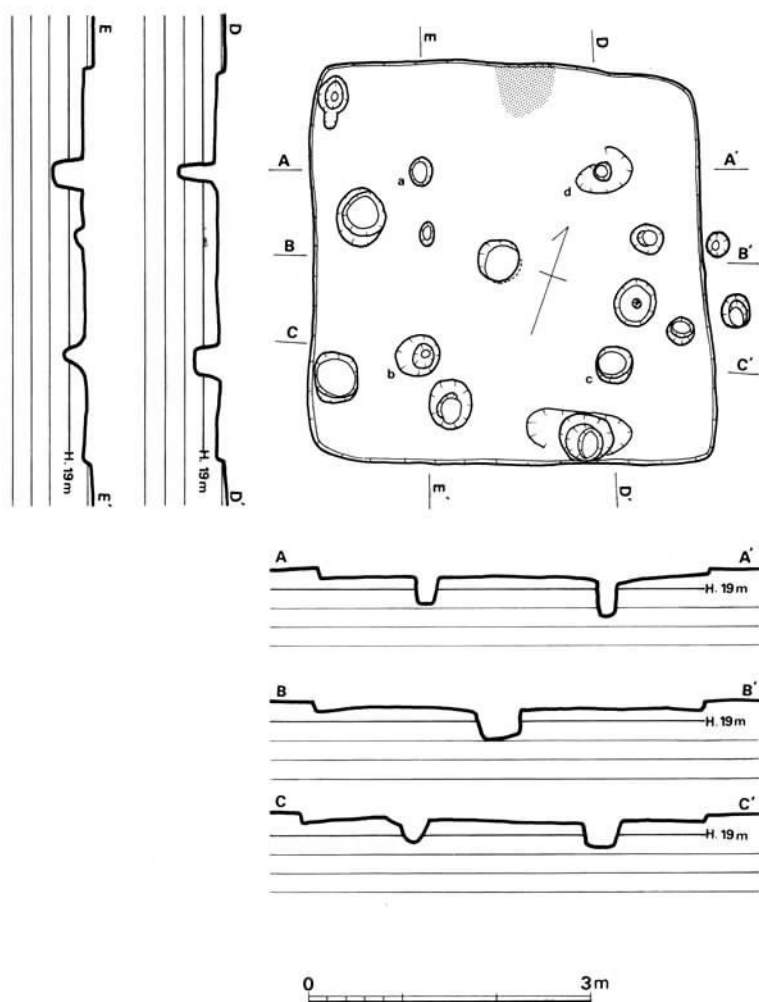


Fig. 174 道添第20号住居跡実測図(縮尺1/80)



Fig. 175 道添第21号住居跡

部の壁に接してつくられており、黒褐色粘質土・黄褐色粘質土の袖部が遺存していた。内部の底面からは焼土が検出されている。カマド北端の小ピットは煙出しの位置にあるが、焼土面を切っており、後世のものと思われる。壁溝は認められなかった。ユカ面は中央部が若干高く、壁高は5~10cmである。

第22号住居跡

(Fig. 177)

第21号住居跡の北西8.6m(最短距離)に位置する。南側の第23号住居跡との最短距離は1.2mである。

西側が用水路に切られているため東西長は不明である。南北は4.77mを測る。西辺の位置の推定には2案が考えられる。I案：カマドの位置を北辺中央部と考えると、東西長は約5mとなる。II案：ピットa・b・c・dを支柱穴とすると、b-cと東辺との距離は120~130cmとなり、これをa-b側へ折り返すと、東西長は4.2m前後となる。本遺跡でのカマドの位置は辺の中央部に設置するのがほとんどであり、且つピットa・b・c・dは径・深さ等からみて支柱穴と考えられることから、I・II案を総合して東西長は約5m、支柱穴は全体にやや東寄りと推定しておく。なお、a・b・c・dの心心距離は、a~b:125cm, b~c:169cm, c~d:159cm, d~a:161cmである。E-E'の方位はN17°Eをとる。カマドは北辺に設置されたと思われる、外方へ丸く張り出している。中央部から甕の破片が出土した。ユカ面は平坦で、壁高は10cm前後である。

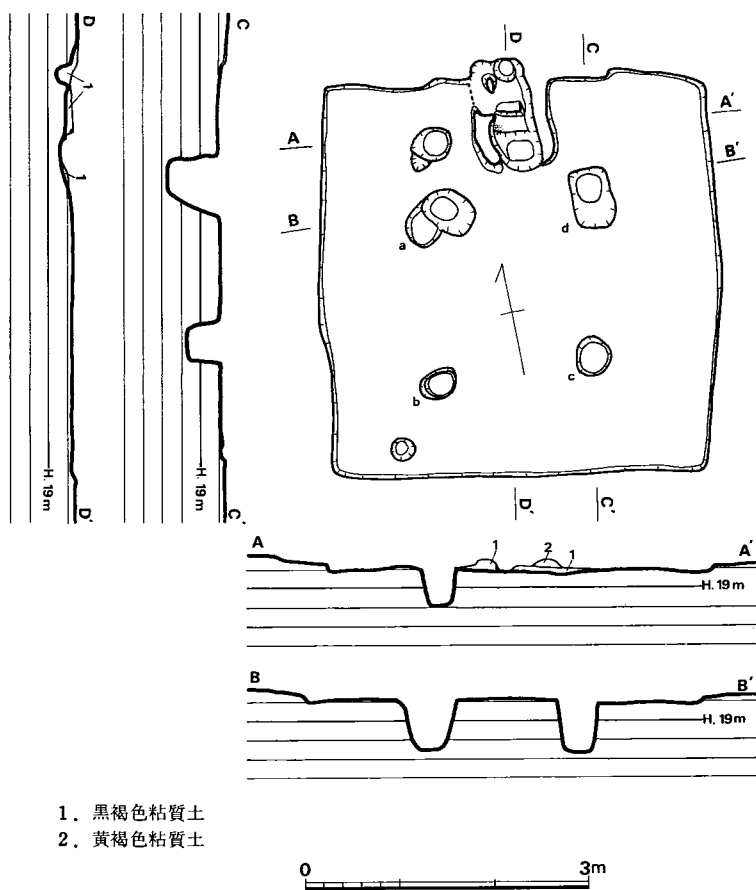
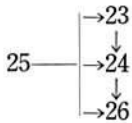


Fig. 176 道添第21号住居跡実測図(縮尺1/80)

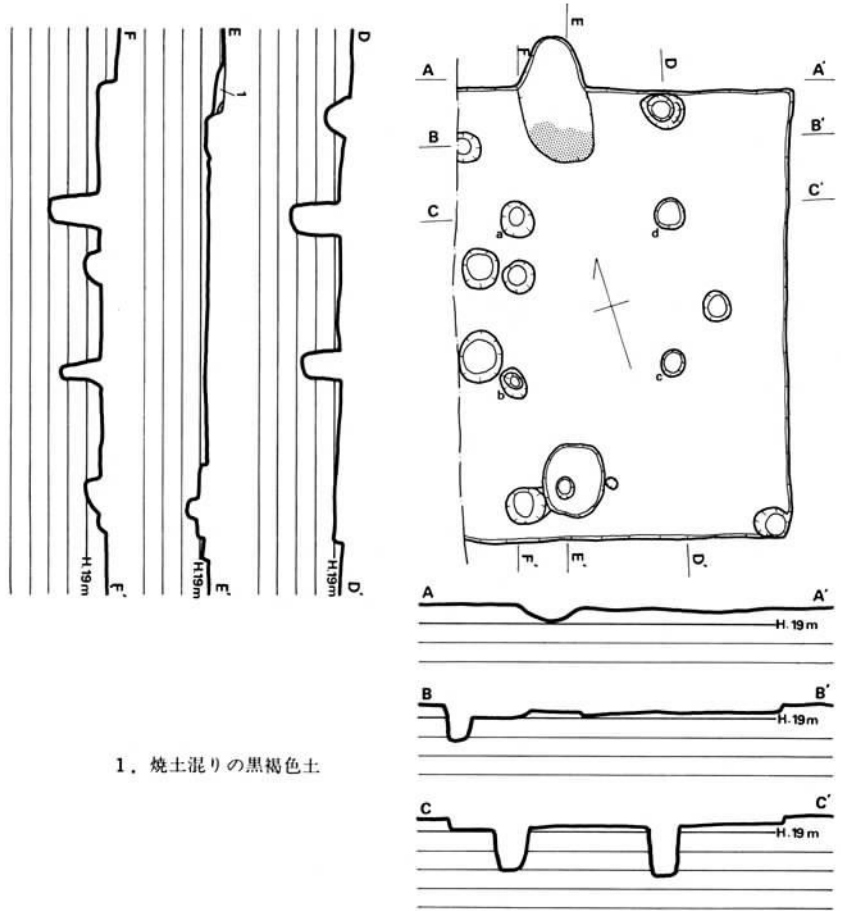
第23号住居
跡(Fig. 179)

第24・25・
26号住居跡と
重複しており、
23→24→26の
順に新しい。
第25号はこれ
ら3者に切ら
れており、4
者の関係は、



となる。この
付近は著しく
削平を受けて
いるため、壁
高は1~8cm
しかなく、遺
物も殆ど出土
しなかった。

本遺構は北
東隅を検出し
たのみで、詳
細は不明であ
る。この北東
隅と焼土の位
置から推定す
ると、規模は
東西約5m、
南北約4.5m
となる。主柱



1. 焼土混りの黒褐色土

Fig. 177 道添第22号住居跡実測図(縮尺1/80)



Fig. 178 道添第13~15・20~28号住居跡

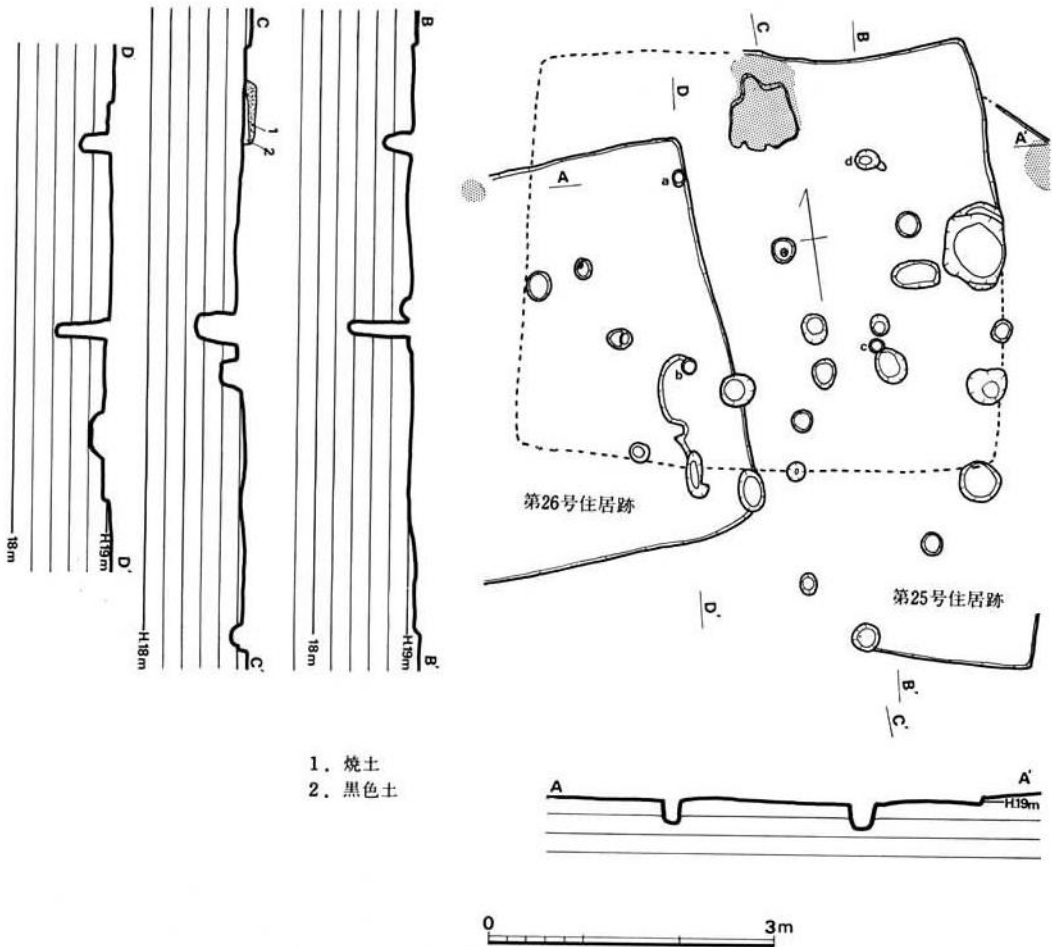


Fig. 179 道添第23号住居跡実測図 (縮尺1/80)



Fig. 180 道添第13・14・22～28号住居跡

穴はa・b・c・dのピットの組合せが、径・深さ・位置等からみて適合的である。

なお、各柱穴間の心心距離はa～b：202cm、b～c：199cm、c～d：198cm、d～a：197cmである。

第24号住居跡 (Fig. 181)

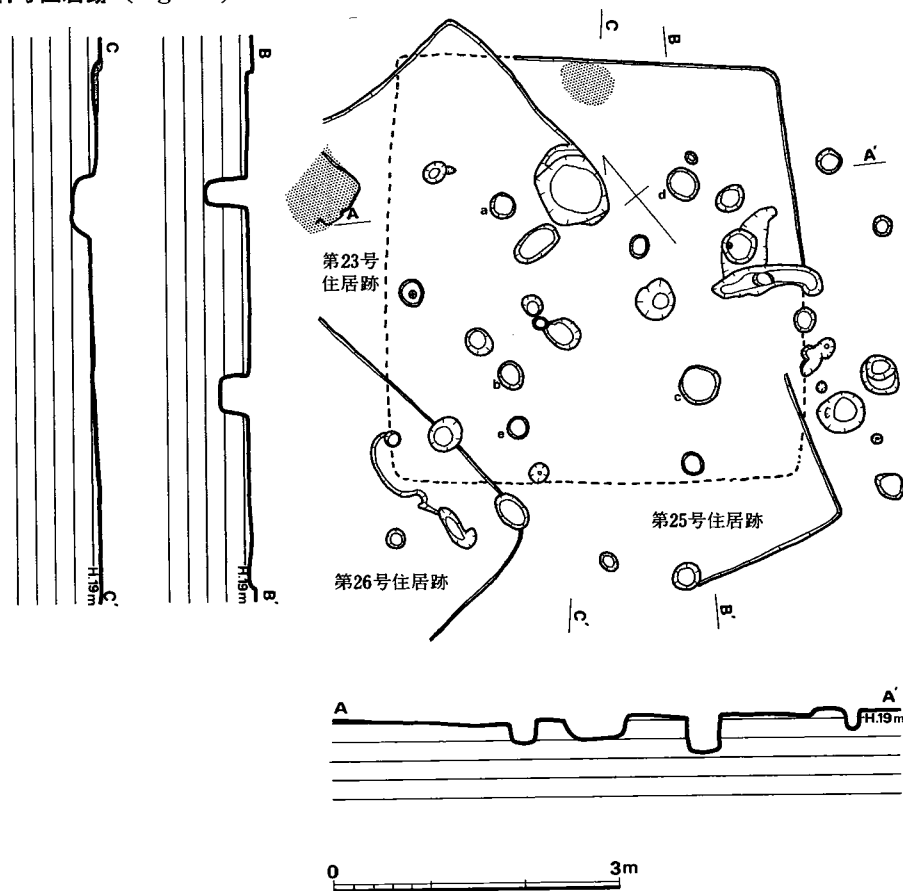


Fig. 181 道添第24号住居跡実測図 (縮尺1/80)

本遺構は北東辺と南東辺の一部を検出したのみである。焼土の位置および推定される支柱穴の位置等から、東西約4.5m、南北約4.5mの規模が復原される。支柱穴はa・b・c・dまたはa・e・c・dの組合せが考えられる。各柱穴間の心心距離はa～b：181cm、b～c：200cm、c～d：215cm、d～a：192cm、a～e：237cm、e～c：198cmである。

第25号住居跡 (Fig. 182)

南東隅を検出したのみで、本遺構に属すると思われる焼土は検出されなかった。南東隅の位置から推定すると、支柱穴はa・b・c・dのピットの組合せが考えられる。さらに、柱穴の位置と遺存壁の方向から、東西約4.5m、南北約4.4mの規模が推定される。

なお、各柱穴間の心中心距離は $a \sim b : 186\text{cm}$, $b \sim c : 198\text{cm}$, $c \sim d : 174\text{cm}$, $d \sim a : 200\text{cm}$ である。

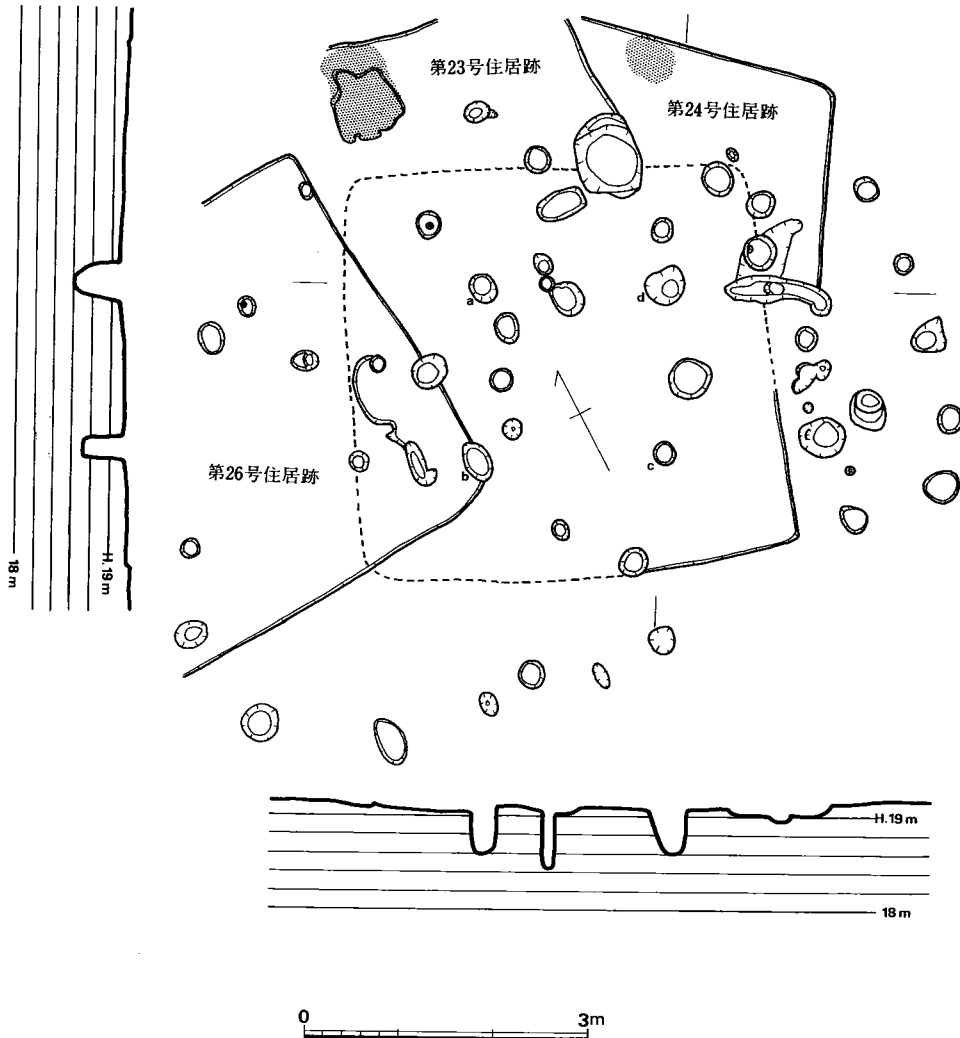


Fig. 182 道添第25号住居跡実測図 (縮尺1/80)

第26号住居跡 (Fig. 183)

東西 4.33m , 南北 4.22m (いずれも中央部での計測値) で、床面積は 17.51m^2 を測る。各辺長は北辺 4.37m , 東辺 4.03m , 南辺 3.94m , 西辺 4.10m である。支柱穴は $a \cdot b \cdot c \cdot d$ のピットであろう。径 $22 \sim 30\text{cm}$, 深さ 50cm 前後で、ほぼ一定している。各柱穴間の心中心距離は $a \sim b : 202\text{cm}$, $b \sim c : 201\text{cm}$, $c \sim d : 208\text{cm}$, $d \sim a : 206\text{cm}$ である。B-B'の方位は $N178^\circ E$ を指す。北辺中央部に焼土が検出されており、おそらくこの位置にカマドが設置されていたと

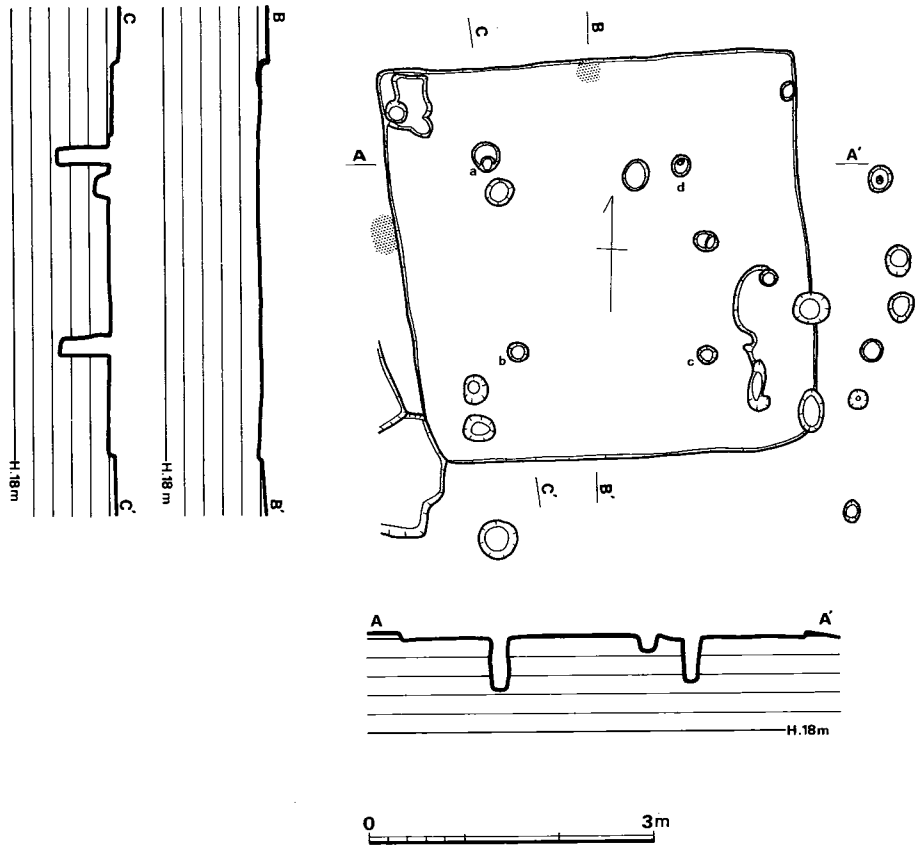


Fig. 183 道添第26号住居跡実測図 (縮尺1/80)

思われる。ユカ面は平坦で、壁高は5～8cmである。

第27号住居跡 (Fig. 184)

第14・26号住居跡と重複している。14→27の順に新しいが、第26号との関係は不明である。

本遺構は南辺と東西両辺の一部を検出したのみであるが、第14号と第26号とのあいだに焼土が検出されており、これを目安として東西約4.3m、南北約4.5mの規模が推定される。支柱穴はピットa・b・c・dであろう。柱穴の規模は径30cm前後、深さ40～55cmである。各柱穴間の中心距離はa～b:199cm, b～c:165cm, c～d:178cm, d～a:184cmを測る。a～dの中心とb～cの中心を結ぶ線は焼土を通り、b～c間のピットおよび竪穴外のピットに乗る。この線の方法はN66°Eを指す。削平を受けているため、壁高は5cm以下である。

第28号住居跡 (Fig. 185・186)

第27号住居跡の南側0.4m (最短距離) に位置する。東側の第21号住居跡との最短距離は、4.9mである。

東西4.54m, 南北4.67mで, 床面積は20.30m²を測る。各辺長は北辺4.51m, 東辺4.34m, 南辺4.37m, 西辺4.56mである。支柱穴はピット a・b・c・d であろう。径28~48cm, 深さは45cm前後で, 各柱穴間の心心距離は a~b : 205cm, b~c : 199cm, c~d : 203cm, d~a : 193cmである。南北方向にやや長い。C-C'の方位は N2°Eをとる。北辺中央の壁に接して焼土が検出されており, おそらくこの部分にカマドが設置されていたと思われる。北西隅に100×110cmほどの貯蔵穴様土壌が検出された。壁溝はみあたらず, ユカ面は平坦で, 壁高は5cm前後である。

なお, 焼土の内側寄りで甕の破片が, 焼土と貯蔵穴様土壌とのあいだのユカから杯が出土している。

第29号住居跡(Fig. 187)

発掘範囲の南西端に位置する。第28号住居跡との最短距離は15.7mである。

東西4.87m, 南北4.98mで, 床面積22.96m²を測る。各辺長は北辺4.99m, 東辺

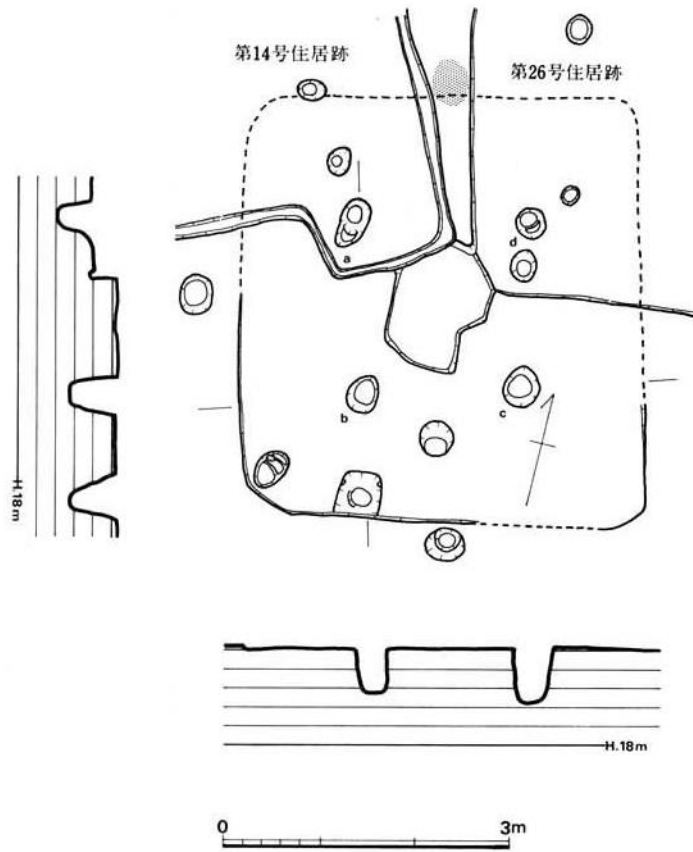
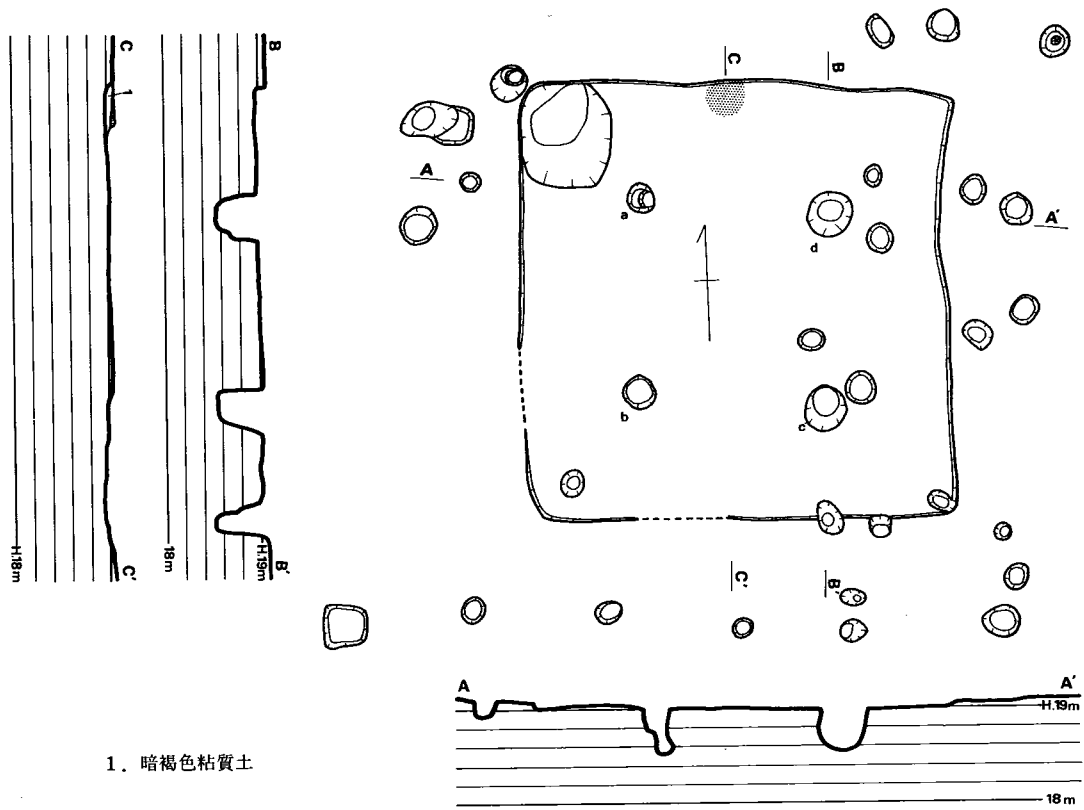


Fig. 184 道添第27号住居跡実測図(縮尺1/80)



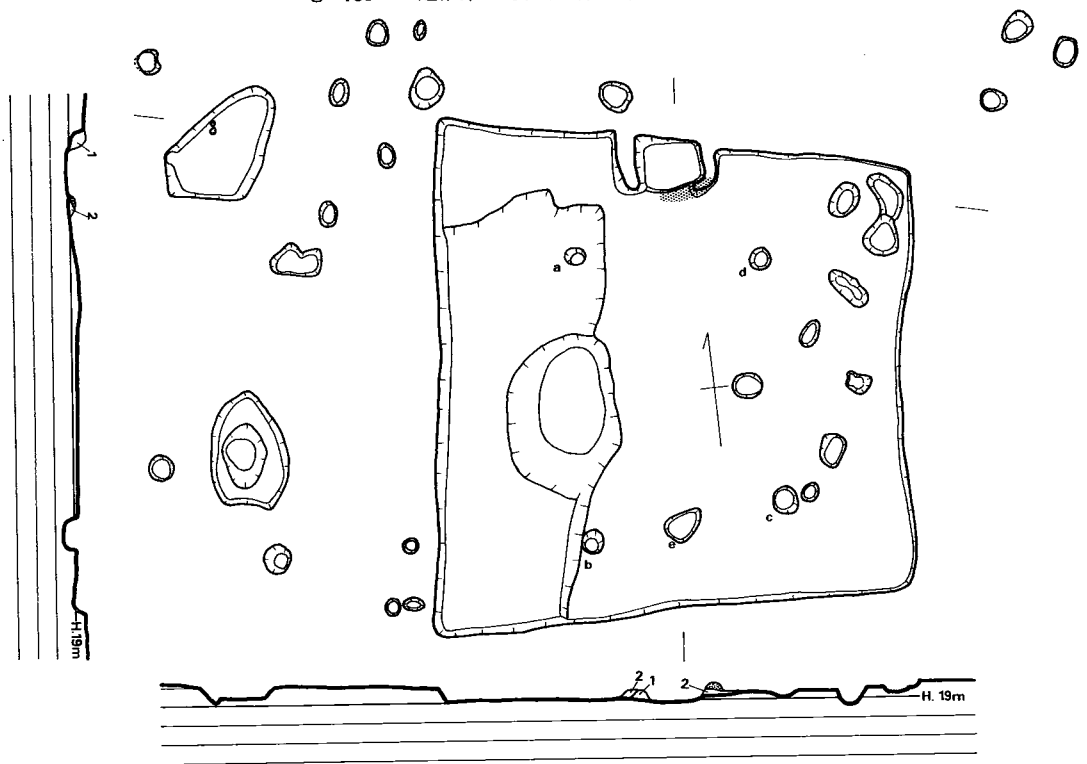
Fig. 185 道添第28号住居跡



1. 暗褐色粘質土

0 3m

Fig. 186 道添第28号住居跡実測図 (縮尺1/80)



1. 褐色粘質土
2. 黒色土混りの暗褐色土

0 3m

Fig. 187 道添第29号住居跡実測図 (縮尺1/80)

4.38m, 南辺 5.03m, 西辺 5.47m で、平面プランは梯形を呈する。主柱穴はピット a・b・c・d と思われる。各柱穴間の心中心距離は a～b : 304cm, b～c : 210cm, c～d : 257cm, d～a : 195cm である。a—d の中点と b—c の中点を結ぶ線はカマドを通り、ピット e に乗っている。この線の方向は N3°E をとる。カマドは北辺中央に設置されており、焼土が検出されている。西辺に沿って 170×450cm ほどの長方形を呈する土壌が検出されており、さらにその東辺中央に 120×175cm ほどの楕円形の掘り込みが認められた。この土壌の性格は不明である。ユカ面は平坦で、壁高は 5～20cm である。

(2) 溝状遺構

溝状遺構は計 5 本検出し、北側から第 1, 2, …と番号を付した。

第 1・2 号溝

発掘範囲の北端で検出された。両者はほぼ平行して北西—南東方向に延びる。幅 0.8m ほどである。2 号溝中より古墳時代以降の土錘が出土した。

第 3 号溝

第 9 号住居跡の南西約 1.3m のところから北西に向って延びる溝である。幅 30～40cm で、長さ約 23m にわたって検出した。

第 4 号溝

第 3 号溝の南西約 1m のところを第 3 号に平行して延びる短い溝で、幅 30～40cm, 長さ 7.3m を検出した。

第 5 号溝

本遺跡ではもっとも長く、全長約 90m を検出した。幅は 30～60cm である。第 5・8 号住居跡と重複しており、いずれも第 5 号溝が切っている。

(3) 出土遺物

住居跡の項で記した通り、前期の住居跡 7 軒と後期の住居跡 10 軒が検出されている。各住居跡出土の遺物は前期のそれが圧倒的に多く、後期の住居跡では出土例が皆無に近い。

出土遺物は土器のみであるので、前期の土師器と後期の土師器・須恵器に分けて記述する。

a 前期の土師器

各住居跡から万遍なく出土しているが、特に第 12 号住居跡と第 16 号住居跡からの出土例が多い。以下、各住居跡ごとの出土土師器について略記する。

第 12 号住居跡出土土師器 (Fig. 188・189)

床面上から夥しい量の土師器片が出土した。器種は甕 2 種・小形壺 2 種・高杯 2 種・碗 1 種である。

甕 1201の口縁部は上外方へ立ったのち直立し、端部近くは再び外反する。端部は丸い。胴部は球形である。1202の口縁部は緩かに外反し、端部は丸い。球形胴部をもつ。

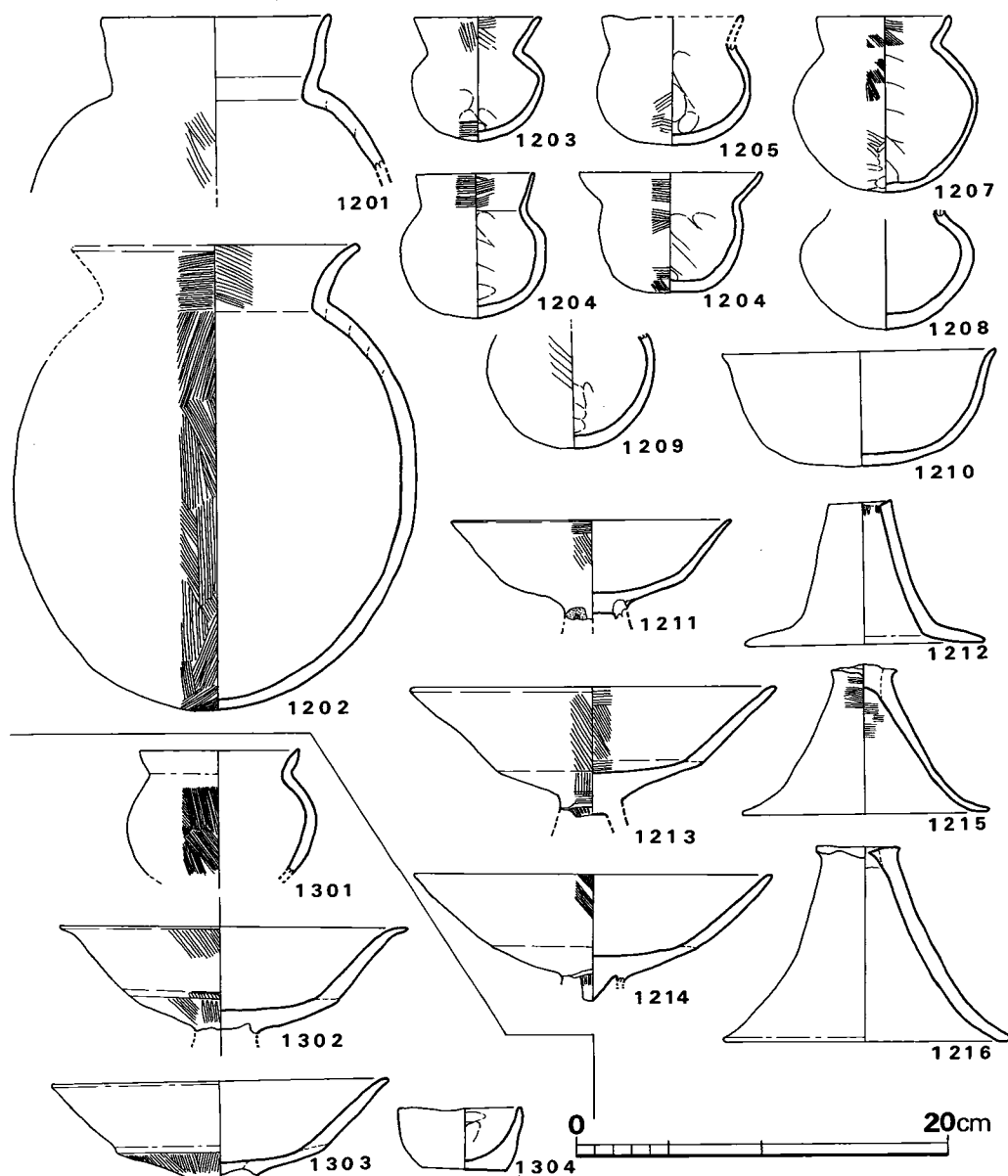


Fig. 188 道添第12・13号住居跡出土土師器実測図 (縮尺1/4)

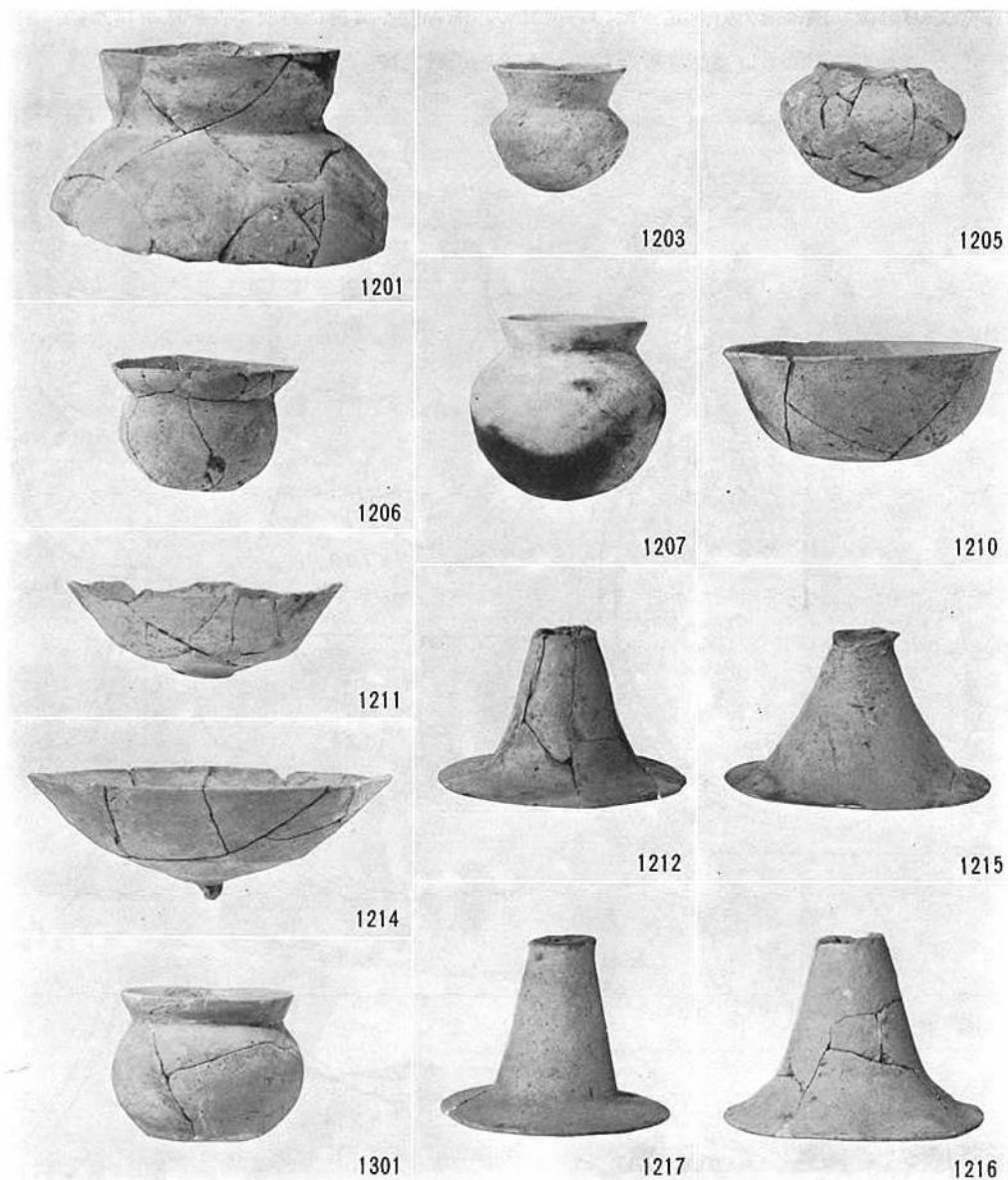


Fig. 189 道添第12・13号住居跡出土土師器

小形壺 口径が胴部径に比して小さいものと、大きいもの（1206）とがある。前者のうちには口縁部が上外方へ直線的に長く伸びるもの（1203・1204）と、内彎気味に伸びるもの（1205・1207）とが含まれる。口径の大きい1206は底部が平底気味で、口縁部は内彎気味に開き、端部は丸い。口縁部内外面はハケメ、胴部内面は指ナデ、外面ハケメで、1207では底部にヘラ削りを施している。

高杯 2類に区分けされる。Ⅰ 杯部は下半部から上半部にかけてなだらかに移行する。脚接合法は、杯部に脚部を刺し込む方式である。1211はこの類の高杯で、作りは整美で薄手である。この種の杯部には、1215の脚部が付されていたと考えられる。脚裾部は薄手で、大きく開く。Ⅱ Ⅰ類に比して杯部口径が大きい。杯部下半と上半の接合部稜が明瞭なもの(1213)と、不明瞭なもの(1214)とがある。脚接合法は脚部に杯部を刺し込むいわゆるソケット式である。1213は上半と下半の接合稜が内外面共に観察される。上半は外反気味に開いて後、直線的に外上方へ伸びる。脚接合ソケット部の下端は切り取られて短くなっている。1214の上半部は内彎気味に開く。ソケット部は長く引き伸ばしたままである。両者共ソケット部に縦方向の刻み目を施し、接合度合を高めている。この種の脚部としては1212と1216とがある。1212は裾部が強く屈折するのに対し、1216



Fig. 190 道添第12号住居跡土器出土状況



Fig. 191 道添第12号住居跡柱穴内土器出土状況



Fig. 192 道添第12号住居跡貯蔵穴様土壇内土器出土状況

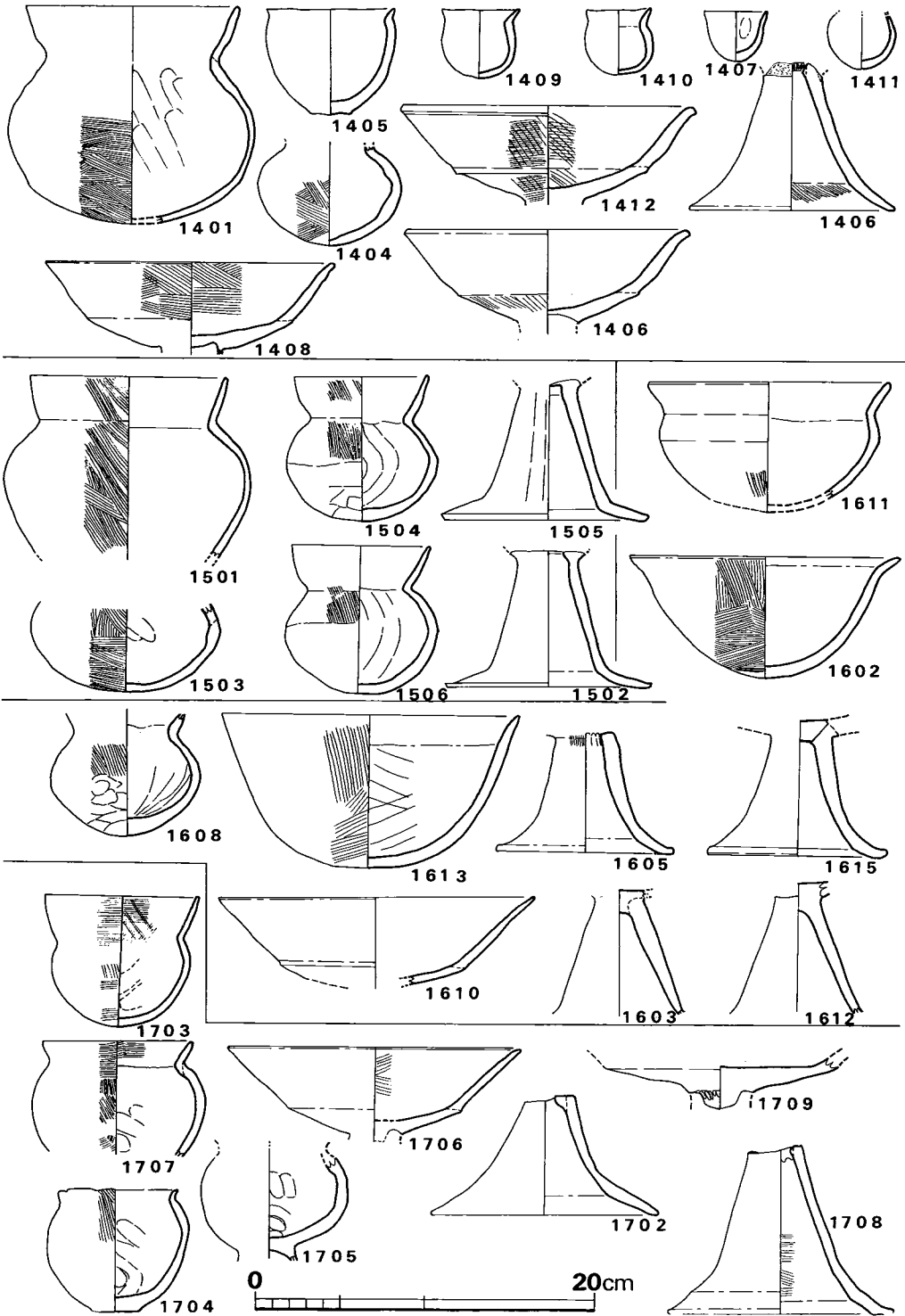


Fig. 193 道添第14~17号住居跡出土土師器実測図 (縮尺1/4)

の屈折度は弱い。成形法は同一で、上半両部を接合している。第17号住居跡の出土例よりして、1213の杯部には1216の脚部が付され则认为られる。

椀 1210の1点のみである。薄手で端部が僅かに外反する。

第13号住居跡出土土師器 (Fig. 188・189)

ベッド状段部より内側の床面上より出土した。器種は小形壺、高杯と小形土器である。

小形壺 1301は口径が胴部径より小さい類である。口縁は中間が太く、端部で尖る。

高杯 1302・1303共に杯部のみである。上半部と下半部の接合部稜が強い。1302は端部近くで強く外反し、端部は尖る。

小形土器 1304は椀形の小形土器である。底部は平底で、口縁部は直立する。内面に指圧痕を残している。

第14号住居跡出土土師器 (Fig. 193・194)

床面上の東半に集中して土器が出土した。特に1407・1409～1411の小形土器は貯蔵穴様土壇脇の一括出土品である。器種は甕・壺・小形壺・椀・高杯・小形土器である。

壺 1401は口縁部が内彎気味に開き、端部は丸い。胴部は偏球状である。肩の接合部がやや厚味を持つが、全体に薄く丁寧に内面をへら削りしている。

小形壺 1401は底部が尖り気味である。調整は粗く、内面にはマキアゲ痕を残す。

椀 1405は平底を持ち、口縁部は極く短かく外反し、端部が尖る。形状は1704と同一である。

高杯 杯部の3例共に中間接合部稜が立ち、中脹らみしながら開く、口縁部の形状には2様ある。1408は細まってかすかに外反し、端部は丸い。1406と1412は体部と同様な厚さを保ちながら強く外反し、端部は平坦である。この種の高杯は他住居跡出土の高杯に比べて厚手で、全体にドッシリした感じがある。1403の脚は裾部内面に稜をもって屈折する。杯部と脚部の接合法は脚頭の中空部に刻みを入れて杯底部凸起を刺し込む方式である。

小形土器 1409と1410は甕形、1407は鉢形、1411は壺形を模した精巧な小形土器である。全体に薄手で、ナデ調整も丁寧である。

第15号住居跡出土土師器 (Fig. 193・194)

床面の炭化材の下より土器が出土した。特に1504は東壁側の貯蔵穴様土壇中に堆積した焼土の下より出土した。器種は壺・小形壺・高杯である。

壺 1501は口縁部が直立気味に立ち、肩が脹っている。全体に薄手である。

小形壺 1503の全様を知る事は出来ないが、偏球胴部をもつ。1504と1506はほぼ同大・同形である。口縁部は内彎気味に長く伸び、端部は丸い。胴部外面下半はへら削りである。

高杯 脚部のみである。裾部は強く水平に近く屈折して開く。杯部との接合はソケット式である。

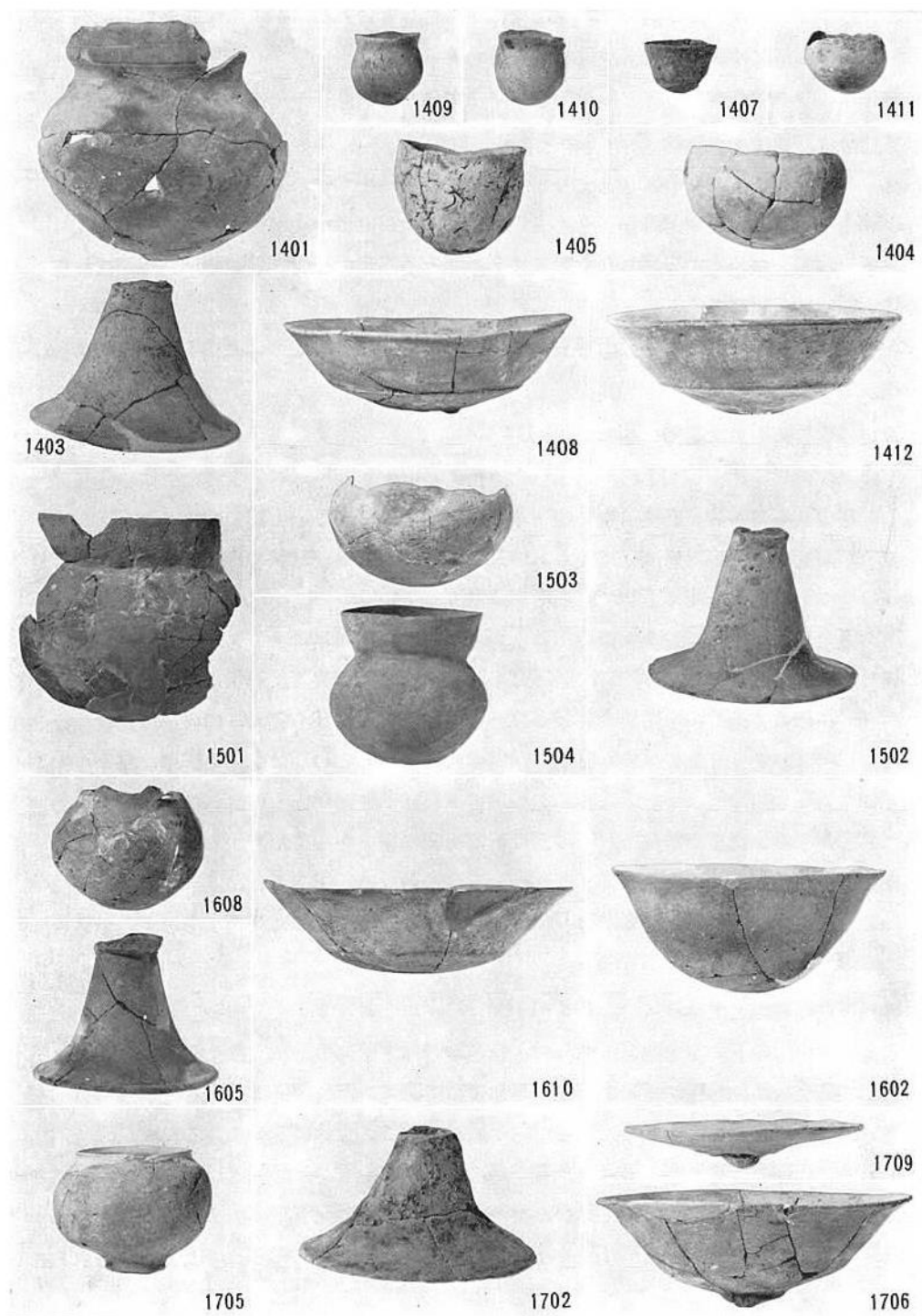


Fig. 194 道添第14~17号住居跡出土土師器

第16号住居跡出土土師器 (Fig. 193・194・196・197)

床面上の北西隅に夥しい量の土器が集中して出土した。また床面中央部と南壁側貯蔵穴様土壙中より高杯が出土した。器種は壺3種・甕3種・深鉢3種・小形壺・高杯であり、バラエティに富む。

壺 1617～1619の3点が含まれ、口縁部の形状を各々異にする。1619の口縁部は朝顔状に大きく開き、端部近くでさらに外反する。1618の口縁部はいったん横に脹ってから直立気味に伸び、端部は丸い。1617の口縁部は内彎しながら伸び、端部は尖る。内面へラ削りである。

甕 1620・1601の口縁部は内彎しながら開き、端部近くで外反し、端部は平坦である。胴部は球形で、内面にへラ削りが施されている。1606の口縁部は短かく、強く外反して、端部近くでさらに外反する。胴部は長球で倒卵形を呈すると思われる。1607の口縁部は上外方へ伸びてのち、僅かに屈折して外反する。端部は丸い。胴部は肩が脹る。

小形壺 1608は口縁部を欠損する。胴部は扁球状で、底部は尖る。胴部下半は外面へラ削り、内面は指のナデアゲである。

高杯 1610は中間接合部の稜が明瞭な類で、上半部は薄く引き伸ばされ、僅かに外反する。脚部はいずれも柱部が直線的で、裾部は短い。

深鉢 3個体が出土し、形態を各々異にする。1611は頸部が屈折する「く」字口縁を持ち、端部は丸い。1602は底部が狭く尖り気味で体部は大きく開き、口縁部が外傾する。1613の底部は広く緩やかな丸底で、体部から口縁部にかけては上外方へ伸びる。内部の調整は1611はヨコナデ、1602と1613は横方向のへラ削りである。

第17号住居跡出土土師器 (Fig. 193・194・196・197)

南東壁側の貯蔵穴様土壙中より甕(1701)、高杯(1701)、碗(1704)が集中して集土した。床面中央部からはまったく土器の出土を見なかった。器種は甕・小形壺・台付小形壺・碗・高杯である。

甕 1701の口縁部は強く屈折し、内彎気味に伸び、端部は丸い。胴部は古式の倒卵形のなごりを残している。内面のへラ削り調整は



Fig. 195 道添第17号住居跡貯蔵穴様土壙内土器出土状況

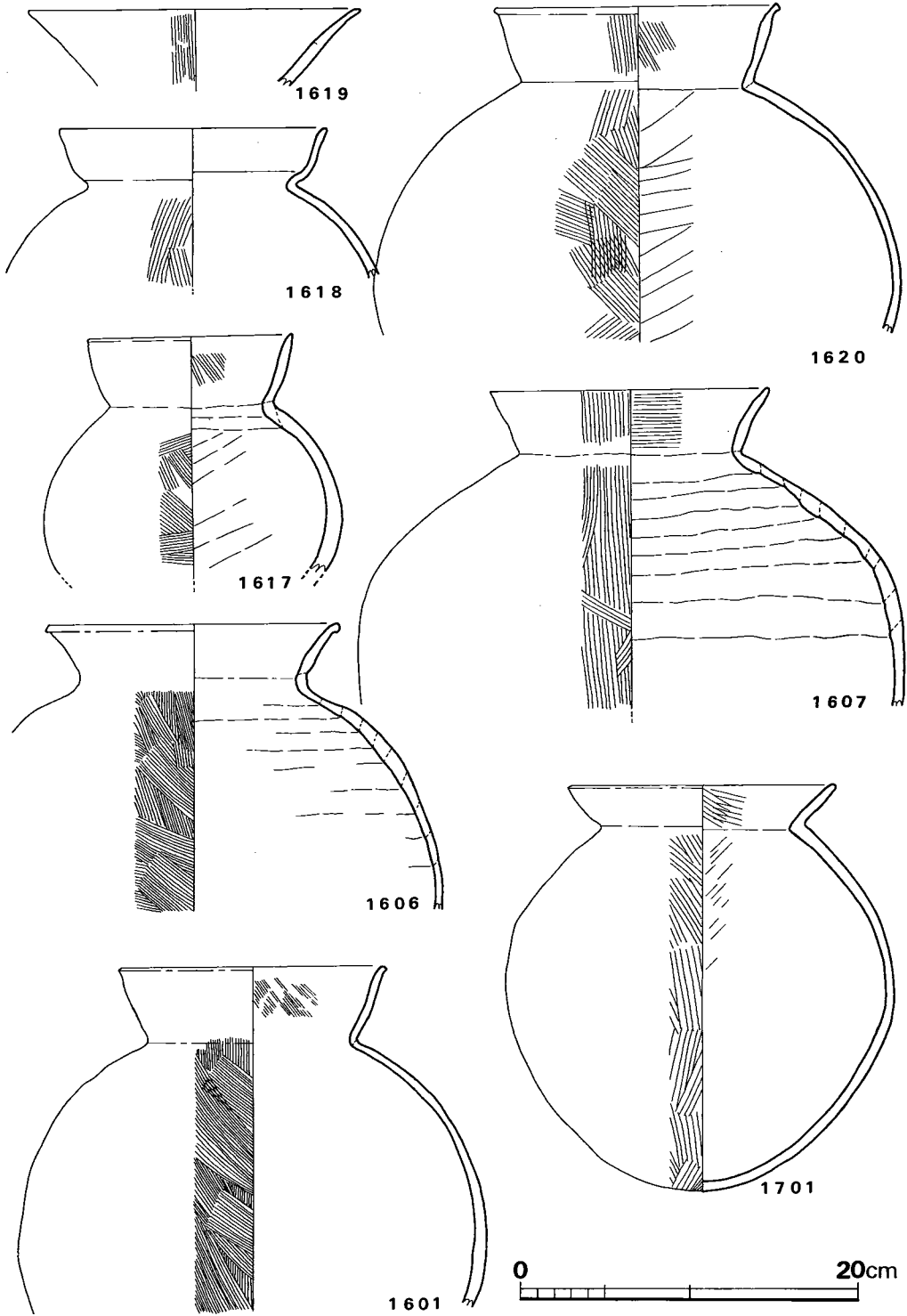


Fig. 196 道添第16・17号住居跡出土土師器実測図 (縮尺1/4)

丁寧である。

小形壺 1703の口径は胴部径より大きく、内彎して長く伸びる。1707の口縁部は短かく、端

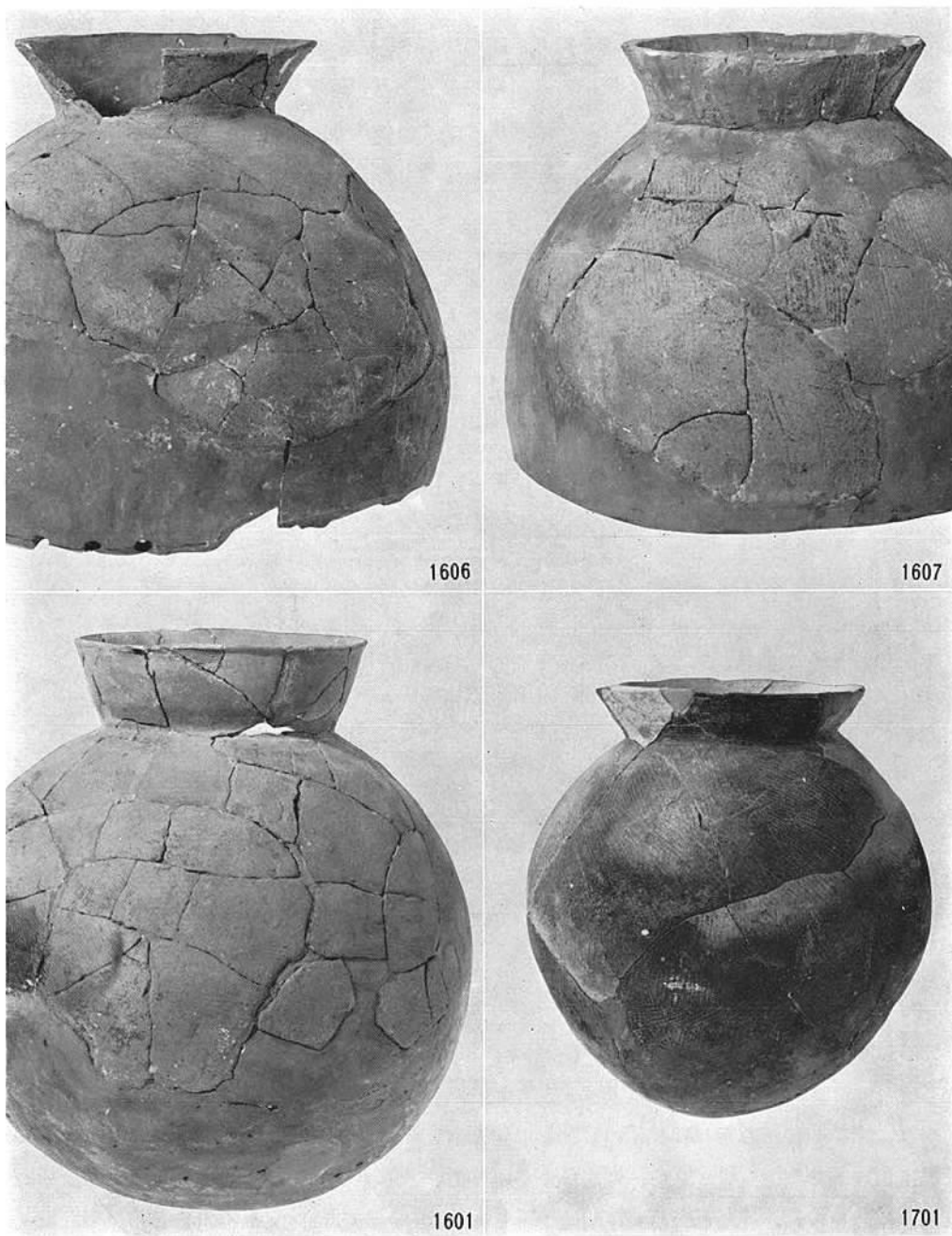


Fig. 197 道添第16・17号住居跡出土土師器

部は丸い。いずれも外面はハケメ調整, 内面は指によるナデツケである。1705は台付小形壺である。台部は基部を残すのみであるが, 大きく開くものである。焼成は悪く, 灰黄色を呈する。

碗 1704は小さく外反する口縁部を持ち, 端部はやや尖る。底部は平底をなす。

高杯 杯部は中間接合部で強く屈折し, 直線的に外上方へ伸びて端部へ至る。1709の脚接合ソケット部には刻み目が施されている。脚部は大小2種がある。1702は器高の割には広い裾部を持つのにに対し, 1708はその逆である。いずれも柱部と裾部の境内面に軽い稜をもつ。

第18号住居跡出土土器 (Fig. 198・199)

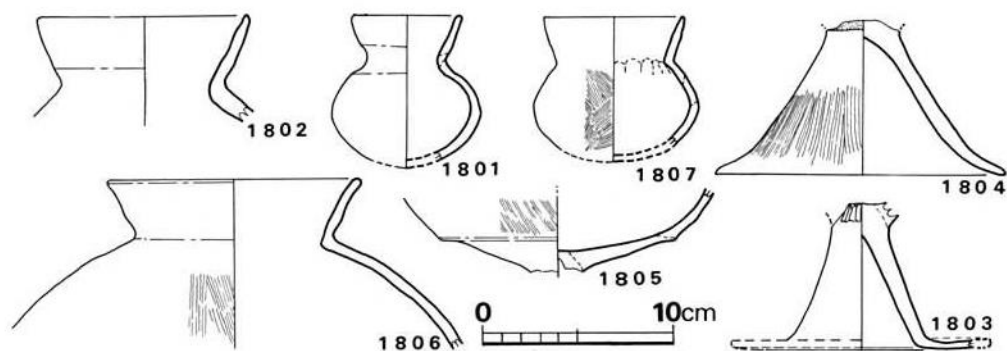


Fig. 198 道添第18号住居跡出土土器実測図 (縮尺1/4)

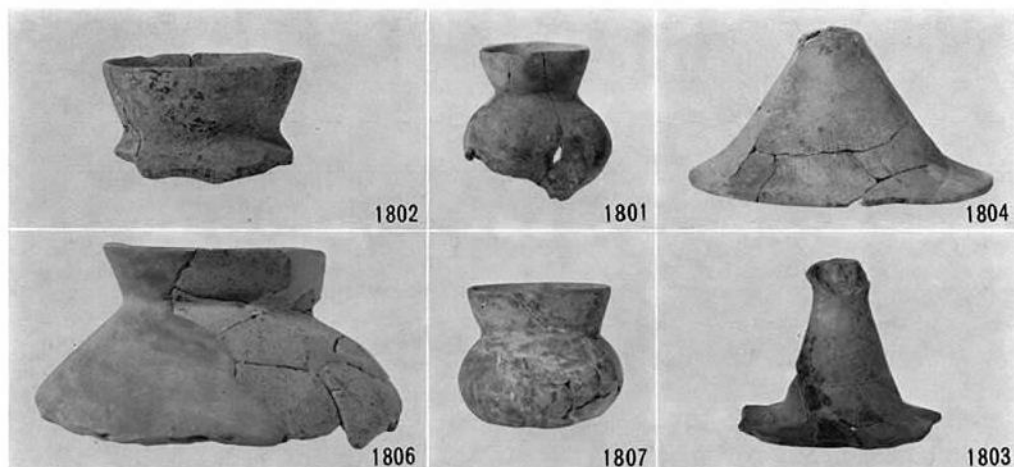


Fig. 199 道添第18号住居跡出土土器

甕には大小2種がみられるが, いずれも口縁部中央が屈折して脹り, 端部は丸い。小形壺の1801は口縁部は内彎気味に立ち, 頸部はよく締まっている。高杯脚には2種の形態がある。1804は広い裾部をもち, 柱部との境が不明瞭であるのに対し, 1803は柱部から屈折して水平な裾部をもつ。

b 後期の土器

後期の住居跡は先の別節で述べた通り、いずれも削平が著しく、床面からの出土遺物も僅少であった。第21・28・29号住居跡から若干の遺物を得た。2105の甕は外面の破損が甚しく、調整法不明である。内面はタテのへら削りである。28号住居跡の須恵器は竈西脇から出土した。2801・2802共口径8.3cmで、立ち上り高は0.4cmと低い。2908は竈中出土の土製支脚である。断面は不整円形である。29号住居跡からは他に甕・甔が出土しているが、細片のため図示しえなかった。

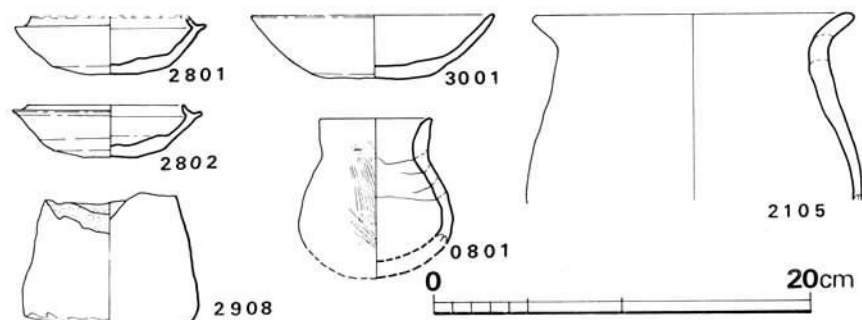


Fig. 200 道添各住居跡出土土師器・須恵器実測図(縮尺1/4)

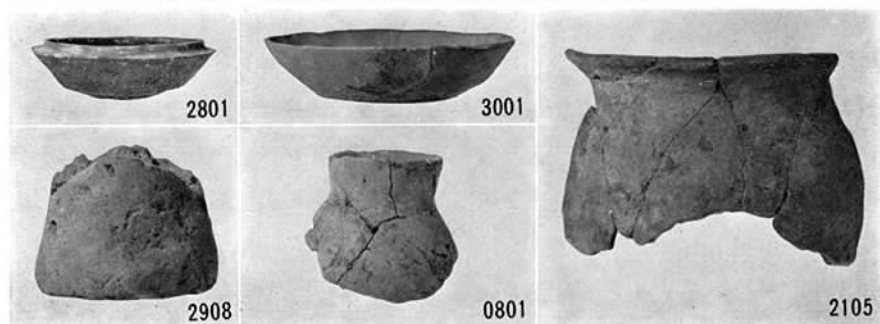


Fig. 201 道添各住居跡出土土師器・須恵器

(4) 第15号住居跡出土木材の樹種鑑定について

九州大学農学部

教授 松本 勲

八女市大字室岡字道添所在の道添遺跡から出土した炭化木材片について、その樹種名を次のように鑑定しましたので報告いたします。

記

供試材番号
1, 2-1, 14

樹種名
クロバイノキ(ハイノキ科)
Symplocos prunifolia SIEB et Zucc.

3, 10, 13	シナノキ (シナノキ科) <i>Tilia japonica</i> (MIQ) SIMONKAI
4	ブナ科の 1 種 (クリ? イタジイ?)
5-2, 6	エノキ (ニレ科) <i>Celtis sinensis</i> Pers. var <i>japonica</i> (PLANCH) NAKAI
7	シオジ (モクセイ科) <i>Fraxinus spaethiana</i> LINGELISH.
8, 9-1, 9-2	アオダモ (モクセイ科) <i>Fraxinus sieboldiana</i> BLUME
11	サワグルミ (クルミ科) <i>Pterocarya rhoifolia</i> SIEB. et Zucc.
5-1	不明 (検鏡不能)
12	検鏡不能 外観上は タケ?

註 検鏡は試料をポリエチレングライコールに包埋し、マイクロームで薄片とし、プレパラートとして検鏡したが、試料はいずれも炭化が進み、ぼろぼろとなり、さらに粘土が入っているため、非常に検鏡が困難であったので、多数のプレパラートをつくり、総合的に結果をまとめた。最もよくプレパラートの作成が出来たものの顕微鏡写真の例は Fig. 202 の写真である。

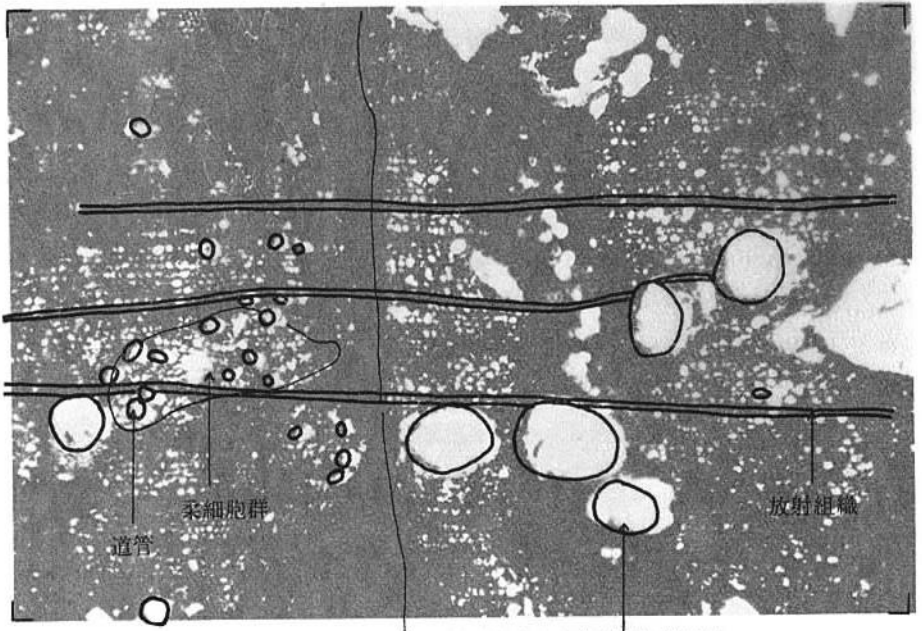
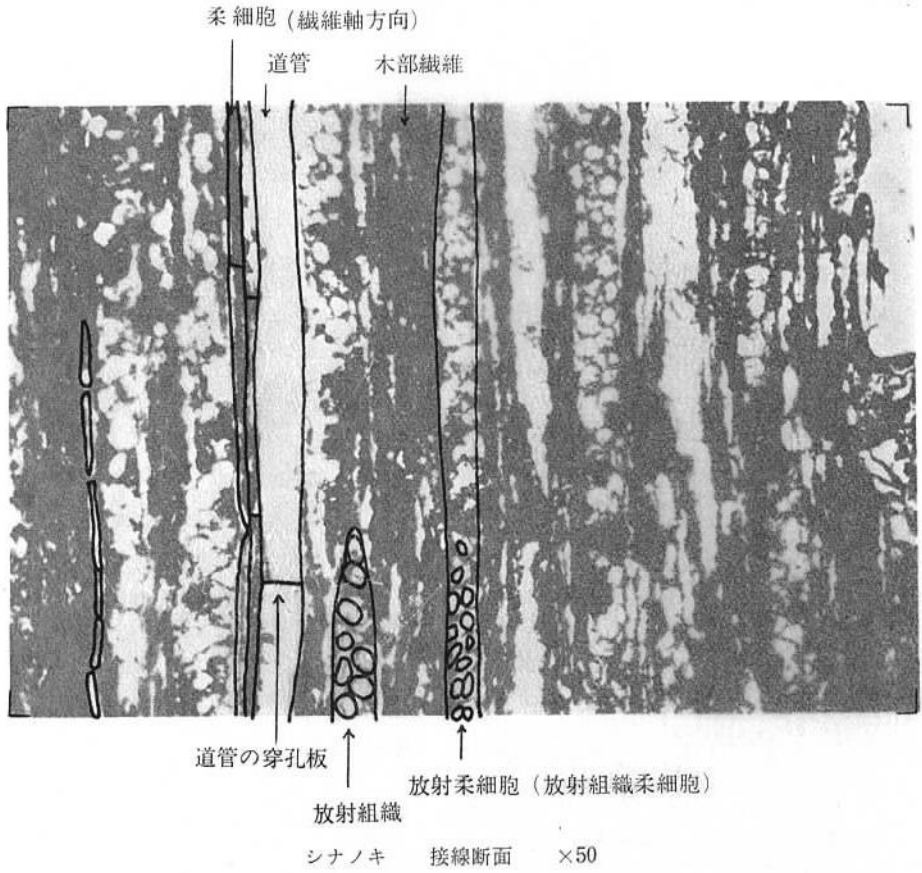


Fig. 202 道添第15号住居跡出土炭化材顕微鏡写真

年輪界

エノキ 横断面 ×50

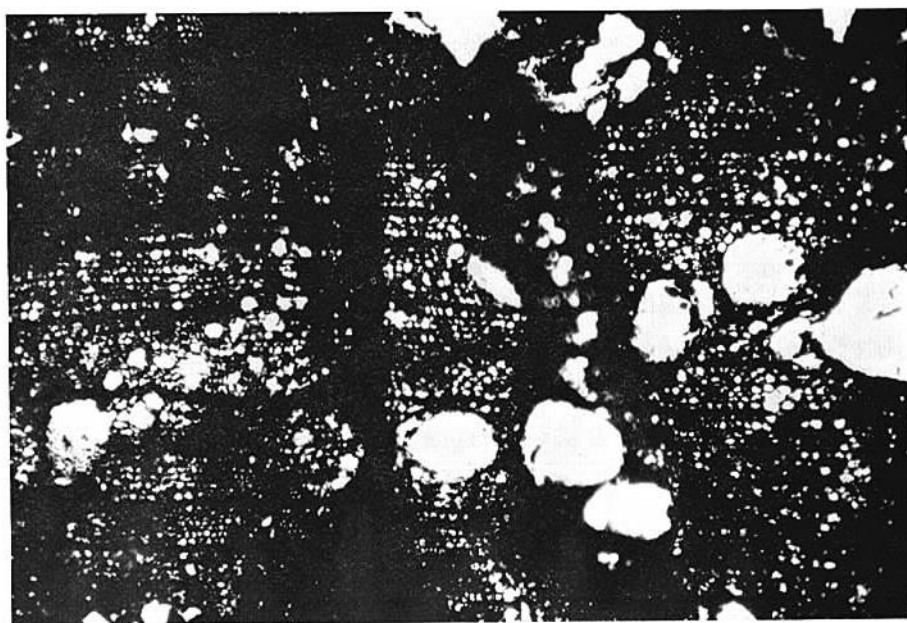


Fig. 202 道添第15号住居跡出土炭化材顕微鏡写真

4. おわりに

本遺跡で発見された遺構は、住居跡28軒（第19号は欠番）、円形周溝2基、掘立柱遺構2棟分、および土壌である。これらのうち、弥生時代の遺構は住居跡10軒、円形周溝、若干の土壌、および確実ではないが掘立柱遺構も弥生時代のものと思われる。

弥生時代の住居跡は、第1～9・11号住居跡で、これらを整理するとTab. 5のようになる。

Tab. 5 道添遺跡弥生時代住居跡一覧表 ()は推定

番号	時期	規模 m	面積 ²	主柱穴		主軸方位	焼土	炉	貯蔵穴様土壌	ベッド状遺構	壁溝	土器以外の遺物	発掘時番号	備考
				数	心距離 cm									
1	弥生後期	東辺 2.1+ α 南辺 1.5+ α	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	30	
2	弥生後期	3.15×2.90	8.68	不明	不明	(長軸 N150.5°E)	なし	不明	南西壁中央	なし	なし		29	
3	弥生後期	6.03×4.39	(22.8)	2	170	N68°E	なし	(中央)	南東壁中央	東西辺	なし		28	
4	弥生後期	北西辺5.65 南東辺6.40 ×4.05	22.76	2	311	N58°E	なし	(中央)	南東壁中央	東隅 南隅	全周	石庖丁・ 砥石	26	ベッド状遺構は若干外方へ張り出す
5	弥生後期	5.38×3.47	16.67	2	157	N67.5°E	あり	中央	南東壁中央	なし	なし		27	
6	弥生後期	4.90×3.54	15.70	2	170	N38°E	あり	中央	南東壁中央	なし	なし		7	
7	弥生後期	4.85+ α (6.00)×4.02	(25.4)	不明	不明	(北西辺 N37°E)	不明	(道路下)	南東壁	北東辺	なし	鉄斧 ガラス小玉	2	
8	不明	(3.9) ×(3.8)	(14.8)	不明	不明	不明	なし	不明	不明	なし	なし		23	第8号住居跡→第5号溝
9	弥生後期	6.01×3.77	21.22	不明	不明	N53.5°E	なし	(中央)	南東壁中央	北東辺	一部あり	石庖丁・ 投擲・ 砥石	22	
11	弥生後期	5.78×4.20	23.30	2	229	N51°E	なし	(中央)	南東壁中央	南西辺 北東辺	なし	ガラス小玉	1	第11号→第10号

平面プランは第2・8号住居跡の方形に近いもの、第3・4・7・9・11号住居跡の長方形のもの、第5・6号住居跡の隅がやや丸く、くずれた長方形を呈するものの3種がある。

主柱穴・炉・貯蔵穴様土壌については、前述の3遺跡でのあり方とほぼ同様である。

長軸の方位は、北東—南西の方向にとるものが殆どで、野口遺跡とは異なっている。

ベッド状遺構は第3・4・7・9・11号住居跡に認められた。第4号を除いては、西中ノ沢遺跡における設置形態に含まれてしまうが、本遺跡の場合短辺全体に沿った設置例が殆どである。第4号は南西隅・南東隅の2ヵ所に設置されており、さらにこの部分は短辺よりも外方へ張り出している。これは前述の3遺跡ではみられなかった設置形態である。

壁溝は第4・9号住居跡に検出された。また第9号では壁小穴が認められており、これらの心距離は35～70cm、平均51cmである。これは坊野第2号住居跡での計測値(8～73cm、平均24.3cm)に比べると、平均値で約2倍の数字を示している。

掘立柱遺構は2棟分認められた。いずれも1間×1間の規模だが、第1号の平面は長方形、第2号の平面は方形を呈する。第1号は南接する土壌から出土した土器から、第2号は弥生時

代の住居跡群に囲まれた位置にあることから、それぞれ弥生時代の所産と推定した。

円形周溝は野口遺跡でも発見されている。本遺跡の円形周溝は、野口遺跡のものに比べやや規模が小さい。また、これら2基は発掘された範囲では、弥生時代の住居跡の外辺部に位置するようである。

古墳時代前半の住居跡は第12・13・14・15・16・17・18号住居跡の計7軒である（第19号は欠番）。

平面プランは方形に近いが、長軸・短軸の設定ができるものもある。第12・14号は南東隅に張り出し部をもつ。また、第17号はとくに規模が大きく、一辺8m弱を測り、本遺跡では最大の面積をもつ。

主柱穴配置は、2・3・4・8本がみられる。主柱穴2本は第15・16号で、ともに規模は小さく、長軸・短軸の設定が可能である。主柱穴3本は第14号で、検出された範囲内では4本の組合せは得られなかった。しかし、東西方向に棟をもつ2本柱の構造も考えられるので、主柱3本の構造の存否は保留しておきたい。主柱穴4本は第12・13・18号で、主柱2本の第15・16号よりも規模がやや大きい。主柱穴8本と推定されるのは第17号であるが、基本形は4本と考えて良いだろう。野口第6号住居跡は、ピットの配置が不明瞭だが、第17号と同じ構造が考えられる。

炉は第14号で床面中央に検出されており、第12・13・16号もほぼ同様と思われる。しかし、第17・18号ではそれらしき掘り込みが検出されておらず、注目される点である。

貯蔵穴様土壇はこの時期の各住居跡に認められた。楕円形または長方形を呈し、第16号では南辺に、他の住居では東辺ないし南東辺に設けられている。本遺跡の弥生時代の住居跡では南東辺に設置する例が殆どで、北辺～西辺には設置しないことと共通した傾向が窺える。

ベッド状遺構は第13・18号に認められた。この2軒ではいずれも「コ」字状に設置されており、弥生時代の住居での設置形態とは異なっている。第13号は貼り付け、第18号は削り出しによるものである。

古墳時代後半の住居跡は第20～29号住居跡の計10軒で、これらを含めて古墳時代の住居跡を整理すると Tab. 6 のようになる。

平面プランは一辺4～5mの方形を呈し、規模はほぼ一定しており、長軸・短軸の設定できる住居は殆どない。また、この時期の住居では、張り出し部をもつものは検出されなかった。

Tab. 6 道添遺跡古墳時代住居跡一覧表 ()は推定

番号	時期	規模 m	面積 ²	主柱穴	主方軸位	焼土	炉	カマド	貯蔵穴様土壇	壁溝	土器以外の遺物	発掘時番号	備考
10	不明	×(4.50)	—	—	—	—	—	—	—	—		8	第11号→第10号
12	古墳前期	北辺 5.11、東辺 6.04 南辺 5.76、西辺 5.10	28.84	4	N14.5°E	あり	中央	なし	東中 壁中央	ほぼ全周	石庵丁	6	南東隅に張り出し部あり

番号	時期	規模 m	面積m ²	主柱穴	主方軸位	焼土	炉	カマド	貯蔵穴様土壌	壁溝	土器以外の遺物	発掘時番号	備考
13	古墳前期	北辺 3.84, 東辺 4.53 南辺 4.16, 西辺 4.37	16.61	4	長軸 N13°E	なし	(中央)	なし	東壁中央北寄り	全周		11	コ字状のベッド状遺構あり
14	古墳前期	4.44×4.39	18.15	2or 3	N66°E	あり	中央	なし	東壁中央北寄り	ほぼ全周		10	南東隅に張り出し部あり
15	古墳前期	北辺 3.63, 東辺 4.10 南辺 3.95, 西辺 3.57	13.96	2	N81°E	あり	不明	なし	東壁中央	全周		13	火災、壁小穴あり
16	古墳前期	4.77×4.07	16.84	2	N98.5°E	なし	(中央)	なし	南壁中央	ほぼ全周		3	
17	古墳前期	7.85×7.82	(61.2)	(8)	(B-B'断面) N18°E	あり	なし	なし	南東壁中央	全周		4	南隅は道路下
18	古墳前期	北東辺5.94, 南東辺5.98 南西辺6.20, 北西辺5.78	35.15	4	N135°E	なし	なし	なし	南東側	なし		31	コ字状のベッド状遺構あり
20	古墳後期	北辺 3.81, 東辺 3.92 南辺 4.18, 西辺 4.02	17.05	4	N158°E	北辺中央	なし	(北辺中央部)	不明	なし		16	
21	古墳後期	北辺 4.00, 東辺 4.09 南辺 3.96, 西辺 4.05	15.78	4	N10°E	あり	なし	北辺中央部	不明	なし		5	
22	古墳後期	(5)×4.77	(23.9)	(4)	N17°E	あり	なし	北辺やや東寄り	不明	なし		15	
23	古墳後期	東西 (5) 南北 (4.5)	—	4	—	あり	なし	(北辺中央部)	(東辺中央)	なし		21	23 ↙ ↓ 25→24 ↘ ↓ 26
24	古墳後期	東西 (4.5) 南北 (4.5)	—	4	—	あり	なし	(北東辺中央)	不明	なし		20	
25	古墳後期	東西 (4.5) 南北 (4.4)	—	4	—	なし	なし	不明	不明	なし		19	
26	古墳後期	北辺 4.37, 東辺 4.03 南辺 3.94, 西辺 4.10	17.51	4	N178°E	あり	なし	(北辺中央部)	不明	なし		9	
27	古墳後期	東西 (4.3) 南北 (4.5)	—	4	—	あり	なし	(北辺中央部)	不明	なし		18	
28	古墳後期	北辺 4.51, 東辺 4.34 南辺 4.37, 西辺 4.56	20.30	4	N2°E	あり	なし	(北辺中央部)	(北西隅の土壌)	なし		12	
29	古墳後期	北辺 4.99, 東辺 4.38 南辺 5.03, 西辺 5.47	22.96	4	N3°E	あり	なし	北辺中央部	不明	なし		14	

主柱穴は4本で、平行四辺形状に並ぶもの(第21・26)、梯形を呈するもの(第29号)もあるが、ほぼ方形を呈するように配置されるものが多い。

焼土はすべて北辺から検出されており、第21・29号ではその付近に粘土で築かれたカマドの残存があり、おそらく他の住居もこの位置にカマドがあったと思われる。主軸を、カマドを通る中軸線と仮りに設定すれば、その方位は北—南の方向をとることになる。

この時期の住居跡では、定型化した貯蔵穴様土壌と思われる掘り込みはみられず、第23号の東辺中央の掘り込み、第28号の北東隅の掘り込みがあるいはそれかと思われる。

以上の遺構が、本遺跡で検出した遺構の主要なものである。遺構の分布情況については、次のことがいえるだろう。

① 弥生時代の遺構は発掘範囲の北半にほぼ等間隔的に分布し、古墳時代の遺構は南半に分布する。

② 古墳時代前半の住居は東西に分散的に位置し、古墳時代後半の住居跡は比較的狭い範囲に集中している。

VII 考 察

1. 住居跡の構造

(1) はじめに

室岡遺跡群で発見された遺構群のうち、竪穴式住居跡は弥生時代後期、古墳時代前期・後期の3時期に亘っている。ここでは他遺跡の例も混じえながら、住居跡のうち全形がほぼ判明するものを中心にして、住居の構造を検討してみたい。

本遺跡群のうち、ほぼ全形の判明する住居跡は、次の通りである。

西中ノ沢遺跡 第1～7号住居跡

坊野遺跡 第1・2号住居跡

野口遺跡 第1・4・8・9・11～13号住居跡

道添遺跡 第2～7・9・11～18・20・21・28・29号住居跡

(2) 平面プラン

4遺跡を通してみると、弥生後期の住居跡の平面プランは、次の3種に分けられる（張り出し部を除く）。

A類 長方形のプラン。梯形を含む。

西中ノ沢遺跡の第2・3・4・5・6号、坊野遺跡の第2号、野口遺跡の第1・9号、道添遺跡の第3・4・7・9・11号がこれに含まれる。検出した住居跡の大半はこの類に含まれており、この時期のプランの主要な形態を占めるようである。

B類 方形または方形に近いプラン。

大形のものはなく、野口遺跡第4号、道添遺跡の第2号がこの類である。

C類 隅に丸味があり、全体に不整形を呈するプラン。

西中ノ沢遺跡第1・7号、坊野遺跡第1号、道添遺跡第5・6号が含まれる。この類は各辺にも若干の凹凸がみられる。

以上の3種のうち、A・B類とC類とは視覚的に区別することができるが、A類とB類との中間的なものも予想されるので、ここではその基準として、 $\frac{\text{短軸}}{\text{長軸}} \times 100$ の値（以下、長軸率と仮称する）をあげておきたい。例えば長軸5m、短軸4mの場合、長軸率 $=\frac{4}{5} \times 100 = 80$ となる。長軸率でいえば、A類は81未満、B類は81以上の値をとる。長軸率が90以上の数値を示すものは、誤差を考慮すれば方形とした方がよいだろう。

弥生後期の住居跡では、長軸が短軸の2倍以上、つまり長軸率50以下のものがみられないのは、プランについて何らかの基準があったことを思わせる。

古墳前期の住居跡では、道添第13・16号の長軸率がそれぞれ88、85の数値を示し、弥生後期における分類のB類に相当する。他の住居は長軸率90以上である。

古墳後期では道添第29号が例外的に長軸・短軸があり、他の住居は長軸率90以上で、方形プランを基本としている。

以上、3時期に亘って平面プランを追ってみたが、プラン変化は基本的には次のように考えることができるだろう。即ち、弥生後期のA・B・C類は古墳前期に至ってA・C類が消滅し、B類に相当するものが主体となる。古墳前期では長軸・短軸の設定できるものが残っているが、長軸率90以上の方形プランが主体を占めるようになる。その限りで、プラン変化は連続的であるといえよう。古墳後期になると、長軸・短軸の設定できるものは例外的な存在となり、方形プランが一般的となる。これは他地域での一般的傾向と大きく矛盾しない。

しかし、さらに詳細にみると、上記の3時期のあいだにはそれぞれ空白の期間があり、連続的に捉えられない要素を含んでいる。このことについては後述したいと思う。

(3) 床 面 積

弥生後期の住居跡のうち、A類13軒では最大 $35.61m^2$ 、最小 $21.22m^2$ で、平均 $27.6m^2$ である。B類2軒の平均は $13.6m^2$ 、C類は $8.77\sim 23.92m^2$ で、平均 $16.9m^2$ である。これらA・B・C類を通した平均は $23.3m^2$ となる（小数点2位以下四捨五入）。床面積の大きさからいえば、A類>C類>B類となる。

古墳前期では、最小 $13.96m^2$ 、最大 $61.2m^2$ （推定）で、平均 $26.0m^2$ である。この時期の住居の規模には大・中・小の3種がみられるようで、床面積は平均的ではなく、分散的である。

古墳後期では最大 $22.96m^2$ 、最小 $13.15m^2$ で、平均 $17.3m^2$ である。この時期には大小の差があまりなく、平均的な規模になる。

以上のことから、本遺跡群でのごく大雑把な傾向として、弥生後期から古墳前期にかけて、平均的な住居規模が相対的に差をもつようになり、古墳後期に至って以前よりもやや小形化して平均的な規模に収束する、といえよう。
(註1)

(4) 出 入 口

当遺跡群中張り出し部をもつ住居跡は、西中ノ沢遺跡第3・5号、野口遺跡第1・2号、道添遺跡第12・14号の計6軒である。これらのなかで出入口である可能性の最も高い遺構を検出したのは、坊野遺跡第2号であろう (Fig. 203)。
(註2)

土器や銅鐸・鏡等に表現された建物では妻入が多くみられるが、坊野第2号の張り出し部のある部分に出入口が推定できるな
(註3)

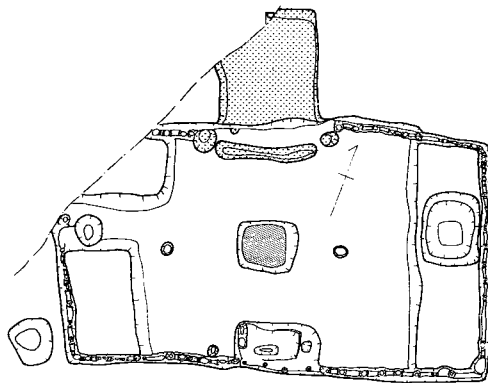


Fig. 203 坊野第2号住居跡張り出し部

らば、主柱穴の位置からみてこれは平入と考えられる。すでに先学の指摘があるように、竪穴式住居への出入りには梯子の使用が推定できる。坊野第2号の北辺中央部の溝とその両脇のピットは、出入口施設に関連した遺構ではないだろうか。^(註4) また、竪穴式住居の外縁には、周堤の存在を一般化しうるとされている。^(註5) これに従えば、坊野第2号にも周堤の存在が想定できるが、少なくともこの張り出し部の外方に推定して良いだろう。^(註6)

そこで梯子下端部が接地する場所を考えると、張り出し部と北辺中央部の溝の部分との2つのケースが考えられる。Fig. 204—1は張り出し部に梯子が接地する場合であり、溝の付近に接地したときは2のようになる。2の場合は梯子と竪穴壁とのあいだに1の場合よりも広い空間が予想され、石野博信氏のいわれるように張り出し部は「屋内貯蔵」の場所であることも考えられる。しかし、1の場合には建物の内部をより広く使用することができ、その意味で実際には1の接地の場合であったと考えたい。^(註7)

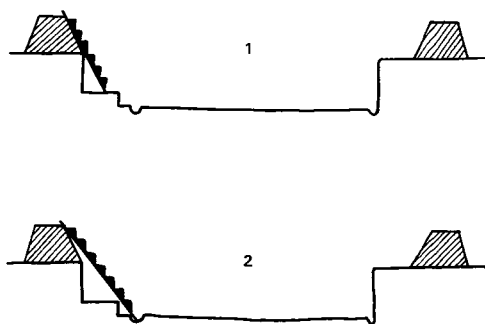


Fig. 204 梯子の位置想定図

他の住居跡の張り出し部も出入口をみると、坊野第1号が妻入、西中ノ沢第3号が妻入、西中ノ沢第5号が平入となるが、これらをも出入口とするには若干の躊躇を感じる。それよりも竪穴内部の遺構配置（炉・主柱穴・貯蔵穴様土壇・ベッド状遺構等の位置）が、坊野第2号に近似した住居跡も多くみられることから、他の住居の出入口も坊野第2号と同位置であった蓋然性の方が高いように思う。^(註8)

道添第12号と第14号は隅に張り出し部がある。弥生後期の住居跡と同じく貯蔵穴様土壇は別のところに求められるので、この張り出し部も出入口の可能性があるだろう。このほかの住居跡については積極的論拠を欠くので、ここでは扱わないことにしたい。^(註9)

(5) ベッド状遺構

室岡遺跡群の各遺跡では、ベッド状遺構をもつ住居跡がそれぞれ検出されている。Fig. 205～208は、各住居のベッド状遺構の位置を示したものである。以下、各項目ごとに検討してみたい。

a 設置方法

ベッド状遺構の設置方法には、貼り付けによるものと削り出しによるものとの2つの方法がある（Fig. 205～208のHは貼り付け、Kは削り出しを示す）。設置方法の判明した弥生後期の住居跡28ヵ所のベッド状遺構のうち、貼り付けによるもの20例（72%）、削り出しによるもの8例（28%）で、貼り付けによるものが大半を占めている。削り出しによるものは、竪穴掘

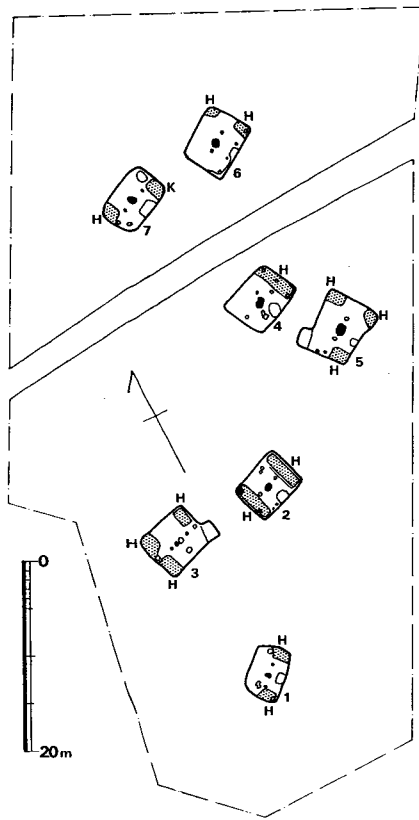


Fig. 205 西中ノ沢遺跡のベッド状遺構設置情況

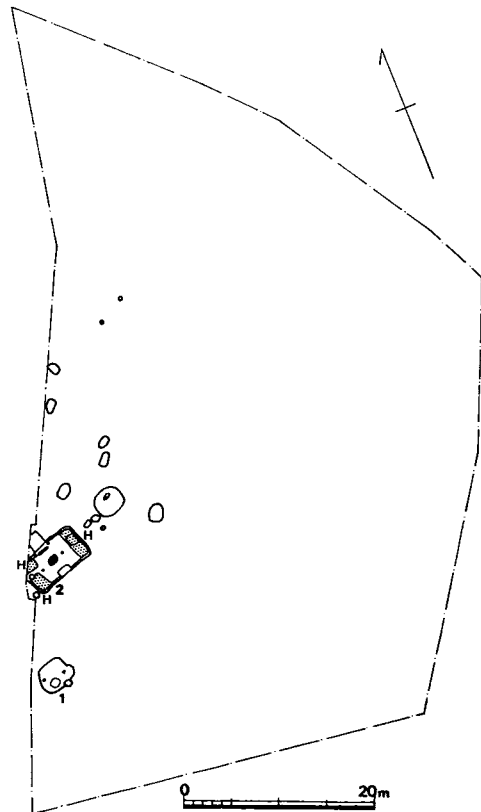


Fig. 206 坊野遺跡のベッド状遺構設置情況

削時に掘り残したのであり、貼り付けによるものは掘削後に設置されたものである。しかし、貼り付けによる場合には 竪穴掘削直後に——今日風にいえば 内装の段階に——設置されたのか、一定の時間が経過したのちに何らかの理由で必要になったために設置されたのか、確かめるのは困難である。1軒の住居に両方法がみられる場合は、時間経過のなかでは削り出しによるものの方が当然古く、貼り付けによるものの方が新しいといえる。しかし、目的意識の面からみると、貼り付けによるものが先に存在したからこそ、竪穴掘削時に掘り残して削り出しによるベッド状遺構を設置したとも考えられる。いずれの方法がオリジナルであるか（あるいは当初から両方法があったのか）は、同地域の弥生中期以前の住居に遡らなければ確証は得られない問題であろう。

b 設置形態

弥生時代後期のベッド状遺構の設置形態には、西中ノ沢遺跡で述べたように、

I類 隅に設置するもの

II類 短辺に沿って設置するもの

の2種がみられる。また、I類は短辺側にやや長く設置される傾向があり、短辺側への意識はかなり強いと思われる。

4遺跡での設置情况进行ると、西中ノ沢遺跡では同じ設置の仕方は一つもないことに気付く。また、I類とII類とが同一住居内では併存しないことも一つの特徴であろう。このことから西中ノ沢遺跡では、設置すること自体は共通しているながらその設置形態はバラエティーに富んでいることがベッド状遺構の性格・機能の問題を解く鍵になるだろうとした。

坊野第2号ではI類とII類とが併存しており、これは西中ノ沢遺跡では見られない形態であった。

ところが、道添遺跡での設置情况进行ると、第4号を除く弥生後期の住居跡では、II類のベッド状遺構が全てであり、一方の短辺に沿って設置するか、両短辺に沿って設置するかのどちらかである。これは西中ノ沢遺跡での情況と全く相反するあり方である。この相違はどのように理解すればよいのだろうか。これについては、多様な(自由な!)解釈があり得る。例えば、両遺跡のあいだに時期差が大きいと考えることもできる。しかし、西中ノ沢遺跡では2つの時期が設定可能であり、同一の設置形態が存在しないという情況

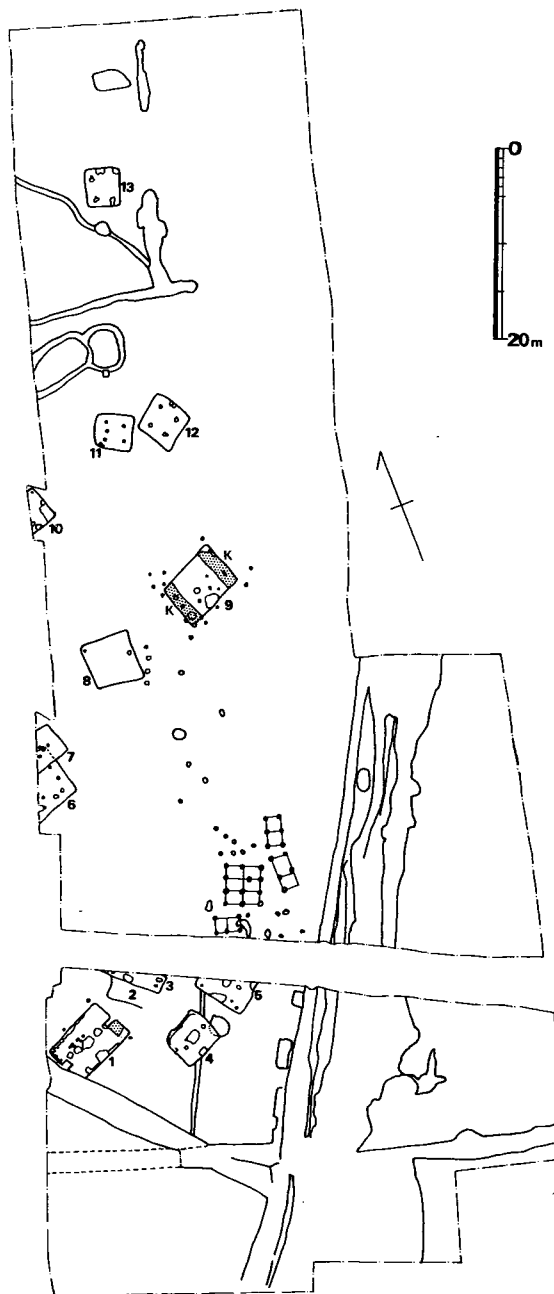


Fig. 207 野口遺跡のベッド状遺構設置情況

に変わりはない。したがって、少なくとも単純な時期差に解消することはできない問題である。

このことについては、俄に展開することができない状態であり、いましばらく、資料の累積

に俟ちたいと
思う。

(註10)

古墳時代の
住居跡では、
ベッド状遺構
は前期の道添
第13・18号住
居跡に設置さ
れており、後
期の住居跡に
は1例もみら
れなかった。
道添第13・18
号は「コ」字
状に設置され
ている。これ
を、

Ⅲ類 住居
の壁に沿って
連続的に設置
されるが、一
部のみ切れて
いるもの
としておく。

道添第13号は
貼り付け、第
18号は削り出
シによるもの

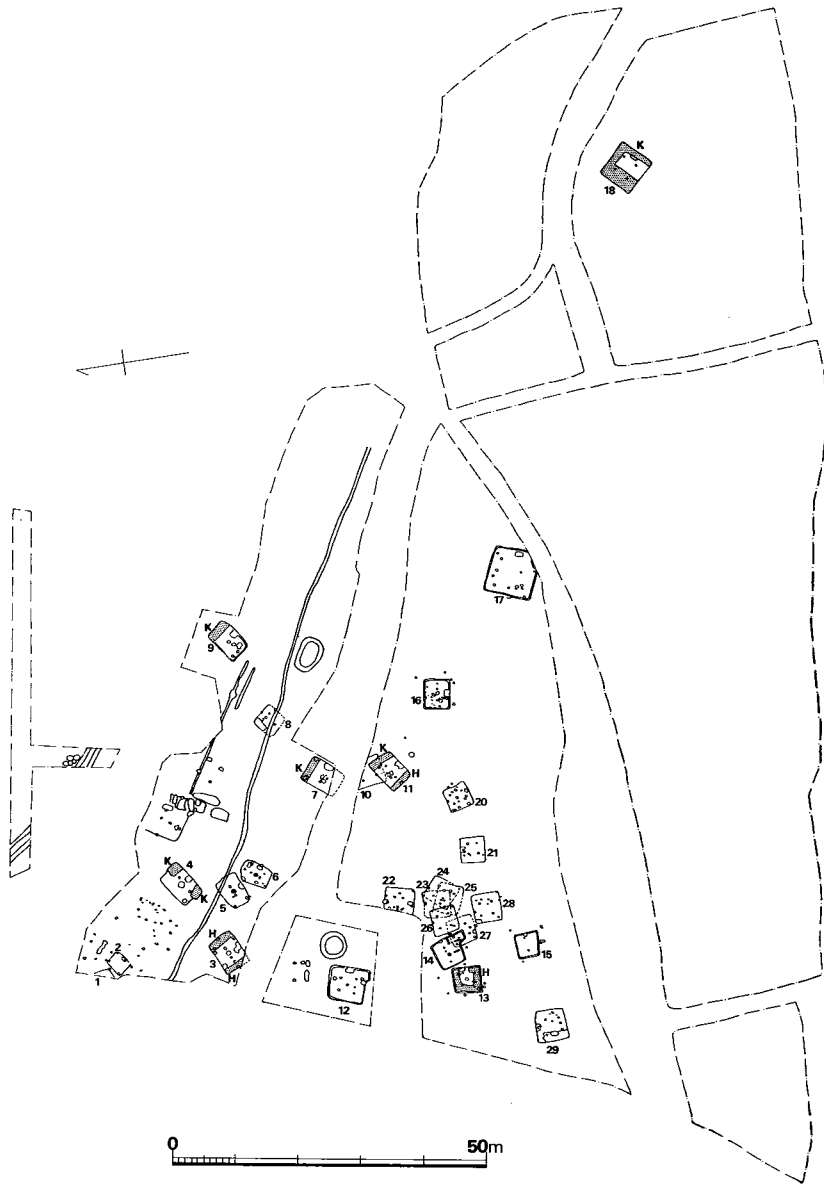


Fig. 208 道添遺跡のベッド状遺構設置情況

である。設置方法については、弥生後期における方法が受け継がれている。しかし、ベッド状遺構が設置される住居跡の数は、相対的に減少し、古墳後期では一例も検出されていない。この現象はどのように理解すれば良いのだろうか。別項において検討してみたい。
(註11)

c 面積構制

ベッド状遺構の性格を考えるために、住居内諸施設の面積の計測を試みた。Tab. 7 がその

Tab. 7 竪穴式住居内諸施設の面積構制一覽表

住居跡番 号	床面積 a (m ²)	ベッド状遺構面積 b (m ²)	炉面積 c (m ²)	貯蔵穴様 土壁面積 d (m ²)	張り出し 部面積 e (m ²)	ユカ面積 f (m ²)	(%) b/a ×100	(%) c/a ×100	(%) d/a ×100	(%) e/a ×100	(%) f/a ×100
西中ノ沢 第1号	19.37	南西隅1.92(9.9%)計 北東隅2.05(10.6%) 3.97	0.52	0.86	—	14.0	20.5	2.7	4.4	—	72.3
西中ノ沢 第2号	25.37	西辺5.43(21.4%)計 東辺5.22(20.6%) 10.65	0.37	1.16	—	13.19	42.0	1.5	4.6	—	52.0
西中ノ沢 第3号	30.92	北東隅2.64(8.5%)計 北西隅2.72(8.8%) 南西隅2.62(8.5%) 7.98	0.23	0.37	2.74	19.60	25.8	0.7	1.2	8.9	63.4
西中ノ沢 第4号	28.37	東辺6.25	0.71	2.14	—	19.27	22.0	2.5	7.5	—	67.9
西中ノ沢 第5号	35.61	北東隅2.53(7.1%)計 南隅2.61(7.3%) 南隅2.65(7.4%) 7.79	1.11	1.02	2.12	23.57	21.9	3.1	2.9	6.0	66.2
西中ノ沢 第6号	27.23	北隅1.41(5.2%)計 東隅1.95(7.2%) 3.36	0.64	0.79	—	22.44	12.3	2.4	2.9	—	82.4
西中ノ沢 第7号	23.92	南東隅2.44(10.2%)計 北西隅2.57(10.7%) 5.01	0.28	1.30	—	17.33	20.9	1.2	5.4	—	72.4
坊野 第2号	26.25	東辺4.01(15.3%)計 南西隅2.16(8.2%) 北西隅1.79(6.8%) 7.96	0.73	0.95	2.56	14.05	30.3	2.8	3.6	9.8	53.5
野口 第1号	35.13	北東辺南寄り1.60	0.70	1.07	—	29.76	4.55	2.0	3.6	—	84.7
野口 第9号	34.44	東辺7.03(20.4%)計 西辺7.04(20.4%) 14.07	0.15	1.46	—	18.76	40.9	0.4	4.2	—	54.5
道添 第3号	24.96	東辺5.03(20.2%)計 西辺(推定) 4.39(17.6%) 9.42	0.50	1.15	—	13.89	37.7	2.0	4.6	—	55.6
道添 第4号	22.76	南東隅2.75(12.1%)計 南西隅2.61(11.5%) 5.36	0.75	0.72	—	15.93	23.6	3.2	3.2	—	70.0
道添 第9号	21.22	北東辺4.94	0.25	0.87	—	15.16	23.3	1.2	4.1	—	71.4
道添 第11号	23.30	北東辺4.71(20.2%)計 南西辺4.50(19.3%) 9.21	0.38	0.78	—	12.93	39.5	1.6	3.3	—	55.5
道添 第13号	16.61	11.56	推定 0.20	推定 0.38	—	5.05	69.6	1.2	2.3	—	30.4
道添 第18号	35.15	21.69	—	0.45	—	13.01	61.7	—	1.3	—	37.0
平均値		I類 2.3m ² (8.8%) II類 5.3m ² (20.1%) III類 16.6m ² (65.7%)	弥生後期 0.5m ²	弥生後期 1.0m ² 古墳前期 0.4m ²	2.5m ²	弥生後期 17.8m ² 古墳前期 9.0m ²	弥生後期 27.7%	弥生後期 2.0%	弥生後期 4.0%	弥生後期 8.2%	弥生後期 65.8%

結果である。なお、表中ベッド状遺構の(%)は床面積aに対する割合を示している(平均値・百分率は、小数点第2位以下を四捨五入した)。以下、箇条書きに述べることにする。

① I類のベッド状遺構の面積は最小1.41m²、最大2.75m²で、平均2.3m²である。床面積に占める割合は5.2~12.1%の幅があり、平均8.8%である。

② II類では4.01~7.04m²で、平均5.3m²となる。床面積に占める割合は15.3~23.3%で、平均20.1%である。

③ 1住居内でI・II類のベッド状遺構の占める割合には、12.3~42.0%とバラツキがみられ、平均は27.7%である。すなわち、床面積に対するベッド状遺構の面積の割合は、半分以下ということになる。

④ これに対してIII類のベッド状遺構は、平均65%強を占め、弥生後期のあり方とは逆である。

⑤ 炉の面積は $0.15\sim 1.11m^2$ の幅があり、平均 $0.5m^2$ である。床面積に占める割合の平均は2%を示す。

⑥ 貯蔵穴様土壌の面積は $0.37\sim 2.14m^2$ で、平均 $1.0m^2$ である。床面積に占める割合は1.2~7.5%で、平均4%の割合である。

⑦ 炉・貯蔵穴様土壌・張り出し部・ベッド状遺構を除いたユカ面積は $12.93\sim 29.76m^2$ の幅があり、床面積に対する割合は平均65.8%を占める。

d 北部九州におけるベッド状遺構の設置情況

次に、他遺跡におけるベッド状遺構の設置情況について検討してみたい。なお、ここでの資料はさしあたり北部九州を中心としたものに限定しておく。

まず、室岡遺跡群の周辺では、裏山遺跡の例がある。裏山遺跡は道添遺跡の南西約3kmに位置する(Fig. 2)。昭和38年8月、岩崎光氏は、たまたま九州へ調査に来ていた和島誠一氏とともに本遺跡を発掘調査し、竪穴式住居跡群を検出した。詳細に調査されたのは竪穴Ⅰ及び竪穴Ⅱと名付けられた住居跡で、いずれも長軸上に2個の主柱穴をもち、中央部に炉があり、南辺側に長方形を呈する貯蔵穴様土壌をもっている。ベッド状遺構も検出されており、同報告の本文及び挿図のデータから Fig. 209 のようであったと推定される(Fig. 209は同報告書図2に筆者が手を加えたもので、以下他遺跡例の引用も同様に加筆している)。

当時は、ベッド状遺構という名称はまだ使われず、竪穴Ⅰについては次のように記されている――

「竪穴Ⅰの北東部に床面より25cm以上も高く東西の巾1m20〔cm〕、南北の長さ1m80〔cm〕の一区があり、これは坐臥の場又はの寝台〔と〕して利用されていたのであろう。」

竪穴Ⅱは、二次に互る床面が検出されている。下の(古い)床面の住居はⅡa、上層の(新しい)床面はⅡbと呼ばれ、

「竪穴Ⅱ〔a〕の高い部分(寝台)は、竪穴の北西部に東西1m70〔cm〕、南北2m20〔cm〕の1区劃をなして高く掘り残され坐臥として用いた。……竪穴ⅡaからⅡbに移行した時、竪穴は北方と東方へ拡張され、柱穴も移動した。東への拡張地域は寝台となった部分で、巾1m20〔cm〕、長さ3m65〔cm〕で、床面より10~15cm高く、外見上、明瞭に台形を残している。」(以上の引用は同報告書4~5頁。

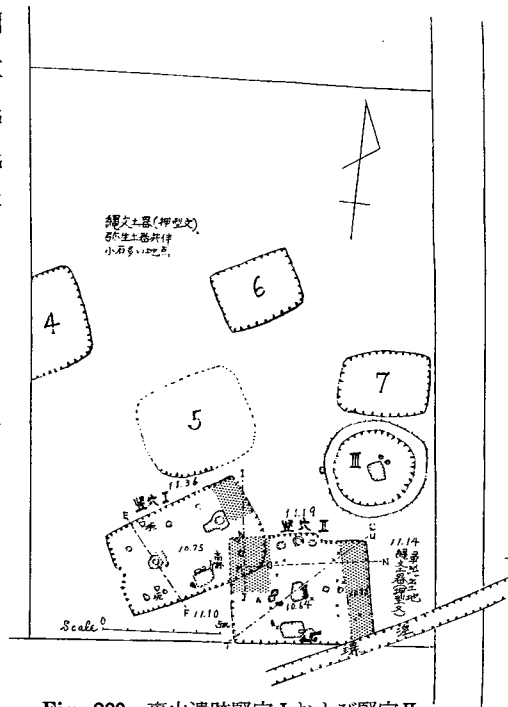


Fig. 209 裏山遺跡竪穴Ⅰおよび竪穴Ⅱのベッド状遺構

〔 〕内は引用者が補った。）

と記されている。竪穴Ⅰと竪穴Ⅱとの関係は、Ⅱ a → Ⅱ b → Ⅰの順に新しく、弥生後期後半の所産と推定される。竪穴Ⅰのベッド状遺構は、室岡遺跡群での分類からいえば、貼り付ケ・隅に設置するⅠ類と思われる。竪穴Ⅱ a は削り出し・Ⅰ類、Ⅱ b では貼り付ケ・短辺に沿ったⅡ類になるだろう（なお、註(9)参照）。

室岡遺跡群は弥生後期、古墳前期・後期の3時期に亘っているが、先述したようにこれら3時期の間にはそれぞれ空白の期間がある。即ち、古墳前期とした住居跡は前期後半(5世紀代)の時期にあたり、弥生終末～古墳前期前半(3世紀終り頃～4世紀代)に相当する期間の住居跡がみられない。また、古墳後期とした住居跡は後期中葉の時期にあたり、その前葉の時期を欠いている。2つの空白期間のうち前の期間、つまり弥生終末～古墳前期前半の欠を補うのが
(註14)
狐塚遺跡である。
(註15)

狐塚遺跡は道添遺跡の西南西約2.8km、前述の裏山遺跡の北北西約1.1kmに位置する。本遺跡は、筑後平野における弥生終末～古墳初頭の土器編年に関してすでに著名である。住居跡の構造について重要なことは、室岡遺跡群における弥生後期の住居構造を直接的に継承する住居跡が検出されていることである。本遺跡第11号竪穴(Fig. 210)は長軸率71.7の長方形プランで、中央に炉をもち、支柱穴2本を有し、南西辺中央に貯蔵穴様土壌がある。平面プランや竪穴内部の諸施設配置は、前述した分類のA類に近く、また古墳前期後半の住居と共通の要素がみられる。その限りで、連続的に構造変化をたどることができるといえるだろう。

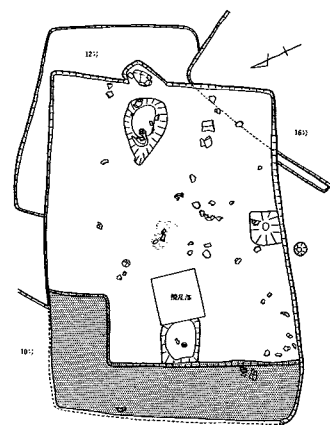


Fig. 210 狐塚遺跡第11号竪穴

ここではL字状のベッド状遺構が検出されており、同種の構造は第2号竪穴(Fig. 211)にもみられる。第11号と第2号とでは、ベッド状遺構は貯蔵穴様土壌に対する位置が反対であるが、いずれも短辺に沿って設置されており、さらにカギ型に曲る部分は、貯蔵穴様土壌の接する長辺とは別の(反対側の)長辺に沿って延びている。
(註16)

狐塚遺跡におけるこの種のベッド状遺構を、

Ⅳ類 L字状を呈するもの

としよう。すると、筑後市・八女市の周辺では、ベッド状遺構の設置形態は、

Ⅰ・Ⅱ類(隅・短辺) → Ⅳ類(L字状) → Ⅲ類(コ字状)

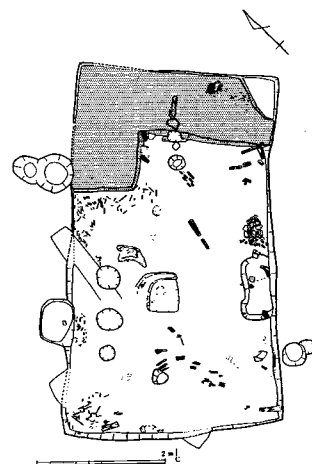


Fig. 211 狐塚遺跡第2号竪穴

という変化をたどることができる。

上記2遺跡を含めて、ベッド状遺構設置の住居跡を検出した遺跡には、次のものがある。^(註17)

- | | |
|------------------------|---------------------|
| 1. 井原・三雲遺跡
(註18) | 20. 宝台遺跡
(註37) |
| 2. 上鎌子遺跡
(註19) | 21. 古大間池遺跡
(註38) |
| 3. 湯納遺跡
(註20) | 22. 中・寺尾遺跡
(註39) |
| 4. 有田遺跡
(註21) | 23. 剣塚遺跡
(註40) |
| 5. 宮ノ前遺跡
(註22) | 24. 横隈山遺跡
(註41) |
| 6. 五十川高木遺跡A地点
(註23) | 25. 栗田遺跡
(註42) |
| 7. 多々良込田遺跡
(註24) | 26. 小田集落遺跡
(註43) |
| 8. 久保長崎遺跡
(註25) | 27. 御蔵園遺跡
(註44) |
| 9. 向山遺跡
(註26) | 28. 裏山遺跡
(註45) |
| 10. 田尻遺跡
(註27) | 29. 狐塚遺跡
(註46) |
| 11. 柳ヶ谷遺跡
(註28) | 30. 西中ノ沢遺跡 |
| 12. 都地原遺跡
(註29) | 31. 坊野遺跡 |
| 13. 茶白山遺跡
(註30) | 32. 野口遺跡 |
| 14. 小原遺跡
(註31) | 33. 道添遺跡 |
| 15. 竹並遺跡
(註32) | 34. 大道端遺跡
(註47) |
| 16. 大南遺跡
(註33) | 35. 千塔山遺跡
(註48) |
| 17. 弥永原遺跡
(註34) | 36. 城ノ上遺跡
(註49) |
| 18. 門田遺跡
(註35) | 37. 本川原遺跡
(註50) |
| 19. 竹ヶ本遺跡
(註36) | 38. 小郡遺跡
(註51) |

現在のところ、もっとも古い例は宝台遺跡B区第1号住居跡であろう (Fig. 212)。この住居跡は円形を呈し、ベッド状遺構は壁に沿って廻っている。設置方法は、実測図をみると削り出しによるものと思われ、ユカ面より5cm以上高い。ユカには粘土を貼っており、この部分に汚れが観察されている。遺物は発見されていないが、上層(第2次生活面)発見の遺物から、弥生中期中葉に比定されている。

もっとも新しい例は、五十川高木遺跡A地点第2号住居跡と思われる (Fig. 213)。本住居跡は、

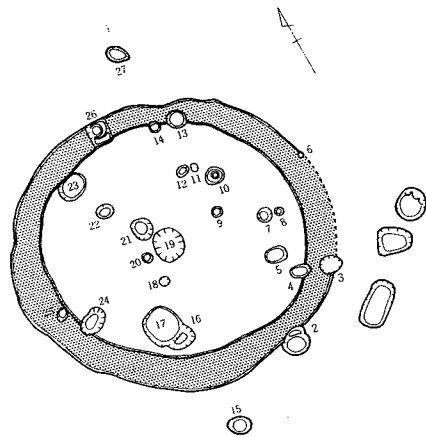


Fig. 212 宝台遺跡B地区第1号住居跡

平面隅丸方形を呈し、「壁面は一般の竪穴住居址のような垂直な立ち上りをもたず、2段の傾斜をもって浅皿状を呈す床面に接する」と表現された遺構をもつ。^(註52)これを、いわゆるベッド状遺構と同列に扱うことができるかどうか疑問であるが、一応あげておくことにする。なお、本住居跡からは土師器・陶器・磁器・石製品を出土し、土師器の皿・杯類はすべて糸切りのもので、「13世紀を中心とする年代」が推定されている。^(註53)

以上の2例を除けば、ベッド状遺構を設置する住居

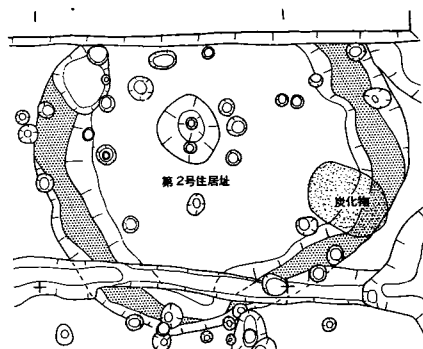


Fig. 213 五十川高木遺跡A地点
第2号住居跡

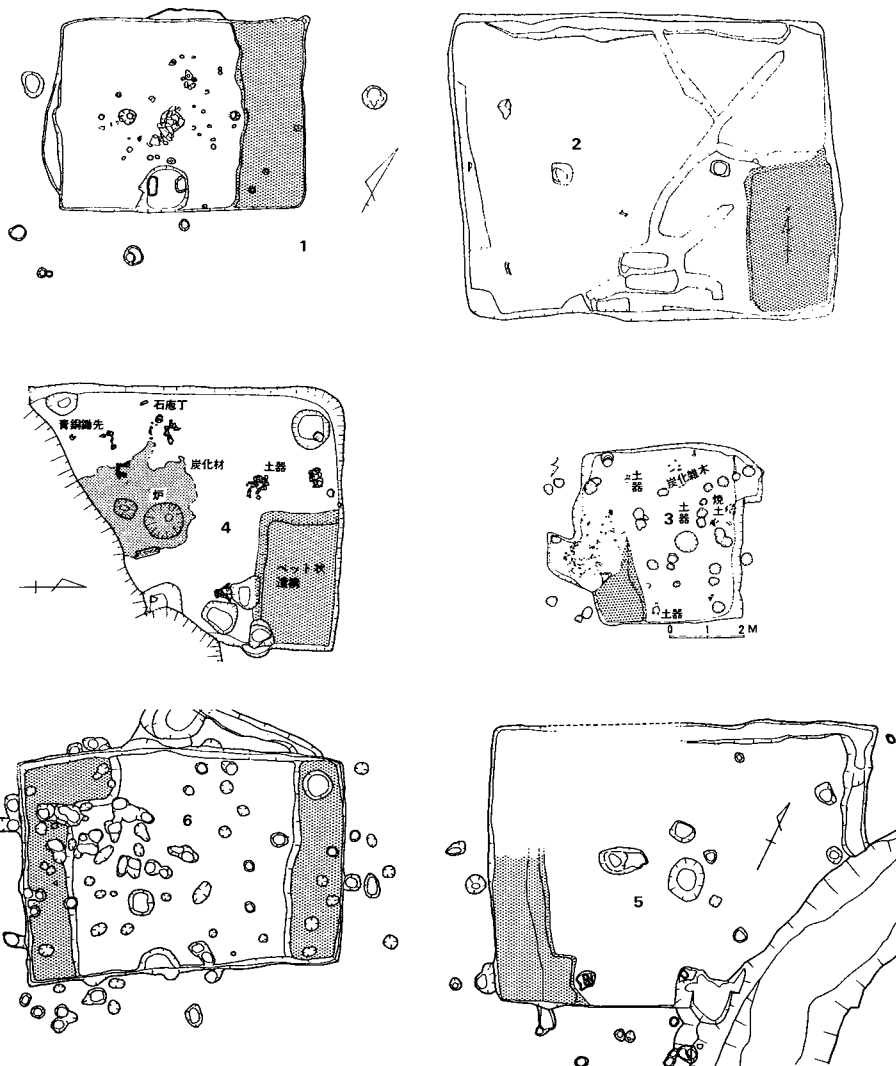


Fig. 214 ベッド状遺構各種①

1. 久保長崎遺跡第2号住居跡
2. 久保長崎遺跡第8号住居跡
3. 小田集落遺跡D地区第9号住居跡
4. 千塔山遺跡第44号住居跡
5. 御蔵園遺跡S B 2
6. 本川原遺跡第6号住居跡

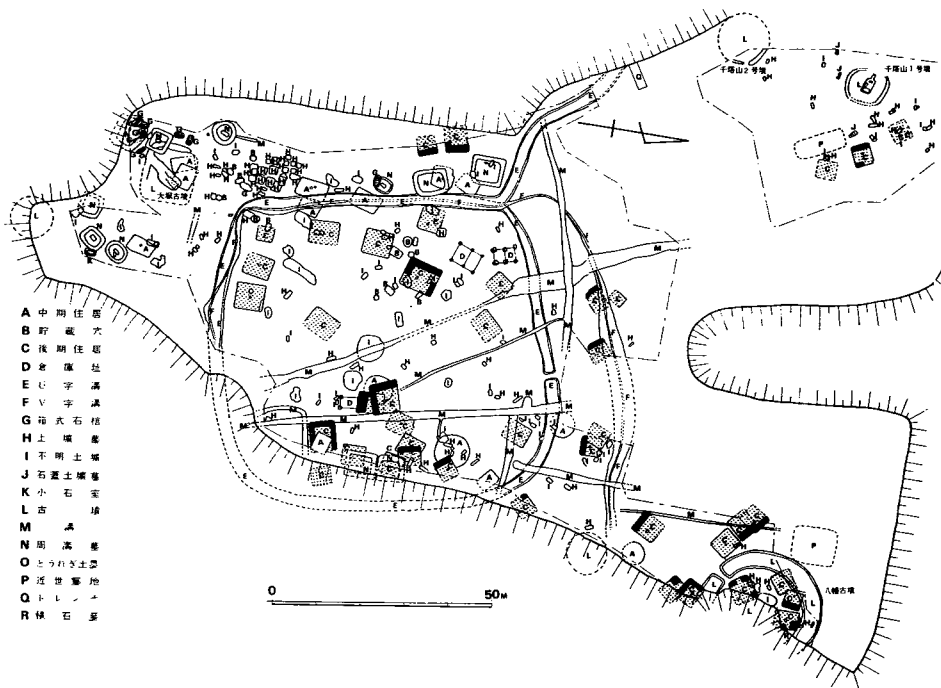


Fig. 215 千塔山遺跡におけるベッド状遺構設置情況 (黒の部分)

跡は弥生後期～古墳前期に集中し (Fig. 214～224), 古墳後期では, 現在のところ田尻遺跡の 1 例のみである。また, I・II 類のベッド状遺構は, 弥生後期前葉～中葉に比較的多く認められ, IV 類の L 字状を呈するものは, 弥生終末期～古墳前期前半に例が多いようである。III 類のコ字状を呈するものは, 道添遺跡のほかには横隈山遺跡第 2 地点第 9 号住居跡 (Fig. 221) があるが, 他の類に比べると例が少ない。

e 機能・性格

ベッド状遺構の機能と, それを設置する住居の性格については, 熊野正也氏が整理されている。それによれば, 機能については①寝所説, ②祭壇説の 2 つが考えられ, またベッド状遺構をもつ住居跡の性格については, ④住居の内部構造の変化 (利用区分の確立) と捉える説, ⑤集落内で特殊な位置にあったとする捉え方がある。①は④に, ②は⑤にそれぞれ展開するが, ①から 1 軒の竪穴住居の居住者間に「序列が固定化される動き」を見る説もある。

①は田村晃一氏を代表とする説で, ベッド状遺構は寝所と土間との区分が確立したための現象であり, 住居の内部構造の変化の一つと考えるものである。これはベッド状遺構のない住居も, その設置された住居と同位置のユカ面が踏み固められていないことを一つの主要な論拠としている。

同じ寝所説でも, 和島誠一氏を代表とする寝所格差説は, 田村氏の捉え方とは異なる。即ち,

ベッド状遺構は特設された寝所とされ、ここを使用する人々と使用しない人々とのあいだに階層差を認める考え方である。

②は熊野正也氏を代表とする。論拠は多岐に亙^(註57)っているが、集落内におけるベッド状遺構をもつ住居跡の評価が中心となっている。その概略は、次の通りである。

- ・ベッド状遺構をもつ住居跡から出土する遺物が、種類・内容とも他の住居跡のものとは様相を異にしていること

- ・ベッド状遺構の出現と消滅の時期が、方形周溝墓のそれと合致していること
 - ・ベッド状遺構をもつ住居跡は集落内において中心的な位置を占め、いろいろな点で配慮されていること
 - ・ベッド状遺構をもつ住居跡は原則的に1集落1軒であること
 - ・熊野氏分類のE類は、寝所とするにはあまりにも小規模すぎること
 - ・ベッド状遺構をもつ住居跡は全国的にみてもその絶対数が少ないこと
- (これらは、熊野氏が主に南関東地方における遺跡の分析から得られた指摘である)

以上、3つの代表的な所説をとりあげたが、室岡遺跡群でのあり方からみると、筆者としては寝所説を支持したい。しかし、3つの説それぞれに疑問点があり、それをいくつか記して自論の展開に代えたいと思う。

- i) ベッド状遺構は弥生後期～古墳前期に全国的に類例が多くみられるようだが、古墳後期になると、一般的には減少・消滅する傾向がみられる。どの説を支持するにしても、これをど

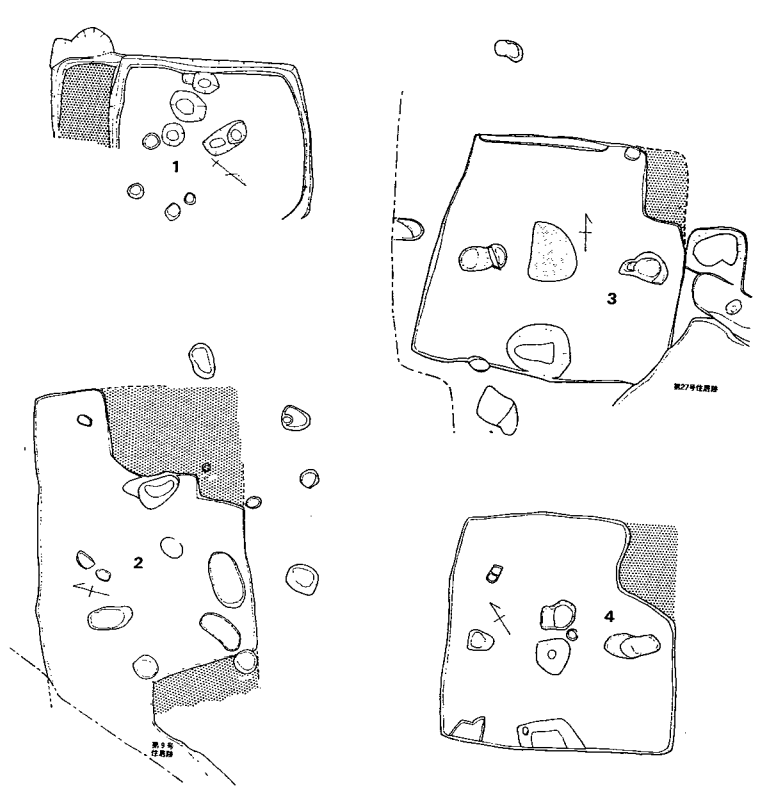


Fig. 216 ベッド状遺構各種②

1. 中・寺尾遺跡第3次調査第1号住居跡
2. 大道端遺跡B区第10号住居跡
3. 大道端遺跡B区第16号住居跡
4. 大道端遺跡C区第1号住居跡

のように理解したらよいのだろうか。一つには、古墳後期に至ると造り付けのカマドが一般的に設置されることから、竪穴住居の内部構造に大きな変化が起きたと考えられるが、ベッド状遺構を設置しなくなることへの疑問は依然として残る。最近の発掘例からみても、竪穴中央に位置した火所が古墳後期に至って周辺に移動し、作業場あるいは居間としての土間と、炊事場としての火所が分離されることはほぼ確実と思われるが、寝所と推定される4本の柱と竪穴壁とのあいだに、ベッド状遺構が検出されていないのは何故だろうか。(北部九州においては、現在のところこの時期のベッド状遺構を検出したのは、田尻遺跡第1号住居跡1例のみである)。

ii) i) と関連するが、寝所格差説の場合、弥生後期～古墳前期に現われた寝所における格差は、古墳後期に至ってどのようなになるのだろうか。住居内部の構造の変化としては現われないのか、現われるとしたらどのような現象なのだろうか。

iii) 寝所説の場合、本稿におけるI類や熊野氏分類のE類は規模が小さく、一部には寝所とするには小規模すぎるものもみられるが、これをどのように理解したら良いのだろうか。

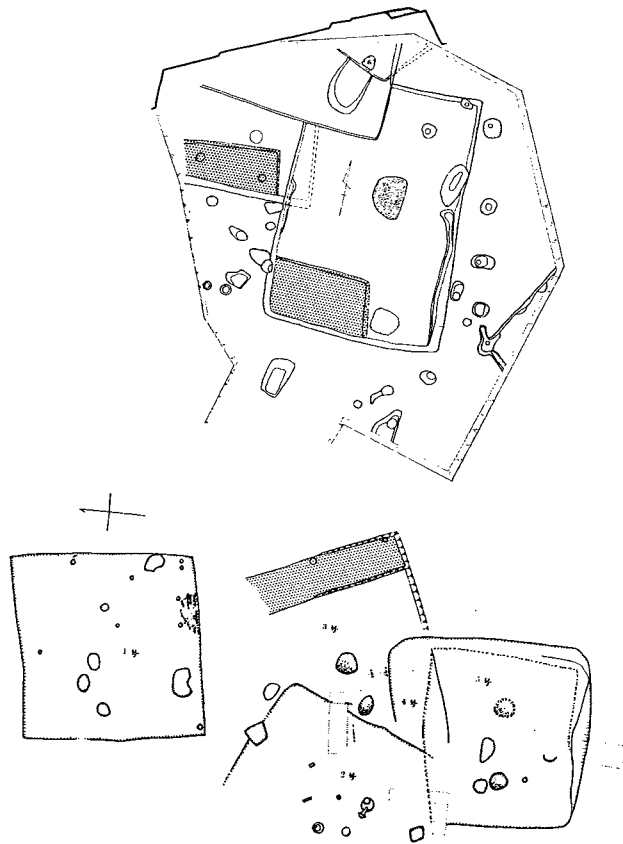


Fig. 217 ベッド状遺構各種③
(上:湯納遺跡, 下:竹ヶ本遺跡)

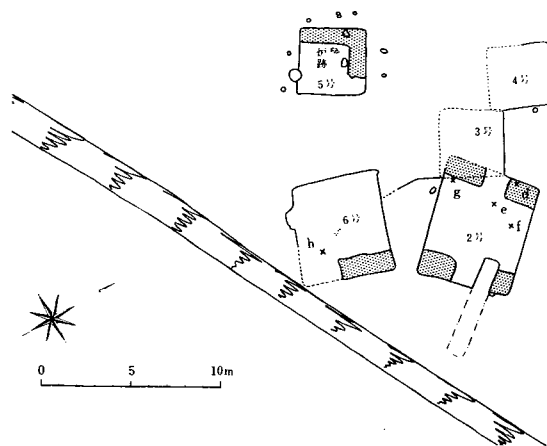


Fig. 218 弥永原遺跡B地区における設置情況



Fig. 219 有田遺跡における設置情況 1. 17街区 2. 13街区 3. 27街区

iv) ベッド状遺構を除いた竪穴内のユカ面積は、少なくとも室岡遺跡群の弥生後期の住居跡では3~4人が寝ることが可能である(1人につき $1.5m^2$ 前後と考える)。これは寝所格差説や祭壇説の一部を支持する。つまりベッド状遺構を寝所としなくても、土間に3~4人が寝ることは可能なのであり、ベッド状遺構に寝所とは別の機能を考えてもさしつかえない。寝所説ではこれをどのように理解するのだろうか。田村氏はベッド状遺構が竪穴内で占める面積からみて、居住者の生活に深くかかわっていると述べておられる。筆者もまたそう思うが、室岡遺跡群での計測結果では、12.3%~42.0%の幅があり、しかも竪穴床面積の50%以上を占めるのはⅢ類のみである。

v) 祭壇説で熊野氏のあげた論拠のうち、出土遺物に関しては、ベッド状遺構の存否と遺物内容との相関関係を指摘することはできない(本書 Tab. 1~6の土器以外の遺物欄参照)。

vi) 西中ノ沢遺跡では、検出された住居跡の全て(100%)にベッド状遺構が設置されてお

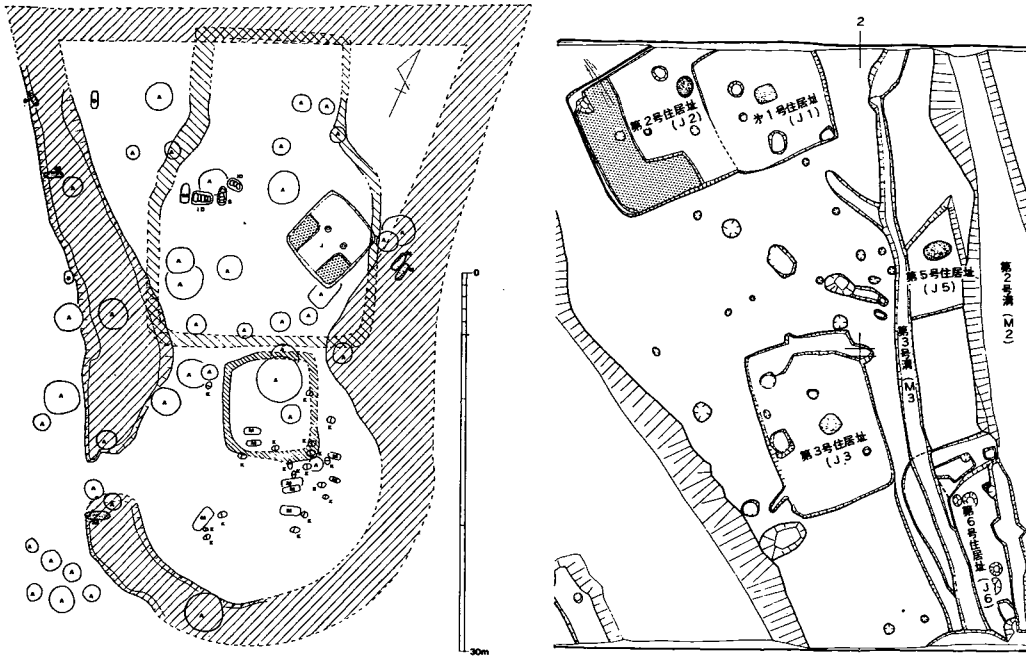


Fig. 220 ベッド状遺構各種④ (左：剣塚遺跡，右：多々良込田遺跡)

り、道添遺跡や他の遺跡での設置情况からみて、北部九州における弥生後期の集落では、ベッド状遺構をもつ住居跡が集落内において中心的な位置を占めるとはいえない。同様に、ベッド状遺構をもつ住居跡は、1集落1軒であるという原則は支持できない。このあり方の差を、南関東と北部九州との地域差と理解することもできるが、もしそうであるならば、どのような回路を経て差が出て

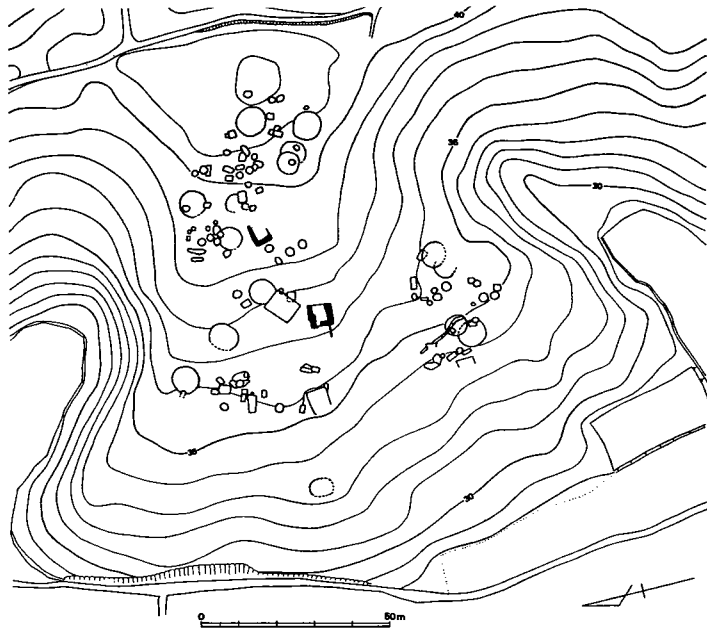


Fig. 221 横隈山遺跡第2地点における設置情况 (黒の部分)

くるのが重要な問題であろう。

vii) 祭壇説の場合、南関東では方形周溝墓の出現と消滅の時期がベッド状遺構のそれと合致しているとされるが、それぞれの消滅がどのような経緯によって接続するのかという問題が残されている。現在のところ、北部九州ではこの時期の方形周溝墓の検出例が少ないため、南関東におけるような指摘はできないと思う。

(6) おわりに

以上、平面プラン・床面積・出入口・ベッド状遺構について検討してみた。ベッド状遺構を

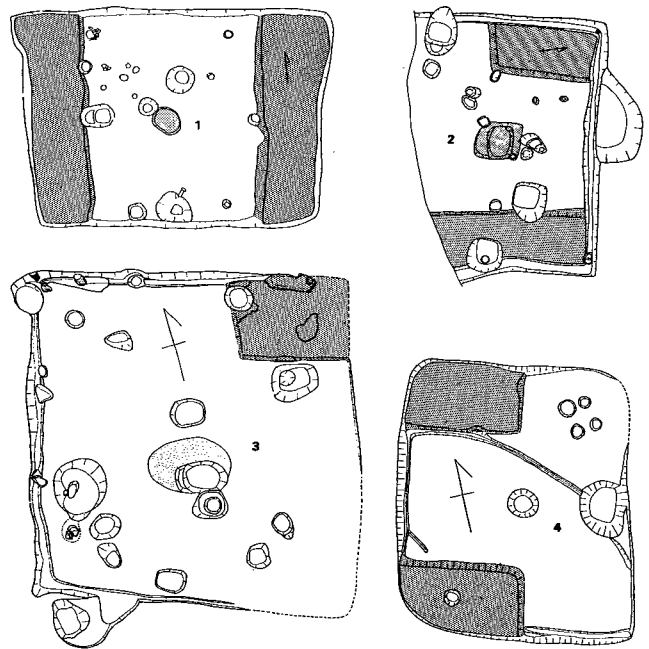


Fig. 222 ベッド状遺構各種⑤

1. 城ノ上遺跡第4号住居跡
2. 城ノ上遺跡第5号住居跡
3. 上籬子遺跡第1号住居跡
4. 茶白山遺跡第1号住居跡

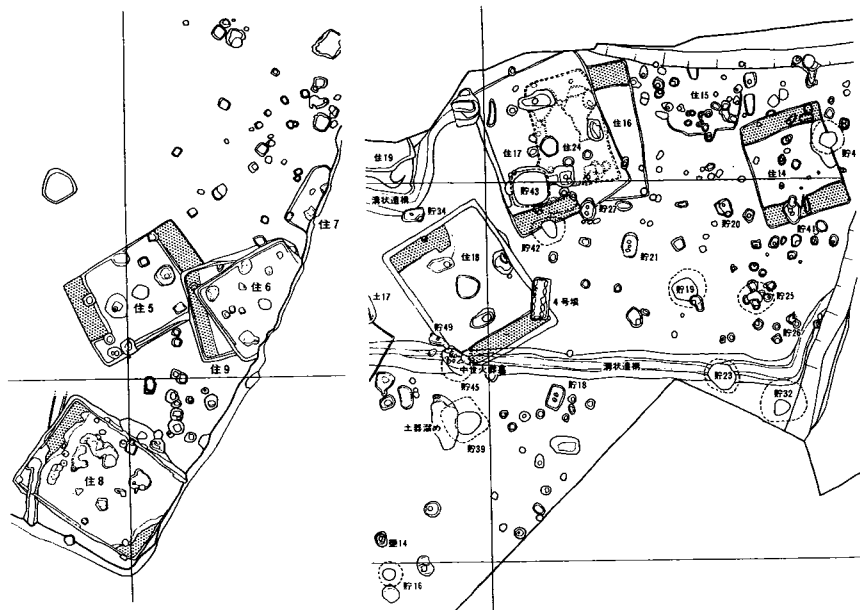


Fig. 223 門田遺跡における設置情況

単純に寢所とみてよいのか、あるいは階級性との関連を重視すべきなのか（さらには、祭壇説の含む諸問題について）、筆者には俄かに判断を示すことはできない。

出入口との関連でいえば、北部九州における長方形プラン・2本主柱の住居では、坊野第2号住居跡の例や、他遺跡におけるベッド状遺構の設置状況からみて、出入口は妻側よりも平側に考えたい（筆者の発想からすれば、寢所・祭壇のある側から出入りするということは考えにくいのである）。さらにいえば、貯蔵穴（註58）様土壌のある側よりも、その反対側に出入口を推定したい。これが許されるなら

ば、室岡遺跡群における弥生後期の住居については、西中ノ沢遺跡では出入口は第3号を除き北～北西に、野口遺跡では北～北西と北東の2方向に、道添遺跡では北西にそれぞれ開口していたとすることができる。

出入口についてこのように執拗なまでに言及するのは、出入口の方向を設定することが、集落論への一つの前哨と考えるからである。堅穴の面積から居住人員を算出する方法は、数字自体は一つの目安でしかないものであり、その危険性は充分認識されなければならないし、また数学に解消してはならないこと、勿論である。しかし、すでに先学が指摘しているように、この方法は生産の主體的な担い手としての・原動力としての・生活する人間相互の結びつき一人間の *Gemeinwesen* の 共同的なあり方 一を明らかにしようとする意識が生みだした、一つのすぐれた方法であると思う。

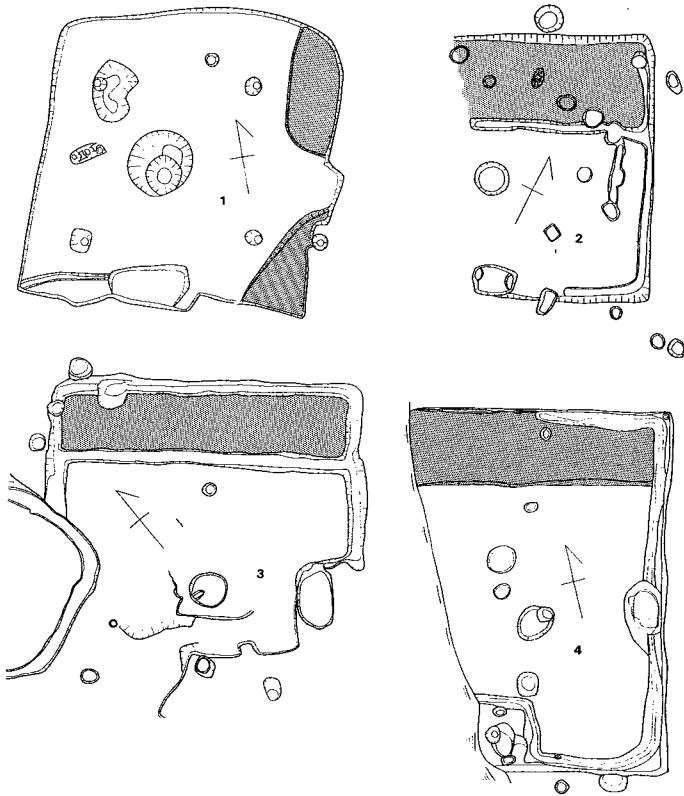


Fig. 224 ベッド状遺構各種⑥

1. 柳ヶ谷遺跡西区第4号住居跡
2. 柳ヶ谷遺跡西区第6号住居跡
3. 柳ヶ谷遺跡西区第5号住居跡
4. 向山遺跡第1号住居跡

- 註 1) 集落遺跡では、住居跡群のなかに他の住居よりも大形の住居がしばしば存在することが古くから気付かれており、また各地の調査でも確認され、討論されている。本遺跡跡群では道添遺跡第17号がそれに当るだろう。

「原始・古代の集落―第23回総会研究報告討議」『考古学研究』24—1, №93, 1977

こうした住居跡については、

- ①住居跡自体からのアプローチ（遺物の出土状況・遺物の内容・住居の構造・埋没過程等）
 - ②他の住居との関係性からのアプローチ（他住居との位置関係・出土遺物の相違等）
 - ③他の住居以外の遺構との関係性からのアプローチ（掘立柱建物・土壇・溝等）が考えられ、これらの総合的な研究から判断されるべきものと思われる。これは別個の研究となり得る課題であり、また本稿の意図から離れてしまうので、ここでは性急な判断は控え、大形住居の検出例を1例加えたことを報告するにとどめたい。
- 2) 貯蔵穴様土壇は別のところに求められる。勿論、この種の場所が1住居内に2カ所以上あってもかまわないが、通例1カ所の場合が多いので、ここでは「屋内貯蔵」の床面での場所は1カ所と仮定しておく。
- 3) 高床の建物では、妻入例が殆どのものである。岡山県女男岩遺跡出土の家形土器は真壁をもった建物で、平入である。竪穴式住居と思われる奈良県東大寺山古墳出土環頭飾は妻入であろう。これと同様に表現された奈良県宝塚古墳出土家屋文鏡の例も、同じく妻入と考えられる。
- 間壁忠彦他「王墓山遺跡群」『倉敷考古館研究集報第10号』, 1974
 佐原真・金関恕編『稲作の始まり』古代史発掘4, 講談社, 1975
 小野山節編『古墳と国家の成立』古代史発掘6, 講談社, 1975
 工楽善通「竪穴住居と高床住居」文化庁監修『日本の建築1』文化財講座古代I, 第一法規, 1977
- 4) 都出比呂志「竪穴式住居の周堤と壁体」『考古学研究』22—2, №86, 1975
- 5) 前掲, 註(4)による。
- 6) 周堤によって住居の「なか」と「そと」が区別されると考えた場合、坊野第2号では炉の中心から各隅への距離と、炉から張り出し部外方の端部までの距離とがほぼ等しいことから、張り出し部は「なか」に属すると考えられるからである。
- 7) 石野博信「考古学から見た古代日本の住居」大林太良編『日本古代文化の探究 家』社会思想社, 1975
- 8) 勿論、2つの出入口の設置方法があってもかまわない訳で、この場合は張り出し部が検出される出入口の設置方法と、張り出し部を設けない出入口の設置方法とがあることになる。さらに、妻入・平入の区別は任意であったかもしれない。
- 9) 北部九州の弥生中期円形竪穴式住居の復元として、
- ①佐藤浩「宝台住居址の建築復元」
 - ②山本輝雄「円形竪穴式家屋の推定復元案について」

がある。

①ではC地区第5号住居跡の発掘調査から、棟の方向に対して約70°の角度をもった出入口が復元されている。ここでは主柱とは別に、出入口の上屋部を支える柱が考えられており、坊野第2号の溝両脇のピットはこの種の柱のものと思われる。②は近年調査された竹並遺跡A地区第2号住居跡について行なわれた復元で、棟の方向に対して①と同じく70°前後（筆者の測定）の角度をもった出入口が復元されている。出入口と推定されたのは柱穴間の距離が他と比べて大きな部分である。①・②のいずれも、平入と考えられよう。

弥生後期の長方形竪穴式住居の復元としては、

③裏山遺跡

④宮原種生「住居跡の復元考察」

がある。③は1964年、前年の調査をもとに筑後郷土史研究会会員および八女地方高校生・中学生の手によってなされた復元例で、遺跡地において実際に上屋が架せられたものである。写真を見る限り、出入口は妻側に復元されているようである。④は弥生後期前半に比定された久保長崎遺跡第2号住居跡における復元例で、出入口は挿図を素直にみればベッド状遺構のある短辺とは反対側の短辺に復元されている。即ち、妻入の建物と考えられている。

古墳後期の方形竪穴式住居跡の出入口の推定には、

⑤酒井仁夫「B、遺構と遺物の検討」

がある。裏ノ田遺跡は、すでにカマドが付設されている住居跡群を検出した遺跡で、4本柱の柱穴間距離の実測値から、「……判明した限りでは竈が全て平の方角にあり、竈と直角方向が棟木方向になると予想される。」そして「……住居跡入口は竈と直角方向になるのではなかろうか」と予想されている。つまり、出入口は妻側にあったと考えられている。

以上は手元の資料によるもので、他地域の諸例については後日に期したい。

①高倉洋彰編『宝台遺跡』日本住宅公団、1970

②行橋市教育委員会編『竹並遺跡』行橋市文化財調査報告第5集、1977

③岩崎光『裏山遺跡調査概報』筑後市教育委員会、1966

④松岡史編『福岡バイパス関係埋蔵文化財調査報告』福岡県教育委員会、1973

⑤酒井仁夫編『九州縦貫自動車道関係埋蔵文化財調査報告—XVII—』福岡県教育委員会、1977

10) 西中ノ沢遺跡の住居跡が全てベッド状遺構を設置するのに対し、道添遺跡の弥生後期の住居跡にはベッド状遺構を設置するものと設置しないものとが存在する。このことから、あるいは両遺跡の[○]居住者相互間に、相異なる[○]結びつき方があったのかもしれない。それはベッド状遺構のあり方からみれば、西中ノ沢遺跡においては比較的自由な・各住居ごとに個性的な設置形態として現われ、道添遺跡においては一方でベッド状遺構を設置するものとしなないものという差として現われ、他方設置する場合には画一的な・限られた設置形態しか許されないものとして現象するような相互間の[○]結びつき方である。

11) 弥生後期ではほぼ全形の判明するもの20軒のうち、ベッド状遺構の設置される住居は15軒で、75%を占める。これに対し、古墳前期では8軒のうちの2軒で、25%となる。この数値を一般化することは勿論できないが、設置住居が相対的に減少するという傾向は指摘できるだろう。

12) 厳密には、ベッド状遺構・炉および貯蔵穴様土壇の面積のほか、主柱穴や他の掘り込みを計測して床面積から差し引かないと、正確なユカ面積は算出されない。しかし、柱穴等の比較的小規模の遺構については、紙面の凹凸や摩擦による計測誤差が大き過ぎるので、ここではこれらの面積は無視している（つまり $f = a - (b + c + d + e)$ である）。従って、炉や貯蔵穴様土壇の面積には相対的に大きな測定誤差があり得るが、ベッド状遺構の面積についてはより正確を期し、4回以上の測定の平均値をとっているため、計測誤差は1%以内に納まると思われる。これについては計測開始前に、方眼紙を使用した練習によって確認した。

なお、プランメーターの使用に関しては、文化課文化係技術主査芳沢要氏の指導・助言を得た。記して感謝の意を表します。

13) 岩崎光『裏山遺跡調査概報』筑後市教育委員会、1966

14) いささか奇妙な表記であることは、筆者も自覚している。ここで古墳時代後期前葉としたのは、比較的資料の多い筑紫野市周辺でいえば野黒坂遺跡における第9・10類土器の時期、および裏ノ田遺跡におけるA・B・C型式土器の時期を指す。福岡市西部では大又遺跡の住居跡群、東

部では蒲田遺跡D地区住居跡群の古い時期がこれに当る。後期中葉としたのは、池田遺跡の住居跡群、大曲遺跡の第3号住居跡を除く住居跡群、畑添2地点のI類住居跡などがこれに含まれる。後期後葉は畑添2地点II類住居跡、八隈遺跡第2地点の住居跡群を考えている。大略の年代は、後期前葉が5世紀末～6世紀前半、後期中葉は6世紀後半、後期後葉は7世紀前半頃が与えられるだろう。以上の古墳後期の3時期細分は暫定的なものであり、将来変改される場合もあることを御断わりしておきたい。それは、住居のみではなく、墳墓その他との関連も当然考慮しなければならないからである。

『福岡南バイパス関係埋蔵文化財調査報告第1集』福岡県教育委員会, 1970

浜田信也編『今宿バイパス関係埋蔵文化財調査報告第1集』1970, および栗原和彦・上野精志編『同第3集』福岡県教育委員会, 1973

川述昭人編『九州縦貫自動車道関係埋蔵文化財調査報告—VI—』, 酒井仁夫・松村一良編『同一—VII—』, 関晴彦編『同一—XIV—』, 酒井仁夫編『同一—XVII—』福岡県教育委員会, 1975~1977

飛高憲雄他『蒲田遺跡』福岡市埋蔵文化財調査報告第33集, 福岡県教育委員会, 1975

15) 小田富士雄編『狐塚遺跡』筑後市教育委員会, 1970

16) 狐塚遺跡の住居跡群は3時期に細分されているが、遺跡全体の状況をみれば、ベッド状遺構の設置される住居の数は、道添遺跡における弥生後期の住居跡群に比べて、相対的に減少している。これは道添遺跡の古墳前期後半の住居跡群にみられる傾向に連続しており、古墳時代以降にベッド状遺構を設置する住居の数が減少し、古墳後期になると殆どみられなくなるという傾向と矛盾しない。

17) ここに列記したのは、手元の資料のみである。これらのほかに脱落しているものも多分にあると思われる。大方の御教示を仰ぎたい。なお、縄文時代の遺跡については、チェックする時間も用意もないため、ここでは弥生時代以降を扱っている。

ベッド状遺構設置の住居跡は、熊本県内でも検出されている。

緒方勉『宮山遺跡』阿蘇町埋蔵文化財調査報告第1集, 阿蘇町教育委員会, 1972

宮山遺跡では、ベッド状遺構は第1号住居跡の南西隅に設置されている。これは本稿におけるI類に相当するものである。

なお、本住居跡は東西にやや長い方形プラン(長軸率87.8)を呈し、北西隅近くに「カマド」(同報文中ではカギカッを付している)が設置されている。同時に検出された第2号住居跡とともに弥生終末期に比定されており、「カマド」の設置例としては、全国でももっとも古い例と思われる。

18) 柳田康雄編『井原・三雲遺跡発掘調査概報昭和49年度』福岡県文化財調査報告書第52集, 福岡県教育委員会, 1975

柳田康雄編『井原・三雲遺跡発掘調査概報昭和50年度』福岡県文化財調査報告書第53集, 福岡県教育委員会, 1976

19) 栗原和彦他『今宿バイパス関係埋蔵文化財調査報告第5集』福岡県教育委員会, 1977

20) 浜田信也編『今宿バイパス関係埋蔵文化財調査報告第1集』福岡県教育委員会, 1970

21) 九州大学文学部考古学研究室編『有田古代遺跡調査概報』福岡市教育委員会, 1967

九州大学文学部考古学研究室編『有田遺跡』有田遺跡調査団, 1968

井沢洋一編『有田周辺遺跡調査概報』福岡市埋蔵文化財調査報告書第43集, 福岡市教育委員会, 1977

なお、柳田純孝編『福岡市野方中原遺跡昭和48年度調査概報』福岡市埋蔵文化財調査報告書第30集, 福岡市教育委員会, 1974も参照されたい。

- 22) 下条信行・沢皇臣編『宮の前遺跡(A～D地点)』福岡県労働者住宅生活協同組合, 1971
九州大学文学部考古学研究室編『宮の前遺跡(F地点)』福岡市埋蔵文化財調査報告書第13集, 福岡市教育委員会, 1971
なお, 酒井仁夫「宮の前遺跡E地点」浜田信也編『今宿バイパス関係埋蔵文化財調査報告第1集』福岡県教育委員会, 1970も参照されたい。
- 23) 塩屋勝利・折尾学編『山陽新幹線関係埋蔵文化財調査報告』福岡市埋蔵文化財調査報告書第32集, 福岡市教育委員会, 1975
- 24) 前掲, 註(23)に同じ
- 25) 松岡史・宮原種生「久保長崎遺跡」
松岡史編『福岡バイパス関係埋蔵文化財調査報告』福岡県教育委員会, 1973
- 26) 中間研志編『九州縦貫自動車道関係埋蔵文化財調査報告—Ⅺ—』福岡県教育委員会, 1977
- 27) 柳田康雄他『山陽新幹線関係埋蔵文化財調査報告第1集』福岡県教育委員会, 1976
- 28) 池辺元明編『九州縦貫自動車道関係埋蔵文化財調査報告—Ⅷ—』福岡県教育委員会, 1977
- 29) 前掲, 註(28)に同じ
- 30) 上野精志他『九州縦貫自動車道関係埋蔵文化財調査報告—XVI—』福岡県教育委員会, 1977
- 31) 児玉真一編『九州縦貫自動車道関係埋蔵文化財調査報告—XI—』福岡県教育委員会, 1977
- 32) 『竹並遺跡』行橋市文化財調査報告書第5集, 行橋市教育委員会, 1977
- 33) 佐々木隆彦編『大南遺跡調査概報』春日市文化財調査報告書第4集, 春日市教育委員会, 1976
- 34) 『福岡県弥永原遺跡調査概報』福岡県文化財調査報告書第32集, 福岡県教育委員会, 1965
三野章編『福岡市弥永原遺跡調査概報』福岡市住宅供給公社・福岡市教育委員会, 1967
- 35) 柳田康雄編『山陽新幹線関係埋蔵文化財調査概報昭和48年度』福岡県教育委員会, 1975
木下修編『山陽新幹線関係埋蔵文化財調査概報昭和49年度』福岡県教育委員会, 1975
小池史哲編『山陽新幹線関係埋蔵文化財調査概報昭和50年度』福岡県教育委員会, 1976
- 36) 渡辺正気編『筑紫郡春日町竹ヶ本遺跡調査報告』福岡県文化財調査報告第22輯, 福岡県教育委員会, 1961
- 37) 高倉洋彰編『宝台遺跡』日本住宅公団, 1970
- 38) 佐々木隆彦編『古大間池遺跡』粕屋町教育委員会, 1977
- 39) 馬田弘稔編『中・寺尾遺跡』大野城市文化財調査報告書第1集, 大野城市教育委員会, 1977
- 40) 調査報告会資料『祖先のあしあと』福岡県教育委員会・筑紫野市教育委員会, 1974
- 41) 浜田信也編『横隈山遺跡』小郡市教育委員会, 1974
- 42) 馬田弘稔編『栗田遺跡D・E地区』三輪町文化財調査報告書第2集, 三輪町教育委員会, 1975
なお, 馬田弘稔編『栗田遺跡A・B・C地区』三輪町文化財調査報告書第1集, 三輪町教育委員会, 1974も参照されたい。
- 43) 高山明編『小田集落遺跡』甘木市文化財調査報告書第2集, 甘木市教育委員会, 1974
- 44) 櫻井康治「御蔵園遺跡」古賀壽・櫻井康治編『筑後国府跡(I)』久留米市文化財調査報告書第12集, 久留米市教育委員会, 1976
荻原裕房編『筑後国府跡(II)』久留米市文化財調査報告書第13集, 久留米市教育委員会, 1977
- 45) 岩崎光『裏山遺跡調査概報』筑後市教育委員会, 1966
- 46) 小田富士雄編『狐塚遺跡』筑後市教育委員会, 1970
- 47) 関晴彦編『九州縦貫自動車道関係埋蔵文化財調査報告—XIV—』福岡県教育委員会, 1977
- 48) 中牟田賢治編『千塔山遺跡調査概報』基山町遺跡発掘調査団, 1977
- 49) 松尾吉高編『城ノ上遺跡』基山町文化財報告書第1集, 基山町教育委員会, 1977

- 50) 木下巧他『本川原遺跡』佐賀県文化財調査報告書第26集, 佐賀県教育委員会・建設省佐賀国道工事事務所, 1974
 木下巧他『本川原遺跡—第2次調査—』佐賀県文化財調査報告書第32集, 建設省佐賀国道工事事務所・佐賀県教育委員会, 1975
- 51) 工楽善通編『福岡県三井郡小郡遺跡発掘調査概報—1967夏～秋—』福岡県文化財調査報告書第39集, 福岡県教育委員会, 1968
 工楽善通編『福岡県三井郡小郡遺跡発掘調査概報—1967・'68・'70—』福岡県文化財調査報告書第49集, 福岡県教育委員会, 1971
- 52) 前掲, 註 (23) 14頁
- 53) 前掲, 註 (23) 60～61頁
- 54) 熊野正也「弥生時代集落構造の一考察—ベッド状遺構をもつ住居址を中心として—」『史館』第2号, 1974
 熊野氏はベッド状遺構の設置形態をA～F類に分類されている。本稿での分類と対比すれば、B類はIV類(L字状), C類はIII類(コ字状)に相当し、E類はI類に近く、A類はII類に近い。D類・F類は、住居の竪穴壁に沿って切れ目なく連続的に設置されており、平面プランに関係なく(宝台遺跡B区第1号住居跡の如く円形プランのものもあるので、これらを一括してV類としたい。
 なお、ベッド状遺構については、本稿は熊野氏の論文に多くを負っている。
- 55) 吉田章一郎・田村晃一「千葉県我孫子中学校校庭遺跡の調査」『考古学雑誌』47—1, 1962
 田村晃一「我孫子中学校校庭遺跡」東京大学考古学研究室編『我孫子古墳群』我孫子町教育委員会, 1969
- 56) 和島誠一・田中義昭「住居と集落」和島誠一編『日本の考古学Ⅲ』河出書房, 1966
 和島誠一・金井塚良一「集落と共同体」近藤義郎・藤沢長治編『日本の考古学Ⅴ』河出書房, 1966
- 57) 前掲, 註 (54)。但し、筆者の誤解でなければ、ベッド状遺構が寝所であることを否定されているのではなく、祭壇としての性格も持っていたと推定され、このことが強調されている。その意味で、ここでは祭壇説と呼んでいる。為念。
- 58) 短辺に沿ったII類のベッド状遺構は、しばしば両短辺に設置されているからである。この点、とくに建築学からの御教示を仰ぎたい。

2. 道添遺跡における住居跡の周溝について

土 田 充 義*

宮 原 種 生**

室岡所在遺跡群には西中ノ沢遺跡、坊野遺跡、野口遺跡、道添遺跡がある。それらの各遺跡から住居跡が発掘された。その内最も多く住居跡を含んでいる道添遺跡をとりあげ、特にその住居跡内に巡られた周溝について述べたいと思うが、その前にこの周溝は以前からどのように使われていたのか、また何故必要であったのかを検討された論考はまだ見うけられない。それは周溝に付随した遺物が伴って発掘されていないためであろう。ところが、道添遺跡住居跡第15号から焼土と共に杭、竹、藁が出土し、その出土状況から、これらが周溝に付随する材料と考えられることにより、周溝とはいったい何かということをも明らかにする手がかりを得た。そこで説明を加えたのが小論である。

●周溝はいったい何か

道添遺跡からは3時期の住居跡が発掘されている。その3時期は弥生時代後期中葉、古墳時代前半、古墳時代後半で、その内周溝を持つ住居跡は弥生時代後期中葉が11棟の内3棟、古墳時代前期の住居跡では8棟の内6棟、古墳時代後期では無い。これらの時期と周溝とがどのような関係を示すのであろうか。この遺跡だけからでは弥生時代後期中葉から見られることになり、古墳時代前半では多く存在し、古墳時代後期では失われることになるので、時期と周溝の存在とが関係しているかの如き様相を呈している。しかし、住居跡を全般的に考えるならば決して、古墳時代前半と周溝とが結びついていることにはならず、この遺跡だけから周溝の時期を決めることは出来ない。それでも、古墳時代前期の住居跡に周溝が多く見られることは注目しておく必要がある。

道添遺跡住居跡第15号では生活面に杭が溝と直角に交わり、平行して6本並び、その上に竹がのり、さらにその上に藁があり、その藁の上に焼土があった。この杭は約1メートルのもあり、また、所々失っていて1メートル以下のもある。これを杭とした理由は溝と直交し、周溝の穴と一致する位置にあるため、垂木ではないと考えられるからである。その杭は直径20cmで、西壁面の杭穴は30cm間隔で3ヶ並んでいる。溝幅は各住居跡とも10cmから20cmの間で、深さは10cm前後に近いが、一定せずに浅い所もある。これらのことから高さ1mのかこい罎が周溝上に巡らされて内部を包んでいた。その罎の跡が周溝となって残されていたと考えられる。したがって、周溝は生活面を包む罎の跡であると規定したい。

この規定に対し、発掘担当者の言葉によると溝は掘って造ったものではなく、上からの重み

*九州大学助教授 **福岡建設専門学校助教授

で生じたためであるとの見解により、この規定も肯定してくれるばかりでなく、その構造まで推測させてくれる。それは杭上に垂木をのせ屋根を支えることによって力を下へ伝えることが推定出来るからである。杭は囲を維持するのに重要な材であるばかりでなく、垂木を支える役目もしていたと考えられる。そこで想像図を描いてみると Fig. 225・226 の如くなる。これは道添遺跡の近くに存した裏山遺跡（筑後市）の住居跡の平面に第15号住居跡からの出土状況を基に推定復原した断面図の一部分である。

●周溝の存在からどのようなことが解るか

壁とせず^{かこい}囲とした理由は周溝内のピットを側柱とせず杭の跡としたからで、側柱の存在により壁を規定すべきであると考えからである。では囲からだんだん壁へ移行するものであろうか。それは今後の課題であるが、内的要因から壁が成立したというよりも高床住居の影響による外的要因とする方が理解し易い。

さて、周囲全部に囲があるとすると入口がふさがれたことになり、不都合になる。そこで周溝が切れている所を探すと方形ピットの所で周溝が無い。それは東から南にかけて存在している。この方形ピットを造るために周溝を不必要としたのではなく、方形ピットに板の橋を掛けてそこから出入りをしていたと考えられる。方形であることの意味も板をかけ易いということから理解出来る。しかし、必ずしもこの理論にあてはまらないものもある。それは、坊野遺跡第2号住居跡では方形ピットに面して杭穴がある。これは溝が無いのでどう判断していいか解らないが、方形ピットの所を入口とするのは無理と思われる。また、道添遺跡第13号住居跡が

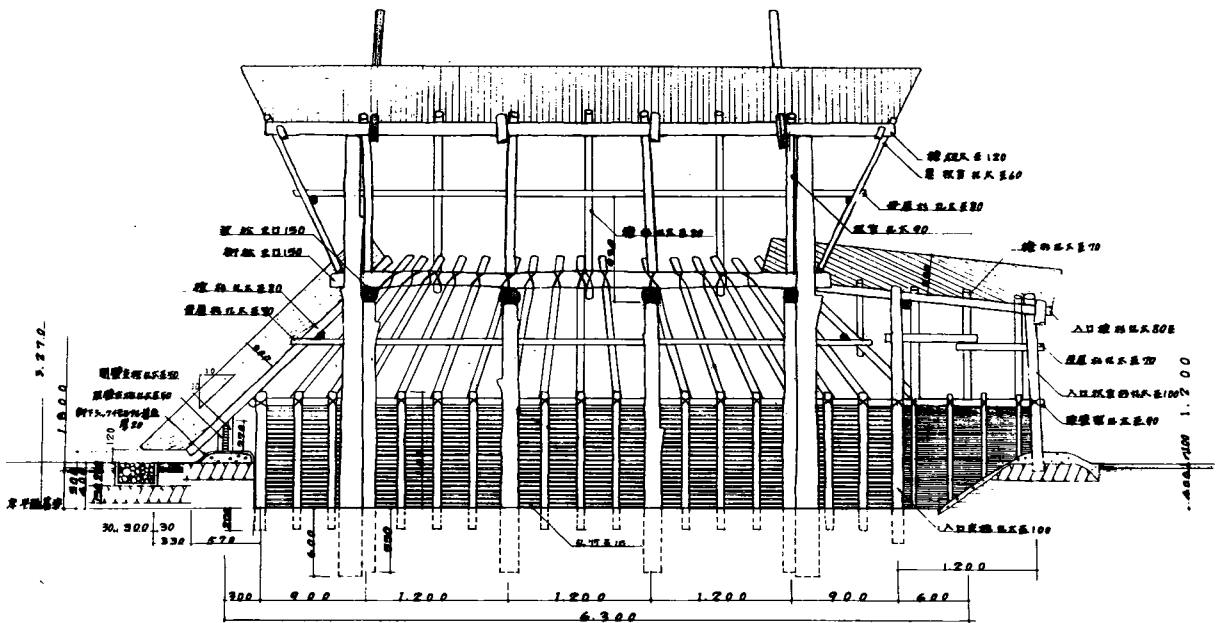


Fig. 225 断面図

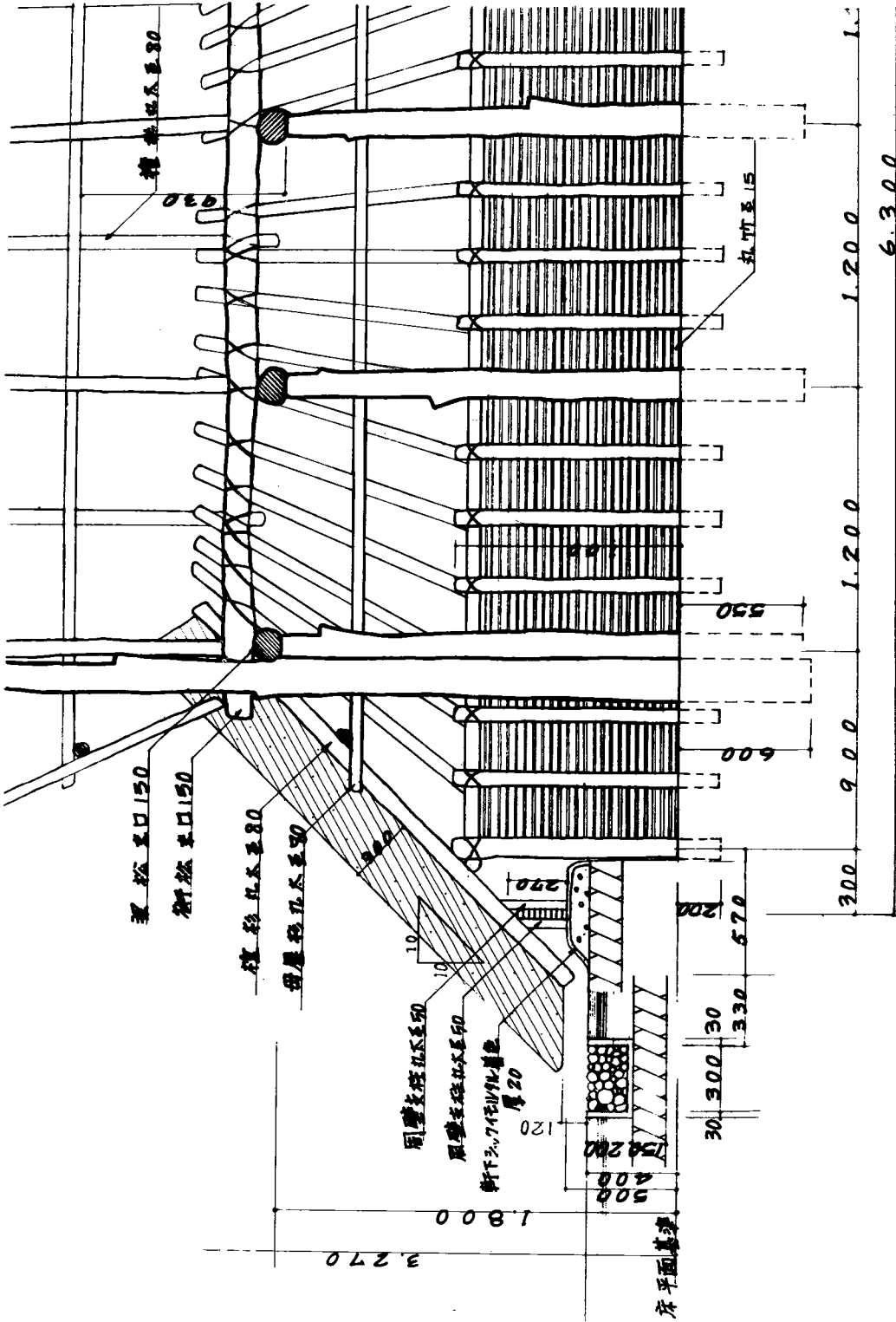


Fig. 226 断面図部分 冊を示す

周囲に溝を巡らし、切れている個所が無い。これなどはどう理解すべきか困難であるが、囲の高さが異なっていたためであると考え以外に方法は無い。すると周溝が切れている所は入口を示すとすることと矛盾する。しかし、これは1例であって他の住居跡では切れているか、溝幅がほんのわずかになっているものだけである。したがって、方形ピットのある所を入口としてよいと考えている。似た例として、それは生活面では無く、生活面と接してピットを掘り、その上に橋をかけて出入口にしている。その遺跡は八王寺市中田遺跡で、復原住居が団地内に建っている。このように入口にピットを掘ることが他でも見うけられる。

3. 遺物の検討

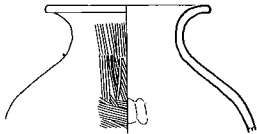
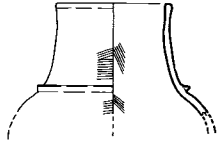

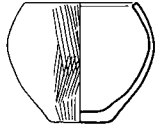
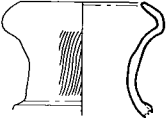
(1) 弥生土器

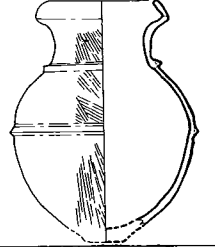
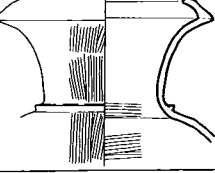
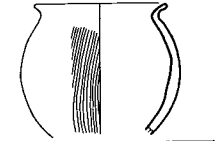
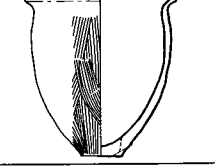
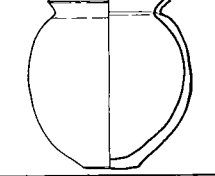
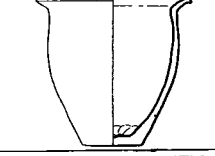
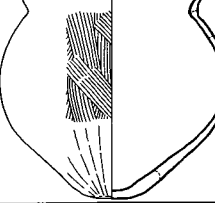
1

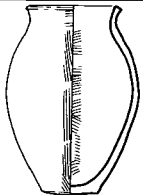
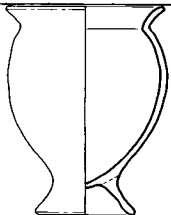

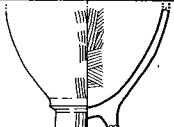


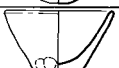

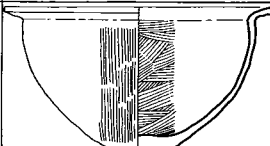

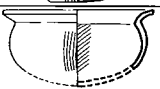

室岡遺跡群出土の弥生土器については概報でも簡単にその位置づけについてのべたが、その後数年を経過して比較検討の材料も増加しているため、本報告においても弥生土器の一項を設けて考察することとした。

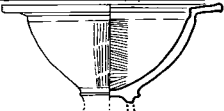
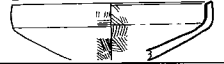
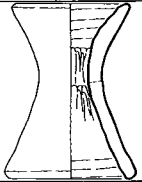
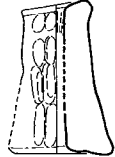
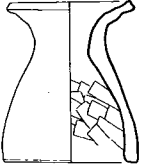
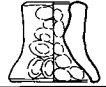

本遺跡群の弥生土器は、壺・甕・鉢・高杯・器台・ミニチュア土器がみられるが、次のような器形分類をおこないたい。

Tab. 8 弥生土器分類表

器種	型式	器形の特徴	図
壺	大形壺	口縁部が単純に大きく外反するものである。	
	直口壺	口縁部がやや内傾気味にまっすぐ直立するものである。	
	広口壺	球形の胴部に短く開く口縁部がつくものである。	
	無頸壺	球形の胴部がそのまま内屈した口縁部に移行しているものである。	
	複合口縁壺	I 口縁反転部で稜をもたず、祖型となった袋状口縁長頸壺そのままの袋状口縁のものである。	

器種	型式	器形の特徵	図
壺	複合口縁壺	II 口縁反転部にやや稜をもつもので、頸部つけねよりもやや上位でしまり、頸部は短い。	
		III 口縁反転部で明確な稜をもちII類よりも直線的に強く内傾するものが多い。頸部は長く、つけねでもっともしまる。	
		大形品と小形品とあるが、口頸部のつくりによってI~IV類に大別される。 I・II類については胴部のつくりによってa・bに細分される。	
甕		Ia 口縁端が丸味を帯び、胴部最大径が口径よりも大きい。	
		Ib 口縁端が丸味を帯び、胴部最大径が口径と等しいか小さい。	
		IIa 口縁端をしっかりと方形につくり、胴部最大径が口径よりも大きい。	
		IIb 口縁端をしっかりと方形につくり、胴部最大径が口径と等しいか小さい。	
		III 口縁端が「く」の字に外反するが、端部へ向うてうすくなる。	

器種	型 式	器 形 の 特 徴	図
甗	IV	頸部はしまらず稜もつかず、ゆるやかに反転し、口縁部は直立気味に開く。	
台付甗	台脚の長短によって、I・II類にわかれ、I類は更にa・bに細分される。		
	I a	台脚が短く外反する。	
	I b	台脚が短く内彎しながら開く。	
II	台脚が長いもの。		
鉢	口縁部の形態によって、I・II類に大別され、体部の形態からI類はa~dに、II類はa~cに細分される。		
	I a	直口半球形で平底である。	
	I b	直口半球形で丸底である。	
	I c	直口平底で体部は植木鉢形に直線的に開く。	
	I d	直口であるが、前三者よりも器高が高い。	
	II a	直線的な「く」の字口縁で、半球形平底の体部は頸部つけねに最大径をもつ。	
	II b	外反する「く」の字口縁に胴張りの強い球形平底の体部がつく。	
II c	外反する「く」の字口縁に扁球形の体部がつく。		
台付鉢		半球形の体部に短く開く台がつくものである。	

器種	型	式	器 形 の 特 徴	図
高 杯	I・II類にわかれる。			
	I		中期の形制を受けつぎ口縁部は逆L字状を呈するが、坏部は深い。	
	II		坏部は浅く広がり口縁部は短く立ち上がる。	
器 台	I~IVにわかれる。			
	I		上下に開き、くびれ部は中ほどに位置する。	
	II		上下に開くが、くびれ部が上方に位置する。	
	III		器高は高いが、くびれることなく、口縁部から脚部へ一直線に開く。	
	IV		器高低く、I類を半載した形態を示す。	
小形土器			手づくねでつくられ、鬚・鉢がみられ、特に鉢が多い。	

各器種を以上のように分類したが、これを本遺跡群でもある程度土器をまとめて出土した西中ノ沢第2号、野口第1・4・7号、道添第1・7号、坊野第2号の各住居跡及び道添円形周溝についてみれば Tab. 9 の通りである。

Tab. 9 各遺構別出土土器分類表

器種		遺構	西中ノ沢2号	野口1号	野口4号	野口7号	道添7号	道添円形周溝	坊野2号
壺	大形壺				○			○	
	直口壺		○						
	広口壺						○	○	
	無頸壺			○			○	○	
	複合口縁壺	I		○	○				
	〃	II		○					
〃	III				○	○	○	○	

器種	遺構	西中ノ沢2号	野口1号	野口4号	野口7号	道添7号	道添門形周溝	坊野2号
甕	I a	○	○	○	○			
	I b				○		○	
	II a			○		○	○	○
	II b			○	○	○	○	○
	III				○		○	
	IV							○
台付甕	I a		○	○			○	
	I b						○	
	II					○		
鉢	I a			○	○	○		
	I b						○	○
	I c	○	○			○	○	○
	I d	○	○		○	○	○	
	II a		○		○			
	II b					○	○	
	II c							○
台付鉢					○			
高杯	I	○						
	II					○		
器台	I			○				
	II				○	○		
	III			○				
	IV	○						○
小形土器				○	○	○		

2

本遺跡群の弥生土器は、内傾内彎する複合口縁壺や「く」の字口縁の甕を主体としており、弥生時代後期に属する。

北九州の後期の土器編年については、森貞次郎氏による、高三瀨式→下大隈式→西新式と三分する編年が一般的に行なわれている。しかしながらこの編年は良好な一括資料を基準に組まれたものではなく、各地からいろいろな器種を寄せ集めて作成された感が強い。したがって筑後（高三瀨）、筑前遠賀川流域（下大隈）、筑前早良平野（西新）と、前・中期の土器において

それぞれ独自の特色をもっていた地域が一つにあわされてしまっており、また、高三瀧、下大隈の両遺跡における土器のセット関係は知られていない。西新式の標式となった壺と甕はその器形・調整からみて、古墳時代の土器＝土師器とするか否かの検討は今後にゆずるとしても、^(註4)庄内式以降に平行する可能性があり、その代替とされる宮の前Ⅰ～Ⅲ式についても同様である。^(註5)^(註6)^(註7)

橋口達也氏は、対馬から出土する弥生土器を整理して、高杯・複合口縁壺・細頸壺の形態変化や成形技法を手がかりに、後期の土器を初頭・前葉・中頃・後葉・終末という五期に細分されている。この土器編年の基礎となった、北九州の後期土器の形態変化についての橋口氏の捉え方には啓発される点が多いが、^(註8)初頭では高杯、前半から中頃は複合口縁壺、終末は長頸壺が主にとりあげられていて、全体のセットで（特に甕について）上記の五期細分に対応するだけの型式変化と系統関係は示されていない。これらは当時の北九州地方における基礎資料の不足に起因しているところも大きいのであろう。後期の土器編年についても、一地域におけるセット関係の明らかな資料によって新たに組み立てる必要がある。特に前・中期において土器編年に主導的な役割を果す福岡平野を中心とした地域でまず行なわれるべきである。

現在この地域において、良好な状態で出土し、その資料が公表されている後期の土器群としては、鹿部東町遺跡土器溜^(註10)、久保長崎遺跡1・2・5・7号住居跡^(註11)、小笹遺跡第一次調査祭祀土壇第二次調査A溝^(註12)、野方中原遺跡A溝出土の各土器群と原ノ辻上層式^(註14)があげられる。

これらの土器群は、複合口縁壺・甕・高杯・器台の形態変化によって第Ⅰ期と第Ⅱ期に大別され、第Ⅰ期については中期の伝統を強く残すⅠA期と、中期の形制から脱却したⅠB期に細分できる。ⅠA期は鹿部東町土器溜、ⅠB期は久保長崎1・2・7号住居跡、第Ⅱ期は野方中原A溝がその代表としてあげられる。第Ⅰ期は従来の高三瀧式、第Ⅱ期は下大隈式の時期に相当し、その後、第Ⅲ期として西新式の内容を示す宮の前遺跡の土器群がつづく。

複合口縁壺は、ⅠA期ではⅠ類が多く、中期の細頸壺よりも頸部が太く短くなり、胴部は球形となる。頸部なかほどでしまり、つけねは稜をもたない。その後、形態的には、口縁反転部でわずかに稜をもち、長胴化するが頸部が上下に開くⅡ類をあいだにはさんで、第Ⅰ期の典型である複合口縁壺Ⅲ類が成立する。頸部つけねでもっともしまり、突帯は三角突帯が使用され、胴部には断面台形の突帯も使用される。この型式は第Ⅱ期まで存続し、頸部つけねや胴部の突帯に刻目が施される例も多くなり、口縁部は直線的に内傾するものも出現する。

大形壺はⅠA期では中期の鋤先口縁やL字状口縁が強く残る。ⅠB期では、単純に外反するものが多くなり、長胴化する。第Ⅱ期では口縁部が発達して大きく開き、断面台形の突帯がついて、口縁部や突帯には刻目が施される。

甕はⅠA期では中期の口縁を継承し、直線的に開くものが多く、頸部に三角突帯をもつものもめだつ。外反する口縁もいくらかみられるが、すべて胴部の張りが強くやや肩が張り、底部付近ではいったんすぼまって平底となる。ⅠB期ではⅡa類が多くなり古い段階でⅠa類もか

なりみられる。胴部最大径は中位に下がってくる。底部付近でいったんすぼまらないものや、レンズ状の平底も出現する。第Ⅱ期ではⅡb類もみられ、長胴化が著しく、底部はレンズ状の平底となり、タタキ目調整がみられる。

鉢は器形の変化に乏しい。ⅠA期では「く」の字口縁の鉢は直線的に開くが、ⅠB期以降は外反し、頸部でいったんしまるⅡb類となる。底部はⅠB期でレンズ状平底があらわれ、第Ⅱ期では小形品に丸底のものが出現する。

高杯はⅠA期では鋤先口縁であるが、杯部が深くなる。ⅠB期では水平口縁から外傾して「く」の字口縁に近くなり、脚部は太く短くなる。一方、これらの高杯とは系統を異にするⅡ類の高杯もこの時期にあらわれる。第Ⅱ期になるとⅡ類の系統だけとなり、杯部は皿状に大きく浅く広がって、口縁部は短く外反する。

器台はⅠA期ではⅠ類であるが、ⅠB期ではくびれ部が上に移動してⅡ類となる。第Ⅱ期では杓形器台が新たに出現する。

調整技法は粗い刷毛目が主体で、一部にヘラ研磨がみられる。第Ⅱ期になると壺・甕・鉢・器台の外面にタタキ目が残るものもかなり多くなるが、特に甕・器台に顕著である。^(註15)

先述の土器群相互の関係についていま少し細かく検討すれば、鹿部東町 (Fig. 227・228) と久保長崎5号 (Fig. 229) では久保長崎5号の甕に新しい形態を含むが、複合口縁壺は出土していないために、全体として鹿部東町よりも一時期下がるものか否かは、現段階ではなんとも言えない。鋤先口縁の高杯の存在や、甕に直線的に厚く短くひらく口縁をもつものもかなりみられることから、いまは大きく一括しておきたい。

久保長崎7号住居跡 (Fig. 230) では大形壺に古い形態がみられるが、他の土器は1・2号住居跡 (Fig. 231)、と同一時期であることを示している。1号住居跡の複合口縁壺は新しい形態を示すが、甕はⅡa類を主体とし、それほど長胴化しておらず、一応ⅠB期に位置づけておきたい。これらの土器群と、小笹祭祀土壙の土器 (Fig. 232) を比較すれば、小笹祭祀土壙の複合口縁壺はⅡ類、器台はⅠ類であり、先行することを示している。

鹿部東町土器溜の土器群よりはやや後出する様相を示すが、甕は口縁部がややうすく長く、端部は丸くつくり、胴張りのものが多く、基本的にはⅠA期に位置づけられる。

従来、高三瀨式と同等の関係でみられてきた原の辻上層式は、複合口縁壺Ⅲ類や甕Ⅱb類を含み、第Ⅱ期まで下る可能性ももつ。しかし、複合口縁壺Ⅱ類の存在や、^(註16) 図示されていないものの、中期の系統をひく高杯が出土しているらしいことからみて、全体としてⅠB期にその中心をもつものと思われる。

小笹A溝の土器群 (Fig. 233) は、古い様相 (1・8・5・6) と新しい様相 (2・3・4・7・9・12) にわかれるが、第Ⅰ期のなかでおさめてよいと思われる。

野方中原A溝は、高杯・甕の形態からみて、宮の前Ⅰ式よりも前の段階におかれるが、タタ

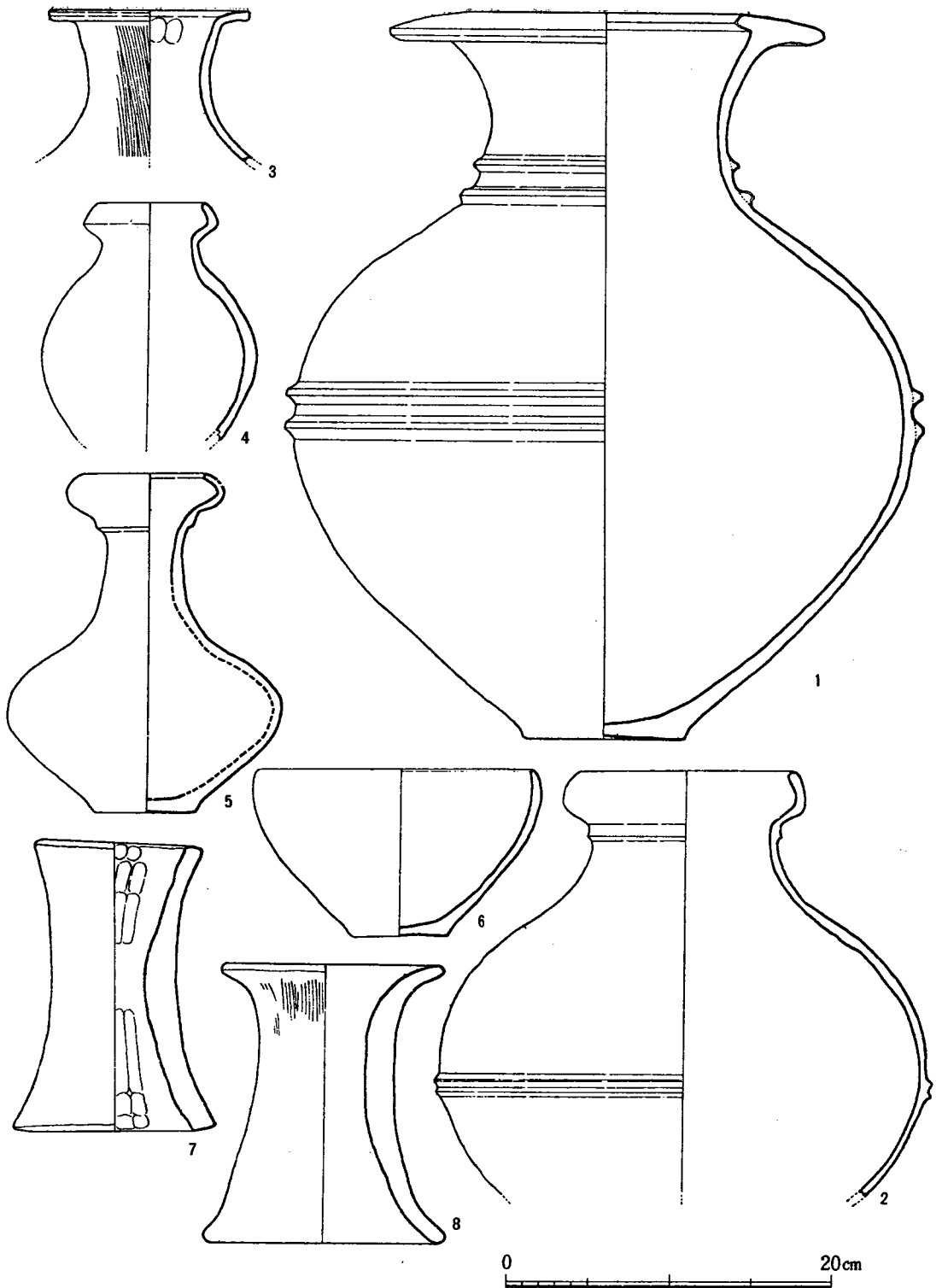


Fig. 227 鹿部東町遺跡土器溜出土土器実測図① (縮尺1/4) (『鹿部山遺跡』1973より)

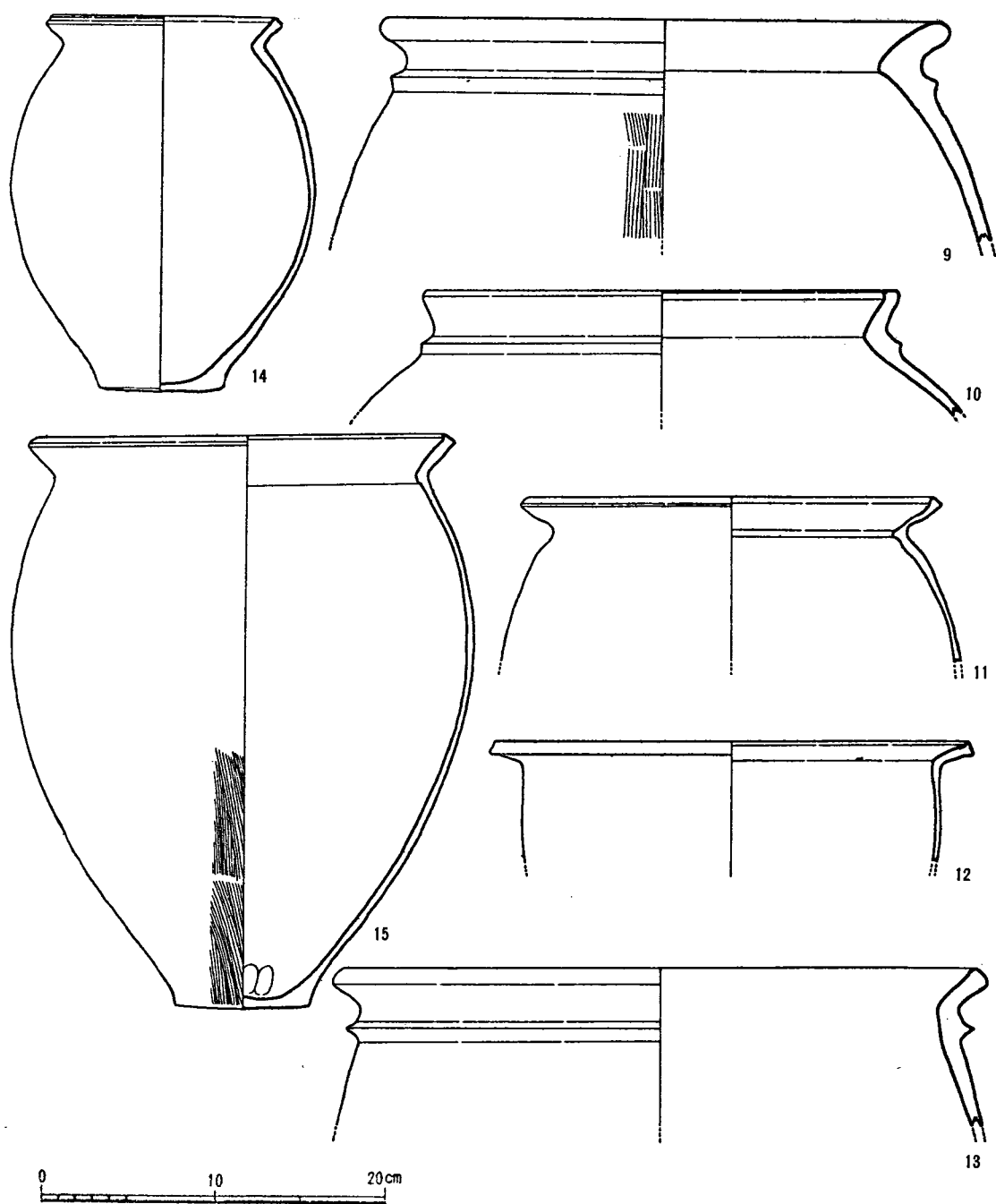


Fig. 228 鹿部東町遺跡土器溜出土土器実測図② (縮尺1/4) (『鹿部山遺跡』1973より)

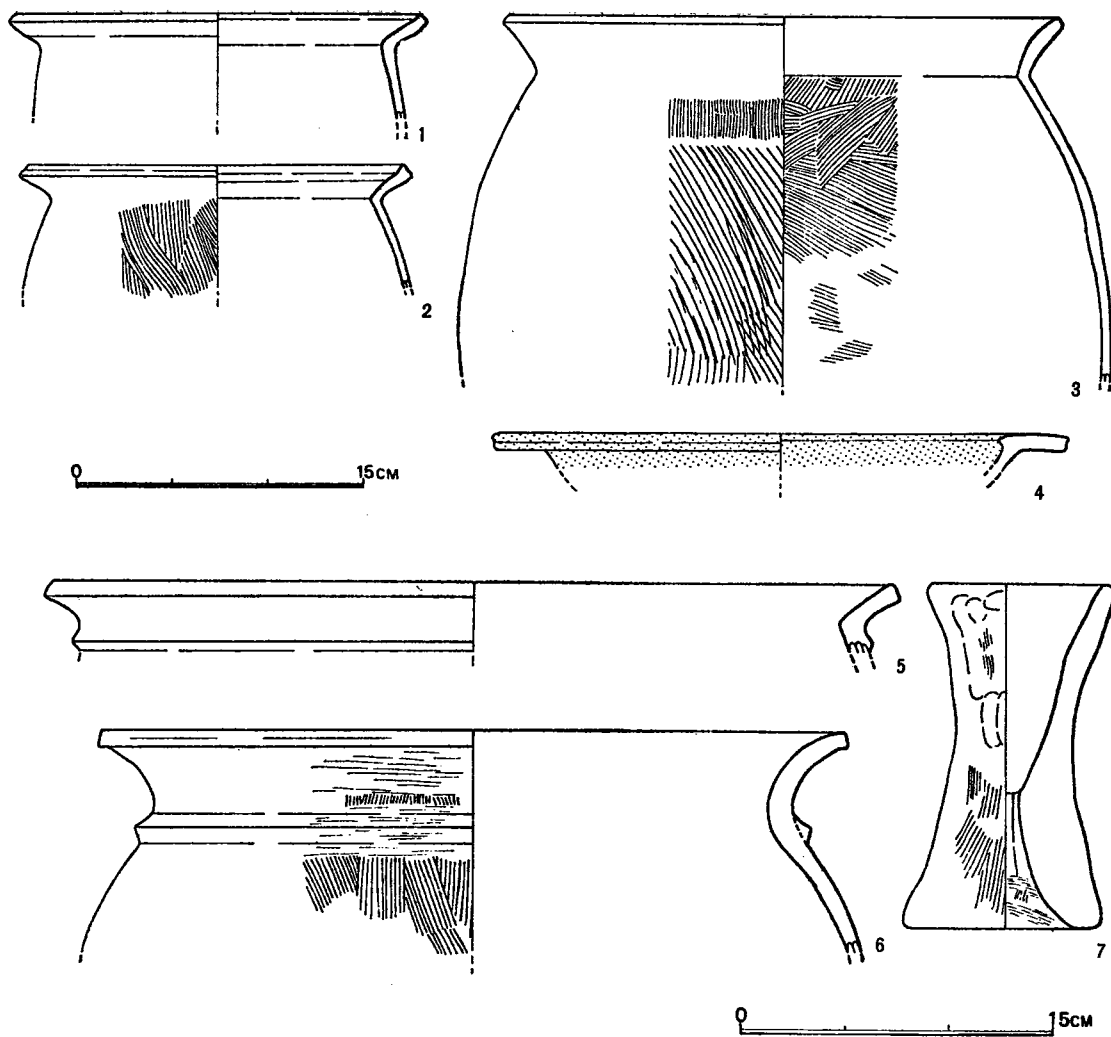


Fig. 229 久保長崎遺跡出土土器実測図①第5号住居跡（『福岡バイパス関係埋蔵文化財調査報告書』1973より）

キ目の盛行などからみて、第Ⅰ期の土器群との間には若干の空白部分が存在し、第Ⅱ期でも新しい時期に位置づけられる。このあいだに入る土器群については、原の辻9' 試掘堀の溝状遺構上層の土器群 (Fig. 235) から、ある程度型式学的に抽出することが可能である。この遺跡の後期の土器はタタキ目がほとんどみられず、杓形器台も出土していないから、その下限は野方中原A溝よりも前にある。また、第Ⅱ期の土器は量的にも多く、まとまって出土したという

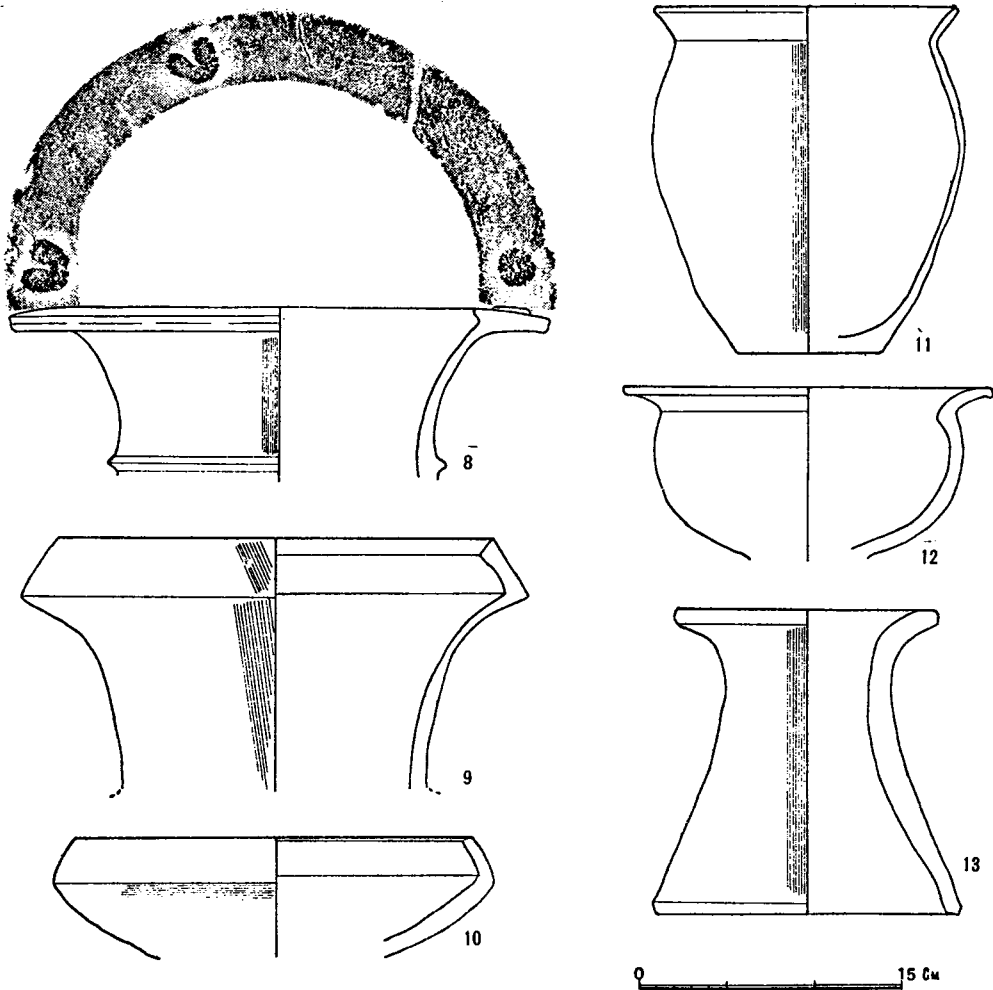


Fig. 230 久保長崎遺跡出土土器実測図②第7号住居跡（『福岡バイパス関係埋蔵文化財調査報告書』1973より）

から、完形品か否かも一つの目安となろう。久保長崎1・2号から野方中原A溝への流れをふまえるならば、Fig. 234—10の土器があげられる。大形壺(10)は口縁部が大きく広がり、複合口縁壺(1・2)はⅢ類で頸部がしまり、断面台形の突帯をもつ。他に、頸部がしまって口縁部が直立気味に外反する壺とも甕ともつかぬ器形(4・6)があり、6にはタタキ目が見られる。甕(5・7)は胴部最大径が中位にあって口径とほぼ等しく長胴で、底部はレンズ状の平底である。高杯(9)は杯部が浅く広がり、口縁部が短く外反し、器台(8)はくびれ部が上部にあって稜をもつ。

以上、やや詳細に筑前地方の弥生時代後期の土器編年について検討してきた。これは、室岡

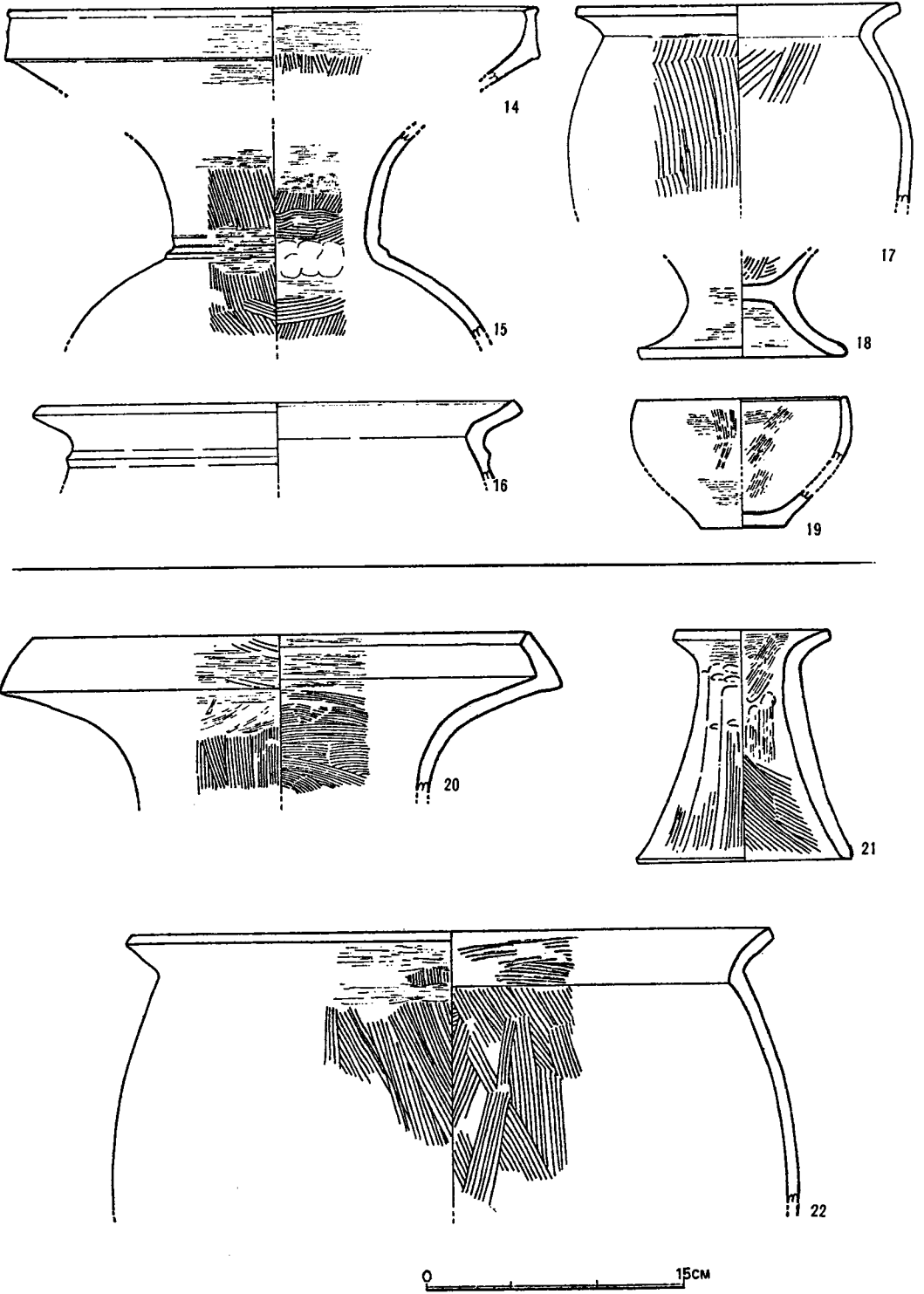


Fig. 231 小笹遺跡A溝出土土器実測図

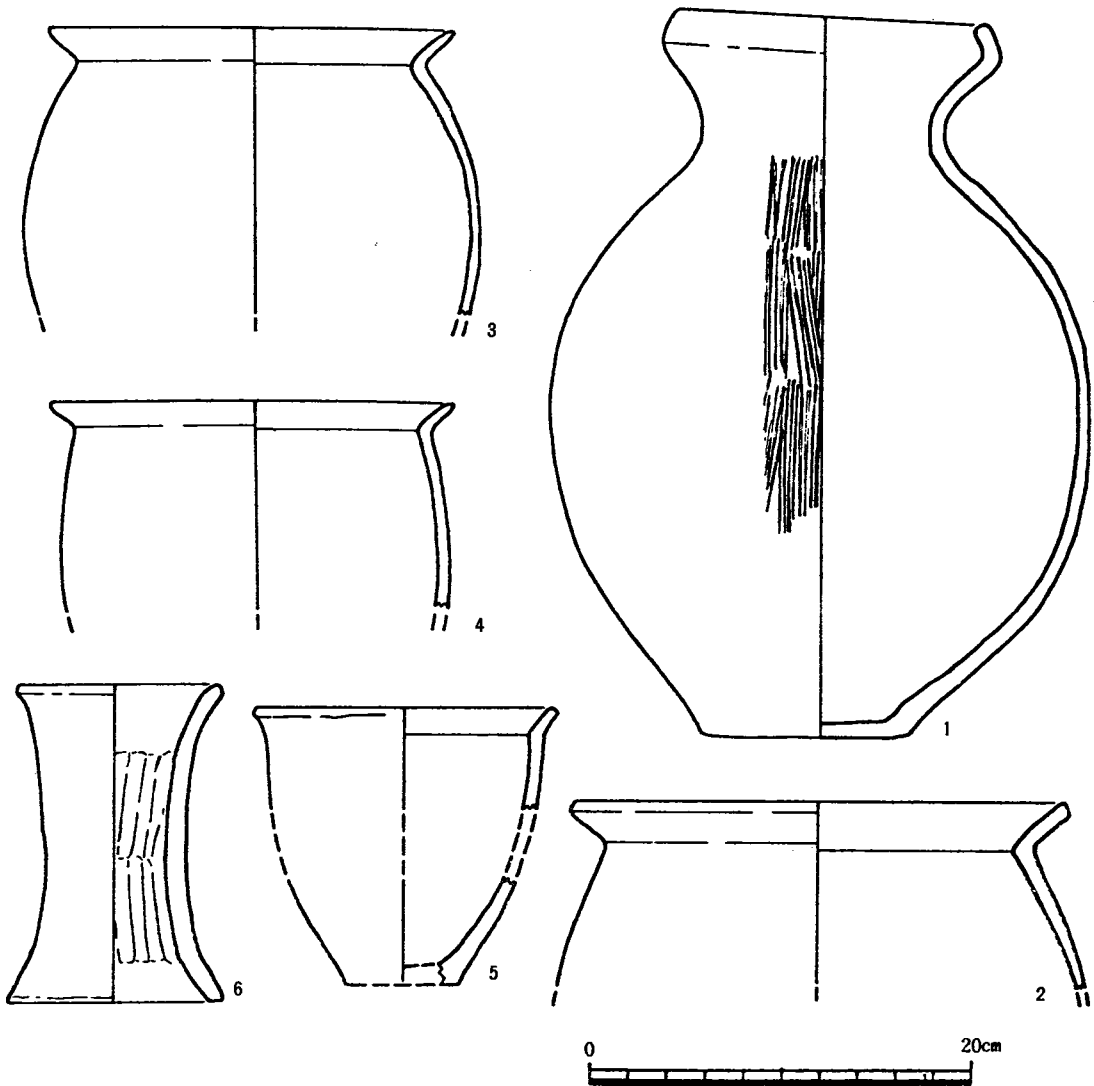


Fig. 232 小笹遺跡祭祀遺構出土土器実測図（『小笹遺跡発掘調査報告書』より）

遺跡群の弥生時代に属する遺構相互での切り合い関係はみられず、したがって各遺構出土の土器群を型式学的に比較検討するほかに、しかも筑後地方においては先行する中期の様相は明らかではなく、後期の土器も終末期とされて本遺跡群よりは基本的に後出すると思われる狐塚遺跡の土器群を除けば皆無に近い^(註18)ため、不十分なながらも一応前期から後期終末までの資料が揃っている筑前地方の編年によって一定の見通しを得るためであった。^(註19)

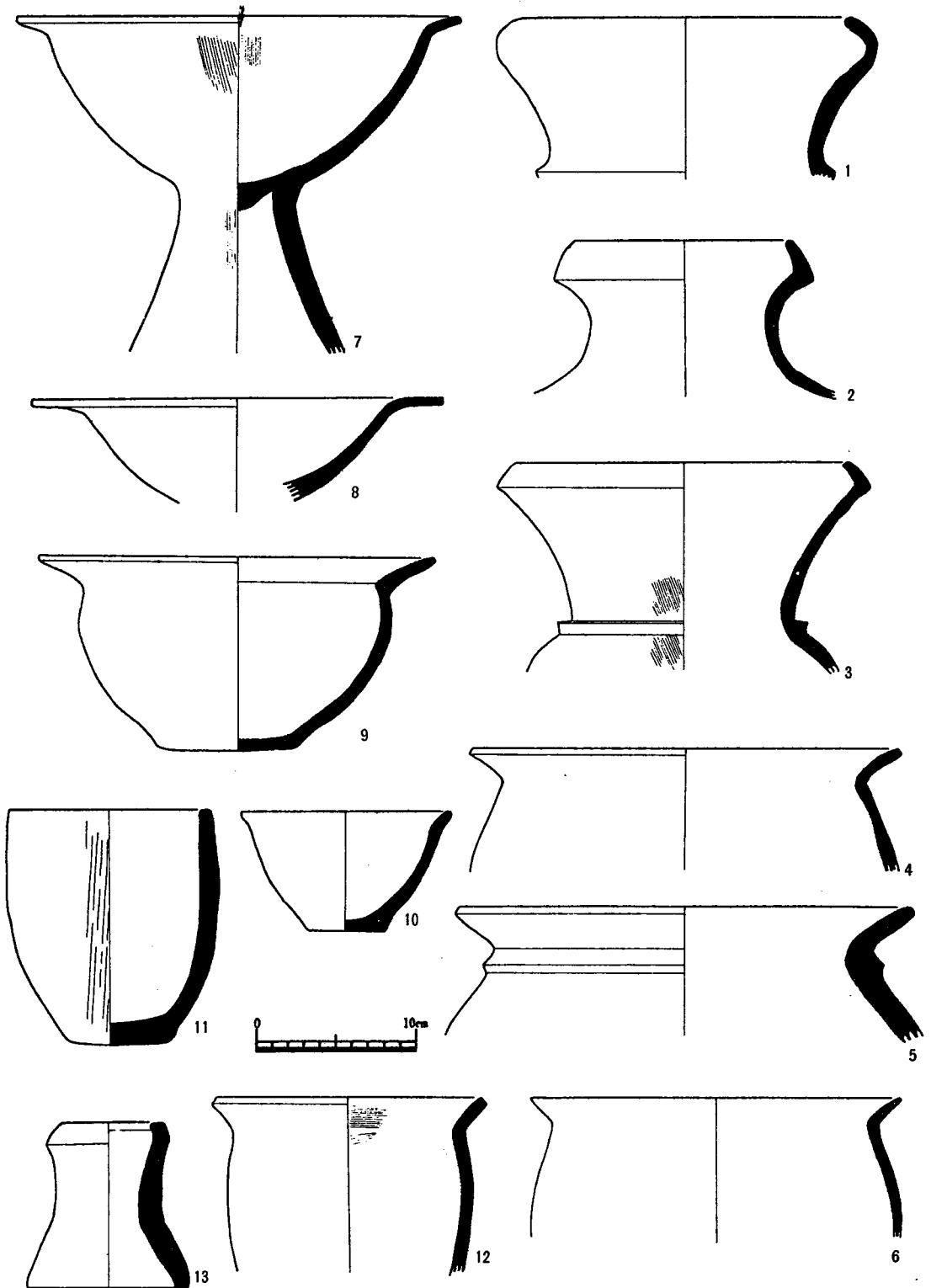


Fig. 233 久保長崎遺跡出土土器実測図③第1・2号住居跡

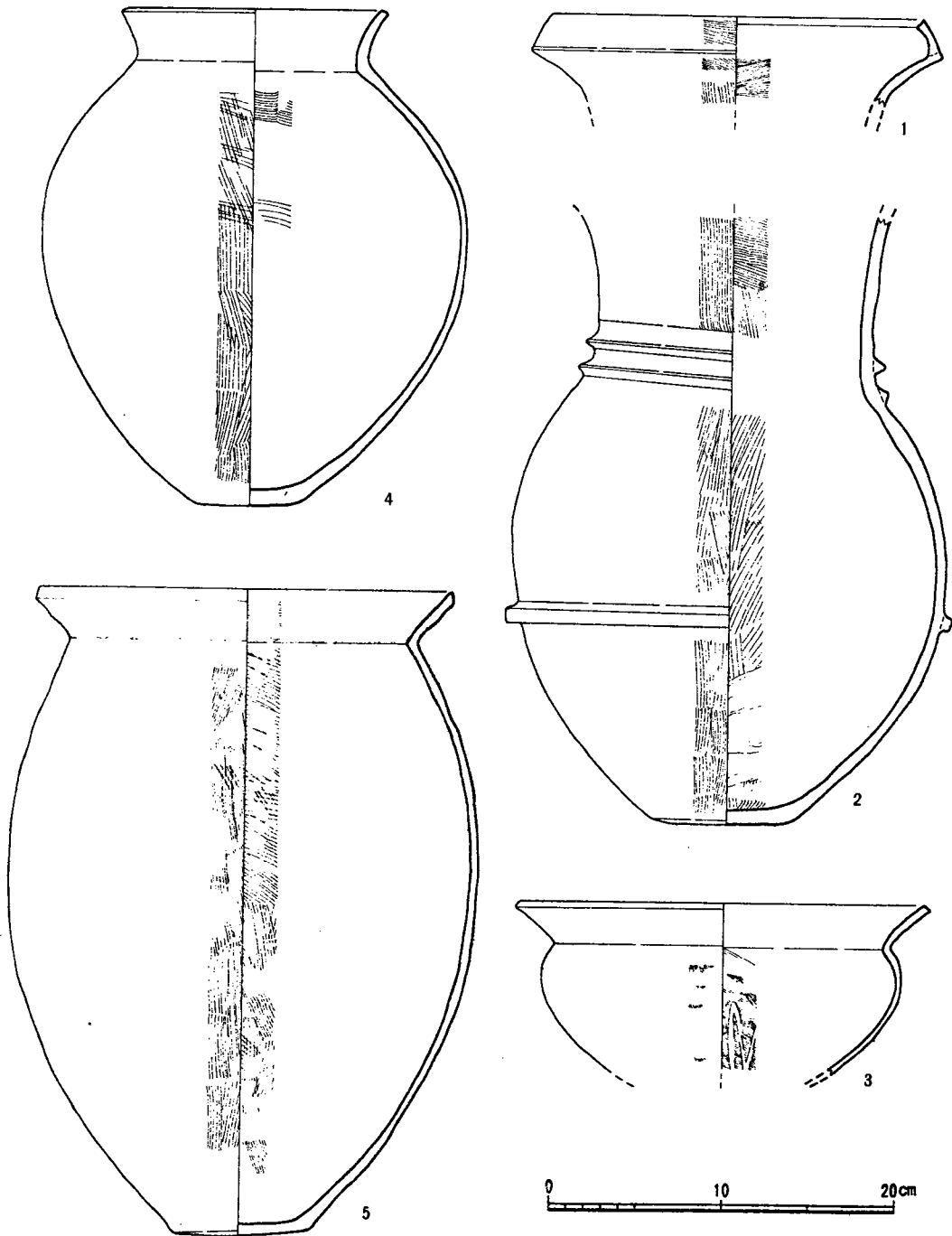


Fig. 234 原の辻9試掘墳溝上層出土土器①

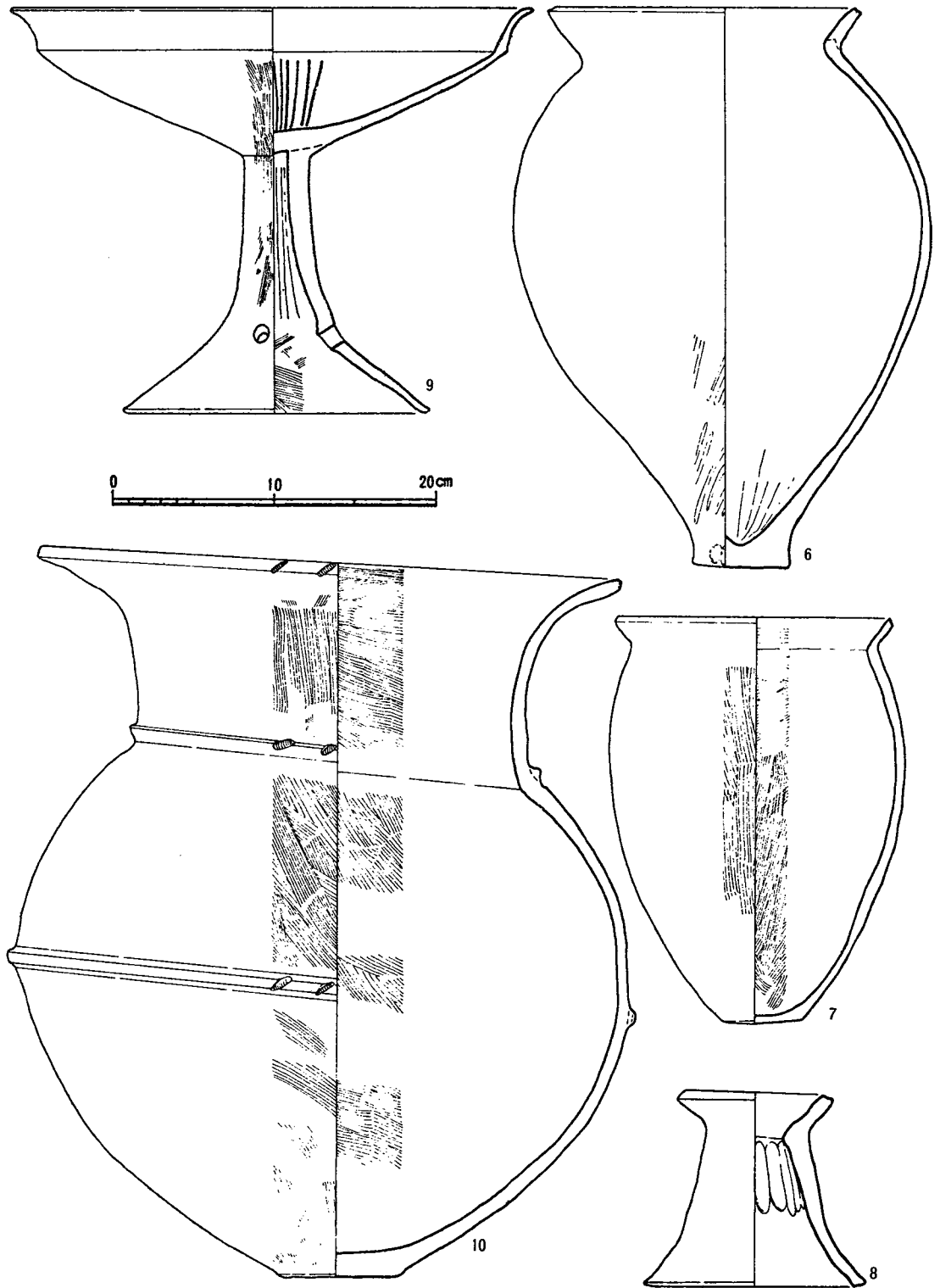


Fig. 235 原の辻9'試掘溝上層出土土器実測図② (縮尺1/4)

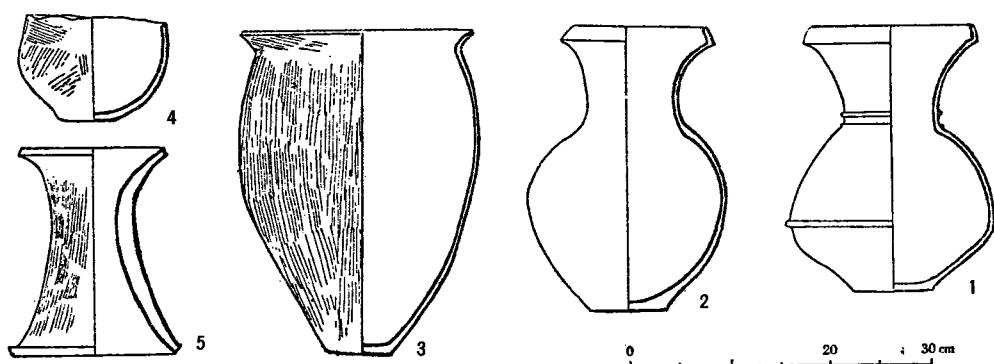


Fig. 236 原ノ辻上層式土器実測図(縮尺2/15) (『壹岐原ノ辻遺跡調査概要』1954より)

3

本遺跡群の土器群は、概報でも若干述べ、Tab. 9 から看取されるようにいくつかの時期のものをふくんでいるが、大まかにⅠ～Ⅲ期にわけられる。

第Ⅰ期には、西中ノ沢2号・野口1号の土器があげられる。

西中ノ沢2号では高杯Ⅰ類が、野口1号では複合口縁壺Ⅰ類と鉢Ⅱa類がみられ、中期の形態を残している。甕はいずれもⅠa類であり、西中ノ沢2号と野口1号の土器群を室岡第Ⅰ期としてとらえたい。野口1号では複合口縁壺Ⅱ類と鉢Ⅱb類も出土しており、やや新しいかと思われるが、西中ノ沢2号では複合口縁壺と鉢Ⅱ類がみられず確言できない。今は一括して第Ⅰ期ということを取り扱いたい。

第Ⅱ期には、野口4号・7号・道添7号の土器群があげられる。複合口縁壺はⅢ類となり、反転部でしっかりした稜をもち、頸部つけねでもっともしまる。甕は、Ⅰb・Ⅱa・Ⅱb類があらたにあらわれるが、大形品ではⅡa類が、小形品ではⅡb類が多くなる。口縁部が第Ⅰ期よりも外反し、やや長くなる。器台はⅡ類が多く、「く」の字口縁の鉢はⅡb類が多くなる。野口4号は複合口縁壺Ⅰ類と器台Ⅰ類がみられ、野口7号では鉢Ⅰ類がみられ口縁端は丸味を帯び、複合口縁壺Ⅲ類は道添7号のものに比してⅡ類に近い。また、甕、鉢の底部はしっかりした平底である。これに対し、道添7号では、甕、鉢の底部はレンズ状のものが多くなり、器台Ⅱ類は脚が内彎して開くものが多い。複合口縁壺Ⅲ類の胴部突帯は刻目をもった断面台形となる。野口4・7・はⅡ期で古く、道添7号はやや新しく位置づけられる。

第Ⅲ期の土器群としては、道添円形周溝、坊野2号があげられる。

甕はⅡb類が多く、全体に胴の張りがなくなり長胴化し、底部はレンズ状に突出する。鉢は丸底のものが出現する。

道添円形周溝の土器は全体的に道添7号との差が少ないが、台付甕に台脚が内彎するⅠb類

があり、丸底の鉢Ⅰb類、甕胴下半部外面のヘラケズリ技法があらたに出現することからⅢ期とした。複合口縁壺Ⅲ類も小破片であるが出土しており、この時期まで存続することは確実である。甕Ⅳ類もこの時期にみられるが、これらは北九州の「く」の字口縁と系統を異にする異質な土器であり、おそらく瀬戸内地方から甕胴部外面のヘラケズリ技法をともなって流入してきたと考えられる。

坊野2号では鉢Ⅰb類の他に、「く」の字口縁の鉢はⅡc類があらわれ、甕胴部外面下半部のヘラケズリがⅡ類の在地系の甕にもかなりみられるなど、道添円形周溝よりも一段階新しい様相を示す。また0207の甕に典型的に示されるように一段と長胴化が著しい。甕Ⅲ類は口縁部や底部付近のつくりからみて、異質な土器である。古宮遺跡に類品があり、おそらく畿内第Ⅴ様式(註20)にその淵源がもとめられる甕であろうと思われる。

次に、室岡Ⅲ期と、狐塚Ⅰ期の土器についての比較を試みたい。共通する器種は甕、鉢である。狐塚Ⅰ期の甕は、Ⅱa、Ⅱb類がみられ、口縁部はやや長く長胴で、底部はレンズ状の稜のはっきりしない平底である。鉢はⅠb、Ⅱb、Ⅱc類がみられ、坊野2号ときわめて近接した時期であることが知られる。しかしながら、狐塚Ⅰ期ではヘラケズリ仕上げが、甕の外面だけでなく、内面や鉢の底部にもみられ、あるいは胴部外面に粗いタタキ目が消されずに残っている。坊野2号では高杯が出土していないためいまひとつ確証を欠くが、現段階では室岡Ⅲ期は狐塚Ⅰ期に一部重複し、基本的には直前に位置づけておきたい。

4

最後に、筑前地方の土器編年との対比をおこないたい。宮の前Ⅰ式と狐塚Ⅰ式は高杯、甕の形態からみて平行関係におくことができる。室岡Ⅰ期と筑前ⅠA期とした土器群を比較すれば、筑前ⅠA期の土器群が中期後半の器形を保っているのに対し、室岡Ⅰ期はやや後出する様相を示すが、現在のところ筑後地方の中期後半の土器相が明らかでないため、いまは大きく平行関係においておきたい。

室岡Ⅱ期については、複合口縁壺Ⅲ類や、甕・高杯の形態からみて、筑前地方のⅠB期に平行することが知られる。野口4・7号が久保長崎7号に、道添7号は久保長崎1・2号に平行しよう。中期の須玖式土器の系統をひくⅠ類の高杯から新たな系統のⅡ類の高杯への転換期がこの時期にあることがわかる。室岡Ⅲ期については、高杯が欠けており、また筑前地方の第Ⅱ期の資料がいまひとつ明確ではないためにその比較は難しいが、甕の形態からみて、両者は平行関係におかれると考えられる。坊野2号は野方中原A溝に比べて、タタキ目がみられないなど異なる点もあるが、大まかには同一時期としてとらえて良いと思われる。

道添円形周溝の土器は道添7号と坊野2号の両者の要素を含むため、中間に位置づけた。用途不明の周溝から出土しており、住居跡よりも遺溝の存続期間が長い可能性も十分あることを考えれば、あるいは道添7号と坊野2号に将来的には二分されてしまう可能性も否定できない

が、いまは一応一括資料として、Ⅲ期の古いところに位置づけておきたい。

これまで述べてきた筑前・筑後の土器群の関係は次のとおりである。室岡Ⅰ・Ⅱ期は筑後地方における高三瀧式の、第Ⅲ期は下大隈式の実態を示すものとしてとらえられる。(武末 純一)

Tab. 10 筑前・筑後の弥生後期各遺跡一覧表

筑 後		高 三 瀧		下 大 隈	西 新
		室岡Ⅰ期	室岡Ⅱ期	室岡Ⅲ期	狐塚Ⅰ・Ⅱ期
室岡遺跡群	西中の沢 2号	_____			
	野口 1号	_____			
	野口 4号	_____	_____		
	野口 7号	_____	_____		
	道添 7号	_____	_____		
	坊野 2号	_____	_____	_____	
鹿部東町土器溜 小笹祭祀遺構(第一次)		_____			
小笹A溝(第二次)		_____			
久保長崎 1号住居跡		_____	_____		
久保長崎 2号住居跡		_____	_____		
久保長崎 5号住居跡		_____	_____		
久保長崎 7号住居跡		_____	_____		
原の辻 上層		_____	_____		
原の辻 9'溝最上層		_____	_____	_____	
野方中原A溝		_____	_____	_____	
筑 前		第 A I B 期		第 II 期	第 III 期

註 1) 従来は、逆「く」の字口縁壺、あるいは袋状口縁壺といわれてきたが、本稿では、口縁部を二重につくるという広い意味でこの語を使用した。

2) 森貞次郎「弥生文化の発展と地域性—九州」『日本の考古学』Ⅲ 1966

3) 1972年までの弥生後期土器の研究史は小田富士雄氏によって整理されており、本稿もこれに負うところが大きい。

小田富士雄「入門講座弥生土器—九州—」5.6『考古学ジャーナル』83.84 1973

4) 古墳出土の土器との対比から庄内式を畿内第六様式とする提言もあり、庄内式平行の土器を土師器とするか否かについては、今後の検討に待ちたい。都出比呂志「古墳出現前夜の集団関係」『考古学研究』20—4 1974

5) 高島遺跡調査団「高島遺跡」『古文化談叢』第3輯 1976

6) 福岡県労働者住宅生活協同組合『宮の前遺跡(A~D地点)』1971

7) 詳細な検討は別稿にゆずるが、宮の前Ⅱ式とⅢ式をわかつ根拠となった複合口縁壺の直立口縁と外反口縁は時間的な差でなく系統差としてとらえられるものであり、Ⅱ式はⅠ式に含まれる。またⅢ式を土師器とする根拠となった新出の畿内系統の甕・高杯は、庄内式ではなく布留式の特徴をそなえており、したがって宮の前Ⅲ式は、庄内式平行まではさかのぼりえず、宮の前Ⅰ式の大部分が庄内式に平行する可能性が強い。

8) 橋口達也「対馬における弥生式土器の変遷」長崎県教育委員会『対馬—浅茅湾とその周辺の考古学調査』1974

9) 複合口縁壺は、中期末ではまだ口縁が丸味を帯び、初頭になるとやや稜を生じ、肩部の突帯も大きくなる。前葉でははっきりした稜がつき、突帯は三角突帯に統一され、大形のものがあらわれる。これは後期中頃まで盛行し、終末期に近づくにつれて直口する傾向が生じ、古墳時代の複合口縁壺に近くなるという。高杯は中末~後初のものが鋤先口縁の退化形態を示し、杯部と脚部

の接合は「円板充填法」の断面を示す。前葉の高杯としては、椀に脚がついたものと、瀬戸内地方の系統とみられる直口する口縁の高杯があげられる。終末期には、杯部が浅く広がり、口縁が外反するものがあげられているが、口縁部の短い野方タイプ（福岡市野方中原A溝のものを基準とする）と宮の前タイプ（福岡市宮の前遺跡のものを基準とする）の区別は明確ではない。長頸壺は頸部の径が大きく若干短い第1類、頸部が細くて長く、口縁端が内彎する第2類、頸部が細くて長く、口縁端が外に開く第3類に細分され、第1類を後期後葉、第2類を終末、第3類を土師器最古式としている。甕については、全体に卵形を呈して丸底に近い丸底を呈する甕を終末期におき、はっきりした平底をそれ以前においているだけで、各時期のメルクマールは示されていない。

複合口縁壺は、内傾内彎するものが後述のように終末まで残り、内傾外反する口縁、外開きの口縁はそれぞれ系統を異にすると考えられる。

10) 日本住宅公団『鹿部山遺跡』1973

遺跡は、福岡県粕屋郡古賀町にあり、1972年に調査され、土器群は密集して完形品を多数含んだ状態で出土しており、祭器として使用した土器を溝状の掘り込みの中に人為的に集めて埋置されたものと考えられている。廃棄時の一括資断として取り扱って良いと思われる。

器種は、壺・甕・鉢・高杯・器台がみられる（Fig. 227・228—1～13）。複合口縁壺は、I類（2）が多く、祖型となる長頸壺（5）と形態的に新しいII類（4）が各1点ずつみられる。大形壺は、中期の形態そのままで鋤先口縁（1）が多い。甕は、ハネアガリ口縁が多く（10～15）、その点を捨象すればII a類が多い。（12）は胴張りが少ないが、むしろ中期の形制を残したものである。（9）は口縁端を丸くおさめる。鉢（6）は、I a類がみられる。高杯は鉢I a類に長脚をつけたものが出土している。脚部には円板充填法もみられる。器台はI類（7）が圧倒的であるが、II類（8）が1点みられる。

11) 福岡県教育委員会『福岡バイパス関係埋蔵文化財調査報告』1973

遺跡は福岡県粕屋郡古賀町大字久保字長崎にあり、1971年に調査され8軒の住居跡と6基の土壇などが検出されている。遺構は上部がかなり削平されており、土器の残りも良くない。1・2・5・7号住居跡からまとめて土器が出土している。5号住居跡では甕、高杯、器台がみられる（Fig. 229）。甕はII a類が多い。口縁部は直線的に開くもの（1～3）が多く、ハネアガリ口縁もみられる。外反する口縁（4・5）はII a類である。高杯（6）は鋤先口縁であり、杯部は中期後半のものより深くなると思われる。器台はI類がみられる。

7号住居跡では壺・甕・鉢・高杯・器台がみられる。（Fig. 230—8～13）。大形壺は鋤先口縁である。複合口縁壺（9）はIII類で、他に無頸壺、広口壺が出土している。甕（11）はI b類がみられ、大きな平底がつく。この他に凸レンズ状の底部も出土している。鉢（2）はII b類で、器台はII類である。

1号住居跡では壺・甕・鉢・器台がみられる。（Fig. 231—14～19）。複合口縁壺（14・15）はIII類で、口縁部が直線的である。甕は外反する口縁（17）が多く、直線的に開く。ハネアガリ口縁（16）も若干みられるが、いずれもII a類である。台付甕（18）はI a類がみられる。鉢はI a類で、器台はII類である。

2号住居跡では壺・甕・器台が出土している（Fig. 231—20～22）。複合口縁壺（20）はIII類で、甕はハネアガリ口縁が1点みられるが、他はすべて外反する口縁でII a類である（22）。器台はIII類である。

12) 福岡市教育委員会『小笹遺跡発掘調査報告書』1973

福岡市教育委員会『小笹遺跡第2次調査報告』1975

遺跡は福岡市西区大字下長尾字隈にあり、1972、1973年の二次にわたる調査が行なわれている。第1次調査では第1号土壇墓にともなう祭祀土壇から、この時期の土器が一括して出土している。第2次調査ではA・B2本の溝が検出され土器が多量に出土している。土器はA溝を主体に報告されているため、本稿でもA溝の土器をとりあげる。

祭祀土壇では壺・甕・器台がみられる（Fig. 232）。複合口縁壺（1）はII類で、胴部は長胴である。甕はI a類（3）II a類が多い。口縁部は直線的に開く。II b類（5）は中期的である。器台（6）はI類である。

A溝では溝の底から上面まで、土器をはじめとする各種の遺物が溝を埋めつくすような状態で置かれていたという。

土器は壺・甕・鉢・高杯・器台がみられる（Fig. 233）。複合口縁壺はI類（1）、II類（2）、

Ⅲ類(3)がみられる。大形壺は長胴で、口縁部は単純に外反する。甕はⅡa類が多く、Ⅰa、Ⅰb類もみられる。口縁部は外反するものが多い。台付甕は、Ⅰ類である。高杯はⅠ類に類似しL字状口縁(8)と「く」の字に近いもの(7)がある。杯部は深い。(7)は脚筒部が太く、円板充填法がみられる。鉢はⅠa類(10)、Ⅰd類(11)、Ⅱb類(9)があり、Ⅰa類は口縁部が短くゆるやかに外反したものが多い。器台はⅠ類が多く、Ⅳ類もみられる。

13) 福岡市教育委員会『野方中原遺跡調査概報』1974

遺跡は福岡市西区大字野方字中原にあり、1973年に調査が行なわれた。200軒を上回る住居跡群とA・B二つの溝、石棺、甕棺、土壇墓群が検出されている。このうち、確実に弥生時代に入る遺溝としては、A・B2溝があげられる。遺溝の大部分はプランを検出するにとどまったが、A溝は一部分が底面まで発掘されている。

土器は最下層からは出土せず、Ⅲ、Ⅳ層から出土しているが、報告者は「Ⅲ層とⅣ層の土器に時期差は認められず同一時期の堆積」と考えている。

土器は一括して写真で紹介されており、壺、甕、鉢、高杯、器台がみられる。図面が公表されていないため細部は不明な点が多いが、複合口縁壺はⅢ類で口縁部はやや直線的である。小形広口壺はへら研磨が施されている。甕はⅡa類とⅡb類がある。台付甕はⅠa類である。

鉢はⅡa類が出土しており、器台はⅡ類と杵形器台とがある。甕、器台にはタタキ目が顕著で、鉢にも一部みられる。高杯は浅く大きくひろがっており、脚部は細長く、3~4孔を有する。

14) 原の辻遺跡では鶴田忠正氏によって紹介された1939年調査の台地舌端部東側斜面出土土器、岡崎敬、水野清一両氏によって紹介された1951年発掘の原の辻上層式、長崎県教育委員会によって1976年調査された9試掘溝の溝状遺構出土土器がまとまった資料としてあげられる。

鶴田氏の報文によれば、東側斜面では下層から順に1~3層の包含層がそれぞれ間層をはさんで存在したという。1層の土器については後期後半の土器が混在しているが、それらを除けば中期後半の土器が単純な形で把握できる。第2層の土器については、後期前半の層とされるが、中期後半の土器とともに後期後半の大形壺や杵形器台も混在しており、後期前半の土器を主体とするもの、単純な形で把握することは難しい。第3層も後期後半と古墳時代前半の土器が混在する。

1976年調査の溝状遺構では第6層を境として、中期と後期は分離されている。後期の土器は後半を主体とするが、前半のものも混在しており両者を層的に細分することはできなかったようである。

1951年の調査では層位は大きく上層、下層に大別され、鶴田氏調査の第1層を下層に、第2層を上層に対応させている。上層の土器については「後期の須玖式とよぶことも、前期の高三瀆式と呼ぶことも可能であるが、要するに中間形式でむしろ現在では原の辻上層式と呼んでおくほうが良いと思う」とされ、原の辻上層式は当時の後期土器の総称であった高三瀆式を二分した場合の前半に位置づけられている。示された図面で見ると限りでは、上層は前二者よりも単純な様相を示し、一時期のセットとしてとらえてよいと思われる。上層式では複合口縁壺、甕、鉢、器台が図示されている(Fig. 236)。

複合口縁壺(1, 2)はⅢ類であるが、(2)は頸部つけねがしまらず、(1)よりも古い形態を残す。甕はⅡb類で鉢はⅠa類である。器台はⅡ類であるが、くびれ部で稜はつかない。

鶴田忠正「長崎県壱岐郡田河村原の辻遺跡の研究」柴田實編『日本文化史研究』1944

水野清一、岡崎敬「壱岐原の辻遺跡調査概報」『対馬の自然と文化』1954

長崎県教育委員会『原の辻遺跡』1977

15) タタキ目技法はこれよりも前に出現しているが、丁寧に消されており、調整の粗雑化にもなって顕著になると考えられる。

16) 『紫雲出』142頁註12)には「水野清一の調査した長崎県壱岐郡芦辺町原の辻遺跡の出土土器整理を担当した深見清の教示によって、原の辻上層式の高杯形土器に連続成形手法が採用されていることを知った。……森貞次郎は北九州第七式の高杯が第六式のそれにくらべて脚が底くなることを指摘している〔森一九五五〕。第七式の高杯は、全体の形態は須玖式の高杯にならっているが、連続成形手法を採用したため、脚部が低く太くなったのであろう。」とある。森氏の第七式には鋤先口縁をもつ高杯が図示されている。この高杯の形態については異論はみられないから、おそらく原の辻上層式でも中期の系統をひく高杯が出土しているのであろう。

詫間町文化財保護委員会『紫雲出』1964

森貞次郎「各地域の弥生式土器—北九州」『日本考古学講座』4 1955

17) この壺については、原報告では後期前半に位置づけられている。たしかに、後期の古い段階の

土器も出土しているが、これはハネアガリ口縁と、頸部に突帯をもって口縁部が直線的に開く胴張りの強い厚手の甕であり、複合口縁壺Ⅰ類ないしⅡ類と共伴すべきものである。また、調査者の一人である安楽勉氏によると、9の高杯とともに出土したとのことであり、野方中原A溝でもこのような複合口縁壺に出土しているのであるから、後半の土器群の中に含めておきたい。

18) 筑後市教育委員会『狐塚遺跡』1970

19) いままで述べてきた編年については、その根拠となる土器群の出土遺構に溝、土器溜が多く、一応報告者の記載にしたがって一括資料として扱ってきたが、混在の可能性はまだ十分に考えられる。唯一の住居跡出土資料である久保長崎遺跡の出土資料についても、なお質・量ともに不十分である。また地域的にも粕屋平野や苅岐の土器を含むため、各平野ごとの地域色を無視した面もあって編年試案の域を出ない。将来は福岡平野でこれらにかわる資料を検出し組み立てられることが望ましい。

なおこれまであげた土器群のうち、筆者が実現したものは、鹿部東町、野方中原A溝、原の辻9'溝で、小笹遺跡の土器は一部だけであり他は図面上の比較による。

20) 波多野院三「古宮阿弥陀遺跡」『筑紫史論』第三輯 1975

この遺跡の土器は後期後半から布留式平行の土器群を含み、再検討してふるいわける必要があるため、全面的な比較はできなかった。甕一式とされるものの中に、やや長胴であるが類品がある。


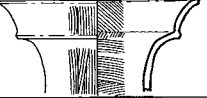
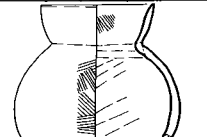


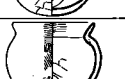
(2) 土 師 器


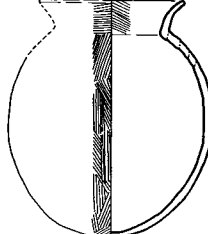
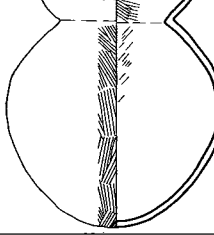

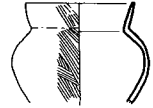


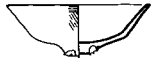

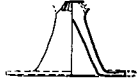

1

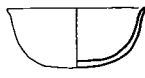


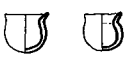
本遺跡群出土の土師器は古墳時代前半期の古式土師器と、古墳時代後期の須恵器を共伴する土師器とに大別される。後者はその量も少ないことから、本稿では割愛し、まとめて出土した古式土師器についてその編年的位置を中心に検討を加えたい。

古式土師器は野口V字溝下層、道添12~18号住居跡から出土している。器種は壺・甕・鉢・高杯・ミニチュア土器がみられ、次のように分類できる (Tab. 11)。

Tab. 11 土師器分類表

器種	型 式	器 形 の 特 徴	図
	壺には、複合口縁壺・大形壺・広口壺・小形丸底壺・脚付壺がみられる。		
壺	大 形 壺	口縁部が大きく単純に外反しており、胴部は大きな球形を呈すると思われる。	
	複 合 口 縁 壺	野口V字溝下層でみられ、頸部は外反し、屈曲部から口縁部も単純に外反する。	
	広 口 壺	球形丸底の胴部に、頸部がぐびれ、内彎しながら開く口縁部がつく。甕Ⅲ類の口縁部のつくりと同一である。	
	小 形 丸 底 壺	口径・器高ともに7~9cmのものである。胴部は球形丸底で、頸部がいったんしまる。口縁部の形態によってⅠ~Ⅲ類にわかれる。	
	Ⅰ	口径が胴部最大径よりも大きいものである。	
	Ⅱ	口径が胴部最大径よりも小さいが、口縁部が長いものである。頸部つけねがぐびれ、口縁部は内彎しながらひらくものが多い。	
	Ⅲ	口径が胴部最大径よりも小さいもので、口縁部が短く開くものである。	

器 種	型 式	器 形 の 特 徴	図	
壺	脚 付 壺	胴下半部から脚上半部が出土している。		
甕	口縁部の形態により、Ⅰ～Ⅳ類に大別される。			
	Ⅰ	口縁部が微妙な凹凸をみせながらも外反するものである。胴部は球形丸底である。		
	Ⅱ	口縁部が内彎しながらひろくものである。		
	Ⅲ	Ⅱ類よりも頸部つけねのくびれが著しく、口縁部は内彎しながら直立に近く開く。胴部は球形丸底の大形品である。		
	Ⅳ	口縁部が直線的に端部へ向ってすばりながら開き、胴部は肩の張ったやや長胴となる。		
高 杯	口径20cm前後のものが多く、脚部の高さは9cm前後が多い。杯部はⅠ～Ⅲ類に、脚部はa～c類に分類できる。			
	杯 部	Ⅰ	屈曲部で明瞭な段をもち、上半部が直線的に開くものである。	
		Ⅱ	屈曲部で明瞭な段をもち、上半部が内彎して開く。口縁部は短く外反するものが多い。	
		Ⅲ	屈曲部で段をもたないものである。	
	脚 部	a	裾部で稜を有し、ゆるやかに開くものである。	
		b	裾部で稜を有し、水平に近く急激に折れるものである。	
		c	裾部で稜をもたず、杯部つけねからゆるやかに大きく開くものである。	

器種	型式	器形の特徵	図
鉢	丸底が多く、口縁部の形態によりⅠ～Ⅲ類にわかれる。		
	Ⅰ	体部半球形を呈し、口縁端部付近がわずかに短く外反する。	
	Ⅱ	体部半球形を呈し、口縁部の開きがⅠ類よりも大きく、内面に稜をもつ。	
鉢	Ⅲ	半球形の体部に明瞭な「く」の字口縁がつくものである。	
	小形土器	口径・器高とも4.5cm前後で、「く」の字口縁に球形丸底の胴部がつき、甕を模したものと思われる。手づくねの土器とは異なり、器壁の厚みも均一で、丁寧に整形されている。	

以上類別した土器群を各遺構別にみれば次の通りである (Tab. 12)。

Tab. 12 各遺構別出土土師器分類表

器種	遺構	道添17号	野口V字溝下層	道添12号	道添13号	道添14号	道添15号	道添16号	道添18号	
壺	大形壺							○		
	二重口縁壺		○							
	広口壺					○		○	○	
	小形丸底壺	Ⅰ	○		○					
		Ⅱ			○		○	○	○	○
Ⅲ		○		○	○					
脚附壺	○									
甕	Ⅰ			○				○		
	Ⅱ	○								
	Ⅲ			○				○	○	
	Ⅳ						○			
高杯	杯部	Ⅰ	○	○	○			○		
		Ⅱ		○	○	○			○	
		Ⅲ		○	○					
	脚部	a	○				○	○	○	
		b			○					○
		c			○					○
鉢	Ⅰ			○						
	Ⅱ							○		
	Ⅲ							○		
小形土器				○	○					

2

いま北九州の古式土師器を弥生土器の伝統が根強い第Ⅰ期と、布留式の様相が圧倒し、小形丸底壺の口径が胴部最大径より大きい第Ⅱ期、複合口縁壺・小形器台がなくなり、小形丸底壺の口径が胴部最大径よりも小さくなる、いわゆる和泉式の第Ⅲ期にわかっならば、本遺跡群出土の古式土師器は、小形丸底壺、高杯、甕の形態からみて、第Ⅲ期に属することが知られる。この時期の資料は筑後地方ではほとんど知られておらず、今回の調査においてはじめてまとまった形でとらえることができたのは大きな成果であった。

筑後地方の第Ⅰ期の古式土師器としては、筑後市狐塚遺跡^(註2)、久留米市古宮遺跡^(註3)の資料があり、6世紀代の土師器としては、最近大道端遺跡^(註4)で須恵器と共伴した資料が公表されたが、本遺跡群の古式土師器とはいずれも2～3型式の空白部分^(註5)があつて、これらの資料と直接比較検討することは困難である。したがつて本稿では他地域の同時期の資料と比較対照することにより、その位置づけをおこなわねばならないが、第Ⅰ・Ⅱ期の古式土師器の編年については、平野単位でおこなうことが可能なくらいに資料が蓄積されつつある筑前地方^(註6)においても、第Ⅲ期の古式土師器の良好な資料は意外と少ないのが現状である。そのため現段階では広く、北九州という地域の中で検討するほかない。この時期の資料としては、福岡県有田遺跡^(註7)、竹ヶ本遺跡^(註8)、原古墳群^(註9)、立花貝塚^(註10)、大曲り遺跡^(註11)、佐賀県伊勢山遺跡^(註12)、横田下古墳^(註13)、長崎県黄金山古墳^(註14)から出土した資料があげられる。

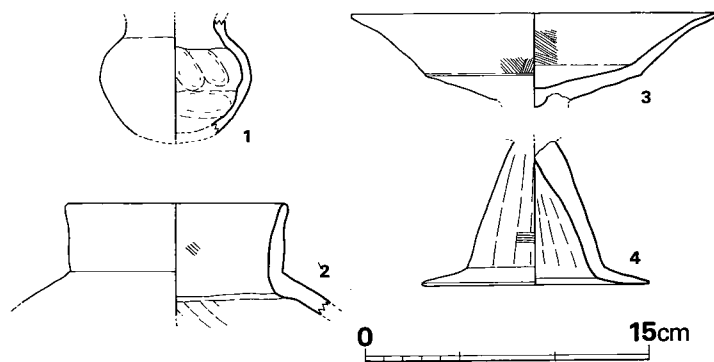


Fig. 237 有田遺跡25街区住居跡出土土器実測図(縮尺1/4)

有田遺跡では、従来、17街区竪穴住居跡出土の土器が有田Ⅱ式として、第Ⅲ期の前半に位置づけられているが、私見ではこの土器は第Ⅱ期までさかのぼる可能性が強いと考えられる。^(註15)むしろ第一次調査の25街区竪穴住居跡^(註16)の小形丸底壺、甕、高杯が、この時期の資料としてあげられる(Fig. 237—1～4)。甕(2)はⅠ類であり、高杯は杯部(3)がⅠ類、脚部(4)がb類であるが、脚筒下半部の径が大きい。小形丸底壺(1)は口縁部を欠失しているが、胴部球形であり、Ⅱ類に属する。

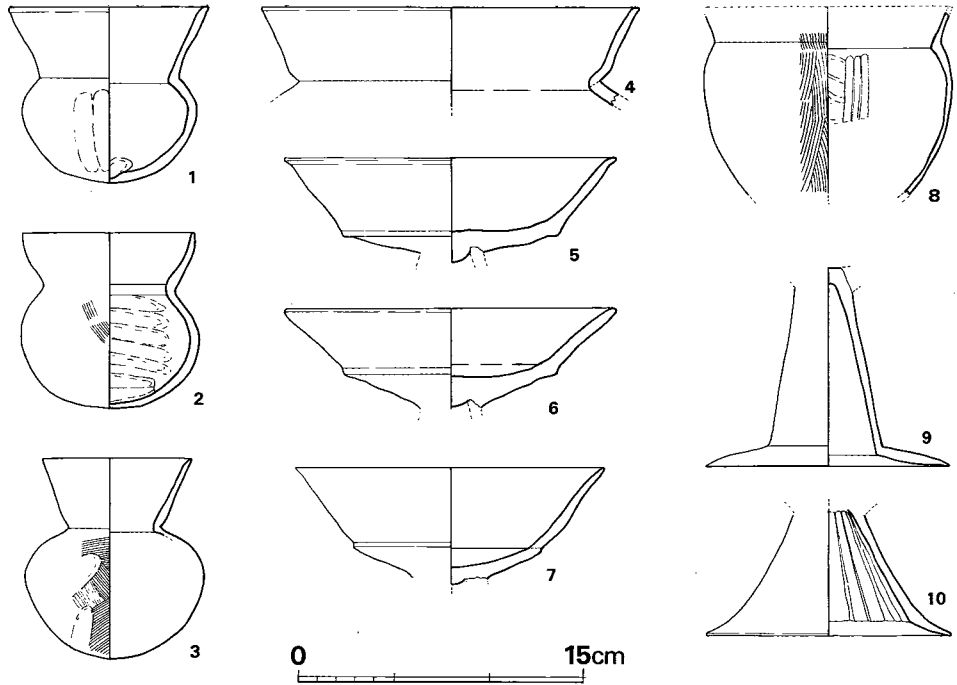


Fig. 238 竹ヶ本遺跡第11号住居跡出土土器実測図 (縮尺1/4)

竹ヶ本遺跡では6・11号竪穴からこの時期の資料がまとまって出土している。6・11号ともに同一時期として差し支えなく、ここでは11号竪穴の出土土器を図示した(Fig. 238—1～10)。小形丸底壺(1～3)はⅠ・Ⅱ・Ⅲ類がみられ、いずれも胴部は球形である。甕(4・8)はⅢ・Ⅳ類がみられ、Ⅳ類は胴部の肩が張る。高杯はⅠ・Ⅱ類の杯部(5・6・7)がみられ、脚部(9・10)はb・c類がある。

原古墳群では、第2号墳周溝内からこの時期の土器が出土しており、複合口縁壺、広口壺、小形丸底壺、高杯がみられる(Fig. 239—1～7)。複合口縁壺は頸部が外反し、屈曲部から口縁部がさらに外反する。小形丸底壺(2・3)はⅡ類である。広口壺(1)は口縁部だけがみられるが、そのつくりは室岡遺跡群の例と同一である。高杯の杯部(4・6・7)はⅡ類であるが、内彎の度合はわずかである。脚部(4～7)はa・b・c類がみられ、脚筒部の径が太い。

立花貝塚上層の土器は、森貞次郎氏によれば、発掘の際には新旧二群にわかれたというが、いまは一括されてしまっており、発掘当時の状態によって分離することは不可能とな^(註17)ってしまっている。したがっていまは型式学的にわける他ない。古い様相をとどめる土器群をa群、新しい様相の土器群をb群とすれば、a群には Fig. 240—1・10・15・16の土器が、b群には

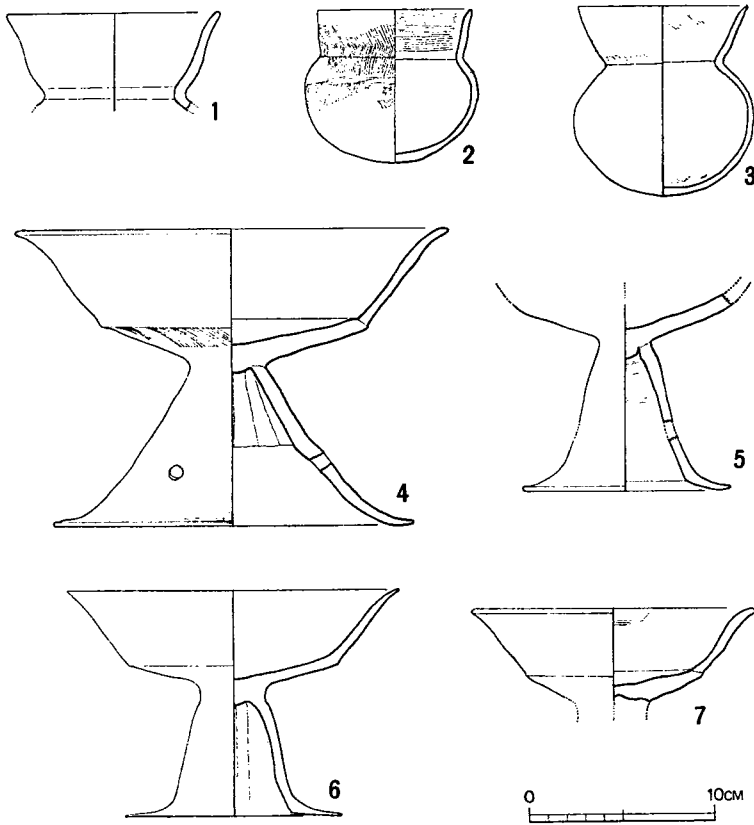


Fig. 239 原 2 号墳出土土器実測図 (縮尺1/4) (『山陽新幹線関係埋蔵文化財調査報告』第 2 集 1976 より)

Fig. 240—2 ~ 9・11~14・17~19 の土器が相当しよう。a 群の小形丸底壺は I 類で胴部球形であるがよく研磨されており、高杯の杯口縁部は外反しており、古式土師器第 II 期末に位置づけられる。

b 群には小形丸底壺・広口壺・甕・高杯・鉢がある。小形丸底壺は II・III 類があり、甕は I・III・IV 類がみられ、III 類の甕(12)は頸部がしまり胴部球形で広口壺との区別がむずかしい。高杯は杯部が II 類で、脚部は a・c 類がみられる。

大曲り遺跡では第 3 号住居跡からこの時期の土器が出土している (Fig. 241)。大形壺 (1) の口縁は微妙な凹凸があり、甕 I 類の口縁部と同じつくりである。高杯 (3) は I 類の杯部に a 類の脚部がつくが、杯部が小さく、屈曲部以下は水平であり、脚筒部は杯部に比べて太く、上下の径の差が少ない。鉢 (4) は小形で単純な半球形を呈し、深いものが床面上から出土しているが、この他にやや浮いた状態で、口縁部が内屈する浅い半球形の鉢 (7・8) が出土している。

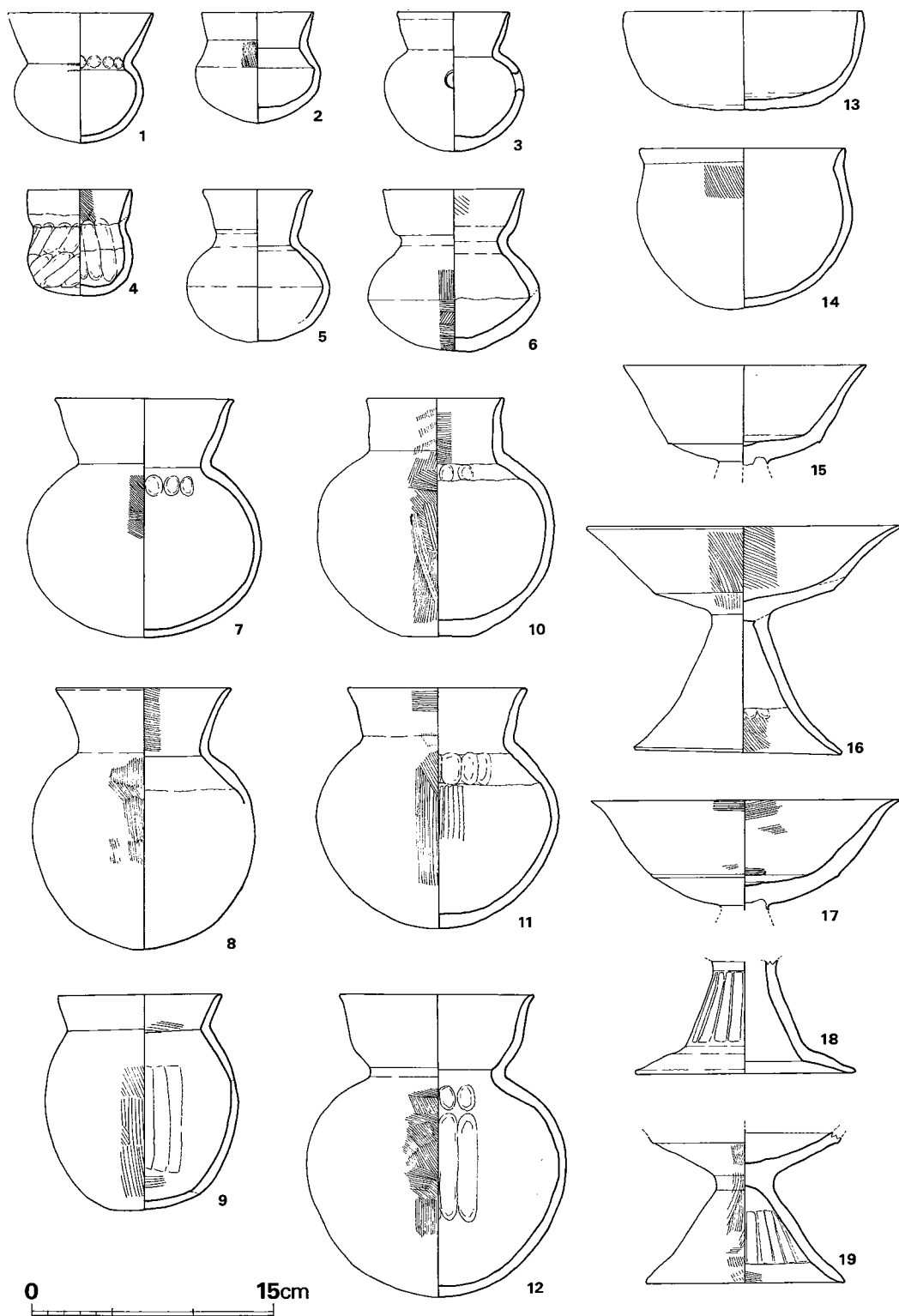


Fig. 240 立花貝塚上層出土土器実測図 (縮尺1/4)

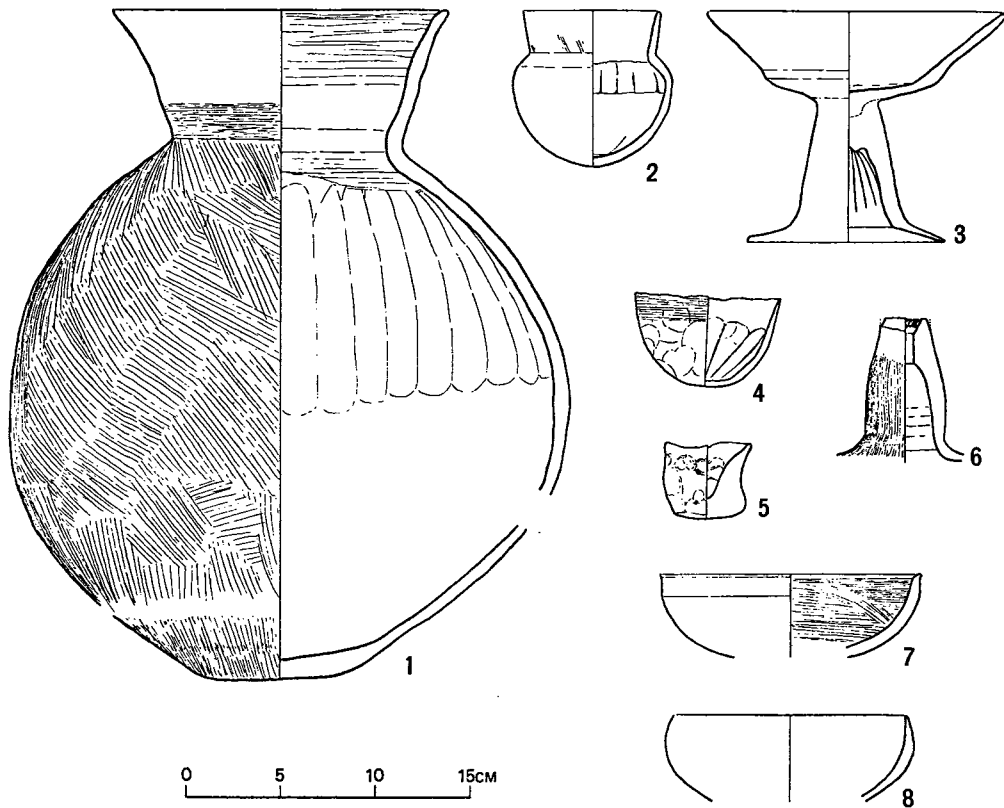


Fig. 241 大曲り遺跡第3号住居跡出土土器実測図(縮尺1/4)(『福岡南バイパス関係埋蔵文化財調査報告』第1集 1970より)

伊勢山遺跡ではⅢ区1号住居跡から第Ⅲ期の土師器が大量に出土している (Fig. 242)。器種は広口壺、小形丸底壺、甕、高杯、鉢がみられる。甕Ⅲ類(2)は広口壺と口縁部のつくりが同じであり、その区別が困難である。小形丸底壺(1)はⅡ類がみられる。高杯(7・8)は杯部がいずれもⅡ類であるが、脚部にはa・b・c類がみられる。甕はⅠ類とⅣ類がみられる。Ⅳ類の甕(8)は胴部最大径が中位に位置し、長胴丸底である底部にはタタキ目の痕が残る。鉢(3・6)はⅠ類が多量に出土している。

横田下古墳では甕と高杯が知られている。高杯は杯部がⅠ類で、脚部はa類である。甕はⅠ類とⅢ類がみられる。

黄金山古墳では甕・高杯・鉢がみられる (Fig. 243)。甕(2・3)はⅣ類で、高杯(1)は杯部がⅠ類で脚部はa類である。小形品で脚筒部が細長く、これまでみてきた高杯とはやや系統を異にする。鉢(4)は半球形で深く、口縁部が内屈する。

いま高杯の形態変化に着目して、第Ⅲ期の古式土師器をA・B・Cの3期に細分すれば、ⅢA期には原2号墳、竹ヶ本11号住居跡、有田25街区住居跡、ⅢB期には伊勢山Ⅲ区1号、黄金山

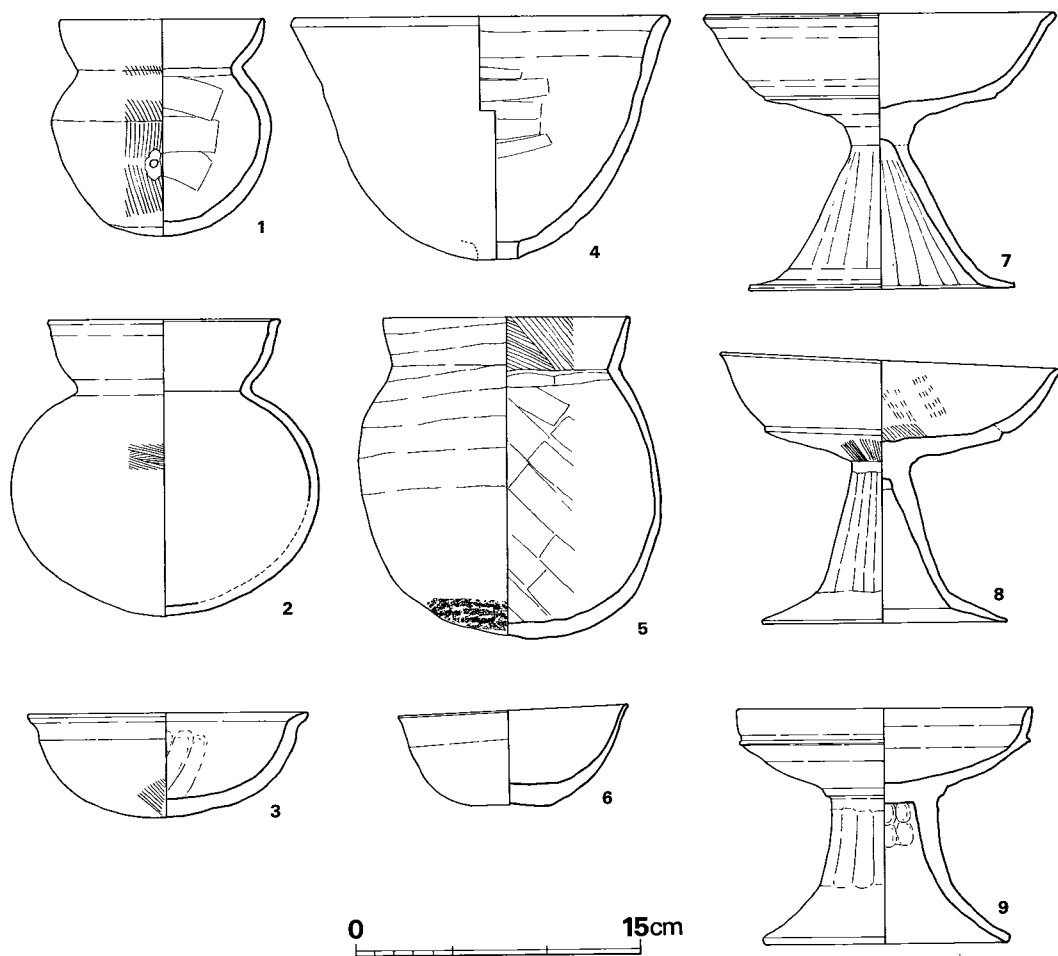


Fig. 242 伊勢山遺跡3区第1号住居跡出土土器実測図(縮尺1/4)

古墳，立花貝塚b群，ⅢC期には大曲り遺跡第3号住居跡の土器群がでてられる。

高杯は古式土師器第Ⅱ期では，現在のところ，湯納遺跡D5溝出土の高杯(註18)のように杯部が小さく深く，脚筒部が細長いものが知られているだけであり，これが黄金山古墳の高杯にまで連なると思われる。このほかに第Ⅰ期のように，杯下半部が小さく，屈曲部から口縁部へかけて大きく外反し，脚部が上から下へ短く大きく広がる器形も存続し，第Ⅲ期へと続いていくと思われる。脚部はa類とb類がみられる。ⅢA期では，杯下半部が大きくなる。杯部はⅠ類とⅡ類がみられるが，器高は高く，Ⅱ類も内彎の度合はわずかであり，口縁部がやや外反する。脚部はⅢ期になるとc類もかなりみられるようになる。ⅢB期では杯部はⅠ類はわずかになり，Ⅱ類が多くなる。杯部全体が小さくなり，口縁部はⅢA期よりも大きく開き，屈曲部

からの内彎度も大きくなる。脚部は細長くなるが、脚筒部の上から下への広がり大きい。a類はあまりみられず、b・c類が多い。ⅢC期ではさらに杯部が小さくなって、脚筒部は上下の径の差がなくなる。

複合口縁壺はⅢA期にわずかに残り、それ以後は消滅するものと思われる。

甕は第Ⅱ期ではb類のように口縁部が内彎しながら開くが、端部は平坦につくり、水平または外傾する。ⅢA期になるとこの甕を祖型にc類の甕が出現する。また、外反する口縁は、第Ⅰ期でもみら

れるが、端部を方形につくり長胴である。第Ⅱ期でも、球形丸底の胴部に外反して端部を方形につくる甕が存在すると思われるが、まだ的確にはつかまれていない。このタイプは、ⅢA期になると微妙な凹凸をもって外反し、Ⅰ類の甕となる。Ⅰ・Ⅲ類ともに口縁端部を丸くおさめ、胴部球形である。内面にはヘラケズリがおこなわれる。Ⅳ類はⅢA期では肩が張ったやや長胴を呈する。ⅢB期では小形の甕しか知られておらず、Ⅰ・Ⅲ・Ⅳ類がみられる。Ⅲ類は頸部がしまり、広口壺との区別が難しくなる。Ⅳ類は胴部最大径が中位にあり、やや下ぶくらみのものもあらわれる。

小形丸底壺は、第Ⅰ期では、扁球形の大きな体部に内彎して開く短い口縁部がつく。第Ⅱ期では小さな半球形の体部に大きく口縁部が開く典型的な小形丸底壺が加わる。ⅢA期では口径が大きいⅠ類と口径が小さいⅡ類がみられるが、Ⅱ類が多く、体部は球形である。ⅢB期ではⅠ類はみられなくなる。ⅢA・ⅢB期の小形丸底壺の口縁部は広口壺や甕Ⅲ類の口縁部と同じづくりである。ⅢC期では胴部球形であるが、口縁部は直線的に開く。

鉢は形態変化に乏しいが、Ⅰ・Ⅱ期では、半球形直口と、「く」の字口縁のものがある。体部は浅く直口のもの口縁部まで単純に開く。ⅢA期の鉢はよくわからないが、ⅢB期では体部が半球形を呈し深くなる。「く」の字口縁もあるが、口縁部がわずかに外反するものが多く、内屈するものもみられる。

ⅢA期では原2号墳がやや竹ヶ本11号住居跡より先行するかと思われるが、一方は古墳で、

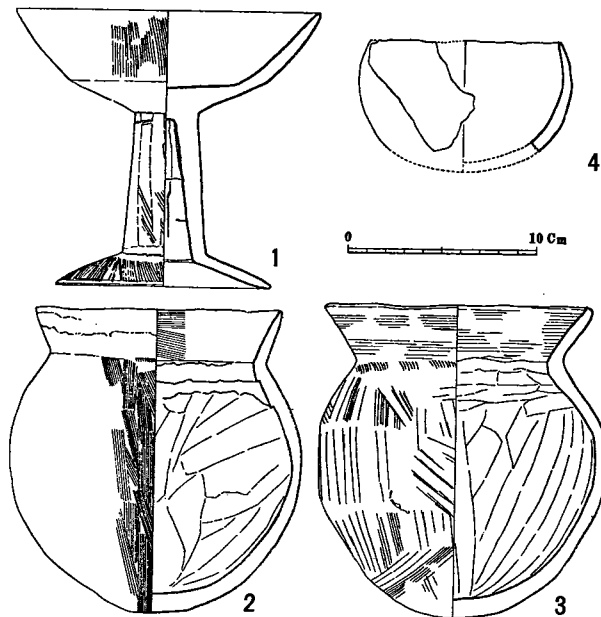


Fig. 243 黄金山古墳出土土器実測図(縮尺1/4)(『長崎県大村市黄金山古墳調査報告』1970より)

一方は住居跡であり、今後の検討にまらたい。

ⅢB期の伊勢山Ⅲ区1号、黄金山古墳、立花貝塚上層b群では、黄金山古墳の甕Ⅳ類が、他の二者のⅣ類の甕よりも古い様相を示すが、これらは地域的にも異なっており、ⅢB期として一括しておく。将来的には筑前地方でこの時期の良好な資料をとらえる必要がある。横田下古墳は高杯の形態は古く、第Ⅱ期に入れてもおかしくないほどのつくりであるが、甕はいずれも端部をうすく丸くおさめており、第Ⅲ期の特徴を示している。公表されている図面では、口縁部の特徴がいま一つ不明確であるため、伊勢山Ⅲ区1号住居跡よりはさかのぼる公算が強いものの、いまはⅢA～ⅢB期と幅を大きくとっておきたい。^(註19)

須恵器との関係については、九州でも陶邑系統の初期須恵器が、朝鮮系の陶質土器とともに第Ⅰ期の須恵器生産開始以前に流入していることが判明しつつあり、第0期を設定しているが、^(註20)初期の須恵器と土師器の良好な共伴資料にめぐまれないため、なお不明な点が多い。あえて推測すれば、伊勢山Ⅲ区1号で朝鮮系の高杯を模倣したような高杯 (Fig. 242-9) が出土しており、野黒坂遺跡^(註21)での須恵器第Ⅱ期と伴出した土師器からみて、ⅢB期まで九州の須恵器第Ⅰ期の時期がさかのぼる可能性は乏しい。ⅢC期と須恵器第Ⅰ期の関係が今後の課題となろう。

3

室岡遺跡群の古式土師器は小形丸底壺や甕Ⅲ・Ⅳ類の形態からみて、竹ヶ本遺跡11号住居跡と共通点が多い。また鉢形土器Ⅰ類は伊勢山Ⅲ区1号と共通するが、高杯の屈曲部からの内彎度はⅢB期ほどは著しくない。ただ、18号住居跡では、かなり内彎しており、小形丸底壺も頸部がしまっていて、この土器群はもっとも新しく位置づけられ、ⅢB期まで降る可能性をもっている。17号住居跡では高杯Ⅰ類、小形壺Ⅰ類がみられ、V字溝下層では複合口縁壺、高杯Ⅰ類があり、この両者はやや古い様相を示している。しかし17号住居跡の甕b類は端部を丸くおさめており、古式土師器第Ⅱ期の同系統の甕よりも一段階新しい。またV字溝下層の複合口縁壺の器形はⅢA期まで残りうるものである。高杯Ⅲ類も第Ⅰ期にわずかながらその類例がみられるが、^(註22)第Ⅲ期まで存続するものと思われる。本遺跡群の古式土師器は野口V字溝下層、17号住居跡^(註23)がわずかに古く、18号住居跡が新しく、それぞれ、第Ⅱ期末、第ⅢB期に一部重複する可能性を残しながらも、全体としてはⅢA期に属し、5世紀前半代に位置づけられる。室岡第Ⅳ期として設定し、室岡第Ⅲ期の間に3形式ほどの存在を考慮しておきたい。^(註23)

(武末 純一)

- 註 1) ここでは九州における須恵器出現以前の土師器としてこの語を使用した。
 2) 筑後市教育委員会『狐塚遺跡』1970
 3) 波多野皖三「古宮阿弥陀遺跡」『筑紫史論』第三輯 1975
 4) 福岡県教育委員会『九州縦貫自動車道関係埋蔵文化財調査報告—XIV』1977
 5) 狐塚遺跡と古宮遺跡の土器では、前者に在地的な器形が多く、後者には畿内地方の第V様式末

～布留式でも古式の段階の影響が強い。相互の比較はむずかしいが、狐塚Ⅲ式を土師器とする根拠となった甕・高杯の比較から（図面上の比較ではあるが）ほぼ同時期、畿内の庄内式から布留式でも古い段階を主体とする時期にあることがわかる。したがって、最近の筑前地方の第Ⅰ・Ⅱ期を細分した編年からみても本遺跡群との間には2型式は存在する。大道端遺跡の須恵器は第Ⅲ型式をさかのぼりえず、6世紀後半以降であるから、少なくとも3型式は存在しよう。

- 6) 早良平野では有田遺跡、宮の前遺跡、湯納遺跡、野方中原遺跡、牟多田遺跡からの好資料の出土をみており、福岡平野では那珂川流域を中心に柏田Ⅰ～Ⅳ期の編年が第Ⅰ期のなかでおこなわれている。筆者はこの両者の平行関係を次のように考えている。

		古式土師器 第Ⅰ期		古式土師器 第Ⅱ期	
福岡平野		柏田Ⅰ	柏田Ⅱ	柏田Ⅲ	柏田Ⅳ
早良平野	宮の前Ⅰ・Ⅱ	宮の前Ⅲ	有田31街区C溝上層	(牟多田溝Ⅰ)	湯納D5溝

有田遺跡調査『有田遺跡』1968

福岡県労働者住宅生活協同組合『宮の前遺跡（A～D地点）』1971

福岡市教育委員会『牟多田遺跡』1974

福岡市教育委員会『山陽新幹線関係埋蔵文化財調査報告』1975

福岡市教育委員会『板付』1976

福岡県教育委員会『山陽新幹線関係埋蔵文化財調査報告』第3集 1977

福岡県教育委員会『山陽新幹線関係埋蔵文化財調査報告』第4集 1977

- 7) 有田遺跡調査団『有田遺跡』1968
- 8) 福岡県教育委員会『筑紫郡春日町竹ヶ本遺跡調査報告』1961
- 9) 福岡県教育委員会『山陽新幹線関係埋蔵文化財調査報告』第2集 1976
- 10) 有田遺跡調査団『有田遺跡』1968
- 11) 福岡県教育委員会『福岡南バイパス関係埋蔵文化財調査報告書』第1集 1970
- 12) 杉原荘介・大塚初重編『土師式土器集成』本編1 1971
- 佐賀県教育委員会『基山町伊勢山・鳥栖市永吉遺跡』1970
- 13) 杉原荘介・大塚初重編『土師式土器集成』本編2 1972
- 14) 小田富士雄「長崎県大村市、黄金山古墳調査報告」『九州考古学』39・40 1970
- 15) 詳細は別稿にゆずるが、古式土師器第Ⅲ期の甕は口縁部が微妙な凹凸をもち、端部を丸くおさめるのに対して、17街区住居跡出土の甕は単純に外反し、端部をしっかりした方形につくっている。Ⅲ期でもタタキ目がみられないことはないが、この住居跡の甕のタタキ目の盛行は異常である。報告書ではこの住居跡から出土した複合口縁壺、高杯については、有田Ⅰ期に位置づけられている。筆者は甕についても以上の理由から、一括して古式土師器第Ⅱ期へ上げた方がよいのではないかと考えている。
- 16) 福岡市教育委員会『有田古代遺跡調査概報』1967
- 17) 森貞次郎氏の御教示による
- 18) 福岡県教育委員会『今宿バイパス関係埋蔵文化財調査報告』第4集 1976
- 19) いままであげた資料のうち、筆者が実見したのは、有田25街区竪穴住居跡、立花貝塚上層、竹ヶ本遺跡11号住居跡、伊勢山Ⅲ区1号住居跡出土土器であり、大曲り遺跡、黄金山墳、原2号墳は各報告書の図面で検討したにすぎない。横田下古墳の高杯は2点だけ唐津城で実見したが、あとは『土師式土器集成』の図面によっている。
- 20) 小田富士雄・武末純一「古文化研究会第3回研究発表要旨①「西日本出土の初期須恵器一大阪府堂山古墳例を中心として」」『古文化研究会会報』№3 1977
- 21) 福岡県教育委員会『福岡南バイパス関係埋蔵文化財調査報告』第1集 1970
- 22) 多田良込田遺跡第6号住居跡から第Ⅰ期の古式土師器とともに出土している
福岡市教育委員会『山陽新幹線関係埋蔵文化財調査報告』1975
- 23) 熊本県でも最近県南部を中心にこの時期の資料がまとまって出土しているが、複合口縁壺がかなり後まで残るなど地域色が強く、一括して扱うことはできず、すぐには比較できなかったため、今回は検討の対象には含めなかった。一度肥後地方内部での検討を経た上で比較してみたいと考えている。
- 熊本県教育委員会『沈目』1974

沈目奥野遺跡調査団『沈目奥野遺跡』1795
熊本県教育委員会『塚原』1975

弥生土器と土師器を総括するにあたり，宗像大社宝物館松本肇氏からは立花貝塚上層土器の原図を提供していただき，佐賀県立博物館志佐輝彦氏には伊勢山Ⅲ区1号土器の実測の便宜をはかっていただいた。また森貞次郎氏，渡辺正気氏，小田富士雄氏，安楽勉氏，岩崎二郎氏をはじめ多くのかたがたから御教示をいただいた。記して感謝いたします。

(1977. 8. 20)

4. 結 語

1

第 I 章で岩崎氏が述べられている通り、今報告の遺跡群は八女丘陵に南接する中位・低位の段丘上に立地する。

西中ノ沢・坊野両遺跡は中位段丘上にあり、筑後市熊野方面から東へ 5 km 程入り込んだ谷の最奥部に面している (Fig. 4)。この谷部に面した遺跡は現在のところ他に調査例はないが、この谷は各時代にわたって人間の社会生活を展開する上で、重要な背景となっていたであろう。特に谷水田を営む生活者にとっては基盤となる地形である。一方、西中ノ沢・坊野両遺跡を取りまく段丘上平地は現在一面の茶畑や果樹園となっている肥沃な可耕地である。弥生時代においては陸耕を営むに適していたと考えられる。この平坦な段丘の南東端の突出部が標高 48.8m の岡山であり、その雄姿は遠く矢部川を隔てた瀬高町側からも臨まれる。明治年間の陸軍大演習がこの地で行なわれた際、大元帥たる天皇がこの山上より総覧したというのも当然としてうなずける。

野口・道添の両遺跡は低位の河岸段丘上にあり、山ノ井川を挟んで対峙している。野口遺跡ののる段丘は南北 150m、東西 500m の広きにわたり、周囲沖積地との比高は 1.2~2 m である。この段丘の中央部を調査した由であるが、調査地の北側では、かつて甕棺・石棺という弥生時代墓跡が掘り出されたという。数量や時期については現品がないので不明であるが、検出した弥生時代住居跡との関連では興味深い事である。

道添遺跡は南北 100m、東西 300m 以上の段丘上にあると思われるが、耕地整理により改田されているので正確な広がりは不明である。調査した範囲内で北部と南部では住居跡はまったく検出されなかった。南部は古老の話によれば、耕地整理前はかなりの深田であったという。調査地の南側は現在鶴ノ池の地名で呼ばれており、その湿地ふりがうかがえる。道添・野口両遺跡ののる河岸段丘と同様の地形は西方の各所にみられ、常持浦山や狐塚遺跡等の立地も同一である。

中位段丘上の遺跡と低位段丘上のそれとが質的な差があったかどうかについて、遺物面から把握するまでにいたらなかった。唯西中ノ沢・坊野両遺跡は弥生時代後期の住居跡のみ検出されたのに対し、低位段丘上の野口・道添両遺跡は同時代と古墳時代の各種遺構が輻湊していた。調査範囲が限定された事もあるが、沖積地に接する低位段丘の方が、古墳時代以降も居住地として利用されていた事が窺える。その場合、同じ地に連綿と住み続いた由ではなく、多少の移動と分村は（恐らくは山ノ井川近辺で）たえずくり返されたであろう。

2

八女丘陵に南接する広い中位段丘の各所で石棺を主として弥生時代墓跡がこれまで発見されている。その多くは工事等で露見し、そのまま破壊され、実態が不明である。かろうじて岩崎光氏の個人的努力によってその一端が窺える程度である。

段丘端の岡山の頂部には大石があり、前述した陸軍演習に際して遺棄され、現在に至っている。古老の話ではこの大石の下より甕が出土したとの事であり、石の形状よりして、あるいは支石墓ではなかったかと思われる。大牟田市で先年調査した甘木山では、後期甕棺が大石の下より発見されている。岩崎氏及び佐土原祐昌氏の御教示によれば、この岡山頂部を取り巻くように多数の石棺があり、調査の実施された亀ノ甲遺跡石棺群はそのまた外縁に接したグループであるという。岡山から亀ノ甲にかけての石棺を主とした弥生時代墓跡群はその数の多い事や各種多様な副葬品（方格規矩鏡・小型仿製鏡3面・鉄戈）が見られる点において周辺各地のグループより特出している。第I章で述べられている線刻ある石棺についても類例少なく特異である。先述したように山頂の石が支石墓であったと確認されるならば、弥生時代墓跡研究は飛躍的に深まるであろう。以上の墓跡と西中ノ沢以下周辺の弥生時代集落跡とは当然関連づけて考慮されねばならない。その実態は調査の不足により不明瞭であるが、今後の重要な研究主題である。

5世紀以降、大規模な古墳が八女丘陵上に多数築造されていった。特に磐井の墓と目される岩戸山古墳は規模大にして九州随一である。八女丘陵上では最も古いとみられる石人山古墳を築造せしめた背景には力の集中を可能とした生産性の高まりと、それをもたらした弥生時代以降の伝統とが考察されねばならない。荒木川と山ノ井川に挟まれた八女丘陵とその南接した段丘部は弥生時代後期にはすでに各村落が各個別に存立しうる状態にはなく、ある種の連合体を形成していたと考えられる。

調査した少範囲の遺跡内容からのみでは大雑把な予測を述べられるのみである。今後岡山山頂の調査をも含めた周辺のより綿密な調査が望まれる。

記述に際し、岩崎氏より多分の御教示をいただいた。氏の積年の努力に対し敬意を表すると共に、氏がその蘊蓄を後輩のために一刻も早く公表されますことを希望します。

九州縦貫自動車道関係埋蔵文化財調査報告-XIX-

昭和52年11月10日

発行 福岡県教育委員会
福岡市中央区西中洲6番29号

印刷 福岡印刷株式会社
福岡市博多区大字邦珂142